

伊坂城跡（第4～7次）発掘調査報告

—四日市市伊坂町—

2019（平成31）年3月

三重県埋蔵文化財センター



西から見た調査前の伊坂城跡（伊勢湾と木曾三川を遠望） 中日本高速道路（株）提供



空から見た伊坂城跡（北東から）



真上から見た伊坂城跡（上が南）



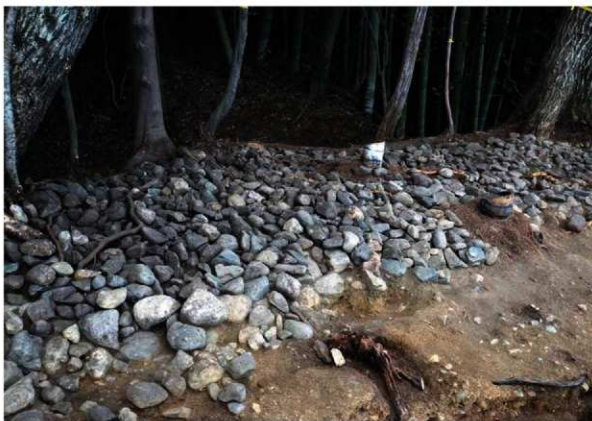
空から見た伊坂城跡（北西から）



櫛門S B 715(東から)



櫓門S B 715の礎石（北東から）



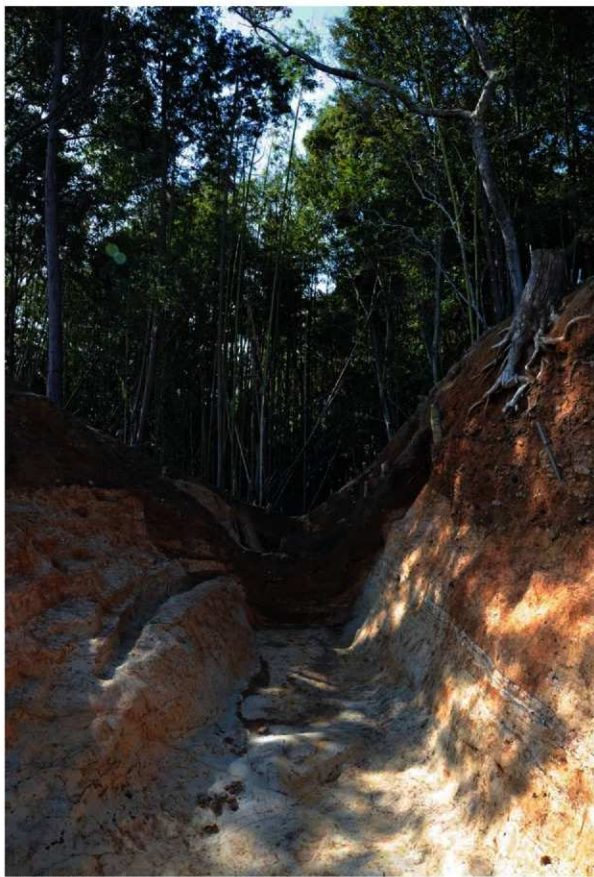
石つぶてS Z 714（北東から）



曲輪 2 (西から)



曲輪 1・2 北側の切岸 (北から)



堀底道SD 719(北から)



曲輪 3 の断ち割り状況（北西から）



曲輪1の常滑陶器大甕出土状況（A y22P ⅡB、南から）



出土遺物

序

三重県埋蔵文化財センターでは、平成 20年度から、新名神高速道路の四日市 JCTー亀山西 JCT間の路線内に存在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。対象となる埋蔵文化財は 22遺跡、発掘調査対象面積は 34万 m²と広大です。

当センターとしては、供用開始予定に間に合わせるべく、発掘調査を終了させるため、担当職員を増員するなどの対応策も行ってきました。調査成果である報告書作成より、現地調査を最優先に取り組むことを主眼に、年間 5 万 m²を超える面積の発掘調査を行ったこともありました。

ようやく発掘調査も終了して、本格的に報告書作成に取り組みはじめ、ここに四日市市伊坂町に所在する伊坂城跡の調査成果を、とりまとめることが出来ました。曲輪 1 をはじめとする多くの曲輪や堀切などの調査によって、城の一端を垣間見ることが出来ました。特に、曲輪 1 虎口では非常に立派な櫓門の礎石が発見され、地域の歴史に新たな 1 ページが加わりました。

最後になりますが、現地調査に限らず、その成果をまとめて終了するという事にもご理解とご協力をいただいた中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所をはじめとする各関係機関の方々、地元伊坂台自治会をはじめ発掘調査区近隣に居住の方々からのお礼を申し上げます。

平成 3 年 3 月

三重県埋蔵文化財センター
所長 野原宏司

例 言

- 1 本書は、三重県四日市市伊坂町に所在する伊坂城跡（第4次～第7次）の発掘調査報告書である。
- 2 本書で報告する発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査である。
- 3 発掘調査にかかる費用は中日本高速道路株式会社が全額負担した。
- 4 発掘調査成果は、『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』の3冊においてその概要を公表しているが、本書をもって正報告とする。
- 5 調査は下記の体制で実施した。（詳細は - 2 参照）
 - ・ 委託者 中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所
 - ・ 受託者 三重県教育委員会
 - ・ 調査主体 三重県教育委員会
 - ・ 調査担当 三重県埋蔵文化財センター
- 6 本書の執筆は、高松雅文・服部芳人・松永公喜・水谷豊が行い、文書については目次及び文末に記載した。写真撮影は現地調査担当者および萩原義彦が行った。編集は高松・水橋公恵が行なった。
- 7 本書で示す方位は、日本測地系第 座標による座標北である。（詳細は - 1 参照）
- 8 本書で表記する土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1967初版）に拠った。
- 9 本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。
S A : 土塁・土橋・柵 S B : 門・建物 S K : 土坑・火葬土坑
S D : 溝・堀・堀底道・自然流路 S E : 井戸 S Z : 集積遺構・階段状遺構・盛土など
- 10 発掘調査及び報告書作成に際し、下記の方々・機関等に多大なるご協力・ご指導を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）
中井均 中野晴久 村田修三 伊藤徳也 千田嘉博 中野環 藤澤良祐 三浦正幸 沢元史代
松井一明 四日市市教育委員会 伊坂台自治会
- 11 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

本文目次

前言	(服部・高松)	1
1 調査に至る経緯	(服部)	1
2 調査の経過	(服部)	1
(1) 調査経過の概要 (2) 調査の体制 (3) 文化財保護法等にかかる諸通知 (4) 普及公開活動		
3 槽門の礎石移設の経緯	(服部・高松)	6
位置と環境	(高松)	10
1 地理的環境		10
2 歴史的環境		10
(1) 伊坂城跡 (2) 周辺の遺跡 (3) 地域の情勢 (4) 応仁の乱以降の北勢		
調査の方法と土層	(高松・水谷)	14
1 調査の方法と名称	(高松)	14
2 基本層序	(高松)	18
3 個別土層	(高松・水谷)	18
(1) 曲輪1 (2) 曲輪10から西側斜面 (3) 曲輪3から堀切SD 910 (4) 土塁SA 701から曲輪7・8 (5) SA 745から曲輪6、SA 743 (6) 曲輪1・5からSD 918 (7) 曲輪2・4・14 (8) SA 930=曲輪2トレンチ2 (9) SA 929=曲輪2トレンチ1 (10) 曲輪13東壁 (11) SD 922 (12) SD 917 (13) SD 735 (14) 曲輪11・12・16 (15) 曲輪1西斜面下層 (16) 曲輪11所ち割り (17) 曲輪17・18・19 (18) 曲輪20から北側斜面 (19) 曲輪外 (1~16:高松, 17~19:水谷・高松)		
遺構	(高松・水谷)	62
1 曲輪1	(高松)	62
(1) 土塁SA 701・745・756 (2) 門SB 715 (3) 掘立柱建物・横SB 721・724~727・750~755・SA 761 (4) 溝SD 703・758・759・706・708・710・711・716・718・720 (5) 土坑SK 702・704・705・709・717・749 (6) 井戸SE 707 (7) その他SZ 712 (8) ビット		
2 曲輪2	(高松)	85
(1) 土塁SA 929~933 (2) 門SB 907 (3) 土坑SK 901~903・905 (4) 溝SD 904・906		
3 曲輪3	礎石建物 SB 713・石つぶてSZ 714・土坑SK 723	(高松) 89
4 堀底道SD 719付近		(高松) 90
堀底溝SD 719・土塁SA 744・溝SD 722・階段状遺構SZ 908		
5 曲輪4	SZ 928	(高松) 93
6 曲輪5	土塁SA 737・堀SD 736	(高松) 95
7 堀切SD 910・SD 921		(高松) 95
8 曲輪6	土橋SA 743・土塁SA 741・757	(高松) 98
9 曲輪7	溝SD 746・747	(高松) 100
10 曲輪8	土塁SA 742	(高松) 100
11 堀切SD 733		(高松) 100
12 曲輪9	溝SD 730	(高松) 100
13 曲輪10	土塁SA 760	(高松) 105
14 曲輪11		(高松) 105

	(1) 土塁 S A 738・740 (2) 掘立柱建物 S B 732 (3) 土坑 S K 728・729・731 (4) 溝 S D 748	
15	曲輪 12 土塁 S A 739・流路 S D 734	(高松).....106
16	曲輪 13	(高松).....106
	(1) 土坑 S K 913～915 (2) 溝 S A 923～927 (3) 溝 S D 922	
17	曲輪 14 溝 S D 911・912・堀 917	(高松).....107
18	曲輪 15 堀 S D 918	(高松).....108
19	曲輪 16 塹壕 S D 735・溝 S D 919・920	(高松).....110
20	曲輪 17	(水谷・高松).....110
	(1) 土塁 S A 1030 (2) 掘立柱建物 S B 1025・1027 (3) 土坑 S K 1016・1021	
	(4) 溝 S D 1028・1029 (5) その他 S D 1011・S K 1022	
21	曲輪 18	(水谷・高松).....113
	(1) 溝 S D 1012・1017・1018 (2) その他 S Z 1035・1034・S D 1020	
22	曲輪 19	(水谷・高松).....114
23	曲輪 20	(水谷・高松).....114
	(1) 火葬土坑 S K 1001・1002 (2) 溝 S D 1003・1004・1006 (3) 土壇状遺構 S Z 1033	
24	曲輪外	(水谷・高松).....116
	(1) 曲輪 6・11の北東(第5次調査) (2) 曲輪 20の南東(第4次・第7次調査東区)	
遺物		(服部・高松・松永) 123
1	第6次調査	(服部).....123
	(1) 曲輪 1 (2) 曲輪 3 (3) 曲輪 5 (4) 堀底道 S D 719 付近 (5) 曲輪 2	
	(6) 曲輪 4 (7) 堀切 S D 910 (8) 曲輪 6～12 (9) 曲輪 14～16	
2	第5次調査	(服部).....150
3	第7次調査	(服部).....150
	(1) 西区 (2) 中区	
4	第4次調査	(服部).....151
5	その他	(服部).....151
6	金属製品	(高松・松永).....151
自然科学分析		173
1	分析の目的	(高松).....173
2	貝種同定結果	(高松).....173
3	放射性炭素年代測定	(株式会社パレオ・ラボ).....177
4	炭化材の樹種同定	(株式会社パレオ・ラボ).....180
5	S K 1002 から出土した人骨	(株式会社パレオ・ラボ).....182
考察		(高松) 183
1	伊坂城以前183
2	伊坂城の遺構183
	(1) 城の変遷と年代 (2) 櫓門 S B 715 と門 S B 907 (3) 曲輪 1 の内部構造	
	(4) 曲輪 1 の主要建物の性格 (5) 柱間寸法から見た S B 725 (6) 塹穴遺構	
	(7) 造成方法の特徴	
3	伊坂城の遺物187
4	縄張りの特徴190
	(1) 城郭と屋敷地 (2) 防衛施設の特徴 (3) 当初の姿と改修の痕跡	
5	伊坂城とその評価192
	(1) 縄張りの評価 (2) 伊坂城の最期	

挿 図 目 次

第 1 図	伊坂城跡 調査区位置図……………2	第 37 図	曲輪 20 土層図 1……………55
第 2 図	近畿自動車道名古屋神戸線 路線内遺跡位置図……………8	第 38 図	曲輪 20 土層図 2……………56
第 3 図	周辺の遺跡位置図……………11	第 39 図	曲輪外土層図 1……………57
第 4 図	大地区設定図……………14	第 40 図	曲輪外土層図 2……………58
第 5 図	小地区設定図……………15	第 41 図	曲輪外土層図 3……………59
第 6 図	調査区と曲輪の名称……………16	第 42 図	曲輪外土層図 4……………60
第 7 図	主要遺構位置図……………17	第 43 図	曲輪外土層図 5……………61
第 8 図	土層図実測位置図……………19	第 44 図	曲輪外土層図 6……………61
第 9 図	曲輪 1 調査区壁土層図……………20	第 45 図	伊坂城跡中心部遺構平面図……………63
第 10 図	曲輪 10 から西側斜面の調査区壁土層図 21	第 46 図	曲輪 1・3 遺構平面図……………65
第 11 図	曲輪 3 土層図……………23	第 47 図	SB 715……………66
第 12 図	曲輪 2 土塁 SA 931 から 掘底道 SD 719 の土層図……………24	第 48 図	SB 715 詳細図……………67-68
第 13 図	曲輪 2 平坦面から 堀切 SD 910・921 の土層図……………25	第 49 図	SB 721・SA 761……………69
第 14 図	土塁 SA 701 土層図……………27	第 50 図	SB 724……………70
第 15 図	曲輪 7 から曲輪 8 以北の土層図 1……………28	第 51 図	SB 725……………71
第 16 図	曲輪 7 から曲輪 8 以北の土層図 2……………29	第 52 図	SB 726・SB 727・SE 707……………72
第 17 図	曲輪 7 から曲輪 6 の土層図 1……………32	第 53 図	SB 750……………73
第 18 図	曲輪 7 から曲輪 6 の土層図 2……………33	第 54 図	SB 751……………74
第 19 図	曲輪 1 から堀 SD 918 の土層図 1……………34	第 55 図	SB 752……………75
第 20 図	曲輪 1 から堀 SD 918 の土層図 2……………35	第 56 図	SB 753……………76
第 21 図	曲輪 2 から曲輪 14 の土層図 1……………36	第 57 図	SB 754・SB 755……………77
第 22 図	曲輪 2 から曲輪 14 の土層図 2……………37	第 58 図	SD 716・SD 718・SK 749……………81
第 23 図	土塁 SA 930・929 土層図……………39	第 59 図	SK 705・709・717・749……………83
第 24 図	曲輪 13 東壁と SD 922 の土層図……………41	第 60 図	曲輪 1 ビット遺物出土状況図……………84
第 25 図	堀 SD 917 と 塹壕 SD 735 の土層図……………42	第 61 図	SD 719 ～ 曲輪 2・4 ～ SD 910・921 ～ 曲輪 13・17 遺構平面図……………86
第 26 図	曲輪 11・12・16、SA 738・739 土層図 43	第 62 図	SB 907……………87
第 27 図	曲輪 1 西端下層土層図……………45	第 63 図	SK 905……………88
第 28 図	曲輪 11 断ち割り土層図……………46	第 64 図	SB 713……………90
第 29 図	曲輪 17・18・19 土層図 1……………47	第 65 図	SZ 714……………91
第 30 図	曲輪 17・18・19 土層図 2……………48	第 66 図	SZ 908、曲輪 2 への経路想定図・断面図……………92
第 31 図	曲輪 17・18・19 土層図 3……………49	第 67 図	SZ 928……………94
第 32 図	曲輪 17・18・19 土層図 4……………50	第 68 図	SD 722・736・737・917・918・919 平面図……………96
第 33 図	曲輪 17・18・19 土層図 5……………51	第 69 図	SD 722・736・737 土層図……………97
第 34 図	曲輪 17・18・19 土層図 6……………52	第 70 図	SD 917・918・919 土層図……………98
第 35 図	曲輪 17・18・19 土層図 7……………53	第 71 図	曲輪 6・7・8・9・10・11・12 遺構平面図……………99
第 36 図	曲輪 17・18・19 土層図 8……………54	第 72 図	第 6 次西区下層 A 地区

	・SD 746 遺物出土状況図……101
第73図	第6次西区下層B地区……102
第74図	第6次西区下層C地区……103
第75図	当初の姿や改修に関連する痕跡……104
第76図	SB 732・SK 728 ……105
第77図	SK 913・SK 914・SK 915……108
第78図	曲輪14・15・16 遺構平面図 ……109
第79図	曲輪17・18・19 遺構平面図 ……111
第80図	SB 1025・SB 1027 ……112
第81図	曲輪20遺構平面図 ……114
第82図	SK 1001・1002・1016・1021 ……115
第83図	伊坂城跡 遺構全体図 ……117-118
第84図	遺物実測図1 (1～39) ……124
第85図	遺物実測図2 (40～74) ……125
第86図	遺物実測図3 (75～111) ……126
第87図	遺物実測図4 (112～137) ……127
第88図	遺物実測図5 (138～166) ……128
第89図	遺物実測図6 (167～213) ……129
第90図	遺物実測図7 (214～234) ……131
第91図	遺物実測図8 (235～287) ……132
第92図	遺物実測図9 (288～328) ……133
第93図	遺物実測図10 (329～338) ……134
第94図	遺物実測図11 (339～406) ……135
第95図	遺物実測図12 (407～437) ……136
第96図	遺物実測図13 (438～465) ……137

第97図	遺物実測図14 (466～506) ……138
第98図	遺物実測図15 (507～524) ……139
第99図	遺物実測図16 (525～559) ……142
第100図	遺物実測図17 (560～593) ……143
第101図	遺物実測図18 (594～608) ……144
第102図	遺物実測図19 (609～639) ……145
第103図	遺物実測図20 (640～667) ……146
第104図	遺物実測図21 (668～683) ……147
第105図	遺物実測図22 (684～715) ……148
第106図	遺物実測図23 (716～748) ……149
第107図	遺物実測図24 (749～755, 847～852) ……150
第108図	遺物実測図25 (756～813) ……152
第109図	遺物実測図26 (814～832) ……153
第110図	遺物実測図27 (833～846) (金属製品) ……154
第111図	放射性炭素年代測定試料 ……177
第112図	暦年校正結果 ……179
第113図	伊坂城跡(第7次) 出土炭化材の 走査型電子顕微鏡写真……181
第114図	SK1002出土人骨……182
第115図	農家の平面類型……186
第116図	伊坂城跡出土遺物グラフ……188
第117図	瀬戸美濃陶器の型式別推移……189
第118図	伊坂城跡 曲輪1への経路想定略図……190

付図 伊坂城跡(第4～7次) 遺構全体図

表 目 次

第1表	近畿自動車道名古屋神戸線 埋蔵文化財発掘調査経過表……9
第2～4表	遺構一覧表……119～121
第5表	掘立柱建物・櫓・門一覧表……122
第6～22表	遺物観察表……156～172
第23表	出土した貝の種類と重量……175
第24表	ハマグリ割合……175

第25表	ハマグリ以外の貝の重量……175
第26表	測定試料および処理……178
第27表	放射性炭素年代測定および 暦年校正の結果……178
第28表	伊坂城跡(第7次) 出土炭化材の 樹種同定結果一覧……181
第29表	旧千本原村の規模別戸数と役柄……186

写真図版一覧

巻頭図版

図版1 西から見た調査前の伊坂城跡、空から見た伊坂城跡

図版2 真上から見た伊坂城跡、空から見た伊坂城跡

図版3 槽門SB 715

図版4 槽門SB 715の礎石、石つぶてSZ 714

図版5 曲輪2、曲輪1・2北側の切岸

図版6 堀底道SD 719

図版7 曲輪3の断ち割り状況

図版8 曲輪1の常滑陶器大甕出土状況、出土遺物

写真図版 東から見た伊坂城跡

図版1 貝弁川と朝明川に挟まれた丘陵に位置する伊坂城跡、北東から見た曲輪1・2

図版2 北西から見た調査前の伊坂城跡、空から見た曲輪1・2

図版3 真上から見た曲輪1、曲輪1全景

図版4 曲輪1全景、土塁SA 701 土層

図版5 槽門SB 715、礎石1、礎石2、礎石3、礎石4

図版6 礎石5、礎石6、曲輪1 A×22Pit 2、曲輪1 A×22Pit 4、掘立柱建物SB 721

図版7 掘立柱建物SB 725、掘立柱建物SB 726

図版8 掘立柱建物SB 724・SB 750、掘立柱建物SB 751・SB 752

図版9 溝SD 711、溝SD 716、土坑SK 749

図版 井戸SE 707、平坦面SZ 712

図版 曲輪2・3とSD 719など、真上から見た曲輪2

図版 カマドSK 905、門SB 907、礎石建物SB 713

図版 北から見た槽門SB 715と曲輪3、曲輪3土層1

図版 石つぶてSZ 714、曲輪3土層2

図版 曲輪1～3・SB 715・SD 719の位置関係、階段状遺構SZ 908

図版 曲輪4と土塁SA 744、貝殻集積遺構SZ 928

図版 曲輪4土層、新旧の堀切SD 921・SD 910

図版 SD 736土層1、SD 736土層2

図版 土橋SA 743土層、SA 743土層、曲輪6断ち割り

図版 第6次調査西区下層A地区土層、西区下層A地区全景、西区下層A地区 溝SD 746 遺物出土状況

図版 第6次調査西区下層B地区溝SD 747、西区下層C地区溝SD 747、西区下層B地区土層、西区断ち割りでの地滑りを示す土層

図版 西から見た曲輪11、北から見た曲輪7、北から見た曲輪8、西から見た曲輪6・8、堀切SD 733、曲輪9

図版 カマドSK 728を伴う掘立柱建物SB 732、曲輪11断ち割り

図版 曲輪13とSK 913～915、曲輪14全景、北東から見た堀SD 735、SD 735土層

図版 曲輪2東側の切岸、曲輪2・4北側の切岸、曲輪15・16と切岸

図版 北から見た第7次調査西区、土塁SA 1030と曲輪17

図版 掘立柱建物SB 1025、掘立柱建物SB 1027

図版 東から見た曲輪17、東から見た曲輪18

図版 北から見た第7次調査中区、火葬土坑SK 1002、火葬土坑SK 1001、SK 1002、大瓮状遺構SZ 1035

図版 第5次調査中区全景、第5次調査東区全景

図版 第4次調査区全景、第7次調査東区全景

図版 2. 4. 5. 6. 8. 30. 31. 32. 39. 49. 52. 53. 58

図版 66. 67. 83. 98. 99. 106. 108. 117. 120

図版 121. 156. 159. 160. 169. 178. 211. 216

図版 190. 218. 219. 227. 229. 230. 231. 239. 261. 285.

図版 290. 291

図版 295. 304. 305. 306. 307. 308. 311. 314. 315. 326

図版 328. 331. 334. 385. 387. 391. 394. 398. 405. 406.

図版 412. 413

図版 425. 426. 432. 433. 434. 435. 456. 465

図版 467. 490. 491. 496. 501. 502. 506. 509. 510

図版 511. 512. 517. 526. 530. 533. 536. 538. 551. 552

図版 554. 555. 559. 561. 562. 563. 574. 580. 581. 584

図版 585

図版 587. 589. 593. 598. 603. 604. 606. 609. 611. 612.

図版 613

図版 635. 641. 645. 646. 648. 654. 659. 661. 663

図版 665. 666. 667. 668. 670. 671. 675. 677. 678

図版 684. 685. 688. 691. 693. 694. 725. 726. 734. 746.

図版 747. 748. 755

図版 226 765 817 824

図版 760. 766. 769. 783. 788. 793. 810. 811. 818. 821

図版 814 815 816 826 827 829 830 832

図版 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841.

図版 842. 843. 844. 845. 846. アカニシ・ハマグリ・

シオフキ・シジミの一種、バイガイ・マテガイ・

オオタニシ・イタヤガイ・イセノナミマイ

前 言

1 調査に至る経緯

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路とする）は、名古屋市と神戸市を結ぶ、総延長約175kmの高規格幹線道路である。昭和40年に開通した名神高速道路は、自動車交通の増大により、慢性的な渋滞や混雑を生み、高速性・定時性が損なわれる状況が生じてきた。そこで、この課題の解消の対策として、代替路線の新名神高速道路の整備が進められることとなったのである。

三重県教育委員会と中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所は、平成21(2009)年2月24日付けで、事業地内に所在する埋蔵文化財の取り扱い、及び発掘調査の方法についての協定書を取り交わし、四日市JCT～龜山西JCT間の発掘調査を実施してきた。

既に刊行している報告書には、新名神高速道路事業の概要、及び発掘調査に至る経緯、保護措置などの詳細について記載しているため、参照されたい。

2 調査の経過

(1) 調査経過の概要

伊坂城跡の発掘調査は、平成17年度に第1次調査、平成18年度に第2次調査として、第2名神高速道路（当時）建設事業に伴って行われた。この事業は、愛知県境～四日市伊坂町の東名阪自動車道との交差する四日市JCTまでの道路建設工事である。

調査箇所は、伊坂城跡が所在する丘陵の東側、約3分の1程度に当たる。

その後、四日市JCT～龜山西JCTの新名神高速道路建設事業に伴う発掘調査が、平成22年度に第3次調査として行われた。調査の成果などについては、既刊の報告書を参照されたい。

今回、平成22年度から平成26年度にかけて行われた発掘調査の年度ごとの概要を、以下に記述する。平成22年度（第4次調査）

当遺跡のほぼ中央に、北東側の谷から西方向に小さな谷地形が存在する。その谷地形部分を利用し

て、三重県企業庁の工業用水道管が、北側の伊坂台地から南側の別丘陵に所在する同企業庁の汚泥処理場へと地下に埋設されており、その地上部分が管理用道路となっている。

これまでの3次にわたる発掘調査は、この管理用道路の東側で行われてきた。地形的にも、東側にはやや大きな平坦地が、丘陵のほぼ中央を走る城道の両側に存在しており、伊坂城跡に包括される古屋敷遺跡として認識されてきた。

当年度は、谷地形の西側を対象とした初めての発掘調査である。この西側には、丘陵の頂部に主郭が築かれ、周囲には、数箇の小さな平坦地が見られている。

当初計画では、2000㎡の面積を対象とする予定であったが、その多くが北側への急峻な谷斜面であり、調査には危険が伴う。そこで、実際には、尾根にみられる小さな平坦地の実態解明のための斜面部と、丘陵の裾をめぐる堀の有無確認のための谷部に調査区をしぼり、外側にはトレンチ2か所を設定した。

調査の結果、斜面部では、切岸や盛土の痕跡は確認できなかったが、古代以前の土師器・須恵器が出土したことで、丘陵上に古墳時代の遺構が広がっている可能性が出てきた。また、谷部分では、堀などの遺構は検出されなかった。調査面積は、斜面部と谷部940㎡、トレンチ50㎡の合計990㎡である。

【第4次調査 調査日誌（抄）】

- 9月2日 調査前写真撮影
- 10月8日 伊藤徳也氏による現地視察
- 10月1日 調査前写真撮影
- 10月1日 掘削開始
- 10月2日 NEXCO日本・興土整備部・北勢プロジェクトの現地視察
- 10月2日 平坦地区の掘削開始
- 11月9日 空中写真測量（1回目）実施、全景写真撮影
- 11月10日 全景写真撮影
- 11月1日 斜面部掘削（人力）開始
- 11月2日 中井均氏による調査指導

- 1月 3日 下層確認調査
- 1月 2日 全景写真撮影
- 1月 9日 写真撮影
- 1月 10日 空中写真測量 2回目 実施、全景写真撮影
- 1月 13日 全景写真撮影
- 1月 2日 最頂部平坦面掘削開始
- 1月 28日 現地作業終了

平成 23年度

年度当初は、平成 22年度の調査範囲の南側と西側の急峻な谷斜面を除く部分で、750㎡の発掘調査が計画された。しかし、この750㎡の箇所を含めて、西側の主郭を含む大部分については、民有地との境界確定が出来ていない状態でもあった。そのため、当年度は、境界確定をまず実施し、翌年の平成 24年度に用地買収、その後には伐採などを考えると、平成 26年度に発掘調査となるという方向性が、数回にわたる協議・打ち合わせを経て決定した。

結果的には、当初計画した750㎡の発掘調査について、平成 23年度は行われなかったが、平成 24年度

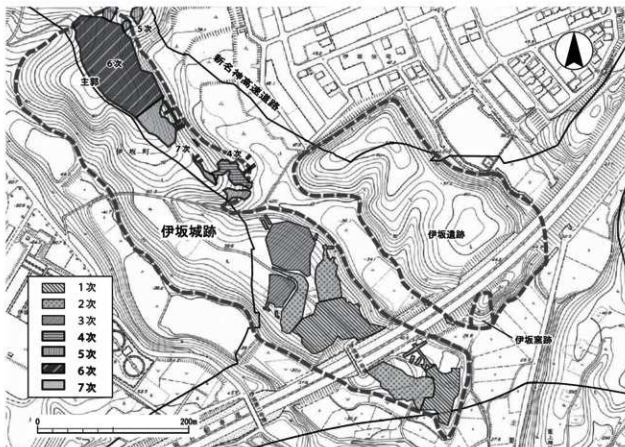
には、一足飛びに用地買収などが進むこともあるため、次年度の調査計画には、年度後半に発掘調査を盛り込むこととなった。

平成 24年度

前年度からの繰り越しとして、当該年度の後半に、750㎡の発掘調査が計画された。しかし、年度半ばになっても、調査場所への進入路や伐採などでの地元調整に課題があり、今年度も発掘調査を断念した。

ところが年度後半になり、平成 22年度の供用開始にむけては、伊坂城跡から西側へ繋ぐための工用道路を計画して、工事を始めなければならない事業が起こってきた。そのための場所としては、出来るだけ遺跡の北側で直線的に計画して、伐採をはじめ調査の諸条件を整える必要性などの調整協議が再三行われた。

また、同時に今年度調査を断念した、750㎡の調査区の内、東側の一部200㎡だけ、平成 25年度の調査計画に入れることとなった。



第1図 伊坂城跡 調査区位置図(1:5000)

平成 25年度（第 5 次調査）

年度が改まり、用地買収も進んだ。同時に、平成 2 年度末の供用開始に向けては、前年度からの懸案事項である工事用道路部分の発掘調査を、当年度内に終了しなければならないという課題の解決のため、年度当初から再三協議を行った。出来る限り工事用道路の計画を直線的にすることや、現地での具体的な調査区設定、伐採など発掘調査を行うための条件整備などが話し合われた。

また、年度の半ばには、伐採の方法や排土置場、詰所や駐車場をどうするかなどの検討協議を重ね、現地確認も数回行った。その結果、ようやく、図面上で 4100㎡を、調査対象とした計画が出来上がった。実際の現地は急峻な斜面部分も多く、それらを除いた平坦地の 3 か所、合計 660㎡の発掘調査を異例ではあるが、年度後半の 1 月末から行うこととなった。

また、当年度は、主郭や 郭（第 6 図参照）を含む 10000㎡を超える範囲の買収作業を進めると同時に、次年度の平成 26 年度内に、上記のような大規模な面積で、且つ、城の主要部分であり、立体的な調査区を如何に安全に円滑に発掘調査するかの方法についても、協議も重ねた。

年度末の 3 月 2 日に、ようやく林地開発申請の許可が下りたため、伐採作業を始められることとなった。ただし、伐採の届出の面積が上限 1 ha となっており、まず、主郭を含む西側から伐採を始めることとなった。伐採方法としては、重機類を使用することでの地下の遺構への影響を考慮して、人力による伐採、搬出を原則とした。

【第 5 次調査日誌（抄）】

- 1 月 1 日 調査前写真撮影
- 1 月 1 日 西区掘削（人力）開始
- 1 月 1 日 東区掘削（人力）開始
- 1 月 1 日 中区掘削（人力）開始
- 1 月 2 日 空中写真撮影、全景写真撮影
- 1 月 2 日 全景写真撮影
- 2 月 4 日 西区新ち割り実施
- 2 月 1 日 現地作業終了

平成 26 年度（第 6・7 次調査）

平成 2 年度末に供用開始をするためには、とにか

く当年度内に、発掘調査を終了しなければならなかった。

伐採作業は、概ね 2 か月を要することとなったが、伐採終了後、速やかに発掘調査が始められるように、同時並行で、各種条件整備の調整などを進めることとなった。ベルトコンベアや資機材などを主郭が所在する高所に運び込むため、果樹園などで使用するモノレールを敷設したり、駐車場・詰所などの調査ヤードの整備、周辺の住宅地を発掘関係者が通行するため、近隣住民への配慮や地元自治会への調整などは、ネクスコの多大なる協力で行った。

西側の伐採が終了して、主郭や 郭を含む 8190㎡もの広大な面積の調査を、ようやく 6 月から開始することが出来た（第 6 次調査）。この調査区は、急峻な丘陵地形の頂部に位置し、地上からの標高差約 40m もある場所である。まさに防衛性の高い城を



資材運搬用モノレール

どのように攻略するか、しかも安全に、という難題に対し、細心の注意を払い、試行錯誤しながら発掘調査を遂行した。周辺で始まった道路建設工事が急ピッチに進められる中、高所からの排土をシューターや、安全帯を付けた作業員が人力で掻き落とししたり、また、重機を活用するなど効率化も図った。

第 6 次調査区東側で引き続き行われていた伐採作業がようやく終了したため、8 月から第 7 次として 2134㎡の調査を開始した。平坦地を含む 3 か所に設定した調査区（西区・中区・東区）のうち、東区については工事の関係上先行して引き渡しを行った。

なお、普及啓発活動の一環として、第 6 次と第 7 次の合同で、現地説明会を 1 月 2 日（祝日）に行った。近年の城ブームもあり、県内外から 45 名とい



急傾斜面での作業風景

う多数の参加があり、関心の高さを実感した。

第6次調査は、特に、担当職員4名の2班体制を組み、第7次調査を含めると、6名という多くの職員が発掘調査に携わるといふ、最大限の努力で対応した。しかも、通常年内をメドに終了している調査を、平成2年2月末末という異例の期間まで行うことで、ようやく現地調査を終了することとなった。

【第6次調査日誌(抄)】

5月2日 モノレールを使って資材搬入

5月2日 調査前写真撮影

6月6日 千田嘉博氏による調査指導



現地説明会風景

6月9日 曲輪1・2の掘削(人力)開始

7月3日 曲輪1虎口で大きな平石を1石検出

8月1日 曲輪1虎口で大きな平石2石目を検出、礎石を伴う門であることを確認。S B 715と命名

8月2日 S B 715の礎石3石目を検出

8月2日 曲輪1において火燄銃の弾が出土

8月2日 S B 715の礎石4石目を検出

9月3日 S B 715の礎石5・6石目を検出

9月16日 S B 715の礎石7石目を検出 曲輪3で石つぶてを検出

9月19日 S B 715の礎石8・9石目を検出

9月22日 C T V (ケーブルテレビ)による取材

9月24日 曲輪6～10の調査開始

9月26日 千田嘉博氏による調査指導 この時、S B 715が櫓門であることが判明 曲輪13～16の調査開始

10月10日 村田修三氏による現地視察

1月20日 空中写真測量(1回目)

1月22日 現地説明会(45名参加)

12月2日 空中写真測量(2回目) 千田嘉博氏による調査指導

12月26日 全景写真撮影

1月14日 下層の調査を開始

2月26日 現地作業終了

【第7次調査日誌(抄)】

9月8日 東区の掘削(人力)開始

9月22日 中区の掘削(人力)開始



雪の伊坂城跡

9月26日 空中写真測量(東区) 千田嘉博氏による調査指導

9月30日 西区の掘削(人力)開始

10月2日 火葬土坑 S K 100掘削

10月24日 火葬土坑 S K 100掘削

10月29日 中区写真撮影

1月2日 現地説明会(45名参加)

12月2日 千田嘉博氏による調査指導

1月14日 空中写真測量(中区・西区) 全景写真撮影

1月16日 全景写真撮影

1月26日 中区下層調査開始

1月2日 西区全景写真撮影

1月2日 西区下層調査開始

2月1日 西区写真撮影

2月1日 現地作業終了

(2) 調査の体制

各年度の担当・体制などは、次のとおりである。

平成25年度

・第4次調査

担当：杉野直也・穂積裕昌・櫻井拓馬

(調査研究課)

土工委託：丸文工業株式会社

期間：平成25年8月9日～平成25年1月14日

面積：990㎡

平成25年度

・第5次調査

担当：西脇智広・水谷豊(調査研究3課)

土工委託：株式会社イビソク

期間：平成25年1月28日～平成26年2月2日

面積：589㎡

平成26年度

・第6次調査

担当：松永公喜・浅野隆司・高松雅文・西脇智広

(調査研究3課)

調査補助委託：株式会社アート

期間：平成26年5月19日～平成27年3月1日

面積：7879㎡

・第7次調査

担当：河尻浩一・水谷豊(調査研究3課)

調査補助委託：橋本技術株式会社

期間：平成26年8月20日～平成27年3月1日

面積：2134㎡

(3) 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法第9条に基づく三重県文化財保護条例第40条第1項(周知の埋蔵文化財における土木工事等の発掘に関する通知)

・平成25年8月6日付け中高名支四工第760号

(中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所長から三重県教育委員会教育長あて) 文化財保護法第99条第1項

(発掘調査の着手報告)

・平成25年8月9日付け教理第12号

(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて) 【平成25年度・第4次】

・平成25年11月28日付け教理第36号

(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて) 【平成25年度・第5次】

・平成26年6月3日付け教理第8号

(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて) 【平成26年度・第6次】

・平成26年8月27日付け教理第18号

(三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて) 【平成26年度・第7次】

文化財保護法第100条第2項

(文化財の発見・認定通知)

・平成25年2月2日付け教委第12-441号

(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて) 【平成25年度・第4次】

・平成26年3月7日付け教委第12-442号

(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて) 【平成25年度・第5次】

・平成25年3月16日付け教委第12-443号

(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて) 【平成26年度・第6次】

・平成25年3月19日付け教委第12-443号

(三重県教育委員会教育長から四日市北警察署長あて) 【平成26年度・第7次】

(4) 普及公開活動

現地調査とともに、発掘調査成果の周知を図るため、現地説明会や発掘調査ニュースの刊行、歴史講座の実施により、普及公開活動を行った。

現地説明会(6・7次)

平成25年1月2日 参加者45名

歴史講座等

・八郷の歴史探検隊 出前講座「伊坂城跡の発掘調査」平成26年10月31日 松永・西脇 参加者25名

・発掘成果報告会「おもろいもん出ましたんやわ@三重2014」平成25年3月14日 三重県埋蔵文化財センター嬉野分室 高松 参加者14名

・八郷の歴史探検隊 出前講座「伊坂城跡出土遺物の整理」平成25年7月30日 服部・高松 参加者2名

・鈴鹿市考古博物館夏休み企画展関連スライド説明



そらんぼ四日市（四日市市立博物館）での展覧会
会 平成2年8月1日 西脇 参加者1名
・公開考古学講座「三重を掘る」 「発掘された伊坂城
一戦国時代の北伊勢を探索」 平成2年9月26日 三重県生涯学習センター 高松 参加者9名
・第3回三重県埋蔵文化財展「高速道路発掘物語」
発掘調査報告会「戦国時代の遺跡 伊坂城跡」平成
28年7月1日 そらんぼ四日市（四日市市立博物館）高松 参加者12名 （服部）

3 櫓門の礎石移設の経緯

平成26年8月19日、S B 715が礎石を伴う門であることを確認した。そこで、城郭研究の第一人者である千田嘉博氏（奈良大学学長・当時）に、門の構造やその性格を探索する目的で、9月2日、現地での調査指導を受けた。その結果、S B 715は、櫓門の構造であり、礎石の大きさだけで比較するなら名古屋城の本丸御殿にも匹敵する、県史跡クラスの遺構であるという評価を得た。

千田氏による調査指導を踏まえて、三重県埋蔵文化財センターは三重県教育委員会社会教育・文化財保護課や、当該市である四日市市教育委員会社会教育課、地元の八郷地区市民センターなどと、その重

要性などについて、情報の共有化を図った。

この最中、10月3日には地元の八郷の歴史探検隊への出前講座、1月1日には報道提供、1月2日には現地説明会を実施した。折からの城ブームもあり、現地説明会は、県内県外から45名という多数の参加者があった。これにより、櫓門の重要性が周知されることになった。

報道提供や現地説明会での反響は大きく、地元から四日市市観光課への保存に関わる打診や、1月22日には、八郷地区連合自治会から中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所へ、櫓門の礎石の移築保存の要望書も提出された。

三重県埋蔵文化財センターとしては、発掘調査と並行しながらではあったが、緊急性を伴うため、上記のような状況も踏まえて、まず、礎石の現地保存の可否について、中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所と協議を行った。

具体的には、伊坂城跡周辺の道路法面の工法について、2・3の図面（案）の提示を受けて、検討を加えた。しかし、いずれの工法も、櫓門の礎石を現地で保存できるようなものではなかった。しかも、本体工事が目前まで完成しており、ルートの変更も無理な状況であったため、現地での保存は、断念せざるを得なかった。

平成2年に年が改まり、1月に入ると、地元からの要望書を受けたことによって、三重県土整備部新名神推進課から、関係する機関での調整会議の依頼があった。

参加機関は、中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所、株式会社大林組、四日市市都市計画課、四日市市教育委員会社会教育課、四日市市商工農水部観光課、八郷地区市民センター、三重県企業庁北勢水道事務所経営管理課・工水保全課、三重県土整備部新名神推進課、三重県埋蔵文化財センター調査研究3課の9機関である。

会議の内容は、礎石を移設するという方向で、具体的な移設先やその時期、経費、維持管理などをどうするかなどについて、1月6日、2月1日、3月6日と3回行われた。

その結果、移設先は伊坂貯水池の外周道路脇、説明用看板は四日市市教育委員会が作成すること、移

設に伴う礎石の移動は大林組が協力すること、維持管理は地元が行うことなどが決まった。中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所には、建設工事が急がれる中ではあったが、発掘調査終了後に行われる移設時期と工事工程の調整などの協力も得た。なお、三重県埋蔵文化財センターは、調査データ（位置関係・図面、写真）の提供や、移設に伴う人的協力を行うこととなった。

年度が替わり、4月14日に、礎石の移設作業が、小雨降る中ではあったが、関係者および地元自治会など10数名で行われた。なお、移設された礎石は、調査時と同じ位置関係で配置されている。

翌1日の中日新聞北勢版に、櫓門移設の記事が掲載された。その後、4月2日には四日市市教育委員会によって作成された説明用看板が設置され、6月5日には、地元自治会によって礎石を囲む杭・柵が設置された。

伊坂貯水池は、季節ごとに様々な木々草花で、その風景を変える。その自然目当ての散策や、ウォーキング・ランニングなどで、年間約30万人もの人々が憩う場所となっている。その一角に、今回、櫓門の発見から1年足らずという短い時間で、様々な関係機関のご理解・ご協力のもと、礎石を移設することができた。櫓門の遺構そのものの現地保存は実現できなかったが、今後、この櫓門の礎石が、歴史を肌で感じ、地元の郷土愛や地域の活性化などに、少なからず寄与できることを期待する。（服部・高松）

【註】

・三重県埋蔵文化財センター『伊坂窟跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告』（2019年）

・三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡（第3次）発掘調査報告』（2019年）

【文献】

・櫻井拓馬「伊坂城跡（第4次）」、『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』（三重県埋蔵文化財センター2019年）

・水谷豊「伊坂城跡（第5次）」、『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化



移築された櫓門礎石と説明用看板

財発掘調査概報』（三重県埋蔵文化財センター2014年）

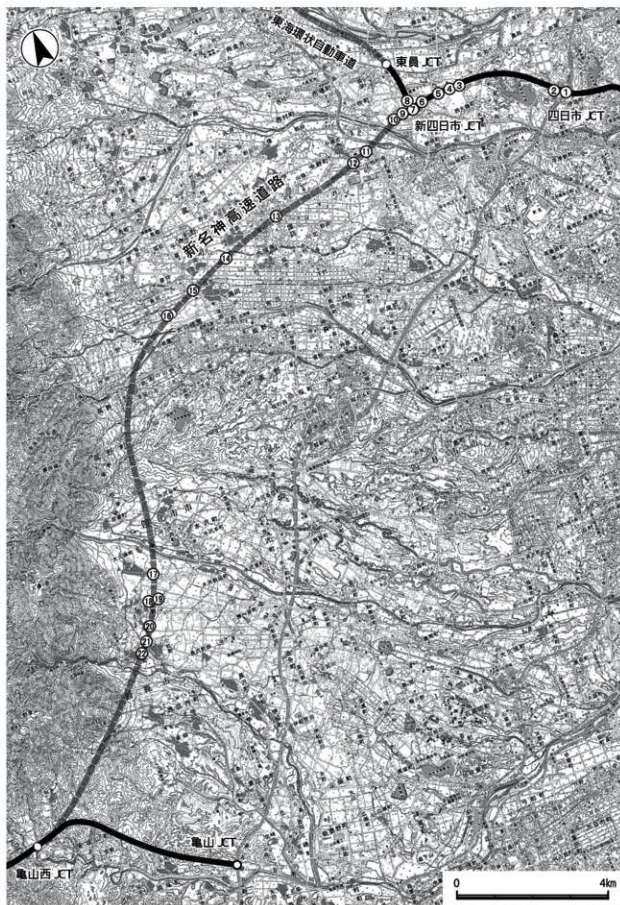
・浅野隆司・高松雅文・松永公喜・西脇智広「伊坂城跡（第6次）」、『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』（2019年）

・水谷豊「伊坂城跡（第7次）」、『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』（2019年）

・三重県埋蔵文化財センター「新名神高速道路埋蔵文化財発掘調査ニュース「新あさけのいにしえ 3」（2019年）」

・三重県埋蔵文化財センター「伊坂城跡（第6・7次）発掘調査現地説明会資料」（新名神高速道路埋蔵文化財発掘調査ニュース「新あさけのいにしえ 23」（2019年）」

・三重県埋蔵文化財センター「第3回三重県埋蔵文化財展 高速道路発掘物語～新発見ぞくぞく！朝明のいにしえ～」（2019年）



第2図 近畿自動車道名古屋神戸線(四日市 JCT-龜山西 JCT)路線内遺跡位置図(1:100 000)

第1表 近畿自動車道名古屋神戸線 四日市 JCT-龜山西 JCT)埋藏文化財発掘調査経過表

No	道路名	所在地	事業地内道路面積	一次調査実施工事区画積	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	合計 発掘	発掘 面積	備考		
					一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査				一次調査 二次調査	
1	伊勢道路-伊賀道路	四日市市伊賀町	3,900	0	42										42				
					558	2,870										3,428			
					800	3,150											3,950	0	
2	伊賀城跡	四日市市伊賀町	25,000	0	4,490	990				389	10,009				16,078				
					6,000	2,500				4,100	12,400					25,000			
							600			1,000		216				1,816			
3	北山道路	四日市市西大藏町-桑名市志知	29,242	6,517						4,350	4,945	9,047	3,423	1,960	22,725				
										4,350	4,945	9,047	3,423	1,960	22,725	0			
									500	500									
4	野中道路	四日市市北山町	15,500	15,500											0				
							580	380							960				
																	0		
5	藤生道路	四日市市北山町	11,000	11,000											0				
							950	530							1,480				
							100	3,780	4,130	4,270	756				13,116				
6	北山道路	四日市市北山町	19,000	5,300						100	3,780	4,130	4,920	790	13,700	0			
							1,530	880							2,410				
							6,400	108,35	18,485	6,173					41,893				
7	伊賀山道路	四日市市北山町	43,000	1,155						6,400	10,712	17,833	4,900		41,845	0			
										580					580				
										750	9,100	5,319			15,169				
8	伊賀山道路	四日市市小牧町	15,000	0						750	9,100	5,150			15,000	0			
										630					630				
										6,426	6,438	6,948			19,812				
9	北山道路	四日市市北山町	20,864	0						6,426	6,438	6,948			20,864	0			
										6,426	6,438	6,948			20,864	0			
																	0		
10	藤生道路	四日市市北山町	—	—										0		北山城跡 対象範囲 に含まれる			
															0				
																	0		
11	小牧南道路	四日市市小牧町	20,726	6,885					460	800	72	165		1,497					
													32	7,371		5,935	13,338		
													165	7,371		6,305	13,641		
12	中野平古道路	四日市市中野町	7,000	7,000										940					
															0				
															0				
13	野添野山古墳	四日市市北山町	1,000	1,000						200				200					
															0				
															0				
14	藤生道路	四日市市北山町	18,500	15,650							920	260		1,290					
															791				
															850		850	0	
15	大久保道路	四日市市南町	12,000	12,000						800				800					
															0				
																	0		
16	新山道路	四日市市南町	9,450	1,621							980		174	1,154					
														6,296	1,495	7,796			
														6,296	1,562	7,859			
17	大和道路	四日市市大久保町	2,200	2,200					180					180					
															0				
															0				
18	山本道路	四日市市山本町	28,280	28,280					1,590		769	948	237.5	3,425					
															0				
															0				
19	山本道路	四日市市山本町	19,200	19,200					800				570	1,370					
															0				
															0				
20	東野野道路	四日市市山本町	4,900	4,900					500					500					
															0				
															0				
21	小社道路	四日市市小社町	12,073	8,065				1,090	400					1,490					
														1,573		4,068			
														1,573		2,073	362	4,068	0
22	小社道路	四日市市小社町	30,000	14,541				2,300	200					2,500					
年度別調査 合計面積					358,995	171,934		42	0	3,060	7,330	5,180	5,222	1,284	1,064	891.5	0	23,153.5	
					558	7,360	1,090	10,910	43,280	30,548	35,787	18,620	1,500.0	1,960.0	171,602.0				
					800	9,150	2,600	10,910	44,956	33,987	40,060	19,990	1,678.0	1,960.0	185,061.0				

位置と環境

1 地理的環境

伊坂城は四日市市伊坂町にある戦国時代の城館跡である。当地は北勢地方と呼ばれ、東には伊勢湾が広がり、西には鈴鹿山脈がそびえる地形的特徴を有する。この鈴鹿山脈からは員弁川・朝明川・海蔵川・三滝川などの諸河川が東流しており、これらの開析作用によって谷底平野が形成されるとともに、丘陵・台地がいくつかのまとまりに分断される。

員弁川と朝明川にはさまれた丘陵は朝日丘陵、朝明川と海蔵川に挟まれた丘陵は垂坂丘陵と呼ばれる。伊坂城跡は朝日丘陵に立地しており、最高所の標高が約84mという好地にあるため、晴天時は海岸部・伊勢湾だけでなく、知多半島を望むことができる。



伊坂城跡から伊勢湾・知多半島を望む

2 歴史的環境

(1) 伊坂城跡

朝日丘陵に位置する伊坂城跡(1)は、東西約650m、南北約130mで、標高約84mを最高所とする曲輪1とそれに隣接する曲輪2を中心にして、いくつもの平坦地が階段状に東方へ連なる。さらにその東に丘陵平坦面をうまく利用した東西300m以上、南北約130mの平坦地が広がる。最高所と麓の比高差は約40mであることから、防御面において地形をうまく利用した選地でもある。

伊坂城跡でのこれまでの調査は、東半の広大な平坦地を中心に行っており、戦国時代の道路状遺構・

溝や段状の地形で区画された屋敷地とそれに伴う建物などを確認した。東半の平坦地では防御施設があまり顕著ではなかったことから「屋敷地部分」と呼ぶことができる。一方、本報告の曲輪1・2では防御施設が顕著なことから、「城郭部分」と呼ぶことができる。

(2) 周辺の遺跡

周辺遺跡は他の報告書において詳しく述べられているため、本報告では関係事項にとどめておく。古代の遺跡としては、伊坂城跡、伊坂遺跡(2)、伊坂塚跡(3)、西ヶ広遺跡(4)、菟上遺跡(5)があげられる。西ヶ広遺跡は、久留倍遺跡(6)の調査以前に朝明郡衙の可能性があげられていた大規模な遺跡でもある。

中世の遺跡として西ヶ広遺跡があげられる。西ヶ広遺跡は、伊坂城跡の南隣の丘陵平坦面に位置しており、中世後期の独立柱建物、区画溝、道路状遺構が検出された。遺跡の北には西ノ広城跡(7)が位置する。竹田憲治氏は、城と集落の関係、時期を考慮して、西ノ広城跡と西ヶ広遺跡が、伊坂城跡の「城郭部分」と「屋敷地部分」へと移った可能性を指摘する。中世墓として、伊坂城跡とは谷を隔てた位置関係にある菟上遺跡があり、10基以上の火葬墓が検出された。

近隣の城跡として、萱生城跡(8)があげられる。近世の所伝によると伊坂城主は春日部氏あるいは伊坂氏とされ、萱生城主は春日部(萱生)氏とされ、



萱生城跡



- 伊坂城跡(1) 伊坂遺跡(2) 伊坂窟跡(3) 西ヶ広遺跡(4) 菟上遺跡(5)
 久留倍遺跡(6) 西ノ広城跡(7) 董生城跡(8) 星川城跡(9)
 八風道(近世)(10) 茂福城跡(11) 富田城跡(12) 志知南浦遺跡(13)



第3図 周辺の遺跡位置図(1:50 000) [国土地理院「荏野」・「桑名」・「四日市西部」・「四日市東部」1:25 000に加筆作成]

伊坂氏と同族とされる。

星川城跡(9)については、春日部氏から分かれた星川氏の居城とされる。近世の所伝が正しいとすれば、春日部氏とその一族は、星川城と伊坂城で桑名から近江へ至る八風道のうち員弁川沿いのルートを、伊坂城と養生城で朝明川沿いのルートを睨んでいたことになる。

八風道は、物流・陸海交通の要衝である桑名と近江を結ぶ街道である。現在の八風道(10)は近世に整備されたルートで、富田一色を起点に朝明川をさかのぼる。中世においては員弁川沿いのルートが主だった。当地域の15・16世紀は、この八風道と桑名の利権をめぐる各勢力が争う時代であった。

(3) 地域的情勢

当地は、有力な戦国大名が成立しなかった地域で、中小の国人・地侍が群在した。『勢州軍記』をはじめとした近世の軍記物はこうした状況から、北勢四十八家と称した。この北勢四十八家は、室町・戦国時代の文書からいくつかのまとまりを形成していたことが知られている。

このうち朝明郡には十ヶ所人数、員弁郡には北方一揆と呼ばれる地域的結合を形成していた。十ヶ所人数は、伊勢神宮内宮領10ヶ所を給付された者たちをさし、朝倉・海老名・横瀬・佐脇・足田・富永・南部らの諸氏からなる。彼らの大半は室町幕府の奉公衆に属していた。奉公衆は将軍親衛隊という性格を有する。十ヶ所人数に対応する城として、朝倉氏の茂福城(11)・市場城・保々西城・中野城、南部氏の富田城(12)などがあげられる。

一方、北方一揆は大木・田能村・多胡・梅津(梅



保々西城跡



茂福城跡

戸)・養生・伊坂・宇佐美らの諸氏で構成されている。

北方一揆は、一揆全体で一個の御家人と同等に扱われる身分だったと考えられる。したがって、北方一揆の諸氏は十ヶ所人数の諸氏と比べて小規模な領主だったとされる。その後、梅戸・養生氏が奉公衆として名を運ねることから、一揆を構成する領主間に力の差が生じ、やがて北方一揆は文明年間ごろに解体したとされる。北方一揆のなかで盟主的な存在であったのは梅戸氏である。この梅戸氏の城として大井田城跡などがあげられる。

(4) 応仁の乱以降の北勢

応仁の乱後、北勢は北畠氏・長野氏の対立に一色氏・関氏・北伊勢国人が巻き込まれるかたちで抗争を繰り返していた。その後、永正8(1511)年には長野氏が桑名を占領する事態が生じた。これに対して住民が逃散で抵抗し、伊勢神宮や山田三方の仲介斡旋もあって、1年半後に長野氏は撤退する。しかし、長野氏は再び桑名を勢力下に収めたようで、梅戸氏の反発をかうことになる。やがて、桑名は長野氏と梅戸氏による共同支配が行われたものの、天文9(1540)年に六角氏・梅戸氏らの勢力と長野氏・朝倉氏らの勢力が争い、前者の勝利に帰した。これにより、北勢では六角氏の影響力が一層増すことになった。

永禄10-12(1567-69)年、織田信長が伊勢に侵攻する。近世の軍記物によると、この時に伊坂城は廃城になったとされる。しかし長島一向一揆の際に、人質を差し出した勢力として「いさか」の名が『信長公記』にみえる。したがって、近世の軍記物における脚色を考慮する必要がある。

元龜元年～天正元(1570～1574)年の長島一向一揆の後、北勢は滝川一益が統治する。滝川一益による統治は明確ではないものの、従来の土地支配関係を把握するとともに、これをともに新たな土地支配関係の一部乗り出した可能性も指摘されている。

天正10(1582)年の本能寺の変、天正11(1583)年の賤ヶ岳の戦い後、柴田勝家側だった滝川一益は領地を没収され、北伊勢五郡は尾張・南勢・伊賀とともに織田信雄による支配地となる。しかし、天正12(1584)年の小牧・長久手の戦いの後、織田信雄の領地は北伊勢と尾張に縮小する。この際、家臣の領地配置換えを大規模に行ったことが、天正13(1585)年の『織田信雄分限帳』にみえる。領地の縮小に伴って、家臣の給地もそれぞれ3分の1減封することを基本とした。この分限帳において、董生氏・伊坂氏の名がみえること、本貫地から切り離された地に伊坂氏の名がみえることを確認できる。この2点から、伊坂氏がこの時点まで命脈を保っていたことがわかる。伊坂城の城主は、この領地配置換えかそれ以前のごく近い時期まで、伊坂の地を本貫地とした可能性が推測できる。その後、天正18(1590)年、織田信雄は下野に転封され、北伊勢は豊臣政権の直轄領などとなる。(高松)

【註】

伊坂城跡の地理的環境については、前回調査報告書等に詳述されているため、略述にとどめておく。

・櫻井拓馬「地理的環境」『伊坂城跡・伊坂遺跡(第5次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 201年)

・櫻井拓馬「位置と環境」『伊坂城跡(第3次)発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 201年)

・三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡発掘調査報告』(200年)

・三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡(第3次)発掘調査報告』(201年)

・倉田文美・水橋公恵「位置と環境」『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 200年)

・竹田憲治「位置と歴史的環境」『伊坂城跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 200年)

前掲註

・三重県埋蔵文化財センター『伊坂遺跡発掘調査報告』(200年)

・三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡・伊坂遺跡(第5次)発掘調査報告』(201年)

・三重県教育委員会「西ヶ広遺跡」『日本道路公団東名阪道路埋蔵文化財調査報告』(197年)

・四日市市教育委員会「西ヶ広遺跡発掘調査報告-D地区-a」(197年)

・三重県埋蔵文化財センター「西ヶ広遺跡(第3・4次)発掘調査報告」(200年)

・三重県埋蔵文化財センター「菟上遺跡発掘調査報告」(200年)

四日市市教育委員会「久留倍遺跡5-a」(201年)

竹田憲治「発掘調査のまとめ」『伊坂城跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 200年)

伊藤徳也「再発見北伊勢国之城」(200年)

稲本紀昭「南北朝の動乱と北伊勢」『戦国期の北伊勢』『四日市市史』第1巻通史編古代・中世(四日市市 199年) 前掲註

・飯田良一「北伊勢の国人領主」『中世史研究』第9号(中世史研究会 198年)

・飯田良一「員弁郡の国人領主について」『山田城跡発掘調査報告』(東員町教育委員会 198年)

・飯田良一「室町幕府の成立と北伊勢の国人たち」『四日市市史』第1巻通史編古代・中世(四日市市 199年)

以下、文献については稲本・飯田論文に拠る。

・太田牛一著 桑田忠親校注『信長公記』(新人物往來社 199年)

前掲註

四日市市『四日市市史』第7巻史料編古代・中世(1991年)

・播磨良紀「織田・豊臣政権期の北伊勢」『戦国時代の北伊勢』四日市市講座 3(四日市市学・四日市市学研究会 2008年)

調査の方法と土層

1 調査の方法と名称

調査区の設定と名称(第6図) 第4次調査では、地形にしたがって斜面部と谷部と呼称し、谷部には遺跡外側に向かって筋状にトレンチを設定した。

第5次調査では、独立した3つの調査区を設定し、西区・中区・東区と呼称した。

第6次調査では、調査区全体を5つに区分し、曲輪1・曲輪2・西区・中区・東区と呼称した。

曲輪1では改修の痕跡が確認されたため、土層S A 756を除去して下層調査を行った(曲輪1下層調査区)。また、曲輪7が大規模な地滑りによって形成されたと考えられたため、それ以前の状況を把握する下層調査を行った(西区下層A地区・B地区・C地区)。

第7次調査では、独立した3つの調査区を西区・中区・東区と呼称し、西区・中区の斜面にはトレンチを設定した。また、西区でも2か所で下層調査を行った。

座標管理とグリッド設定(第4・5図) 伊坂城跡全体には調査前測量の成果をもとに大地区(日本測地系で $X = 106500$ $Y = 57000$ を原点とした100m四方)と小地区(東西を1~25 南北をa~yもしくはA~Yに分割した4m四方)が設定されている。第1~3次調査は、その地区割りにしたがっ

て調査が行われた。

第6・7次調査では、過去の調査との整合をはかるため、平面直角座標系は日本測地系を採用し、調査区内のグリッド分割方法についても、第1~3次調査の大地区・小地区を踏襲した。ただし、第4次調査では小地区のアルファベットと数字が逆になっており、第5次調査では世界測地系が採用され、独自のグリッドとなっている。

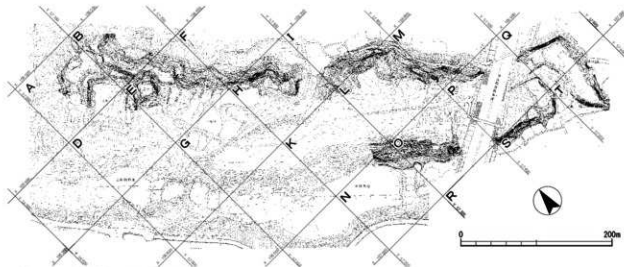
最終的に第1~3・6・7次調査の方法に合わせ、第4~7次調査の全体図(付図)を作成した。

遺構番号の付与(第7図) 土塁や建物などの遺構には、種類を問わず通し番号を付与し、ビットについては小地区(グリッド)ごとに通し番号を付けた。

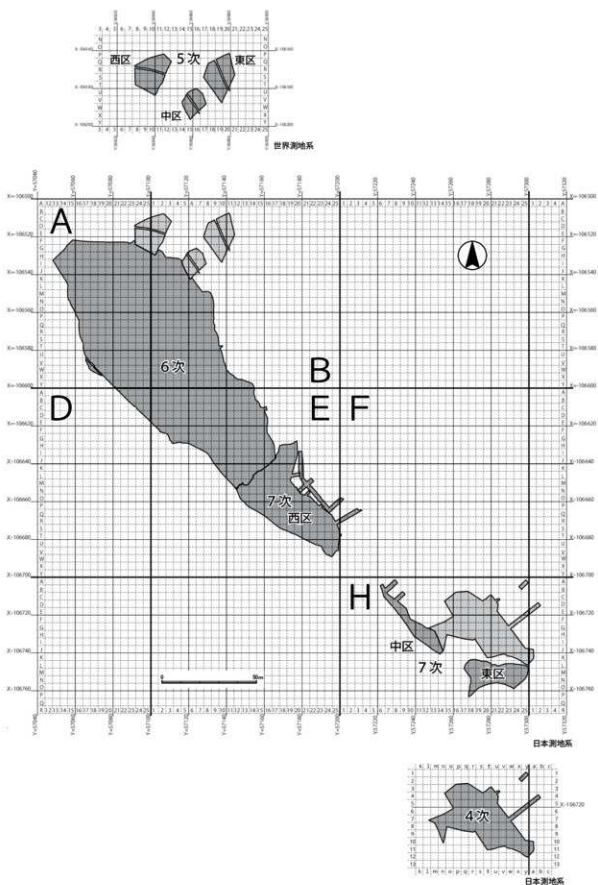
第4・5次調査では、調査時に番号は付与すべき遺構は確認されなかった。

平成2年度は3班体制で調査を進めたため、遺構番号が重複しないように、曲輪1から第6次西区には701~、曲輪2から第6次東区には901~、第7次調査は1000~を付与した。

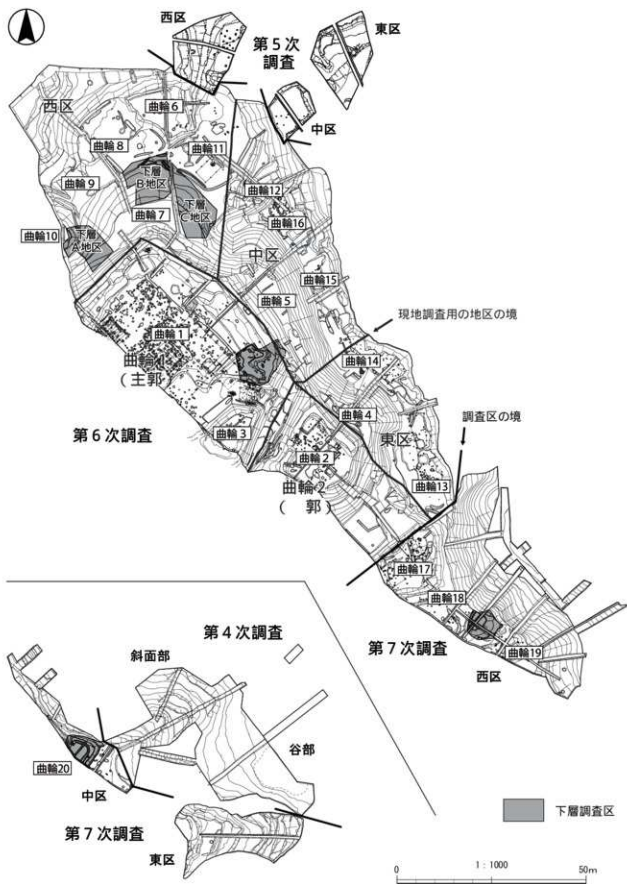
曲輪名の整理(第6図) 概報では第6次調査の曲輪を1~16と整理したが、第7次調査については曲輪A~Cと仮称した。本報告に際し、A~Cを17~19に直して追加して、1~20とした。



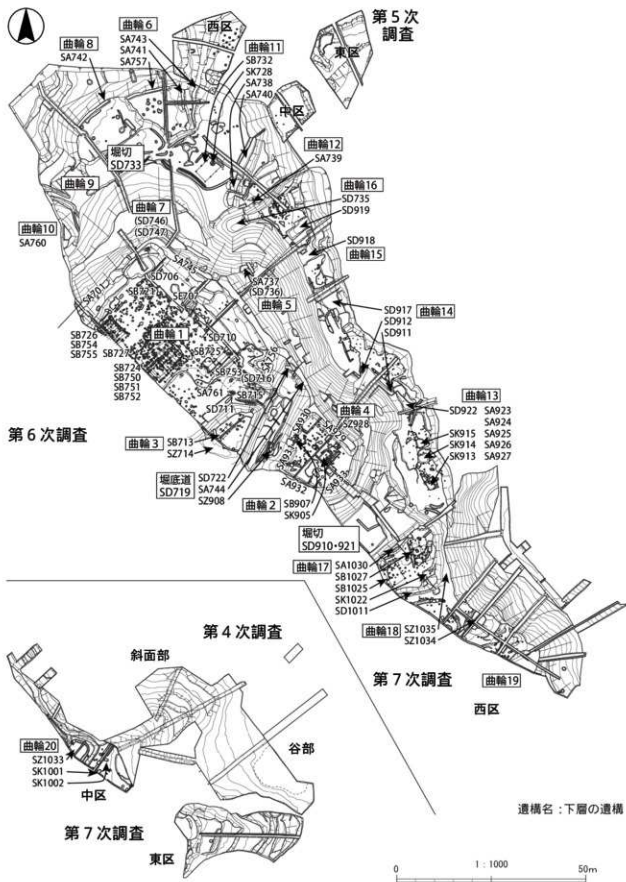
第4図 伊坂城跡 大地区設定図(1:5000)



第5図 伊坂城跡 小地区(グリッド)設定図(1:2 000)



第 6 図 調査区と曲輪の名称 (1 : 1000)



第7図 主要遺構位置図(1:1000)

2 基本層序

伊坂城跡の基本層序は、表土、流土、遺構面（地山）という構成をとる。地山については、上から橙色礫層・黄色砂層・灰色粘土層の3層構成をとる。おおむね標高約79mを境に、橙色礫層と灰色粘土層がわかれ、場所によっては、その間の標高76～79m付近に黄色砂層が認められる。地表に近い部分は風化による影響で、礫層は赤褐色系、粘土層は黄橙色系に変色している。

旧表土は、曲輪1の土塁の断ち割り、曲輪6・8・11・12の斜面部等で確認できた。曲輪1・2等の平坦面は、地山を削り出して形成しているため、旧表土は既に失われていると考えられる。この点を裏返せば、地山削り出しが不要だった部分において旧表土が残存しているといえる。

本書では、土塁盛土・整地層・造成土の語を使い分けておく。土塁盛土は、橙色礫層・灰色粘土層を利用している。技術的な工夫（土質の異なる盛土を交互に積み上げる、細かな単位で積み上げる等）は確認できなかった。おおむね積み方は粗い。なお、曲輪1では、土塁の外側から盛土を行う傾向にある。

整地層は、曲輪1・2において認められるもので、地山削り出しで形成された平坦面の高さにあわせて積まれた層をさす。曲輪1・2の場合、橙色礫層の地山を削り出して平坦面を形成し、その赤褐色系の排土を整地層に利用することを基本とする。

造成土は、曲輪6・8・11・12等で認められるもので、橙色礫層・灰色粘土層およびこれらの風化層に由来する。斜面と同じ傾斜で土が堆積する傾向にある。これを繰り返して、曲輪の平坦面を徐々に広げていくのである。排土を同じ場所で処分し続けた結果、平坦面となったというのが実状であろう。概して積み方は粗い。

3 個別土層（第8・9～4図）

（1）曲輪1（第9図：1a～1c）

曲輪1 曲輪1の平坦面は上段と下段に分かれている。下段では表土下において流土の第3層、上段では流土の第4層が堆積する。下段および段付近に流土がやや厚く堆積する。

土塁SA701 幅9m、残存高2mである。表土・流土の下に斜堆積の盛土第10～18層、その下には水平堆積の第19～2層が確認された。

水平堆積の一番上の第1層は、伊坂城築城以前の旧表土と考えられ、厚さ20mの褐色極細粒砂で構成される。この下には旧表土下の流土または地山風化土第20・2層、その下に橙色礫層地山である第22層が確認できた。

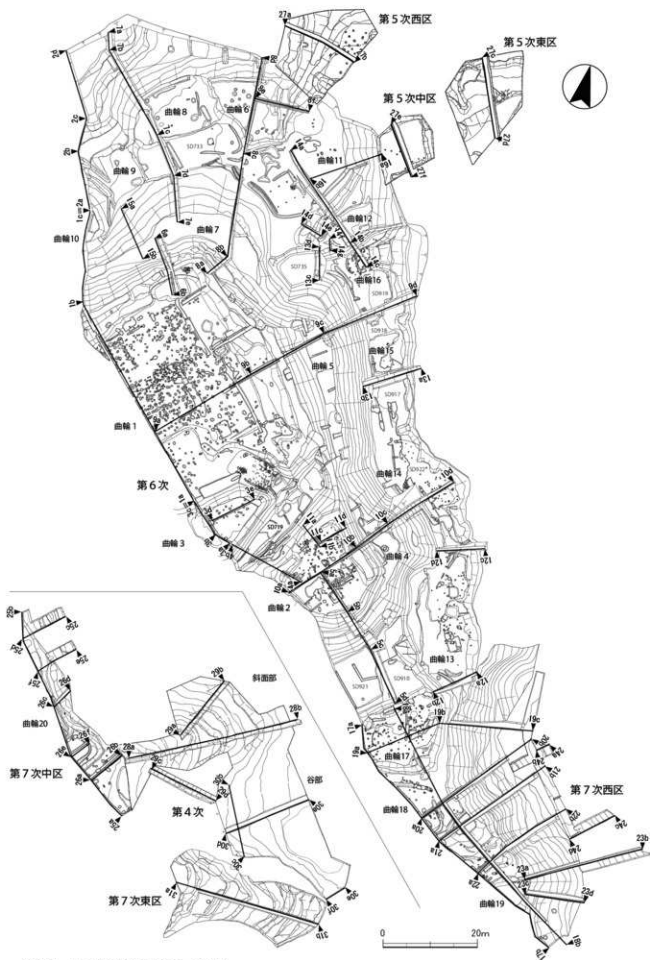
旧表土の第1層は、曲輪1平坦面より80m以上高い位置で確認された。この点から、曲輪1を形成するにあたって、あらかじめ平坦面と土塁の配置を決め、内側のみ旧表土から80m以上掘削し、安定した地山層を平坦面としたことがわかる。

盛土は外側が高い斜堆積を示す。下層に向かうにつれて次第に明褐色系の土層が多く占める傾向がある。第1層は橙色礫層地山に由来し、第1層は橙色礫層地山の風化層に由来する土色・土質の特徴を示しており、自然堆積とは逆の堆積順であった。曲輪1平坦面を掘削した土を、一旦置いたり、混ぜたりすることなく、そのまま積み上げて土塁に利用したと推測される。

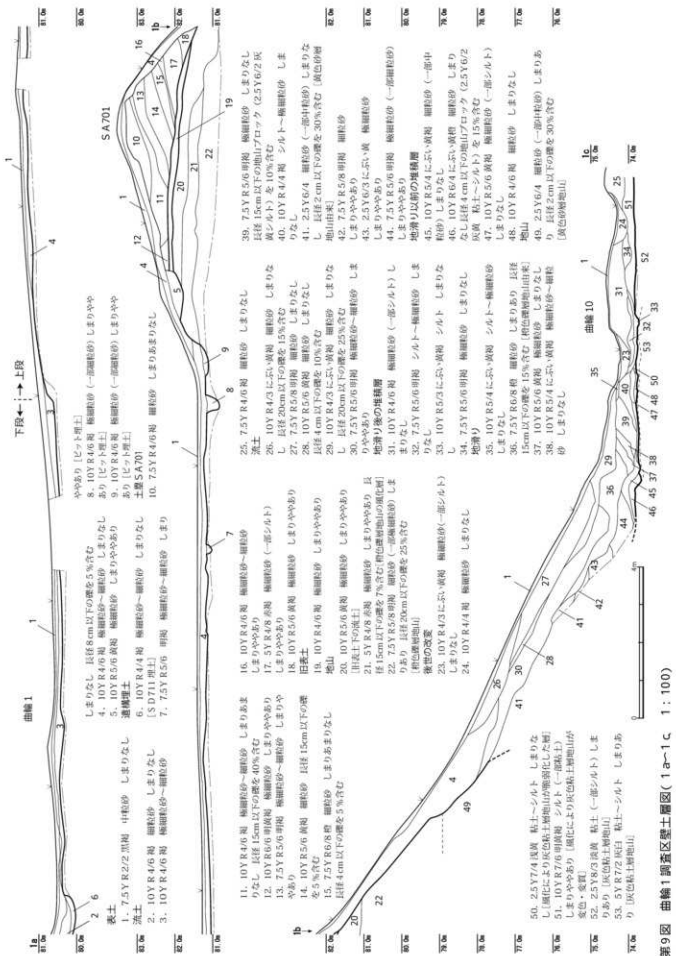
盛土部分は、まず曲輪の縁辺部から積み上げて、内側にはさほど盛土を行わなかったために平坦面側に段を有するような形状となった。こうした盛土築成のために、段の高さと旧表土の高さがおおむね一致しているのだろう。なお、第1層は、礫層ともいえる程多くの礫を含んでいる。第10～12層と第13～18層で2分できるとすれば、前者は、改修等で築成された可能性がある。

切岸 SA701は西側の斜面では、流土の第26～30層が確認された。この部分は、旧表土・風化土が認められないこと、自然傾斜よりもやや急峻な斜度であることから、人工的に掘削された、いわゆる切岸と考えられる。当初はさらに急峻であったと考えられる。

地滑り層 平面的にみると標高77m付近には緩やかな段があり、当初、犬走りのような遺構を想定した（第4図）。しかし、第42～4層の堆積方向は傾斜方向とは逆の方向を示したため、流土以外の可能性が想定できた。後述する他調査区の成果も勘案すると第41～4層は、地滑りおよびその影響を受け



第8图 土层图实測位置图(1:800)



下段 ← 上段

1/a 1/b 1/c 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52

1. 7.5Y R 2/2 黒河 中粒砂 しまりなし
 2. 10Y R 4/6 黒河 細粒砂 しまりなし
 3. 10Y R 4/6 明河 細粒砂～細粒砂 しまりなし
 4. 10Y R 4/6 黒河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり
 5. 10Y R 5/6 黒河 細粒砂 しまりややあり
 6. 10Y R 4/4 黒河 細粒砂～細粒砂 しまりなし
 7. 7.5Y R 5/6 明河 細粒砂～細粒砂 しまりなし
 8. 10Y R 4/6 黒河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり
 9. 10Y R 4/6 黒河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり
 10. 7.5Y R 4/6 黒河 細粒砂 しまりありなし
 11. 7.5Y R 5/6 明河 細粒砂～細粒砂 しまりなし
 12. 10Y R 4/6 黒河 細粒砂～細粒砂 しまりややあり
 13. 7.5Y R 5/6 明河 細粒砂～細粒砂 しまりややあり
 14. 10Y R 5/6 黒河 細粒砂 長径 15cm 以下の漂りややあり
 15. 7.5Y R 6/8 明河 細粒砂 しまりありなし
 16. 10Y R 4/6 黒河 細粒砂～細粒砂 しまりややあり
 17. 5Y R 4/8 赤河 細粒砂 (一部シルト)
 18. 10Y R 5/6 黒河 細粒砂 しまりややあり
 19. 10Y R 4/6 黒河 細粒砂 しまりややあり
 20. 10Y R 5/6 黒河 細粒砂 しまりややあり
 21. 5Y R 4/8 赤河 細粒砂 しまりややあり 長径 15cm 以下の漂りややあり (和色砂質山)

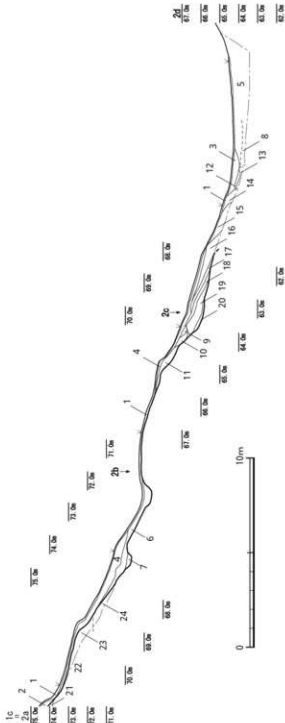
22. 7.5Y R 5/6 明河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり
 23. 10Y R 4/3 にふい、赤河 細粒砂 (一部シルト) しまりなし
 24. 10Y R 4/4 黒河 細粒砂 しまりなし
 25. 7.5Y R 4/6 明河 細粒砂 しまりなし
 26. 10Y R 4/3 にふい、赤河 細粒砂 しまりなし 長径 20cm 以下の漂りややあり 15% 含む
 27. 7.5Y R 5/6 明河 細粒砂 しまりなし
 28. 10Y R 5/6 黒河 細粒砂 しまりなし
 29. 10Y R 4/3 以下の漂りややあり 10% 含む
 30. 7.5Y R 5/6 明河 細粒砂～細粒砂 しまりややあり
 31. 10Y R 4/6 黒河 細粒砂 (一部シルト) しまりなし
 32. 7.5Y R 5/6 明河 シルト～細粒砂 しまりなし
 33. 10Y R 5/6 にふい、赤河 シルト しまりなし
 34. 7.5Y R 5/6 明河 細粒砂 しまりなし
 35. 10Y R 5/6 明河 シルト～細粒砂 しまりなし
 36. 7.5Y R 6/8 明河 細粒砂 しまりあり 長径 15cm 以下の漂りややあり (和色砂質山)

37. 10Y R 5/6 黒河 細粒砂 しまりなし
 38. 10Y R 5/6 にふい、赤河 細粒砂～細粒砂 しまりなし
 39. 7.5Y R 5/6 明河 細粒砂 しまりなし 長径 15cm 以下の漂りややあり (2.5Y Y 6/2 灰黄シルト) を 10% 含む
 40. 10Y R 4/4 黒河 シルト 細粒砂 しまりなし
 41. 2.5Y 6/4 細粒砂 (一部中粒砂) しまりなし 長径 2cm 以下の漂りややあり (黄色砂質山)

42. 7.5Y R 5/6 明河 細粒砂 しまりややあり
 43. 2.5Y 6/3 にふい、黄 細粒砂 しまりややあり
 44. 7.5Y R 5/6 明河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり
 45. 10Y R 5/4 にふい、赤河 細粒砂 (一部中粒砂) しまりなし
 46. 10Y R 6/4 にふい、赤河 細粒砂 しまりなし 長径 4cm 以下の漂りややあり (2.5Y 6/2 灰黄 粘土～シルト) を 15% 含む
 47. 10Y R 5/6 黒河 細粒砂 (一部シルト) しまりなし
 48. 10Y R 4/6 黒河 細粒砂 しまりなし
 49. 2.5Y 6/4 細粒砂 (一部中粒砂) しまりあり 長径 2cm 以下の漂りややあり (黄色砂質山)

50. 2.5Y 7/4 灰黄 粘土～シルト しまりなし (層位により灰色粘土層の強化した層)
 51. 10Y R 7/6 明河 シルト (一部粘土)
 52. 2.5Y 8/3 灰黄 粘土 (一部シルト) しまりあり (灰色粘土層山)
 53. 5Y R 7/2 灰白 粘土～シルト しまりあり (灰色粘土層山)

第9図 曲輪1調査区露土層図(1a-1c 1:100)



- 表土
1. 7.5Y R 2.2黒褐色 中粒砂 しまりなし
表土の浸透
2. 7.5Y R 4.6暗 細粒砂 しまりなし
表土
3. 7.5Y R 4.6暗 細粒砂 しまりなし
4. 10Y R 5.6黄褐色 細粒砂-一部粗砂 しまりなし
5. 10Y R 4.4暗 細粒砂 (一部中粒砂) しまりなし
6. 10Y R 6.6明黄褐色 細粒砂 しまりなし
7. 10Y R 6.4に25:1黄褐色 細粒砂-一部粗砂 しまりなし
自然地形への堆積層
8. 7.5Y R 4.6暗 細粒砂 しまりなし
【堆積層の下の堆積層】
9. 10Y R 5.4に25:1黄褐色 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
10. 10Y R 5.6黄褐色 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
厚さ 15cm以下の地山ブロック (SY 7.2灰白) しまりややあり
11. 10Y R 5.6明黄褐色 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
厚さ 20cm以下の地山ブロック (SY 7.2灰白) しまりややあり
12. 10Y R 6.4に25:1黄褐色 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
13. 10Y R 6.6明黄褐色 シルト-一部細粒砂 しまりややあり
曲輪辺原に伴う可能性をもつ層
14. 10Y R 5.6黄褐色 細粒砂-一部粗砂 しまりややあり
厚さ 15cm以下の地山ブロック (SY 7.2灰白) しまりややあり
15. 7.5Y R 5.8明黄褐色 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり
16. 7.5Y R 6.6暗 シルト-一部細粒砂 しまりややあり
厚さ 1cm以下の堆積層 7%含む
厚さ 1cm以下の地山ブロック (SY 7.2灰白) しまりややあり
7%含む
17. 10Y R 6.4に25:1黄褐色 細粒砂 しまりややあり
18. 7.5Y R 5.6明黄褐色 細粒砂-一部粗砂 しまりややあり
厚さ 1cm以下の堆積層 7%含む
19. 10Y R 7.6明黄褐色 シルト-一部粗粒砂 しまりややあり
厚さ 1cm以下の堆積層 7%含む
厚さ 2cm以下の地山ブロック (2.5Y 8.3濃黄 シルト (一部粘土) しまりややあり) を 20%含む
20. 7.5Y R 5.6明黄褐色 細粒砂-一部粗砂 しまりややあり
地山
21. 10Y R 7.6明黄褐色 シルト (一部粘土) しまりややあり
【黄化により灰色粘土層堆積山が変色・変質】
22. 2.5Y 8.3濃黄 粘土 (一部シルト) しまりあり
【灰色粘土層堆積山】
23. 5Y 7.2灰白 シルト (一部粘土) しまりあり
【灰色粘土層堆積山】
24. 2.5Y 6.1濃黄 粘土 (一部シルト) しまりあり
【灰色粘土層堆積山】

第10図 曲輪 10から西側斜面の調査区型土層図(2a~2d 1:200)
一部柱状図を用いて図面を作成

た崩落土・堆積土と考えられる。土層の特徴は地山と変わらないが、しまり具合において大きく異なる。この地滑りは、地滑り以前のSD 746から大塚第1段階の遺物が出土しているため、伊坂城築城後に発生したと考えられる。

(2) 曲輪10から西側斜面

(第10図：2a～2d)

曲輪10西側斜面 西側斜面は流土の第3～6層がみられ、自然地形の谷に至る。第14～20層は、いずれも斜堆積を示しており、灰色粘土質地山由来の土をブロック状に含むことを特徴とする。土質の特徴から切岸・平坦面の形成に際して地山を削った際の排土と考えられる。これらの堆積層の上には曲輪9が位置するものの、造成土は確認されていない。

(3) 曲輪3から堀切SD 910

(第11～13図：3a～3e 4a～4b 5a～5d)

曲輪3 下半部を地山削り出しによる形成、上半部を盛土によって形成されている。厚さ2mの盛土からなる上半部は、大きく3つのまとまりに分かれ、上層は第7～1層、中層は第18～3層、下層は第33～4層である。

地山削り出しの部分は、曲輪1下段から測ると厚さ30mとなる。地山は橙色礫層である。旧表土・風化土が確認できなかったことから、曲輪3の形成に先立って、まず旧表土と風化土を除去したものと判断できる。この層の上端は標高812～813mで、曲輪1上段の高さに近似する。したがって、曲輪1の上段の形成と同時に曲輪3の地山も掘削された可能性がある。その後、曲輪1下段の形成が別途、行われたのであろう。

下層は、盛土の単位が小さいことを特徴とする。盛土の開始時は、厚さ5cmで水平に敷き詰め、その後はSD 719側から盛土を行う。このため、斜堆積が確認できる。この斜堆積は、赤色系と灰色系の盛土を交互に積み重ねることを意図したようである。粒度の異なる盛土を交互に積み重ねることで摩擦力を高め、崩れにくくする互層の可能性がある。しかし、曲輪3の下層以外では、いわゆる互層は観察できなかった。これらの斜堆積の後、再び、厚さ5cmで水平に盛土を行う。

中層は、盛土の単位が大きいこと、白色系の盛土

が確認できることが大きな特徴である。地山の供給源として、灰色粘土質地山とその風化層が想定される。SD 719等の深掘時に排出された土を利用したと考えられる。中層は中心付近から開始されたものの、その後はSD 719側に偏って盛土が積まれた。遺物として第30層より常滑陶器の鉢(456)が出土している。

上層は、盛土の単位が大きく、褐色系を主体とし、粒度は中層と比べると粗い傾向にある。盛土の供給源として、橙色礫層地山とその風化土が想定される。中層がSD 719側に偏って形成されているために、上層は曲輪1側に盛ることによって高さを調整しているのが特徴である。遺物として第1層より常滑陶器の鉢(455)が出土している。

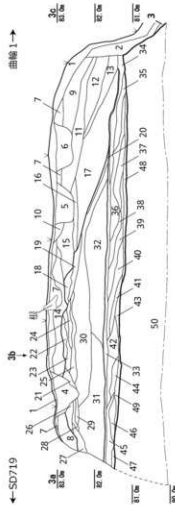
その他の特徴として、SD 719側には斜堆積層が観察できない点がある。当初は、SD 719側へもう少し伸びていたが、SD 719弘幅等の改修によって曲輪3が削り取られ、急峻な斜面になった可能性がある。

曲輪3の平坦面では、流土はごくわずかで、表土を除去すると、すぐに石つぶてと礎石建物SB 713を確認できた。

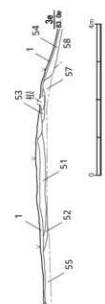
SD 719 表土下において流土の第59～6層が確認された。第68～8層はSD 719の埋土にあたる。土層の観察から、埋没過程において幾度かの溝状の凹地が形成されるが、いずれも雨水等による影響と考えられる。最下層の第8層は灰黄色極細粒砂で構成されており、灰色粘土質地山の由来する堆積土といえる。堀底の形状は、西側では幅30cm程度の浅い溝状を呈しており、南側に向かって徐々に下降する。

このSD 719埋土よりも前の堆積として第89～98層が確認された。これらの層は、褐色系の埋土も含まれており、土色・土質は一定とはいえない。土層の関係から、古い堀が掘削された後に、その堀の埋土の第89～98層が堆積し、新たに堀SD 719を掘削したと考えられる。すなわち堀SD 719に新古があると考えられる。古い堀の底は標高778～779mで、SB 715の前面にある低い段とほぼ同じ標高である。

SD 719付近の地山は、橙色礫層地山の第10層、灰色粘土質地山の風化・変色した第110～11層である。

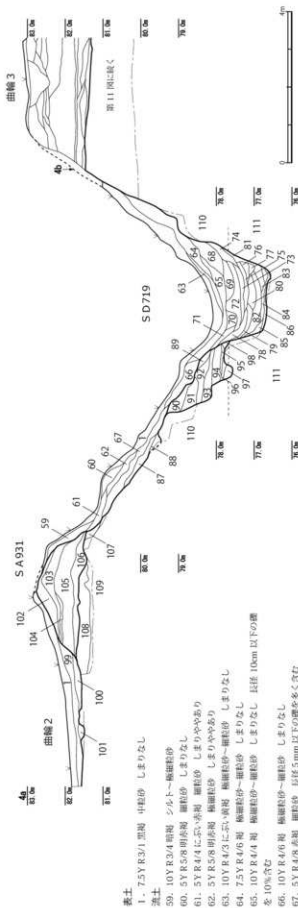


- 表土
 1. 7.5Y R 2/2 黒河 中粒砂 しまりなし
 流土
 2. 10Y R 4/6 河 細粒砂 しまりなし
 遺構埋土
 3. 10Y R 4/4 河 細粒砂 しまりなし [S D 711 埋土]
 遺構埋土の可塑性をもつ層
 4. 10Y R 4/4 河 細粒砂 しまりなし 長径 15cm 以下の礫を 5% 含む
 5. 10Y R 4/3 に近い河河 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり 長径 15cm 以下の礫を 25% 含む 長径 2cm 以下の礫を 3% 含む
 遺構埋土または埋埋乱
 6. 10Y R 4/4 河 細粒砂 しまりなし 長径 8cm 以下の礫を 5% 含む
 曲輪 3 遺土層
 7. 10Y R 4/4 河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり (流土の可能性も有る)
 8. 10Y R 4/6 河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりなし
 9. 10Y R 4/4 河 細粒砂 しまりなし 長径 15cm 以下の礫を 7% 含む
 10. 10Y R 4/4 河 細粒砂 しまりややあり 長径 8cm 以下の礫を 3% 含む (層 11 層と一致と看せらるる)
 11. 10Y R 5/6 河河 細粒砂 しまりややあり 長径 10cm 以下の礫を 5% 含む
 12. 10Y R 4/4 河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり 長径 20cm 以下の礫を 30% 含む
 13. 7.5Y R 5/6 河河 細粒砂 しまりややあり
 14. 10Y R 4/4 河 細粒砂 しまりなし 長径 8cm 以下の礫を 20% 含む
 15. 10Y R 4/6 河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり 長径 15cm 以下の礫を 5% 含む



- 曲輪 3 遺土層
 33. 7.5Y R 4/6 河 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり (上層は 2.5Y 0/2 灰黄 細粒砂 しまりなしに変質) (埋土)
 34. 7.5Y R 5/6 河河 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり [赤色]
 35. 10Y R 4/4 河 細粒砂 しまりややあり [灰色]
 36. 7.5Y R 5/6 河河 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり 長径 15cm 以下の礫を 7% 含む [赤色]
 37. 10Y R 4/4 河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり [灰色]
 38. 10Y R 5/4 に近い河河 細粒砂 しまりややあり [灰色]
 39. 7.5Y R 5/6 河河 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり 長径 15cm 以下の礫を 5% 含む [赤色]
 40. 10Y R 4/4 河 細粒砂 しまりややあり 長径 15cm 以下の礫を 5% 含む [灰色]
 41. 7.5Y R 5/6 河河 細粒砂 しまりややあり [赤色]
 42. 7.5Y R 5/6 河河 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり [赤色]
 43. 10Y R 4/4 河 細粒砂 しまりややあり [灰色]
 44. 10Y R 4/4 河 細粒砂 しまりややあり [灰色]
 45. 7.5Y R 5/6 河河 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり [赤色]
 46. 10Y R 4/4 河 細粒砂 しまりややあり [灰色]
 47. 7.5Y R 4/6 河 細粒砂 しまりややあり
 48. 7.5Y R 4/6 河 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり (一部 2.5Y 0/2 に近い河河 細粒砂 しまりあり) [ややあり]
 49. 7.5Y R 4/6 河 細粒砂 (一部シルト) しまりあり
 地山
 50. 7.5Y R 6/6 河河 細粒砂 しまりあり 長径 20cm 以下の礫を 25% 含む
 流土の可塑性のある層
 51. 10Y R 4/4 河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりなし
 52. 10Y R 3/4 河河 細粒砂 しまりなし (層による変化・変質あり)
 53. 10Y R 4/2 河河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりなし
 54. 10Y R 4/3 に近い河河 細粒砂 しまりなし
 曲輪 3 遺土層
 55. 10Y R 5/4 に近い河河 シルト しまりややあり
 56. 7.5Y R 5/6 河河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり
 57. 7.5Y R 5/6 河河 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり
 58. 7.5Y R 4/6 河 細粒砂 しまりややあり

第 1 図 曲輪 3 土層図 (3 a-3 e. 1: 100)



- 表土**
1. 75Y R3/1 明洩 中粒砂 しまりなし
- 流土**
59. 10Y R3/4 明洩 シルト～輪礫砂
60. 5Y R5/8 明洩 細粒砂 しまりなし
61. 5Y R4/4 に近い明洩 細粒砂 しまりややあり
62. 5Y R5/8 明洩 粗粒砂 しまりややあり
63. 10Y R4/2 に近い明洩 輪礫砂～粗粒砂 しまりなし
64. 75Y R4/6 明洩 粗粒砂～粗粒砂 しまりなし
65. 10Y R4/4 明洩 輪礫砂～粗粒砂 しまりなし 粒径 10cm 以下の礫を 10%含む
66. 10Y R4/6 明洩 輪礫砂～粗粒砂 しまりなし
67. 5Y R4/8 明洩 粗粒砂 粒径 5mm 以下の礫を多く含む
- 遺跡SD719 埋土**
68. 75Y R4/6 明洩 中粒砂 (一部輪礫砂) しまりなし
69. 10Y R4/6 明洩 中粒砂 (一部粗粒砂) しまりなし
70. 10Y R4/6 明洩 粗粒砂 (一部粗粒砂) しまりなし
71. 75Y R4/6 明洩 シルト しまりややあり
72. 75Y R4/6 明洩 粗粒砂 しまりなし
73. 10Y R4/6 明洩 シルト～粗粒砂 しまりなし
74. 10Y R5/6 明洩 シルト～粗粒砂 しまりなし
75. 10Y R6/6 明洩 粗粒砂～粗粒砂 しまりなし
76. 10Y R7/4 に近い明洩 シルト～粗粒砂 しまりなし
77. 10Y R7/6 明洩 粘土～シルト しまりなし 粒径 8 cm 以下の礫を 20%含む
78. 10Y R4/6 明洩 粗粒砂～粗粒砂 しまりなし
79. 10Y R4/6 明洩 粗粒砂～粗粒砂 しまりなし
80. 25Y R6/3 に近い明洩 粘土～シルト しまりあり
81. 10Y R6/6 明洩 シルト しまりなし
82. 10Y R3/4 明洩 中粒砂 (一部粗粒砂) しまりなし 粒径 15cm 以下の礫を 25%含む
83. 10Y R7/6 明洩 粘土～シルト しまりなし
84. 25Y7/3 明洩 粘土～シルト しまりなし
85. 75Y R6/8 明洩 シルト しまりなし
- 土層SA931 埋土**
102. 10Y R6/6 明洩 粗粒砂 (一部粗粒砂) しまりなし (風化による変色・変質が著しい)
103. 10Y R8/4 明洩 シルト～粗粒砂 しまりややあり (灰色粘土層山由来)
104. 10Y R4/4 明洩 粗粒砂 しまりややあり
105. 5Y R6/8 明洩 粗粒砂 しまりややあり 粒径 10～20cm の礫を 7%含む (傾斜側山はよほど土由来)
106. 10Y R5/4 に近い明洩 粗粒砂 (一部粗粒砂) しまりややあり 粒径 1cm 以下の礫を 3%含む
- 地山**
107. 5Y R5/6 明洩 シルト～粗粒砂 しまりあり (傾斜側埋土山の風化層)
108. 75Y R5/8 明洩 シルト～粗粒砂 しまりややあり
109. 75Y R4/6 明洩 シルト～粗粒砂 粗粒砂・礫を多く含む
110. 10Y R7/6 明洩 粗粒砂 粗粒砂～粗粒砂 (一部シルト) しまりあり
111. 25Y R4/4 明洩 粘土 (一部シルト) しまりあり
- 遺跡埋土**
86. 25Y R2/2 明洩 粗粒砂 粗粒砂を多く含む
87. 5Y R5/6 明洩 粗粒砂 粗粒砂を多く含む
88. 75Y R4/3 明洩 粗粒砂 粗粒砂を多く含む
- 遺跡SZ908 埋土**
89. 25Y R5/3 明洩 粗粒砂～粗粒砂 しまりなし
90. 10Y R3/4 明洩 粗粒砂～粗粒砂 しまりなし
91. 25Y R5/3 明洩 粗粒砂 しまりなし
92. 25Y R4/4 に近い明洩 シルト しまりなし
93. 75Y R3/4 明洩 粗粒砂～粗粒砂 しまりなし
94. 25Y R4/4 明洩 粘土 (一部シルト) しまりややあり
95. 25Y R2/2 明洩 粗粒砂 (一部シルト) しまりなし
96. 10Y R4/4 明洩 粗粒砂 (一部シルト) しまりなし (埋土上)
97. 10Y R7/6 明洩 シルト (一部粘土) しまりなし (埋土上)
98. 75Y R5/6 明洩 粘土～シルト しまりなし
- 流土**
99. 10Y R3/4 明洩 シルト～粗粒砂 しまりややあり
100. 10Y R7/6 明洩 シルト～粗粒砂 しまりややあり
101. 5Y R5/8 明洩 シルト～粗粒砂 しまりあり [ピット埋土]

第12図 曲輪2土層SA931から堀底遺跡SD719の土層図(4-a-4 b) 1:100

32. 7.5Y R5/6 明濁 細粒砂 しまりややなし 5.0の間に厚さ
2~3cmの水酸化鉄質あり

33. 7.5Y R6/8 明 細粒砂 しまりややなし 直径7~8cmの礫
多数含む

34. 10Y R8/8 明濁 シルト~細粒砂 しまりややあり

35. 7.5Y R7/6 明 シルト~細粒砂 しまりややあり

36. 10Y R8/6 明濁 シルト~細粒砂 しまりややあり

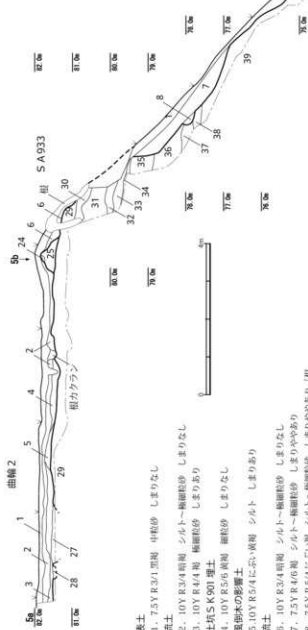
37. 10Y R8/4 混濁物 シルト~細粒砂 しまりややあり

38. 7.5Y R7/6 明 シルト~細粒砂 しまりややあり

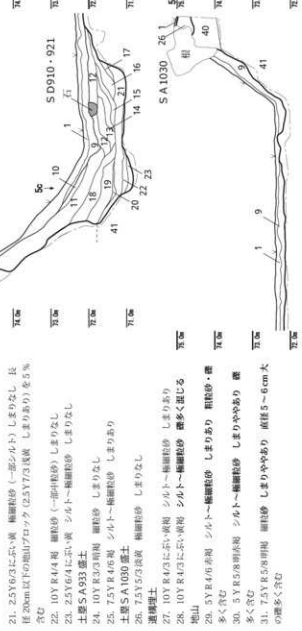
39. 5Y 6/2 灰オリーブ シルト~細粒砂 しまりあり

40. 2.5Y 6/2 灰黄 細粒砂(一部シルト) しまりありなし
(風化による変色・変質が認められる)

41. 2.5Y 7/1 灰白 粘土~シルト しまりあり



- 表土
1. 7.5Y R3/1 重濁 中粒砂 しまりなし
 2. 10Y R3/4 明濁 シルト~細粒砂 しまりなし
 3. 10Y R4/4 明 細粒砂 しまりあり
- 土層SK901埋土
4. 10Y R5/6 混濁 細粒砂 しまりなし
- 風化床の影響土
5. 10Y R5/4 混濁 シルト しまりあり
- 洪土
6. 10Y R3/4 明濁 シルト~細粒砂 しまりなし
 7. 7.5Y R4/6 濁 シルト~細粒砂 しまりややあり
 8. 7.5Y R5/4 混濁 シルト~細粒砂 しまりややあり (埋)
- 原土
9. 2.5Y 6/4 混濁 黄 シルト~細粒砂 しまりなし
- 層SD910埋土
10. 7.5Y R5/6 明濁 シルト~細粒砂(一部中粒砂) しまりなし
 11. 7.5Y R5/6 明濁 シルト~細粒砂 しまりなし
 12. 7.5Y R4/6 濁 シルト~細粒砂 しまりややなし 長径
10cm以下の礫を5%含む
 13. 7.5Y R6/8 濁 細粒砂 しまりややあり
 14. 7.5Y R4/4 濁 細粒砂~細粒砂 しまりなし
 15. 7.5Y R6/6 濁 シルト~細粒砂 しまりなし



21. 2.5Y 6/3 混濁 黄 細粒砂(一部シルト) しまりなし 長
径20cm以下の地山ブロック(2.5Y 7/3 混濁 しまりあり)を5%
含む
22. 10Y R4/4 濁 細粒砂(一部中粒砂) しまりなし
 23. 2.5Y 6/4 混濁 シルト~細粒砂 しまりなし
- 土層SA933埋土
24. 10Y R3/3 明濁 細粒砂 しまりなし
 25. 7.5Y R4/6 濁 シルト~細粒砂 しまりあり
- 土層SA1030埋土
26. 7.5Y 5/3 混濁 黄 細粒砂 しまりなし
- 遺構埋土
27. 10Y R4/3 混濁 灰黄 シルト~細粒砂 しまりあり
 28. 10Y R4/3 混濁 灰黄 シルト~細粒砂 礫多く混じる
地山
 29. 5Y R4/6 混濁 シルト~細粒砂 しまりあり 粗粒砂・礫
多く含む
 30. 5Y R5/8 明濁 灰黄 シルト~細粒砂 しまりややあり 礫
多く含む
 31. 7.5Y R5/8 明濁 細粒砂 しまりややあり 直径5~6cm大
の礫多く含む

第1図 曲輪2平坦面から掘切SD910・921土層図(5 a~5 d 1:100)

曲輪 2 土塁 S A 931 第 102~106層の盛土で構成される。盛土は水平堆積を基本としており、外側から盛土を開始する曲輪 1 の土塁築造方法と異なる。

第 10層は浅黄橙色シルト~極細粒砂を示しており、灰色粘土質地山やその風化土に由来する。この地山は標高 79.4mより低い位置でみられることから、S A 931の形成にあたって、盛土を運び上げたことになる。第 10層については、にびい黄褐色極細粒砂で構成されており、わずかに炭を含む。第 10層は橙色礫層地山が風化により赤褐色に変色した層である。旧表土に相当する層が認められないことから、曲輪 2 では土塁の部分も含めて水平に削り出した後、土塁を築いたと考えられる。この工法は、曲輪 1 と大きく異なる。

地山は、橙色礫層地山の第 10層とその風化・変色した第 10層である。曲輪 1 よりも赤褐色化が著しいことから、旧表土からの掘削深度は比較的浅いと推測される。

曲輪 2 平坦面 東西方向の土層では、表土・流土下で土塁 S A 933の第 24・25層を確認した。土塁の東側は、長年の風雨にさらされて崩落しており、土塁はわずかに幅 1m、厚さ 50cmを確認したに過ぎない。盛土は風化による変色が著しいため、どの層に由来する土かは不明である。この下層では橙色礫層地山が風化により赤褐色化した第 2層が確認できた。第 2層は土塁築造部分も水平であることから、曲輪 2 の形成は、まず全面を削平したと考えられる。

曲輪 2 東斜面 表土・流土下においてただちに地山が確認できた。長年の風雨による崩落を考慮する必要はあるが、旧表土は確認できなかったことから、この斜面は切岸として急峻な傾斜に造作されたと考えられる。この斜面の角度は現状で 40度である。この斜面には地山の第 30~3層が露出する。第 30~3層は橙色礫層地山が風化により変色した層、第 34~3層は灰色粘土質地山が風化により浅黄橙色に変色した層、第 39~4層は灰色粘土質地山である。第 34~3層と第 39~4層は、同じ灰色粘土質地山ではあるが、風化の度合いによって色調と地山の硬軟が大きく異なる。このため、前者の崩落が著しく、第 3層の上端において緩斜面が形成されている。犬走りなどの人工的な掘削・平坦面形成の可

性も考慮したが、自然崩落の結果と判断した。

S D 910・921 曲輪 2 東斜面の下端には S D 910 921がめぐる。第 9層は S D 910の埋土、第 10~2層は S D 921の埋土である。S D 910の東端は 3m 上昇し、土塁 S A 1030に至る。この土塁は幅 2.4m、高さ 1.2mの大きさである。第 2層はひとまず盛土と判断したものの、風化が著しく、地山層の可能性も残る。いずれにしても、S A 1030は大部分を地山削り出しによって形成していることが判明した。

(4) 土塁 S A 70から曲輪 7・8

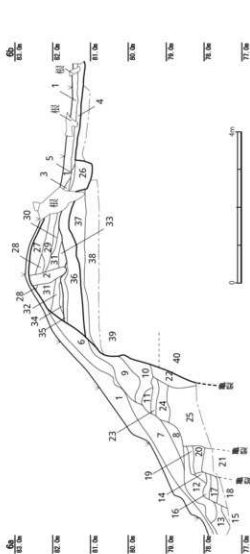
(第 14~1図: 6a~6d 7a~7e)

S A 70周辺 表土下で流土の第 3~1層を確認した。S A 70の西側斜面では、これらの下層において、地滑りに関係する第 16~2層を確認した。このうち第 16・19・2層は、地滑り以前には旧表土の第 3層とひと続きだったと考えられる。さらに第 17・20・2層は、地滑り以前には旧表土下の流土だった第 3層とひと続き、第 18・21・2層についても地山の第 38・3層とひと続きだったと考えられる。これらの点から、流土とした第 9~1層は元々土塁の盛土だった可能性が高く、第 12・13層についても同様の可能性を考慮すべきだろう。

これらの点から、地滑りは伊坂城築城後に発生したこと、土塁 S A 70の半分が崩落したこと、崩落に際して 3 条の亀裂が生じたことなどが判明した。

曲輪 7 曲輪 7 では表土下において流土の第 42~4層を確認した。その下層では地滑りによる崩落土の第 64~8層がみられた。この点から曲輪 7 は地滑りによる崩落土を除去せずに曲輪として取り込んだことが判明した。地滑り層を詳細にみると第 6層は、黄色砂質層の地山に由来し、堆積方向は 45度傾斜している。黄色砂質層の地山はほぼ水平堆積であることから、第 6層は地滑りに際して傾いたと考えられる。第 6層は灰色粘土質地山に由来する地滑り層で、第 6層もろとも滑ったと考えられる。地滑りは、地山のうち、しまりの比較的弱い黄色砂質層の崩落から始まったと考えられる。

第 14図下半については、作成時の主軸が異なるため別図としたが、おおむね曲輪 7 の下部の堆積層を示す。第 85~9層については、地滑り以前の堆積層の可能性もある。このうち、灰色粘土質地山に由来



表土
1. 10Y R 2.2 黒褐色 中粒砂 しまりなし
根根層

2. 7.5Y R 4.4 褐色 細粒砂 しまりなし
流土

3. 7.5Y R 4.6 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりなし
4. 7.5Y R 4.6 褐色 シルト～細粒砂 しまりなし

5. 7.5Y R 5.0 明褐色 細粒砂 しまりややあり
6. 10Y R 4.4 褐色 (一部中粒砂) しまりなし

7. 7.5Y R 5.0 明褐色 細粒砂 しまりなし
8. 7.5Y R 4.6 褐色 細粒砂 しまりなし

9. 7.5Y R 4.6 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりなし
10. 10Y R 5.0 明褐色 細粒砂 (一部細粒砂) しまりなし

11. 10Y R 4.4 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりなし
12. 10Y R 5.0 明褐色 細粒砂～粗粒砂 しまりなし

13. 10Y R 4.4 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりなし 長径 2cm 以下の
礫を 10% 含む

14. 10Y R 4.4 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりなし 長径 20cm 以下の
礫を 10% 含む

15. 7.5Y R 5.0 明褐色 細粒砂 (一部細粒砂) しまりなし
16. 7.5Y R 5.0 明褐色 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり 長径
10cm 以下の礫を 5% 含む

地層
17. 7.5Y R 4.4 褐色 細粒砂 しまりややあり [図法土由來]
18. 10Y R 4.6 褐色 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり [棕色礫層
地山の地山風化層由來]

19. 10Y R 7.0 明褐色 細粒砂 しまりややあり [地山土由來]
20. 10Y R 4.4 褐色 細粒砂 しまりややあり [図法土由來]

21. 7.5Y R 4.6 褐色 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり [棕色礫層
地山の地山風化層由來]

22. 2.5Y 4.6 オリーブ褐色 細粒砂 しまりややあり [地山土由來]
23. 2.5Y 4.6 オリーブ褐色 細粒砂～細粒砂 しまりなし [地層内で生
じた層に由来した層]

24. 10Y R 4.4 褐色 細粒砂 しまりややあり [図法土由來]
25. 7.5Y R 4.6 褐色 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり [棕色礫層
地山の地山風化層由來]

26. 10Y R 7.0 明褐色 細粒砂 しまりややあり [地山土由來]

1. 10Y R 2.2 黒褐色 中粒砂 しまりなし
根根層

2. 7.5Y R 4.4 褐色 細粒砂 しまりなし
流土

3. 7.5Y R 4.6 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりなし
4. 7.5Y R 4.6 褐色 シルト～細粒砂 しまりなし

5. 7.5Y R 5.0 明褐色 細粒砂 しまりややあり
6. 10Y R 4.4 褐色 (一部中粒砂) しまりなし

7. 7.5Y R 5.0 明褐色 細粒砂 しまりなし
8. 7.5Y R 4.6 褐色 細粒砂 しまりなし

9. 7.5Y R 4.6 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりなし
10. 10Y R 5.0 明褐色 細粒砂 (一部細粒砂) しまりなし

11. 10Y R 4.4 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりなし
12. 10Y R 5.0 明褐色 細粒砂～粗粒砂 しまりなし

13. 10Y R 4.4 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりなし 長径 20cm 以下の
礫を 10% 含む

14. 10Y R 4.4 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりなし 長径 20cm 以下の
礫を 10% 含む

15. 7.5Y R 5.0 明褐色 細粒砂 (一部細粒砂) しまりなし
16. 7.5Y R 5.0 明褐色 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり 長径
10cm 以下の礫を 5% 含む

新表土
17. 7.5Y R 4.6 褐色 細粒砂 しまりなし [ピット裡土]
18. 7.5Y R 4.6 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりややあり 長径 8cm 以
下の礫を 15% 含む

19. 10Y R 4.4 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりややあり
20. 10Y R 4.4 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりなし 長径 20cm 以下の
礫を 50% 含む

21. 5Y 7.1 灰白 シルト (一部土) しまりややあり
22. 7.5Y R 4.6 褐色 細粒砂～細粒砂 しまりややあり 長径 15cm 以下
の礫を 7% 含む

23. 7.5Y R 4.4 褐色 細粒砂 しまりややあり 長径 4cm 以下の礫を
7% 含む

24. 10Y R 4.6 褐色 細粒砂 しまりあり
25. 10Y R 4.6 褐色 細粒砂 しまりややあり 長径 2cm 以下の礫・
粘土を 2% 含む

旧表土

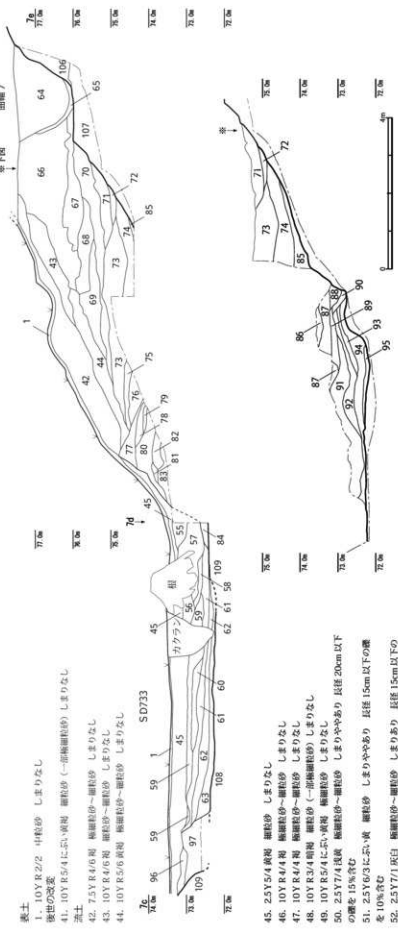
35. 10Y R 4.4 褐色 細粒砂 しまりややあり
36. 10Y R 5.0 明褐色 細粒砂 しまりあり 長径 15cm 以下の礫を
5% 含む 旧表土下の流土]

地山
37. 7.5Y R 4.6 褐色 細粒砂 (一部シルト) しまりあり 長径 15cm 以下
の礫を 5% 含む [棕色礫層地山の風化層]

38. 5Y R 4.6 赤褐色 細粒砂 しまりあり 長径 20cm 以下の礫を
30% 含む [棕色礫層地山]

39. 10Y R 6.0 明褐色 細粒砂 しまりあり 長径 20cm 以下の礫を
30% 含む [棕色礫層地山]

40. 2.5Y 6.0 明褐色 細粒砂 しまりややあり [黄色砂質堆山]



土質
 1. 10Y R2/2 中粒砂 しまりなし
 後世の改變
 41. 10Y R5/4 にぶい黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりなし
 流土
 42. 7.5Y R4/0 黄 礫粒砂～礫粒砂 しまりなし
 43. 10Y R4/6 褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりなし
 44. 10Y R3/6 黄褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりなし

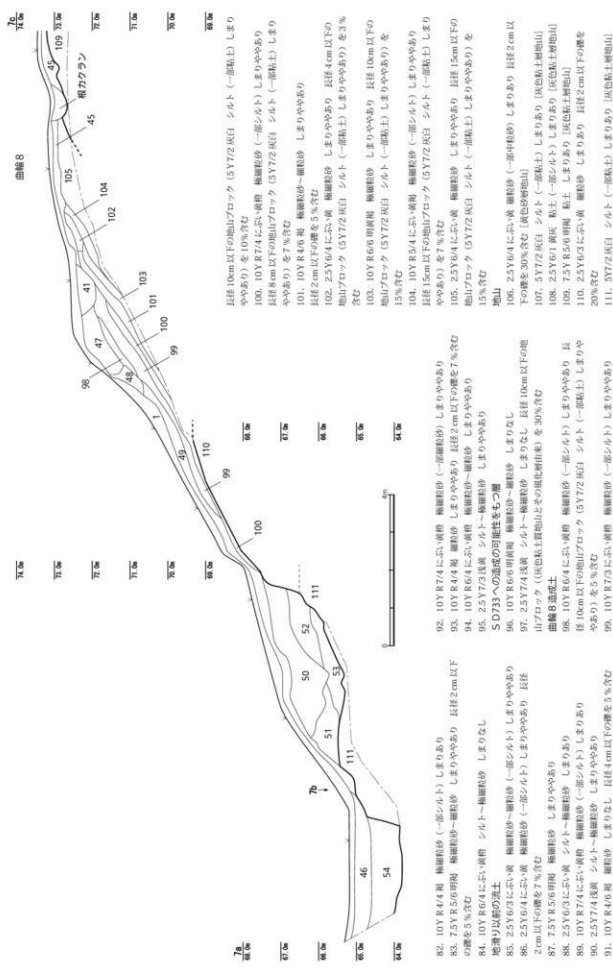
76. 59 59 1 S D733
 77. 45 45
 78. 55 55
 79. 57 57
 80. 56 56
 81. 59 59
 82. 59 59
 83. 62 62
 84. 61 61
 85. 60 60
 86. 108 108
 87. 63 63
 88. 61 61
 89. 60 60
 90. 109 109
 91. 97 97
 92. 45 45
 93. 59 59
 94. 59 59
 95. 57 57
 96. 59 59
 97. 59 59
 98. 59 59
 99. 59 59
 100. 59 59
 101. 59 59
 102. 59 59
 103. 59 59
 104. 59 59
 105. 59 59
 106. 59 59
 107. 59 59
 108. 59 59
 109. 59 59
 110. 59 59

45. 2.5Y5/4 黄褐 礫粒砂 しまりなし
 46. 10Y R4/4 褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりなし
 47. 10Y R4/4 褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりなし
 48. 10Y R3/4 黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりなし
 49. 10Y R5/4 にぶい黄褐 礫粒砂 しまりなし
 50. 2.5Y7/4 黄褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりややあり 長径 20cm 以下の礫を15%含む
 51. 2.5Y6/3 にぶい黄 礫粒砂 しまりややあり 長径 15cm 以下の礫を10%含む
 52. 2.5Y7/1 灰白 礫粒砂～礫粒砂 しまりあり 長径 15cm 以下の礫を10%含む
 53. 2.5Y6/4 にぶい黄 礫粒砂～礫粒砂 しまりあり 長径 15cm 以下の礫を20%含む
 54. 10Y R6/4 にぶい黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりなし
 55. 7.5Y R4/4 褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりなし
 56. 10Y R6/4 黄褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりなし
 57. 10Y R4/4 にぶい黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりなし
 58. 10Y R5/4 にぶい黄褐 礫粒砂 しまりなし
 S D733 埋土
 59. 10Y R3/6 黄褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりなし
 60. 2.5Y5/5 黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりなし 長径 10cm 以下の礫粒砂を30%含む
 61. 2.5Y6/3 にぶい黄 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりなし 長径 10cm 以下の礫粒砂を30%含む
 62. 2.5Y7/4 黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を30%含む
 63. 10Y R7/3 にぶい黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を30%含む
 64. 2.5Y7/6 明黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を30%含む
 65. 10Y R7/3 にぶい黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を30%含む
 66. 2.5Y7/4 黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を30%含む
 67. 2.5Y8/3 淡黄 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を5%含む
 68. 2.5Y6/3 にぶい黄 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を7%含む
 69. 7.5Y R5/6 明黄 礫粒砂～礫粒砂 しまりややあり

70. 2.5Y6/4 にぶい黄 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 40cm 以下の地山ブロック(2.5Y7/3 淡黄 シルト(一部粘土)しまりあり)を15%含む
 71. 10Y R4/4 褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりなし
 72. 2.5Y6/3 にぶい黄 礫粒砂 しまりなし
 73. 10Y R4/6 褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり
 74. 7.5Y R5/6 明黄 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり
 75. 10Y R5/4 にぶい黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり
 76. 7.5Y R4/6 褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりややあり
 77. 10Y R6/4 にぶい黄褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりややあり
 78. 10Y R6/6 明黄褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりややあり 長径 15cm 以下の礫を5%含む
 79. 7.5Y R5/6 明黄 礫粒砂～礫粒砂 しまりややあり
 80. 10Y R5/6 黄褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりややあり
 81. 10Y R4/6 褐 礫粒砂～礫粒砂 しまりややあり

60. 2.5Y5/5 黄褐 シルト しまりなし 長径 4cm 以下の地山ブロック(灰色粘土質地山とその酸化産物)を5%含む
 61. 2.5Y5/4 黄褐 シルト～礫粒砂 しまりなし 長径 1cm 以下の礫を10%含む
 62. 2.5Y6/4 にぶい黄 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を30%含む
 63. 10Y R7/3 にぶい黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を30%含む
 64. 2.5Y7/6 明黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を30%含む
 65. 10Y R7/3 にぶい黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を30%含む
 66. 2.5Y7/4 黄褐 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を30%含む
 67. 2.5Y8/3 淡黄 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を5%含む
 68. 2.5Y6/3 にぶい黄 礫粒砂(一部礫粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を7%含む
 69. 7.5Y R5/6 明黄 礫粒砂～礫粒砂 しまりややあり

第15図 曲輪7から曲輪8以北の土層図1(7c~7d 1:100)



第16図 曲輪7から曲輪8以北の土層図2 (7a~7c 1:100)

長径10cm以下の地山アロック (SY72灰白 シルト (一部粘土) しまり
ややあり) を10%含む

100. 10Y R74に多い硬質 極細砂 (一部シルト) しまりややあり
長径8cm以下の地山アロック (SY72灰白 シルト (一部粘土) しまり
ややあり) を7%含む

101. 10Y R46 硬 極細砂 (一部シルト) しまりややあり
長径2cm以下の礫を5%含む

102. 2.5Y 6/4に多い硬 極細砂 しまりややあり 長径4cm以下の
地山アロック (SY72灰白 シルト (一部粘土) しまりややあり) を3%
含む

103. 10Y R66明硬質 極細砂 しまりややあり 長径10cm以下の
地山アロック (SY72灰白 シルト (一部粘土) しまりややあり) を
15%含む

104. 10Y R54に多い硬質 極細砂 (一部シルト) しまりややあり
長径15cm以下の地山アロック (SY72灰白 シルト (一部粘土) しまり
ややあり) を7%含む

105. 2.5Y 6/4に多い硬 極細砂 しまりややあり 長径15cm以下の
地山アロック (SY72灰白 シルト (一部粘土) しまりややあり) を
15%含む

地山

106. 2.5Y 6/4に多い硬 極細砂 (一部中粒砂) しまりあり 長径2cm以
下の礫を30%含む (黄色砂層地山)

107. 2.5Y 6/4に多い硬 シルト (一部粘土) しまりあり (灰色粘土層地山)

108. 2.5Y 6/4 硬質 粘土 (一部シルト) しまりあり (灰色粘土層地山)

109. 7.5Y R5/6明硬 粘土 しまりあり (灰色粘土層地山)

110. 2.5Y 6/3に多い硬 極細砂 しまりあり 長径2cm以下の礫を
20%含む

111. 5Y72灰白 シルト (一部粘土) しまりあり (灰色粘土層地山)

92. 10Y R74に多い硬質 極細砂 (一部極細砂) しまりややあり

93. 10Y R44 硬 極細砂 しまりややあり 長径2cm以下の礫を7%含む

94. 10Y R64に多い硬質 極細砂 (一部シルト) しまりややあり

95. 2.5Y73互層 シルト 極細砂 (一部シルト) しまりややあり

S D733への造成の可能性をもつ層

96. 10Y R66明硬質 極細砂 (一部シルト) しまりなし

97. 2.5Y74 硬質 シルト 極細砂 しまりなし 長径10cm以下の地
山アロック (灰色粘土層地山とその風化層付岩) を30%含む

曲輪8造成土

98. 10Y R64に多い硬質 極細砂 (一部シルト) しまりややあり 長
径10cm以下の地山アロック (SY72灰白 シルト (一部粘土) しまりや
やあり) を5%含む

99. 10Y R73に多い硬質 極細砂 (一部シルト) しまりややあり

82. 10Y R44 硬 極細砂 (一部シルト) しまりあり

83. 7.5Y B5/6明硬 極細砂 (一部シルト) しまりややあり 長径
2cm以下の礫を5%含む

84. 10Y R64に多い硬質 シルト 極細砂 しまりなし

地滑り以前の流土

85. 2.5Y 6/3に多い硬 極細砂 (一部シルト) しまりややあり

86. 2.5Y 6/4に多い硬 極細砂 (一部シルト) しまりややあり 長径
2cm以下の礫を7%含む

87. 7.5Y R5/6明硬 極細砂 しまりややあり

88. 2.5Y 6/3に多い硬 シルト 極細砂 (一部シルト) しまりあり

89. 10Y R74に多い硬質 極細砂 (一部シルト) しまりあり

90. 2.5Y74 硬質 シルト 極細砂 しまりなし 長径4cm以下の礫を5%含む

91. 10Y R46 硬 極細砂 しまりなし 長径4cm以下の礫を5%含む

する第 92～95層の堆積後、溝状の凹地が形成される。この凹地は、切岸の下端において雨水の作用で生じた溝と考えられる。この凹地が埋没した後に地滑りが生じたことがわかる。

S D 733 表土・流土下において埋土の第 59～6層を確認した。第 80・8層の上端ラインと第 84層上端ラインを結んだラインが S D 733機能時の斜面である。また、S D 733の外側では、造成土の可能性をもつ第 96・9層を確認できた。

曲輪 8 曲輪縁辺部には幅 14m、高さ 20m程度の土壘状高まり S A 742がある。これは、内側の溝（第 4層）の掘削土を盛り上げたと考えられ、その下層に流土（第 47～4層）があることから、植林に伴う後世の改変と考えておきたい。

北側斜面では、斜堆積の第 98～10層が確認された。造成土と考えられる。

曲輪 8の斜面下半は、斜面から谷底へは急峻ではあるが、下端において人工的な加工が行われた痕跡は認められなかった。傾斜を崩したような痕跡も認められなかったことから、谷底は域外ととらえておきたい。谷は加工することなく、自然地形をうまく利用したと考えられる。

(5) S A 745から曲輪 6、S A 743

(第 17・18図：8a～8f)

S A 745 表土下において地滑りによって生じた第 10～1層を確認した。第 10・1層は旧表土、第 1層は旧表土下の流土、第 4層は橙色礫層地山に由来し、第 1層は地滑りによって生じた亀裂に堆積した層である。このようにとらえると、第 9層は盛土由来の地滑り層の可能性をもつ。ただ、地表近くで風化が著しく、盛土の単位を捉えることができなかつたため、その可能性をあげるにとどめておく。

地滑り層より南側については土壘 S A 745の盛土を構成する第 17～2層が確認された。盛土は褐色系の極細粒砂から細粒砂を主体としている。地滑りによって失われた部分が不明だが、盛土を外側から積み重ねた状況はとらえることができなかつた。この地点では、水平堆積を基本とするものの、旧表土が北へ傾斜しているために、盛土も同様の傾きが観察できる。なお、この地点においても、盛土を細かい単位で丁寧に積むような印象は受けなかつた。なお、

上層の第 17～19層では土器片・炭などが含まれることから、伊坂城の改修に伴って、再び積み上げた可能性がある。

盛土の下層では旧表土の第 2層、地山の第 26～28層を確認した。地山は橙色礫層地山である。

曲輪 7 流土の第 3層の下で地滑り層を確認した。第 30・3層は橙色礫層地山を、第 3層は黄色砂層地山を、第 3層は灰色粘土質地山を由来とする。第 3層については、灰色粘土層地山に由来するが、ほぼ原位置をとどめると思われる。

地滑り層の下には、第 36～5層を確認した。これらは、地滑り以前に堆積した層である。このうち S D 747の埋土に相当する第 47～5層からは土師器の皿・羽釜（614～616）が出土している。地滑りはこの土師器の年代以降に生じたといえる。

S D 733 流土（第 4～8層）や近現代の溝の埋土（第 2層）が確認された。

曲輪 6 南半を地山削り出し、北半を造成土で形成されている。第 5層は、曲輪 6の縁辺をめぐる土壘状の高まりを構成する。この高まりは、曲輪 10などと同等に植林に伴う後世の改変である可能性が高い。

造成土にあたる第 53～5層は、谷側へ傾斜する堆積層で、灰色粘土質地山をブロック状に含む。これらの点から、曲輪 6の形成は、南側から北側へと展開したこと、水平面を形成していないこと、灰色粘土質地山を基盤とする曲輪の形成で生じた排土を利用したと考えられる。その下の第 58・5層は赤褐色の極細粒砂から細粒砂で、土橋 S A 743を構成する層と同じである。

盛土下では、旧表土の第 6層を確認した。旧表土は北側にむかって傾斜していることが観察できる。旧表土下では地山の第 62～6層を確認した。第 6層は灰色粘土質地山である。

土橋 S A 743 第 6層は、赤道に伴う埋土である。この赤道の両側で 2条の土壘状の高まりを呈しているが、これは赤道部分が凹地となったためであり、本来は 1条であったと考えられる。

第 70～7層は流土であるが、S A 743形成後、曲輪 1の形成に伴って一部崩れたため、こうした土層となったと考えられる。

第 58～60・74・75層は、S A 74c 構成する盛土である。いずれも赤褐色系の極細粒砂から細粒砂で構成される。土色から、盛土は表土に近い土を利用したと考えられる。第 74・75層は後述する旧表土に沿うように西へ傾斜することから、旧地形を利用して土橋 S A 74d が築かれたと考えられる。盛土下では旧表土の第 76層および灰色粘土質地山の第 77～79層を確認した。

この断面から、赤褐色系土で S A 74c を形成、灰色粘土地山ブロックを含む土で曲輪 6 を形成、曲輪 1 の形成に伴って、S A 74d の赤褐色盛土を一部削平、以上の 3 点が確認され、
、
という新古の関係を確認できた。

(6) 曲輪 1・5 から S D 918

(第 19・20図：9a～9d)

曲輪 1 平坦面 表土下において S D 708 の埋土にあたる第 2層を確認した。流土の第 2層より上層に堆積しているが、長年雨水等の流路となっていたためと考えられることから、S D 708 は伊坂城に伴う建物の雨落ち溝の可能性がある。流土の第 22～28層の下層では橙色礫層地山の第 80層を確認した。

土壘 S A 745 表土・流土下において盛土の第 65～7層を確認した。褐色系の極細粒砂から細粒砂を主体とする。土壘 S A 70 ほど明瞭ではないが、土壘の外側から盛土を開始したと考えられる。

盛土下の第 75層は褐色極細粒砂を主体とする層で、炭や瀬戸美濃陶器天目茶碗(138)、土師器片を含む。土色・土質の特徴から旧表土由来と考えられるため、旧表土に準じた性格を付与したい。この第 75層は最も厚い部分で 1m に及ぶ。この特徴と第 75層の上面が標高 81.5m 付近で揃っているようにもみえることから、整地層としての役割も兼ねていたと考えられる。さらに、後述する土壘下段の高さから、第 71～7層についても同様の性格を兼ねる可能性がある。なお、第 75層出土の天目茶碗(138)は古瀬戸後期 様式と考えられる。この天目茶碗は、伊坂城の築造時期を示す良好な資料といえる。

第 75層の下層では地山の第 77～85層を確認した。いずれも橙色礫層地山とその風化により赤褐色に変色した層である。地山のうち第 78層は、土壘 S A 745 と曲輪 1 の平坦面との境界で高さ約 50cm の段を

形成している。これは、平坦面の形成に際して土壘相当部分を削り残した結果と考えられる。すなわち、土壘 S A 749 は下半を地山削り出しによって形成し、上半は外側を起点に盛土を始めたことがわかる。このため、土壘は内側にのみ段をもつ形状を呈し、上段は幅 3.5m、高さ 1～1.2m、下段は幅 9.5m となる。

曲輪 5 表土・流土下において第 38～6層を確認した。これらの層は、S D 736(新)の埋土である第 38～4層、S D 736(古)の埋土の第 48～56層、曲輪 5 の造成土にあたる第 57～6層の 3 つのまとまりに分かれる。

S D 736(新)は、斜面直下に設けられた堀で、幅 4m、深さ 1m の大きさである。同様の堀が、曲輪 1 の南斜面と西斜面直下で認められる。S D 736(古)は幅 4.5m 以上、深さ 1.5m である。底面は平坦ではなく、凹凸がみられる。第 5層については、雨水の作用により生じた自然流路と考えられる。

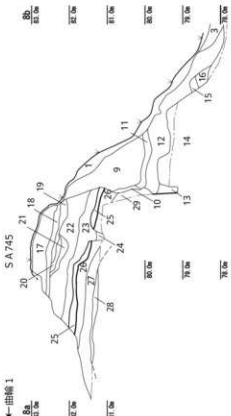
S D 736(古)の北側は第 57～6層の造成土を積上げて形成されており、曲輪 5 平坦面と高さ調整がなされている。S D 736(古)および(新)の南東側では地山を基盤として堀を掘削しており、北西側のごくわずかな範囲で造成が確認できる。この造成のうち S D 736(古)および(新)の外側(北東側)は防壁の面で大きな効果を見出せないことから、曲輪 1・5、S D 736 の掘削で生じた排土を処理しあぐねて行ったのかもかもしれない。

曲輪 5 では S D 736(新)が埋没した後、S A 737 が築かれる。したがって、S D 736(古) S D 736(新) 曲輪 5 の平坦面形成および S A 737 築成という 3 つの時期が曲輪 5 において確認できる。S A 737 の盛土から出土した瀬戸美濃陶器の蓋鉢(466)が大塚第 1 段階であることから、伊坂城築城から短期間のうちに改修が行われたと推測できる。

切岸 曲輪 5 の北斜面では、表土・流土下において灰色粘土質地山の第 8層を確認した。旧表土は確認できなかったことから、切岸を行うことで斜面を急峻に削り落とされたと考えられる。この斜面の角度は、5 度である。

S D 918 埋土 切岸の結果、斜面下端には平坦面が生じた。この平坦面を曲輪 13～16 と呼称するが、

←曲輪1



- 湧土**
 1. 7.5Y R5/6 明視 砂礫土(一部粉砂) しまりやあり
 2. 2.5Y 5/2 黄褐 粉砂土(一部粘砂) しまりなし
 [足場の滑り]
湧土
 3. 10Y R4/6 明 粉砂土(一部粘砂) しまりなし
 4. 10Y R5/6 黄褐 粉砂土(一部粘砂) しまりなし
 S O733 埋土
 5. 10Y R5/4 に近い黄 粉砂土 しまりやあり
 6. 10Y R3/6 黄褐 シルト(一部粉砂) しまりやあり
 7. 10Y R6/3 に近い赤 粉砂土(一部粘砂) しまりなし
 長径 2cm 以下の地山アロロック (2.5Y 7/1 灰白 粘土) を含む
 8. 2.5Y 6/2 に近い黄 粉砂土 しまりなし

土割 SA745

17. 7.5Y R5/6 明視 粉砂土 しまりあり 長径 1cm 以下の土割片・灰を 2% 含む
 18. 10Y R4/6 明 粉砂土(一部粘砂) しまりやあり 長径 1cm 以下の土割片・灰を 2% 含む
 19. 7.5Y R4/6 明 粉砂土 しまりやあり 長径 1cm 以下の灰を 2% 含む
 20. 7.5Y R5/6 明視 粉砂土 しまりやあり
 21. 7.5Y R4/6 明 粉砂土 しまりやあり
 22. 5Y R4/6 赤褐 粉砂土(一部粘砂) しまりあり 長径 10cm 以下の礫を 25% 含む
 23. 5Y R4/8 赤褐 粉砂土 しまりあり 長径 10cm 以下の礫を 15% 含む
 24. 10Y R5/6 黄褐 粉砂土 しまりなし [遺構?]

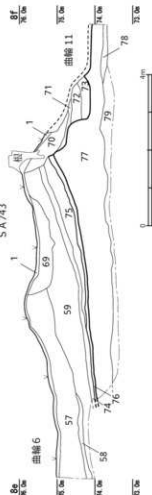
田跡土

31. 7.5Y R6/8 明 粉砂土 しまりやあり
 25% 含む [褐色礫地山由来]
 32. 2.5Y 7/4 黄褐 粉砂土 しまりなし 長径 4cm 以下の礫を 30% 含む

地山

33. 5Y R2/灰白 粘土・シルト しまりやあり [灰色砂地山由来]
 34. 2.5Y 6/6 明視 粉砂土(一部シルト) 中粒砂 しまりなし
 35. 7.5Y R7/4 に近い黄 シルト(一部粘土) しまりやあり 長径 4cm 以下の礫を 15% 含む 長径 60cm 以下の地山アロロック (2.5Y 4cm 以下の礫を 15% 含む 長径 20cm 以下の礫を 25% 含む
 7/6 明視黄 シルト(一部粘土) しまりやあり 灰色 粘土明視山の細化新由來)
 地清り以外の埋積した礫
 36. 7.5Y R5/6 明視 粉砂土 しまりやあり 長径 4cm 以下の礫

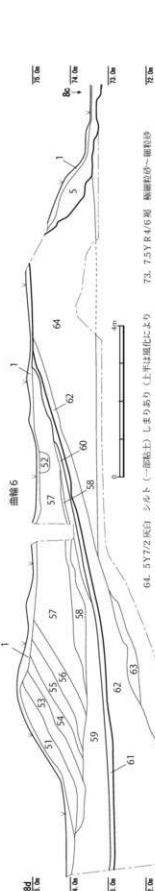
第17回 曲輪7から曲輪6の土割図(1 a-b-8 b e-8 f 1: 100)



37. 5Y 6/2 灰白 粉砂土(一部粘土) しまりやあり 15% 含む
 38. 10Y R4/6 明 粉砂土 しまりなし
 39. 7.5Y R5/6 明視 粉砂土(一部シルト) しまりやあり
 40. 7.5Y R4/6 明 粉砂土(一部粘砂) しまりなし
 41. 7.5Y R5/6 明視 粉砂土(一部粘砂) しまりやあり
 42. 10Y R4/4 明 粉砂土(一部シルト) しまりやあり 長径 2cm 以下の礫を 15% 含む
 43. 10Y R5/6 黄褐 粉砂土 しまりやあり
 44. 10Y R5/6 黄褐 粉砂土(一部シルト) しまりやあり 長径 2cm 以下の礫を 10% 含む
 45. 10Y R6/4 に近い黄 粉砂土(一部粘砂) しまりやあり



46. 2.5Y6/3に赤い塊 シルト→極細粒砂 しまりなし
 ややあり
 47. 2.5Y7/4灰黄 シルト (一部極細粒砂) しまりなし
 曲輪心盛成土
 48. 10Y R5/6黄褐 極細粒砂 しまりやあり
 長径50cm以下の地山ブロック (2.5Y8/3灰黄
 シルト (一部粘土) しまりやあり) を7%含む
 49. 5Y6/3オリーブ黄 シルト→極細粒砂 しまり
 ややあり [S D747 理土]
 50. 7.5Y R4/6黄 細粒砂 (一部シルト) しまりや
 やあり 岩薄片出土 [S D747 理土]
 後述の改変の可能性をもつ層



51. 10Y R4/6黄 極細粒砂→細粒砂 しまりなし
 52. 10Y R4/6黄 細粒砂 (一部極細粒砂) しまりなし
 曲輪心盛成土
 53. 10Y R5/6黄褐 極細粒砂 しまりやあり
 長径50cm以下の地山ブロック (2.5Y8/3灰黄
 シルト (一部粘土) しまりやあり) を7%含む
 54. 2.5Y7/2灰黄 シルト しまりやあり

55. 7.5Y R6/8黄 シルト→極細粒砂 しまりやあり
 56. 2.5Y8/4灰黄 シルト (一部粘土) しまりなし 地山ブロックによって形成
 されている 長径15cm以下の地山ブロック (2.5Y6/3に赤い塊 シルト
 (一部粘土) しまりやあり) を15%含む
 57. 10Y R5/6黄褐 極細粒砂→細粒砂 しまりやあり 長径4cm以下の塊
 を30%含む 白色粘土地山ブロック (2.5Y8/2灰白 粘土→シルト しまり
 なし) を長径4cm以下で5%含む
 58. 5Y R4/8赤褐 極細粒砂 (一部シルト) しまりやあり
 59. 5Y R4/6赤褐 細粒砂 (一部極細粒砂) しまりあまりなし
 60. 10Y R5/6黄褐 極細粒砂 しまりやあり
 旧粘土
 61. 10Y R4/4黄 極細粒砂→細粒砂 灰+粘土は含まない 長径
 2cm以下の塊を7%含む
 62. 10Y R5/6黄褐 極細粒砂 しまりあり 長径2cm以下の塊を
 15%含む
 63. 7.5Y R5/6明黄 シルト (一部極細粒砂) しまりあり
 64. 5Y7/2灰白 シルト (一部粘土) しまりあり (上層は風化により
 7.5Y R6/6相に色変) [灰色粘土層地山]
 65. 10Y R7/6明黄褐 シルト (一部粘土) しまりあり [灰色粘土層地
 山の風化地山]
 66. 5Y R8/8灰黄 シルト (一部粘土) しまりあり [灰色粘土層地山]
 67. 5Y7/2灰白 シルト (一部粘土) しまりあり [灰色粘土層地山]
 68. 2.5Y6/1赤灰 粘土 (一部シルト) しまりあり [灰色粘土層地山]
 赤成理土
 69. 7.5Y R4/4黄 極細粒砂→細粒砂 しまりなし
 洗土
 70. 7.5Y R5/6明黄 極細粒砂→細粒砂 しまりなし
 71. 7.5Y R4/4黄 極細粒砂→細粒砂 しまりなし 長径5mm以下の
 灰を1%含む 土層付含む
 72. 7.5Y R5/6明黄 極細粒砂 しまりやあり

73. 7.5Y R4/6黄 極細粒砂→細粒砂 しまりやあり
 土橋SA743 盛土
 74. 7.5Y R4/6黄 極細粒砂 (一部シルト) しまりあり
 75. 5Y R4/6赤褐 細粒砂 (一部極細粒砂) しまりやあり
 旧粘土
 76. 10Y R3/3明黄 シルト→極細粒砂 しまりやあり 長径5mm
 以下の塊を2%含む
 77. 10Y R6/6明黄褐 シルト しまりあり 長径4cm以下の塊を
 25%含む [灰色粘土層地山の風化地山]
 78. 5Y R6/6黄 シルト (一部粘土) しまりやあり [灰色粘土層地
 山の風化地山]
 79. 2.5Y6/2灰黄 シルト (一部粘土) しまりあり [灰色粘土層地山]

第18図 曲輪7から曲輪6の土層図2 (8 b - 8 d)

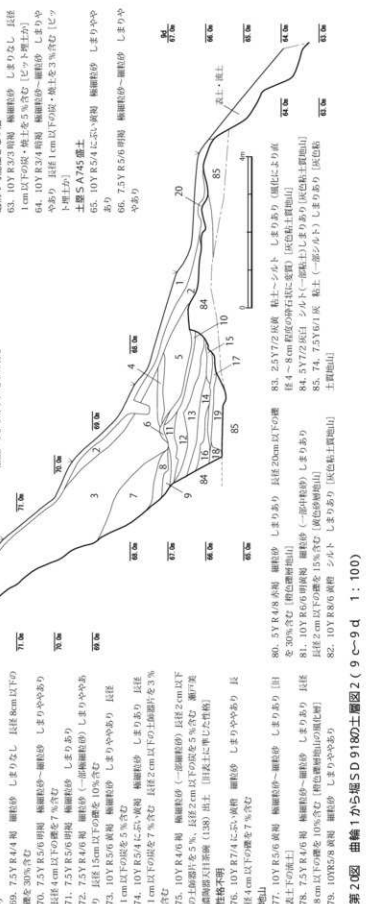


1. 7.5Y R 2/2 栗土 中粒砂 しまりなし
2. 2. 2. 2. 2. 栗土
3. 7.5Y R 4/6 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりなし
4. 2.5Y 6/4 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりややあり
5. 7.5Y R 4/6 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりなし
6. 10Y R 5/4 にぶい黄 栗土 細粒砂 しまりややあり
7. 2.5Y 6/2 栗土 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりなし
8. 7.5Y R 5/6 明栗 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりなし
9. 2.5Y 6/2 栗土 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりなし
10. 2.5Y 6/4 にぶい黄 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりややあり
11. 10Y R 4/6 栗土 栗土 細粒砂 しまりややあり
12. 7.5Y R 3/6 明栗 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりややあり
13. 2.5Y 6/3 にぶい黄 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりややあり
14. 2.5Y 6/4 にぶい黄 栗土 細粒砂 (一部細粒砂) しまりややあり
15. 栗土 20cm 以下の地山プロック (5Y 7/2 灰白 シルト (一部栗土) しまりあり) を 25% 含む
16. 2.5Y 6/2 灰黄 栗土 細粒砂 しまりややあり 長径 15cm 以下の地山プロック (5Y 7/2 灰白 シルト (一部栗土) しまりあり) を 15% 含む
17. 5Y 6/3 オリーブ黄 シルト～栗土 細粒砂 しまりややあり
18. 2.5Y 6/4 にぶい黄 栗土 (一部中粒砂) しまりなし
19. 5Y 6/2 灰オリーブ シルト～栗土 細粒砂 しまりややあり
20. 2.5Y 6/4 にぶい黄 栗土 細粒砂 (一部シルト) しまりなし
21. 10Y R 4/6 栗土 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりなし
22. 10Y R 4/4 栗土 栗土 細粒砂 しまりややあり
23. 7.5Y R 5/6 明栗 栗土 細粒砂 しまりややあり
24. 10Y R 4/6 栗土 栗土 細粒砂 しまりややあり
25. 2.5Y 6/2 栗土 栗土 細粒砂 しまりなし
26. 7.5Y R 5/6 明栗 シルト～栗土 細粒砂 しまりなし
27. 10Y R 4/4 栗土 栗土 細粒砂 しまりなし
28. 10Y R 4/6 栗土 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりなし
29. 7.5Y R 5/6 明栗 シルト～栗土 細粒砂 しまりややあり [ピット埋土]
30. 7.5Y R 5/6 明栗 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりなし [ピット埋土]
31. 7.5Y R 3/2 栗土 中粒砂 しまりなし (竹の根の跡と思われる)

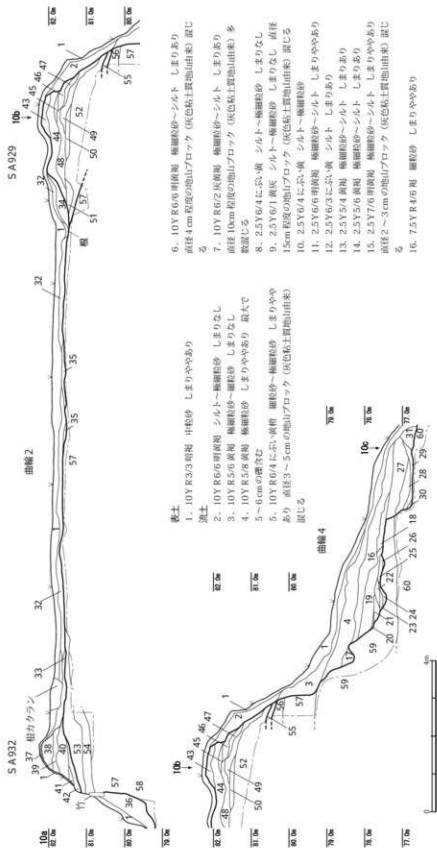
32. 7.5Y R 4/6 栗土 栗土 細粒砂 しまりなし [ピット埋土]
33. 10Y R 4/3 にぶい黄 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりなし [ピット埋土]
34. 10Y R 4/3 にぶい黄 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりなし [溝 SD 710 埋土]
35. 2.5Y 6/4 にぶい黄 シルト しまりややあり 長径 4cm 以下の地山プロック (2.5Y 7/2 灰黄 シルト (一部栗土) しまりあり) を 3% 含む
36. 7.5Y R 4/6 栗土 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりあり
37. 10Y R 5/6 栗土 栗土 細粒砂 しまりややあり
38. 2.5Y 7/2 後栗 シルト～栗土 細粒砂 しまりややあり 長径 4cm 以下の地山プロック (2.5Y 7/2 灰黄 シルト (一部栗土) しまりあり) を 15% 含む
39. 10Y R 3/4 明栗 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりややあり 長径 2cm 以下の土層片を 3% 含む
40. 10Y R 3/2 栗土 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりややあり 長径 2cm 以下の栗土層片を 10% 含む
41. 7.5Y R 4/6 栗土 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりややあり
42. 7.5Y R 4/4 栗土 栗土 細粒砂～細粒砂 しまりややあり 長径 8cm 以下の栗土層片を 5% 含む

第19図 曲輪1から堀SD918土層図(1) 9 a-9 c 1:100

46. 10Y R 6/6 明炭 細粒砂 シルト (一部粘土) しまりややあり
長径 2cm 以下の地山アロックス (2.5Y 7/2 灰
粘土) しまりあり 長径 1cm 以下の炭を 3% 含む
47. 10Y R 10/6 細粒砂 (一部細粒砂) しまり
ややあり 長径 1cm 以下の炭を 3% 含む
48. 10Y R 5/4 に近い、黄褐色 細粒砂-細粒砂 しまりあり
りなし 長径 2cm 以下の地山アロックス (2.5Y 7/2 灰
シルト (一部粘土) しまりあり) を 5% 含む
49. 10Y R 4/4 粗 細粒砂-細粒砂 しまりややあり
あり 長径 4cm 以下の地山アロックス (2.5Y 7/2 灰
シルト (一部粘土) しまりあり) を 7% 含む
50. 10Y R 4/6 粗 細粒砂 しまりややあり
あり 長径 4cm 以下の地山アロックス (2.5Y 7/2 灰
シルト (一部粘土) しまりあり) を 7% 含む
51. 7.5Y R 4/6 粗 細粒砂 しまりややあり
あり 長径 4cm 以下の地山アロックス (2.5Y 7/2 灰
シルト (一部粘土) しまりあり) を 7% 含む
52. 10Y R 4/4 粗 細粒砂 しまりあり 長径 2cm 以下の
炭を 7% 含む 上端に厚さ 2cm の硬化層あり
53. 10Y R 4/4 粗 細粒砂 (一部シルト) しまりなし
あり 長径 4cm 以下の炭を 7% 含む 上端に中央に厚
さ 2cm の硬化層あり (硬化層は 2.5Y 5/3 灰褐色 細粒砂
を 2% 以上含む)
54. 7.5Y R 4/6 粗 細粒砂 しまりあり 上端に中央に厚
さ 2cm の硬化層あり (硬化層は 2.5Y 5/3 灰褐色 細粒砂
を 2% 以上含む)
55. 7.5Y R 5/6 明炭 細粒砂-細粒砂 しまりややあり
あり 長径 1cm 以下の地山アロックス (2.5Y 7/2 灰
粘土) しまりあり) を 5% 含む
56. 7.5Y R 5/8 明炭 細粒砂-細粒砂 (一部細粒砂) しま
りややあり 長径 2cm 以下の地山アロックス (2.5Y
7/2 灰シルト (一部粘土) しまりあり) を 5% 含
む 長径 15cm 以下の炭を 3% 含む
57. 10Y R 4/6 粗 細粒砂-細粒砂 しまりなし
あり 長径 4cm 以下の地山アロックス (2.5Y 7/2 灰
シルト (一部粘土) しまりあり) を 5% 含む
58. 7.5Y R 4/6 粗 細粒砂-細粒砂 しまりやや
あり 長径 4cm 以下の地山アロックス (2.5Y 7/2 灰
シルト (一部粘土) しまりあり) を 7% 含む
59. 10Y R 4/6 粗 細粒砂-細粒砂 しまりやや
あり 長径 4cm 以下の地山アロックス (2.5Y 7/2 灰
シルト (一部粘土) しまりあり) を 15% 含む
60. 10Y R 5/6 黄褐色 細粒砂 (一部シルト) しま
りややあり
61. 7.5Y R 5/6 明炭 細粒砂 (一部シルト) しま
りややあり 長径 4cm 以下の地山アロックス (シルト
(一部粘土) しまりややあり) を 20% 含む
62. 5Y R 4/6 赤褐色 シルト (一部粘土) しまりあり
あり 長径 1cm 以下の炭を 5% 含む



第2図 曲輪1から延SD9180土層図2(9~9d 1:100)

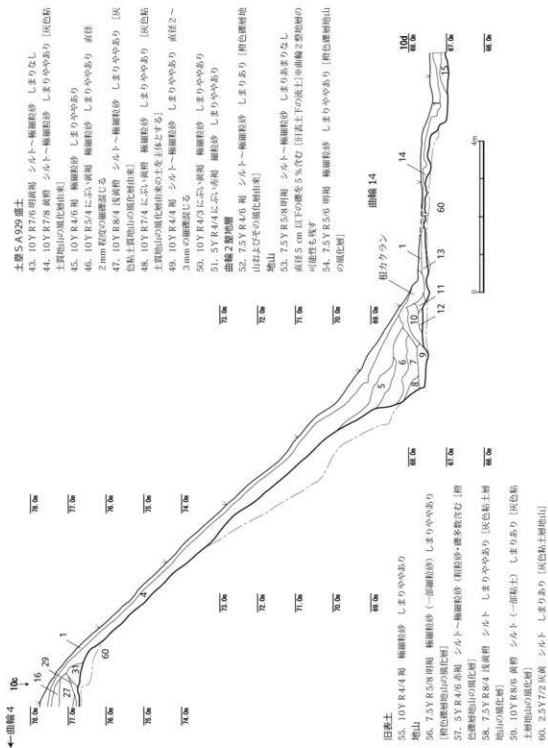


- 表土
1. 10Y R 3/3 明洩 中粒砂 しまりやあり
 2. 10Y R 6/6 明洩 シルト→楕圓砂 しまりなし
 3. 10Y R 5/6 明洩 楕圓砂→楕圓砂 しまりなし
 4. 10Y R 5/8 明洩 楕圓砂 しまりやあり 最大で 5~6cm の厚み
 5. 10Y R 6/4 におい、硬質 楕圓砂→楕圓砂 しまりやあり 直径 3~5cm の地山ブロック (灰色粘土質地山由来) 混じる
- 流土
6. 10Y R 6/6 明洩 楕圓砂→シルト しまりあり 直径 4cm 程度の地山ブロック (灰色粘土質地山由来) 混じる
 7. 10Y R 6/2 灰黄濁 楕圓砂→シルト しまりあり 直径 10cm 程度の地山ブロック (灰色粘土質地山由来) 多量混じる
 8. 2.5Y 6/4 におい、硬 シルト→楕圓砂 しまりなし
 9. 2.5Y 6/1 剛長 シルト→楕圓砂 しまりなし 直径 15cm 程度の地山ブロック (灰色粘土質地山由来) 混じる
 10. 2.5Y 6/4 におい、硬 シルト→楕圓砂
 11. 2.5Y 6/6 明洩 楕圓砂→シルト しまりやあり
 12. 2.5Y 6/3 におい、硬 シルト しまりあり
 13. 2.5Y 5/4 黄濁 楕圓砂→シルト しまりあり
 14. 2.5Y 5/6 明洩 楕圓砂→シルト しまりあり
 15. 2.5Y 7/6 明洩 楕圓砂→シルト しまりやあり 直径 2~3cm の地山ブロック (灰色粘土質地山由来) 混じる
 16. 7.5Y R 4/6 明洩 楕圓砂 しまりやあり

- 土質改善材読み埋土
17. 7.5Y R 5/6 明洩 シルト→楕圓砂 しまりやあり 直径 2~3cm の厚み
 18. 7.5Y R 5/8 明洩 楕圓砂 しまりやあり
 19. 5Y R 5/6 明洩 楕圓砂 しまりやあり
 20. 7.5Y R 3/3 明洩 シルト→楕圓砂 しまりやあり
 21. 7.5Y R 6/8 明洩 シルト しまりやあり
 22. 7.5Y R 5/4 におい、硬 しまりやあり
 23. 10Y R 6/6 明洩 シルト しまりやあり
 24. 10Y R 8/8 明洩 シルト しまりやあり
 25. 7.5Y R 7/8 明洩 シルト→楕圓砂 しまりやあり
 26. 10Y R 4/3 におい、硬質 シルト→楕圓砂 しまりやあり
- 地山ブロック (灰色粘土質地山由来) 多量混じる
27. 7.5Y R 6/6 明洩 シルト→楕圓砂 しまりやあり
 28. 7.5Y R 6/8 明洩 シルト→楕圓砂 しまりやあり 厚さ 7% 混じる
 29. 10Y R 3/2 明洩 シルト→楕圓砂 しまりやあり
 30. 10Y R 5/3 におい、硬質 楕圓砂→楕圓砂
 31. 10Y R 6/4 におい、硬質 楕圓砂→楕圓砂
- 曲線 2 の流土
32. 10Y R 3/4 明洩 シルト→楕圓砂 しまりなし
 33. 7.5Y R 5/6 明洩 楕圓砂 しまりやあり

34. 7.5Y R 5/6 明洩 楕圓砂 しまりやあり
 35. 10Y R 4/4 明洩 楕圓砂 (一部混砂) しまりやあり
 36. 7.5Y R 4/2 灰濁 楕圓砂 しまりなし
 37. 7.5Y R 6/6 明洩 楕圓砂 しまりやあり
- 土質 932 番土
38. 7.5Y R 7/6 明洩 シルト→楕圓砂 しまりなし
 39. 7.5Y R 5/6 明洩 楕圓砂→楕圓砂 しまりありなし 直径 10cm 以下の塊を 15% 含む
 40. 7.5Y R 4/6 明洩 楕圓砂→楕圓砂 しまりあり
 41. 10Y R 5/8 明洩 シルト→楕圓砂 しまりやあり
 42. 10Y R 7/6 明洩 シルト→楕圓砂 しまりやあり

第 2 図 曲線 2 から曲線 140 の土層図 (10a~10c 1:100)



第 22 図 曲輪 2 から曲輪 14 の土層図 2 (10c ~ 10d 1 : 100)

- 土層 SA020 盛土
43. 10Y R 7/6 判 粘細粒砂 シルト〜粘細粒砂 しまりなし
44. 10Y R 7/8 判 シルト〜粘細粒砂 しまりややあり [灰色粘土層地山の風化層由来]
45. 10Y R 4/6 判 粘細粒砂 しまりややあり
46. 10Y R 5/4 にぶい 判 粘細粒砂 しまりややあり 直径 2mm 程度の細礫を含む
47. 10Y R 8/4 判 粘細粒砂 シルト〜粘細粒砂 しまりややあり [灰色粘土層地山の風化層由来]
48. 10Y R 7/4 にぶい 判 粘細粒砂 しまりややあり
土質地山の風化層由来の土を主体とする]
49. 10Y R 4/4 判 シルト〜粘細粒砂 しまりややあり 直径 2 ~ 3mm の細礫を含む
50. 10Y R 4/3 にぶい 判 粘細粒砂 しまりややあり
51. 5Y R 4/4 にぶい 判 粘細粒砂 しまりややあり
52. 7.5Y R 4/6 判 シルト〜粘細粒砂 しまりあり [棕色礫層地山およびその風化層由来]
- 地山
53. 7.5Y R 5/8 判 シルト〜粘細粒砂 しまりありなし
直径 5 cm 以下の礫を 5 % 含む [田表土下の流土層曲輪 2 整地層の可塑性も低す]
54. 7.5Y R 5/6 判 粘細粒砂 しまりややあり [棕色礫層地山の風化層]

設定した箇所では、S D 918の埋土層を確認した。これらの層は灰色粘土質地山由来の埋土であり、雨水等による浸食作用が著しかったことを推測させる。このS D 918より北側で地山高はわずかに上昇し、比較的平坦な面が5mほど続き、やがて谷底まで続く自然斜面に至る。

(7) 曲輪 2・4・14

(第21・22図：10a～10d)

曲輪 2 平坦面 厚さ30mの表土・流土の下で遺構面の第5層を確認した。第5層は橙色礫層地山が風化により赤褐色へと変色した層である。この平坦面の両端には土壘 S A 929と S A 932の盛土が確認できる。S A 932の盛土は第38～4層、S A 929は第43～5層で構成される。いずれも水平堆積を基本としており、外側を起点に盛土を開始し、内側へ傾斜する盛土を積み重ねる曲輪1での工法と異なる。土質については、第44・47・48層において灰色粘土質地山およびその風化層由来の盛土を用いる。灰色粘土質地山は曲輪2平坦面よりも低い標高79m以下で確認できることから、土壘築造のために土を2m以上運び上げたことがわかる。

この盛土の下層には第5層が確認できた。この層の下に旧表土の第5層が確認されていることから、人工的に盛り上げた層といえる。この層の上端が標高816mで曲輪2の平坦面とほぼ同じ高さに揃う。したがって第5層は、曲輪2平坦面の整地層と評価しておく。曲輪2では南北方向において十分な平坦地を確保できなかったために、整地層形成により平坦地が北側へ約4m広がったと考えられる。なお、第5層についても同様の性格の可能性があるものの、下層で旧表土を確認できなかったために、整地層とする有力な根拠を欠いた。そのため土色と含有物から、第5層を赤褐色に変色した地山と判断した。

そして、曲輪2では北端で整地層(第22図第5層、第22図第23～25層)が、南端でその可能性のある層(第22図第53・54層)が確認されたが、東端(第13・22図)と西端(第2図)には認められなかった。一辺約20mの方形を志向する曲輪2では南北方向において十分な平坦地を確保できなかったために、整地層で補ったと考えられる。一方で東西方向では、確保できたため、整地層は不要だったと考えられる。

曲輪 4 地山削り出しによって平坦面を形成するため、表土・流土下で地山に至る。流土の第3・4・16～26層は厚さ12mに及び、このうち第1層と第20～26層は雨水の作用により生じた溝状の落込みへの堆積層である。曲輪4北端では、第18層の谷底において第27～3層が確認できた。これらの層は土坑状の落込みの埋土である。第29層は炭を含む。第2層上端は曲輪4平坦面と高さが揃うことから、土坑状落込みを埋めて平坦面を形成した可能性をもつ。

曲輪4の流土では大量の土器類が含まれ、曲輪4出土遺物の大半を占める。集積遺構 S Z 928の上層流土からは、大塚第1段階と考えられる瀬戸美濃陶器の端反口(584)が出土している。

曲輪 4 下の切岸 曲輪4の北斜面では、表土・流土下において、ただちに地山に到達した。斜面において旧表土は確認できなかったことから、斜面を急峻に切り立てた切岸を行ったと考えられる。斜面は4段程度である。

切岸下端付近では流土の第5～1層が確認できた。これらは、灰色粘土質地山由来の堆積土を主体とする。流土のうち、第10～1層が堆積した後、雨水の作用によって切岸斜面に直交方向に溝状の自然流路ができ、やがてこの流路に第5～9層が堆積するという形成順と考えられる。

曲輪 14 切岸を行った結果、下端には平坦面が形成された。この平坦面も城の防衛ラインとして利用されたと考えられることから、曲輪14と呼称する。

曲輪14では厚さ20m程度の表土・流土の下において、灰色粘土質地山に達した。旧表土や風化によって変色・変質した層がみられなかったこと、および曲輪14での成果を考慮すれば、切岸に際して80m以上の掘削が行われたと推測される。

(8) S A 930= 曲輪 2 トレンチ 2

(第23図：11a～11b)

表土・流土下では、S A 930の盛土である第6～10層を確認した。盛土は厚さ20m程度で水平に積み上げることが基本とする。土壘外側を起点として土壘を積み始めて、その後は曲輪中央側へ傾く盛土を積み重ねる曲輪1とは工法が大きく異なる。第6～10層は灰色粘土質地山およびその風化層に由来する。灰色粘土質地山は曲輪2平坦面よりも低い標高

79m以下で確認できることから、土壘築造のためにわざわざ土を運び上げたことがわかる。

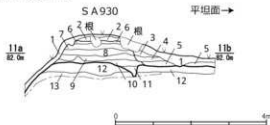
盛土下では、橙色礫層地山が風化により赤褐色化した第1層が確認できた。第1層については曲輪2整地層の可能性も残るが、土のしまり具合等を考慮して、地山と判断した。いずれにしてもこの断ち割りでは、盛土と地山の間に旧表土を確認できなかったことから、曲輪2では一旦全面を水平に削平した後、土壘を築成したと考えられる。この点も、曲輪1の土壘築造方法と大きく異なる。

(9) SA 929= 曲輪2トレンチ1

(第2図: 11c~11d)

表土・流土下において盛土の第16~2層を確認した。盛土は水平堆積を基本としており、外側に起点として積み始めて、内側に傾斜する盛土を積み重ねる曲輪1の土壘とは工法が異なる。SA 929の盛土は、上層において灰色粘土質地山およびその風化

【曲輪2トレンチ2】



表土

1. 7.5Y R3/1 黒濁 中粘砂 しまりなし

流土

2. 10Y R7/4 にふい黄橙 極細粒砂 しまりややあり

3. 7.5Y R5/6 明濁 極細粒砂 しまりややあり

4. 7.5Y R5/8 明濁 極細粒砂 しまりややあり

5. 7.5Y R5/6 明濁 極細粒砂 しまりややあり

SA 930 盛土

6. 10Y R7/3 にふい黄橙 シルト~極細粒砂 しまりややあり

(流土の可能性も残る)

7. 10Y R7/6 明黄濁 シルト しまりあり [灰色粘土質地山の風化層由来]

8. 10Y R8/6 黄橙 シルト~極細粒砂 しまりあり [灰色粘土質地山の風化層由来]

9. 10Y R7/8 黄橙 シルト しまりあり [灰色粘土質地山の風化層由来]

10. 10Y R8/3 浅黄橙 シルト~極細粒砂 しまりややあり [灰色粘土質地山の風化層由来]

11. 7.5Y R5/6 明濁 極細粒砂~細粒砂 しまりなし

地山

12. 5Y R4/8 赤濁 極細粒砂 しまりあり 長径8cm以下の礫を15%含む [褐色礫層地山の風化層] ※曲輪2整地層の可能性も残す

13. 5Y R5/8 明赤濁 細粒砂 しまりあり 長径20cm以下の礫を30%含む [褐色礫層地山]

第2図 土壘SA 930・SA 929土層図(11a~11d 1:100)

層に由来する盛土を用いる。したがって、曲輪2平坦面よりも低い位置でみられる土をわざわざ運び上げたことがわかる。なお、盛土の第2層では貝殻と瀬戸美濃陶器の天目茶碗(533)の遺物が出土した。

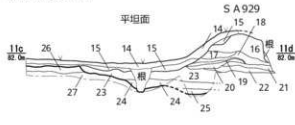
第2層は褐色のシルトから極細粒砂で構成され、しまり具合はやや弱い。上端が標高81.6m前後で水平面を形成するとともに、地山削出し成形による曲輪2中央付近の平坦面と高さが増す堆積状況と、地山に比してしまりが弱いという土質から、第2層は曲輪2の整地層と評価しておく。

第2層下では、旧表土に近い特徴を備える第2層やその下の流土第2層を確認した。第26~2層は橙色礫層地山だが、風化により赤褐色への変色が著しい。

(10) 曲輪13東壁(第24図: 12a~12b)

表土下において第2層を検出した。流土層から掘

【曲輪2トレンチ1】



表土

14. 7.5Y R3/1 黒濁 中粘砂 しまりなし

流土

15. 7.5Y R5/6 明濁 極細粒砂 しまりややあり

土壘SA 929 盛土

16. 10Y R7/4 にふい黄橙 シルト~極細粒砂 しまりあり

17. 10Y R6/6 明黄濁 シルト~極細粒砂 しまりややあり [灰色粘土質地山の風化層由来]

18. 10Y R7/6 明黄濁 シルト~極細粒砂 しまりややあり [灰色粘土質地山の風化層由来]

19. 10Y R5/6 黄濁 シルト~極細粒砂 しまりややあり

20. 10Y R8/6 黄橙 シルト~極細粒砂 しまりややあり

21. 7.5Y R5/8 明濁 シルト~極細粒砂 しまりややあり [褐色礫層地山やその風化層由来]

22. 10Y R4/6 濁 シルト~極細粒砂 しまりややあり 貝殻・瀬戸美濃陶器天目茶碗などの遺物を多く含む

曲輪2整地層

23. 7.5Y R4/6 濁 シルト~極細粒砂 しまりあまりなし 直径5cm以下の礫を含む

24. 10Y R4/4 濁 シルト~極細粒砂 しまりややあり [旧表土に近い層]

25. 10Y R5/6 黄濁 極細粒砂~細粒砂 しまりややあり [旧表土下の流土に相当]

地山

26. 5Y R4/4 にふい赤濁 極細粒砂 しまりややあり [褐色礫層地山の風化層] ※曲輪2整地層の可能性も残す

27. 5Y R4/8 赤濁 シルト~極細粒砂 しまりあまりなし 粗粒砂・礫多数含む [褐色礫層地山]

り込まれていること、調査前に確認した赤道に近接していることから、近現代の道に伴う埋土ととらえておく。流土の第3～1層のうち、第6～8層および第10・1層は溝状の凹地への埋土である。流土下には、灰色粘土質地山の第12・1層が確認できた。第1層はやや軟質、第1層は硬質の灰色粘土である。S D 910・92の北斜面において旧表土・造成土が確認できなかったことから、地山の削り落としによって形成されていること、曲輪13の平坦面は地山削り出しによって形成されていることがわかる。

(11) S D 922(第2図：12c～12d)

S D 922は曲輪13と曲輪14を区切る溝である。調査前に曲輪13・14の間に段があったため、人工的な遺構の可能性を考慮した。調査の結果、S D 922は自然流路の可能性が高まった。

表土下において、溝状凹地の埋土第15～19層が確認できた。これらは自然流路で、細かくみると第15層、第16層、第17～19層の3つのまとまりからなる。これより下層では流土の第20～40層を確認できた。このうち第33・3層は溝状凹地に堆積する。第35～40層が灰色粘土質地山に由来する堆積土であることから、切岸形成 流土が堆積 溝が形成 その溝が埋没という過程を推測できる。伊坂城跡では、切岸直下において斜面に直交するように幅40m以下、深さ40m以下の溝がしばしば観察できた。これは、斜面を流れ落ちる雨水によって形成された可能性が高い。

地山については、灰色粘土質の第41～4層を確認した。第4層は軟質、第4層は水酸化作用によって第4層が変色・変質した部分、第4層は硬質の灰色粘土である。軟質の灰色粘土において雨水が浸透しやすいものの、硬質の灰色粘土での浸透は容易ではないため、層の境目において滞水層が生じ、この部分が水酸化作用により変色・変質したと考えられる。S D 922の地山断面は、谷側に向かってなだらかに下降する。断面形状において、平坦面形成や溝による区画の意図はうかがえない。

なお、曲輪13～16の平坦面は、おおむね第4層上面を基盤とする。硬質の灰色粘土質地山を掘り下げることが容易ではなかったため、切岸の掘削をこの高さで止めた可能性がある。

(12) S D 917(第2図：13a～13b)

S D 917は曲輪14・15を区切る溝である。斜面と直交方向にのびる小さな流路部分は、雨水による形成と考えられる。この部分を除けば、人工的な遺構の可能性が残されている。

表土の第4層下には、流土の第45～6層が堆積する。これらは第45～5層からなる上層、第55～5層からなる谷側斜面への堆積層、第58～6層からなる下層の3つに細分できる。上層は褐色系の極細粒砂から細粒砂を主体としており、S D 917が完全に埋没した後の堆積層である。

第55～5層は灰黄色系極細粒砂、下層は灰黄色系のシルトから極細粒砂を主体とする。これらは灰色粘土質地山に由来する流土であり、切岸・S D 917形成から近い時期の堆積と考えられる。

なお、第59・6層の上端が水平で、曲輪14・15と高さが揃うことから、S D 917埋没後に平坦面として機能した可能性がある。この点を考慮して検出を行ったが、明確な遺構は検出できなかった。

地山は灰色粘土質で、軟質の第6層と硬質の第70層を確認した。地山の断面から溝の底面は平坦であることがわかる。曲輪14から曲輪15への侵攻を遮断する機能を有していた可能性が考えられる。

(13) S D 735(第2図：13c～13d)

S D 735は表土下において第72～9層の埋土を確認した。これらは第72～8層の上層、第83～8層の中層、第90～9層の下層に分かれる。上層は褐色系極細粒砂から細粒砂で構成される。中層は、溝状となった2条の落込みへの堆積土をさす。下層は、灰色粘土層地山に由来するブロックを含む。

中層の形状から、下層の堆積後、2条の流路が形成された可能性がある。この2条の流路は自然に形成された可能性を考えておきたい。これらの堆積層の下では、灰色粘土質地山の第9層が確認された。

(14) 曲輪11・12・16(第2図：14a～14g)

曲輪11 表土下においてS D 748の埋土にあたる第2層を確認した。第2層は流土の第5層から掘り込まれていることから、伊坂城に伴う遺構とは考えにくい。調査前は植林地であったことなどから、後世の改変によるものと考えておきたい。

流土の第5層等の下層では、造成土の可能性を

【曲輪13東壁】

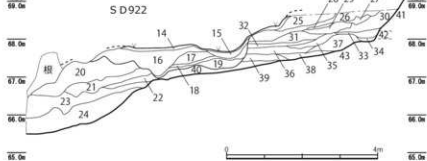
表土

1. 10Y R3/3 暗褐 中粒砂 しまりなし
- 後世の改変
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし [赤道埋土]
- 遺土
3. 10Y R4/6 褐 極細粒砂 しまりなし
4. 10Y R5/4 にぶい黄 極細粒砂～細粒砂 しまりなし
5. 2.5Y5/4 黄褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし
6. 7.5Y R5/6 明褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし
7. 2.5Y6/4 にぶい黄 極細粒砂 しまりなし長径 2cm以下の地山ブロック (5Y7/2 灰白 シルト (一部粘土) しまりややあり) を5%含む

8. 7.5Y R5/6 明褐 極細粒砂 しまりなし
9. 2.5Y6/3 にぶい黄 極細粒砂 しまりなし (根埋土)
10. 2.5Y7/3 浅黄 極細粒砂 (一部シルト) しまりなし
11. 10Y R5/6 黄褐 極細粒砂 しまりややあり
- 地山
12. 5Y7/2 灰白 シルト (一部粘土) しまりあり [灰色粘土質地山]
13. 7.5Y7/2 灰白 粘土 (一部シルト) しまりあり [灰色粘土質地山]



12c



【溝SD922】

表土

14. 10Y R3/3 暗褐 中粒砂 しまりなし
- 溝SD922堆積層
15. 2.5Y5/2 暗灰黄 細粒砂 しまりなし [最も新しい溝の埋土]
16. 2.5Y5/3 黄褐 極細粒砂 しまりなし [第15層よりも古い溝の埋土]
17. 2.5Y5/4 黄褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし 長径4cm以下の地山ブロック (2.5Y7/3 浅黄 シルト しまりなし) を10%含む
18. 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト～極細粒砂 しまりなし
19. 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト～極細粒砂 しまりなし
- 遺土
20. 2.5Y4/4 オリーブ褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし
21. 2.5Y5/4 黄褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし 地山ブロック (2.5Y7/3 浅黄 シルト しまりややあり) を長径10cm以下で15%含む
22. 10Y R5/6 黄褐 極細粒砂～細粒砂 しまりややあり

23. 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト～極細粒砂 しまりややあり
24. 2.5Y5/3 黄褐 シルト～極細粒砂 しまりなし
25. 2.5Y5/3 黄褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし
26. 7.5Y R5/6 明褐 シルト しまりややあり
27. 2.5Y5/4 黄褐 シルト～極細粒砂 しまりなし
28. 2.5Y5/3 黄褐 シルト～極細粒砂 しまりややあり
29. 10Y R5/6 黄褐 極細粒砂～細粒砂 しまりややあり
30. 2.5Y5/4 黄褐 細粒砂 しまりなし 長径15cm以下の地山ブロック (2.5Y7/3 浅黄 シルト しまりあり) を10%含む
31. 2.5Y6/4 にぶい黄 極細粒砂 しまりなし
32. 2.5Y5/4 黄褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし 長径15cm以下の地山ブロック (2.5Y7/3 浅黄 シルト しまりなし) を15%含む
33. 5Y6/2 灰オリーブ シルト～極細粒砂 しまりややあり

34. 10Y R5/4 にぶい黄褐 細粒砂～中粒砂 しまりなし 長径4cm以下の地山ブロック (2.5Y7/3 浅黄 シルト しまりなし) を20%含む
35. 2.5Y6/3 にぶい黄 極細粒砂 しまりなし [灰色粘土質地山に由来]
36. 2.5Y5/3 黄褐 細粒砂 (一部極細粒砂) しまりなし [灰色粘土質地山に由来]
37. 5Y6/2 灰オリーブ 極細粒砂 しまりややあり [灰色粘土質地山に由来]
38. 2.5Y6/2 灰黄 極細粒砂 (一部細粒砂) しまりなし (水酸化作用により一部5Y R4/8 赤褐色に変色・変質) [灰色粘土質地山に由来]
39. 5Y6/2 灰オリーブ シルト～極細粒砂 しまりややあり [灰色粘土質地山に由来]
40. 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト～極細粒砂 しまりややあり [灰色粘土質地山に由来]
- 地山
41. 5Y6/2 灰オリーブ シルト～極細粒砂 しまりあり [灰色粘土質地山]
42. 7.5Y R5/6 明褐 シルト～極細粒砂 しまりあり (水酸化作用により第41層が変色・変質した部分) [灰色粘土質地山]
43. 5Y6/1 灰 粘土 しまりあり [灰色粘土質地山]

第24図 曲輪13東壁とSD922の土層図(12a～12d 1:100)

【SD917】

表土

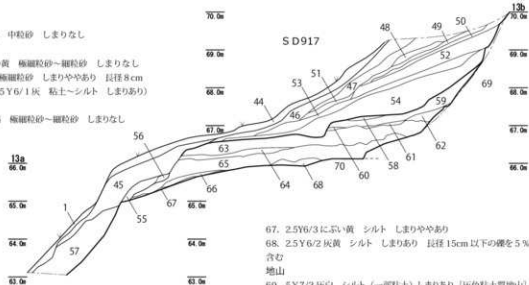
44. 10Y R3/3 暗褐 中粒砂 しまりなし

流土 (上層)

45. 2.5Y 6/3 に近い黄 極細粒砂～細粒砂 しまりなし

46. 10Y R4/6 褐 極細粒砂 しまりややあり 長径 8cm 以下の地山ブロック (5Y 6/1 灰 粘土～シルト しまりあり) を 7% 含む

47. 7.5Y R5/6 明褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし



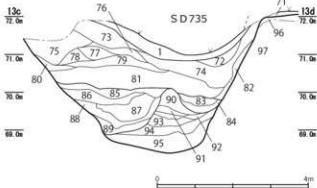
67. 2.5Y 6/3 に近い黄 シルト しまりややあり

68. 2.5Y 6/2 灰黄 シルト しまりあり 長径 15cm 以下の礫を 5% 含む

地山

69. 5Y 7/2 灰白 シルト (一部粘土) しまりあり [灰色粘土質地山]

70. 2.5Y 6/1 黄灰 粘土 (一部シルト) しまりあり [灰色粘土質地山]



【SD735】

表土

1. 10Y R2/2 黒褐 中粒砂 しまりなし

流土

71. 10Y R4/4 褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし

SD735 上層理土

72. 10Y R4/4 褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし

73. 7.5Y R4/4 褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし

74. 7.5Y R4/6 褐 極細粒砂 しまりなし

75. 7.5Y R4/6 褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし

76. 10Y R4/6 褐 細粒砂 しまりなし 長径 2cm 以下の礫を 20% 含む

77. 2.5Y 5/3 黄褐 細粒砂～中粒砂 しまりなし

78. 2.5Y 8/4 淡黄 シルト しまりなし

79. 7.5Y R5/6 明褐 極細粒砂 しまりなし

80. 2.5Y 5/2 暗灰黄 極細粒砂 しまりなし

81. 7.5Y R5/6 明褐 極細粒砂 しまりなし

82. 2.5Y 5/4 黄褐 細粒砂 しまりなし

SD735 中層理土

83. 7.5Y R5/6 明褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし

84. 2.5Y 5/3 黄褐 極細粒砂 しまりややあり

85. 2.5Y 5/2 暗灰黄 極細粒砂 (一部細粒砂) しまりなし

86. 7.5Y R4/6 褐 シルト しまりややあり 長径 4cm 以下の地山ブロック (5Y 6/2 灰オリーブ シルト しまりなし) を 20% 含む

87. 7.5Y R5/6 明褐 極細粒砂 しまりなし

88. 7.5Y R6/6 暗 シルト～極細粒砂 しまりなし

89. 2.5Y 6/1 黄灰 シルト しまりややあり

SD735 下層理土

90. 7.5Y R4/6 褐 極細粒砂 しまりややあり

91. 7.5Y R4/4 褐 極細粒砂～細粒砂 しまりややあり

92. 10Y R4/6 褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし

93. 10Y R5/4 に近い黄褐 極細粒砂 しまりなし

94. 2.5Y 6/3 に近い黄 シルト～極細粒砂 しまりややあり 長径 15cm 以下の地山ブロック (5Y 6/2 灰オリーブ シルト しまりややあり) を 15% 含む

95. 7.5Y R5/8 明褐 シルト～極細粒砂 しまりなし 長径 30cm 以下の地山ブロック (5Y 6/2 灰オリーブ 粘土 しまりあり) を 10% 含む

地山

96. 2.5Y 5/3 黄褐 極細粒砂 しまりなし [灰色粘土層地山の風化層]

97. 5Y 7/2 灰白 シルト (一部粘土) しまりあり [灰色粘土層地山]

48. 7.5Y R4/6 褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし

49. 7.5Y R5/8 明褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし 長径 8cm 以下の地山ブロック (5Y 6/1 灰 粘土～シルト しまりややあり) を 7% 含む

50. 10Y R4/6 褐 細粒砂 しまりなし

51. 10Y R4/6 褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし

52. 7.5Y R5/6 明褐 極細粒砂～細粒砂 しまりややあり 長径 20cm 以下の地山ブロック (5Y 6/1 灰 粘土～シルト しまりあり) を 25% 含む

53. 2.5Y 7/4 淡黄 極細粒砂 しまりなし 長径 8cm 以下の地山ブロック (5Y 6/1 灰 粘土～シルト しまりややあり) を 5% 含む

54. 7.5Y R5/6 明褐 極細粒砂～細粒砂 しまりなし

流土 (中層)

55. 2.5Y 6/4 に近い黄 極細粒砂 しまりなし

56. 2.5Y 6/3 に近い黄 極細粒砂 しまりややあり

57. 2.5Y 7/2 灰黄 シルト～極細粒砂 しまりなし 長径 20cm 以下の地山ブロック (2.5Y 7/2 灰黄 粘土～シルト しまりあり) を 30% 含む

流土 (下層)

58. 10Y R6/2 灰黄褐 シルト～極細粒砂 しまりあり

59. 2.5Y 6/3 に近い黄 シルト～極細粒砂 しまりあり

60. 2.5Y 5/3 黄褐 シルト しまりあり

61. 2.5Y 7/3 淡黄 シルト しまりあり

62. 2.5Y 6/2 灰黄 極細粒砂 (一部シルト) しまりややあり

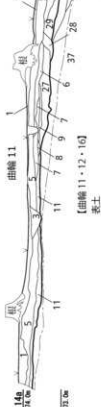
63. 2.5Y 6/2 灰黄 シルト～極細粒砂 しまりあり 長径 40cm 以下の地山ブロック (5Y 6/1 灰 粘土～シルト しまりあり) を 20% 含む

64. 2.5Y 5/3 黄褐 シルト～極細粒砂 しまりあり

65. 2.5Y 6/3 に近い黄 シルト～極細粒砂 しまりあり 長径 15cm 以下の礫を 15% 含む

66. 2.5Y 6/2 灰黄 シルト～極細粒砂 しまりややあり

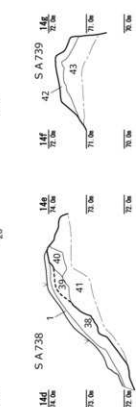
第 25 図 塚 SD 917 と 塚 SD 735 の 土 層 図 (13a～13d 1:100)



- 【曲輪 11・12・16】
 表土
 1. 7.5Y R 2/1 黒 中粒砂 (黒色中粒砂) しまりなし
 2. S D 748 埋土 (埋土) しまりなし
 3. 10Y R 6/4 黒 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 4. 10Y R 3/3 明濁 粗粒砂 (明濁粗粒砂) しまりなし
 5. 10Y R 3/3 明濁 粗粒砂 (明濁粗粒砂) しまりなし
 6. 5Y 7/2 灰白 シルト (一部粘土) しまりなし
 7. 10Y R 6/6 明濁 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 8. 10Y R 5/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 9. 10Y R 5/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 10. 10Y R 5/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 11. 10Y R 5/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 12. 10Y R 5/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 13. 2.5Y 5/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 14. 2.5Y 5/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 15. 2.5Y 6/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 16. 10Y R 4/6 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし (埋土等の影響で色)
 17. 2.5Y 4/2 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 18. 2.5Y 6/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし (一部粘土) シルト (一部粘土) しまりなし



- 【曲輪 11】
 埋土なし (一部粘土) しまりなし
 24. 10Y R 6/6 明濁 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 25. 10Y R 5/6 黄濁 シルト (一部粘土) しまりなし
 26. 埋土なし (一部粘土) しまりなし
 27. 10Y R 6/6 明濁 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 28. 10Y R 5/6 黄濁 シルト (一部粘土) 7% 含む
 29. 10Y R 6/6 明濁 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 30. 10Y R 5/6 黄濁 シルト (一部粘土) しまりなし
 31. 2.5Y 5/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 32. 2.5Y 5/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 33. 10Y R 6/6 明濁 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 34. 2.5Y 6/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 35. 10Y R 5/6 黄濁 シルト (一部粘土) しまりなし
 36. 10Y R 5/6 黄濁 シルト (一部粘土) しまりなし
 37. 10Y R 5/6 黄濁 シルト (一部粘土) しまりなし



- 【SA 738】
 埋土
 38. 10Y R 5/6 黄濁 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 39. 10Y R 5/6 黄濁 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 40. 10Y R 5/6 黄濁 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 41. 10Y R 5/6 黄濁 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 42. 2.5Y 6/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 43. 5Y 7/2 灰白 シルト (一部粘土) しまりなし (一部粘土) しまりなし



- 【SA 739】
 埋土
 42. 2.5Y 6/4 灰白 粗粒砂 (粗粒砂) しまりなし
 43. 5Y 7/2 灰白 シルト (一部粘土) しまりなし (一部粘土) しまりなし

第26図 曲輪 11・12・16. SA 738・739土層図 (14a-14g 1:100)

つ第 27～29層、造成土の第 30層を確認した。後述の曲輪 1 断ち割りとは異なり、確認できた造成土はごくわずかであった。造成土の下層では旧表土の第 3層と地山の第 32～35・3層が確認できた。

曲輪 12 東端において土壘状の高まりがみられたが(第 1層) 植林に伴う後世の改変と考えられる。第 4層等の流土が確認でき、第 2層では、地山直上ともいえる位置で土師器羽釜(618)が出土した。第 22～25層は溝 S D 734の埋土である。この S D 734は、曲輪 12に造成土を盛った後に形成されていることが認められた。また、第 2層を掘り込んでいるようにもみえる。以上から、曲輪 12の南半は地山削り出し、北半を造成土で平坦面を形成、第 2層が堆積、S D 734形成、S D 734埋没という先後関係を把握しておきたい。

曲輪 16 第 14～18層の流土が確認でき、その下層において地山の第 3層を確認できた。曲輪 12と同様に、斜面は切岸状に地山を削り落としている。

S A 738 表土下で流土第 3層、灰色粘土質地山の風化土と考えられる第 3層、地山の第 40・4層を確認した。旧表土は確認できなかったことから、S A 738は、地山削り出しで形成されていることが判明した。S A 738の形成は、S D 733または曲輪 10の掘削時に削り残された部分が結果として土壘状を呈したと考えられる。S D 733は南西・北東方向に伸びる部分が良好に残されているが、本来は北隅において矩形に折れ、南東方向に伸び、S D 733に接続する部分まで形成されていたと考えられる。その後の改修等によって S D 733の範囲・防御機能はあいまいとなった。S A 738が S D 733と曲輪 10のいずれの形成によるものかや、本来の高さ、防御の面での程度有効だったかは不明である。

S A 739 表土を除去すると、灰色粘土質地山の風化土と考えられる第 4層が堆積しており、その下で地山の第 4層を確認した。これにより S A 739は、地山削り出しで形成されていることが判明した。おそらく、S D 735の掘削時に削り残された部分が結果として土壘状を呈したのであろう。S D 735を登る敵に対して横矢を掛ける際に、有効な機能を発揮した可能性がある。

(15) 曲輪 1 西斜面下層

(第 6 次西区下層 A 地区 第 2 区: 15a～15b)

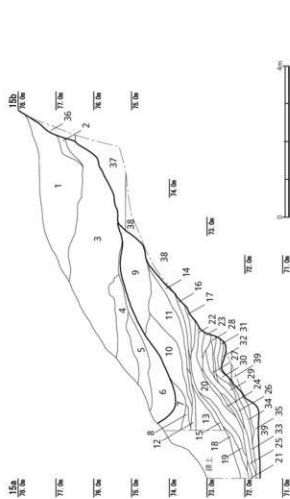
第 1～6層は地滑りに伴う層と考えられる。第 1層は橙色礫層に由来、第 2・3層は黄色砂層地山の第 3層に由来、第 6層は灰色粘土層地山の風化部分の第 3層に由来する地滑り層である。地滑りは、曲輪 1 西斜面が切岸の形成によって急傾斜となった結果、地耐力の低い黄色砂層地山(第 3層)が崩落したことに起因する。この第 3層の崩落は、接する第 3層にも影響が及んだようである。第 3層では高さ 1 m、幅 2 m の範囲が崩落したと推測される。

第 6層の下には、橙色礫層に由来する第 9～1層が堆積する。これらの層は地滑りに伴う可能性と、地滑り以前に堆積した流土の可能性がある。前者の場合、第 1～6層に先行する地滑りを想定する必要がある。ただし、第 9～1層の下において橙色礫層・黄色砂層・灰色粘土層地山に由来する地滑り層がこの順で確認されていないことから、その可能性は低いといえる。したがって後者の可能性を考えておきたい。

地滑り以前の層として、確実な層は第 14～3層である。これらの層は薄い層で構成されること、灰色粘土層由来のブロックを含むことを特徴とすることから、灰色粘土質地山に由来する雨水作用によるものと考えられる。第 3層は S D 746の埋土に相当し、大塚第 1 段階の灰積端反皿(611～613)が出土している。この点から地滑りは大塚第 1 段階がそれ以降に生じたと考えられる。

(16) 曲輪 1 断ち割り(第 2 区: 16a～16b)

曲輪 1 断ち割りは表土・流土掘削後に、曲輪の南半を地山削り出し、北半を造成土によって形成されていることが判明した。これをふまえて南北方向に断ち割りを設定し、曲輪形成方法を詳しく観察した。なお、断ち割りは地山の深度まで実施しており、これにより近隣で横穴が築かれた地山層が当地に存在しないこと、下層に遺構が存在しないことも確認した。土層観察の結果、曲輪 1 断ち割りは谷方向へ傾斜していた。この点から、手前から造成することを繰り返して平坦面を広げていたことが明らかになった。曲輪 6 と同様の工法である。したがって、伊坂城跡では、低い位置から造成を開始して、1～



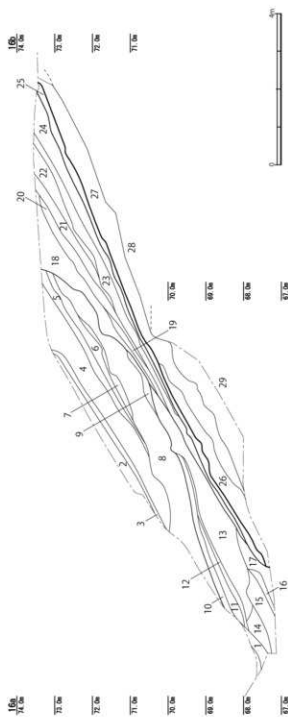
地湧り

1. 7.5Y R5/8 黄褐色 細粒砂 しまりややあり 長径 20cm 以下の礫を 30% 含む [褐色砂質土山来]
 2. 10Y R4/6 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり [黄色砂質土山来]
 3. 2.5Y 6/4 に近い黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を 30% 含む [黄色砂質土山来]
 4. 2.5Y 5/4 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を 7% 含む 長径 20cm 以下の地山アロツク (2.5Y7/3 黄褐色 シルト (一部粘土) しまりややあり) を 25% 含む [黄色粘土層土山来]
 5. 2.5Y 5/6 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) 長径 2cm 以下の礫を 30% 含む [黄色砂質土山来]
 6. 2.5Y 8/4 淡黄 シルト (一部粘土) しまりややあり [灰色粘土層土山来]
- 地湧り以前に堆積した可能性をもつ層
7. 7.5Y R5/6 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり [褐色砂質土山の風化砂質土山来]
 8. 10Y R5/6 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりなし 長径 2cm 以下の礫を 30% 含む [褐色砂質土山来]
9. 7.5Y R5/6 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり [褐色砂質土山の風化砂質土山来]

10. 7.5Y R4/6 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり 長径 10cm 以下の礫を 5% 含む [褐色砂質土山の風化砂質土山来]
 11. 10Y R4/6 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を 10% 含む [褐色砂質土山の風化砂質土山来]
 12. 2.5Y 7/4 淡黄 細粒砂 しまりややあり
 13. 10Y R4/6 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり 長径 1cm 以下の礫を 7% 含む
- 地湧り以前に堆積した層
14. 10Y R4/4 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり 長径 1cm 以下の地山アロツク (2.5Y 8/3 淡黄 シルト (一部粘土) しまりややあり) を樹根に 20% 含む
 15. 2.5Y 7/4 淡黄 細粒砂 しまりややあり 長径 1cm 以下の地山アロツク (2.5Y 6/2 黄褐色 シルト (一部粘土) しまりややあり) を樹根に 5% 含む
 16. 2.5Y 7/3 淡黄 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり 長径 1cm 以下の地山アロツク (2.5Y 8/3 淡黄 シルト (一部粘土) しまりややあり) を樹根に 10% 含む
 17. 10Y R4/4 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり 長径 1cm 以下の地山アロツク (2.5Y 6/2 黄褐色 シルト しまりなし) を樹根に 5% 含む
 18. 2.5Y 6/2 黄褐色 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり 長径 1cm 以下の礫を 10% 含む

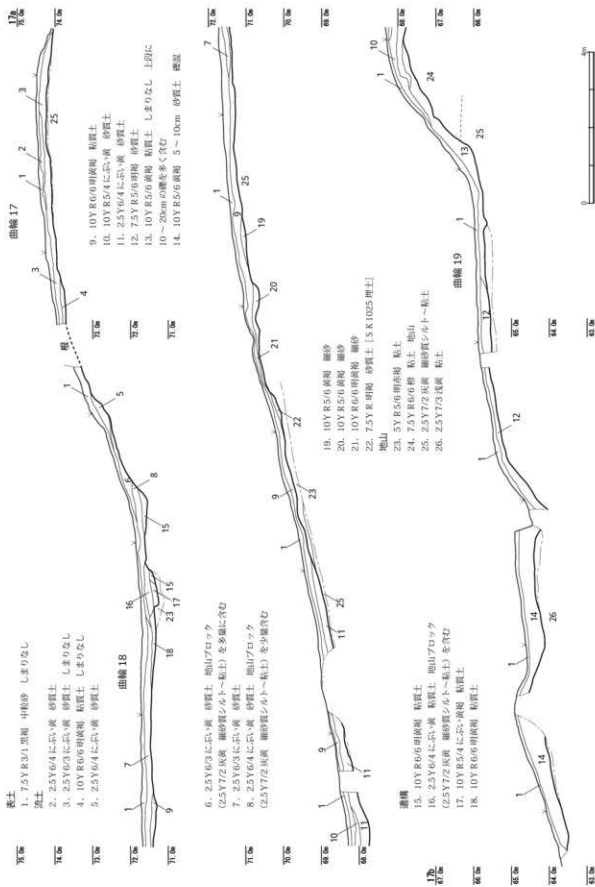
第 2 図 曲輪 1 西下土層断面図 (159~15b 1: 100, 第 6 次西下区層 A 地区)

19. 10Y R4/4 黄褐色 細粒砂 しまりややあり 長径 1cm 以下の礫を 15% 含む
 20. 10Y R5/4 に近い黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり 長径 4cm 以下の礫を 10% 含む
 21. 2.5Y 6/3 に近い黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり
 22. 10Y R4/4 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり
 23. 2.5Y 6/2 黄褐色 細粒砂 しまりあり 長径 1cm 以下の地山アロツク (2.5Y 6/2 黄褐色 シルト (一部粘土) しまりややあり) を樹根に 15% 含む
 24. 2.5Y 6/4 に近い黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり
 25. 5Y 6/1 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり
 26. 2.5Y 6/3 に近い黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり 長径 1cm 以下の地山アロツク (2.5Y 6/2 黄褐色 シルト (一部粘土) しまりややあり) を 7% 含む
 27. 2.5Y 8/4 淡黄 シルト (一部粘土) しまりややあり 長径 2cm 以下の地山アロツク (2.5Y 6/2 黄褐色 シルト (一部粘土) しまりややあり) を 15% 含む
 28. 10Y R4/4 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり 長径 1cm 以下の礫を 7% 含む
 29. 2.5Y 7/4 淡黄 シルト (一部中粒砂) しまりややあり 長径 1cm 以下の礫を 5% 含む
 30. 2.5Y 6/2 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり 長径 1cm 以下の地山アロツク (2.5Y 8/3 淡黄 シルト (一部粘土) しまりややあり) を 15% 含む
 31. 10Y R4/4 黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりややあり 長径 2cm 以下の礫を 5% 含む
 32. 2.5Y 6/3 に近い黄褐色 細粒砂 しまりややあり [S D740 礫土]
 33. 2.5Y 6/2 黄褐色 細粒砂 しまりややあり
 34. 2.5Y 7/3 淡黄 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり 長径 2cm 以下の地山アロツク (2.5Y 6/2 黄褐色 シルト (一部粘土) しまりややあり) を 20% 含む
 35. 10Y R6/0 黄褐色 細粒砂 (一部シルト) しまりややあり 長径 4cm 以下の礫を 5% 含む 長径 8cm 以下の地山アロツク (2.5Y 6/2 黄褐色 シルト (一部粘土) しまりややあり) を 25% 含む
- 地山
36. 2.5Y 6/4 に近い黄褐色 細粒砂 (一部中粒砂) しまりあり 長径 2cm 以下の礫を 30% 含む [黄色砂質土山]
 37. 2.5Y 8/4 淡黄 シルト (一部粘土) しまりあり [灰色粘土層土山の上部風化により変色]
 38. 5Y 7/2 灰白 シルト (一部粘土) しまりあり [灰色粘土層土山]
 39. 2.5Y 6/1 黄褐色 粘土 (一部シルト) しまりあり [灰色粘土層土山 (硬質)]

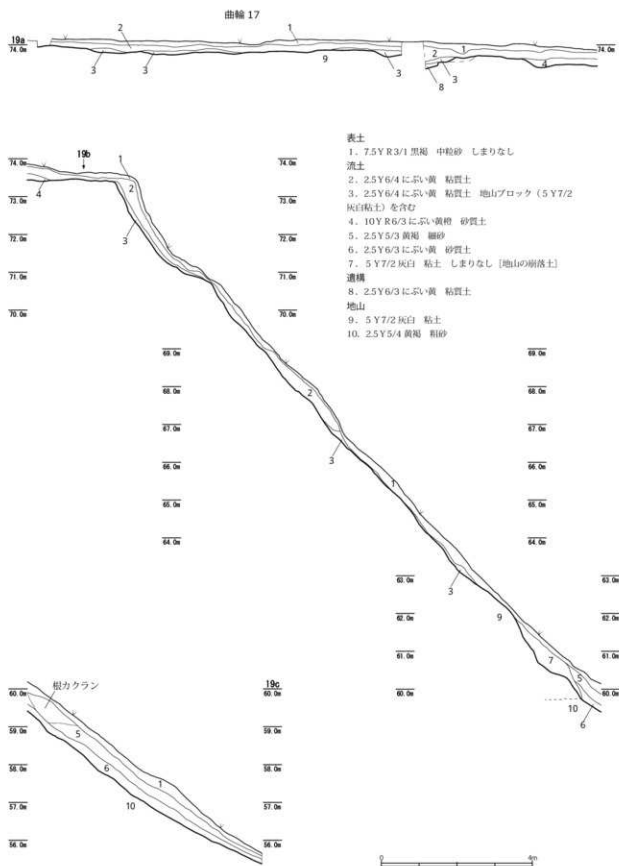


- 湧土
1. 7.5Y R5.69明褐色 糊状砂 しまりなし
- 曲輪11造盛土 (上層) シルト→糊状砂 しまりなし 長径2cm以下
の地山7プロック(2.5Y R8.29灰白 シルト(一部粘土)しまりなし)を7%含む
2. 10Y R7.60明褐色 シルト→糊状砂 しまりなし 長径10cm以下の地山7
プロック(5Y 7.2灰白 シルト(一部粘土)しまりなし)を25%含む
3. 10Y R5.66黄褐色 糊状砂 しまりなし 長径10cm以下の地山7
プロック(5Y 7.2灰白 シルト(一部粘土)しまりなし)を25%含む
4. 10Y R4.66暗 糊状砂→糊状砂 しまりやや多し
5. 10Y R4.44暗 糊状砂→糊状砂 しまりやや多し
6. 10Y R4.66暗 糊状砂→糊状砂 しまりやや多し
7. 10Y R7.60明褐色 シルト しまりやや多し 長径5cm以下の地山
7プロック(5Y 7.2灰白 シルト(一部粘土)しまりなし)を5%含む
8. 10Y R6.29黄褐色 シルト→糊状砂 しまりやや多し 長径15cm
以下の地山7プロック(2.5Y 7.2灰黄 シルト(一部粘土)しまりなし)を30%
含む
9. 10Y R7.42に赤い黄褐色 シルト→糊状砂 しまりやや多し
- 曲輪11造盛土 (中層) シルト→糊状砂 しまりやや多し
10. 10Y R7.60明褐色 シルト→糊状砂 しまりやや多し
11. 10Y R6.42に赤い黄褐色 糊状砂 しまりやや多し 長径2cm以下
の地山7プロック(5Y 7.2灰白 シルト(一部粘土)しまりなし)を5%含む
12. 2.5Y 6.42に赤い黄褐色 糊状砂→糊状砂 しまりやや多し
13. 7.5Y R5.69明褐色 糊状砂(一部シルト) しまりやや多し 長径
2cm以下の礫変3%含む 長径2cm以下の地山7プロック(5Y 8.03灰黄
シルト(一部粘土)しまりなし)を10%含む
14. 10Y R6.66明褐色 糊状砂(一部シルト)しまりやや多し 長径
8cm以下の地山7プロック(5Y 7.1灰白 シルト(一部粘土)しまりなし)を
5%含む
15. 10Y R5.66黄褐色 シルト→糊状砂 しまりやや多し 長径15cm以
下の地山7プロック(5Y 7.2灰白 シルト(一部粘土)しまりなし)を15%含む
16. 10Y R7.60明褐色 糊状砂 しまりやや多し
17. 10Y R6.66明褐色 シルト→糊状砂 しまりやや多し 長径4cm
以下の地山7プロック(2.5Y 8.4灰黄 シルト(一部粘土)しまりなし)を15%
含む
- 曲輪11造盛土 (下層) シルト→糊状砂 しまりやや多し
18. 7.5Y R5.69明褐色 糊状砂 しまりやや多し
19. 10Y R6.66明褐色 シルト→糊状砂 しまりやや多し
20. 10Y R5.42に赤い黄褐色 糊状砂(一部シルト)しまりやや多し
21. 10Y R5.66黄褐色 糊状砂 しまりやや多し 長径2cm以下の地
山7プロック(2.5Y 7.2灰黄 シルト(一部粘土)しまりなし)を15%含む
22. 10Y R6.66明褐色 糊状砂(一部シルト) しまりやや多し
23. 10Y R7.60明褐色 シルト→糊状砂 しまりやや多し 長径
2cm以下の礫変3%含む 長径4cm以下の地山7プロック(2.5Y 8.4灰
黄 シルト(一部粘土)しまりなし)を30%含む
24. 10Y R7.42に赤い黄褐色 シルト→糊状砂 しまりやや多し 長径
15cm以下の地山7プロック(2.5Y 7.2灰黄 シルト(一部粘土)しまりなし)
を10%含む
- 田基土
25. 2.5Y 4.44キリーブ褐色 糊状砂 しまりやや多し
- 地山
26. 2.5Y 6.29灰黄 シルト しまりやや多し(目張上下の黄土または灰
包粘土質地山の風化層)
27. 2.5Y 5.44黄褐色 糊状砂(一部シルト)しまりなし(目張上下の黄土
または灰色粘土質地山の風化層)
28. 5Y 7.2灰白 シルト(一部粘土)しまりなし(灰色粘土質地山)
29. 5Y 7.2灰白 シルト しまりなし(灰色粘土質地山)

第28図 曲輪11新築り土層図(16a~16b) 1:100



新 29 図 曲輪 17・18・19 土層図 1 (17a~17b 1 : 100, 第 7 次西区南壁)



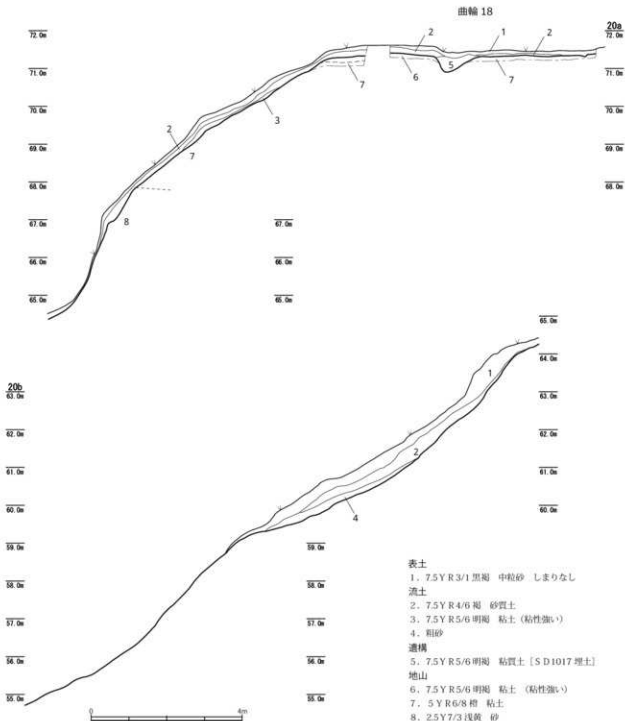
第3図 曲輪 17・18・19土層図3 (19a~19c, 1:100, 第7次西区南北横断)

2 m積み上げごとに平坦面を形成するような丁寧な工法は行われなかったといえる。

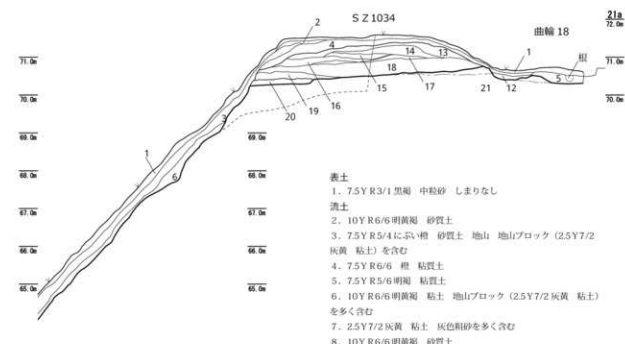
曲輪 1の土層についてさらに仔細に観察すると、造成土は第 2～9 層の上層、第 10～1 層の中層、第 18～24層の下層に分かれる。上層は曲輪平坦面から造成を行うような堆積状況を示しており、谷側での

堆積がやや希薄となる。一方で、中層は平坦面での堆積が認められず、谷側に偏る傾向がある。下層は再び平坦面から造成を行った状況を看取できた。

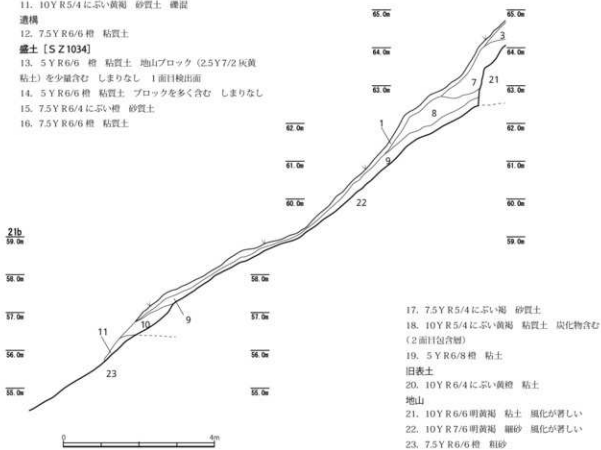
造成土の下層では、旧表土にあたる第 25層が確認された。厚さ 10～20mで、オリブ褐色極細粒砂で構成される。旧表土下には第 26～29層の地山が確



第 32図 曲輪 17・18・19土層図4 (20a～20b 1 : 100,第7次西区南北横断)



9. 2.5Y7/3 浅黄 粘質土 地山ブロック (2.5Y7/2 灰黄 粘土) を多く含む
10. 10Y R6/3 にぶい黄褐 細砂
11. 10Y R5/4 にぶい黄褐 砂質土 礫混
透構
12. 7.5Y R6/6 橙 粘質土
盛土 [S Z 1034]
13. 5Y R6/6 橙 粘質土 地山ブロック (2.5Y7/2 灰黄 粘土) を少量含む しまりなし 1面目検出面
14. 5Y R6/6 橙 粘質土 ブロックを多く含む しまりなし
15. 7.5Y R6/4 にぶい黄 砂質土
16. 7.5Y R6/6 橙 粘質土



第33図 曲輪17・18・19土層図5 (21a~21b) 1:100,第7次西区南北横断)

認められており、灰色粘土層地山を基盤とする。

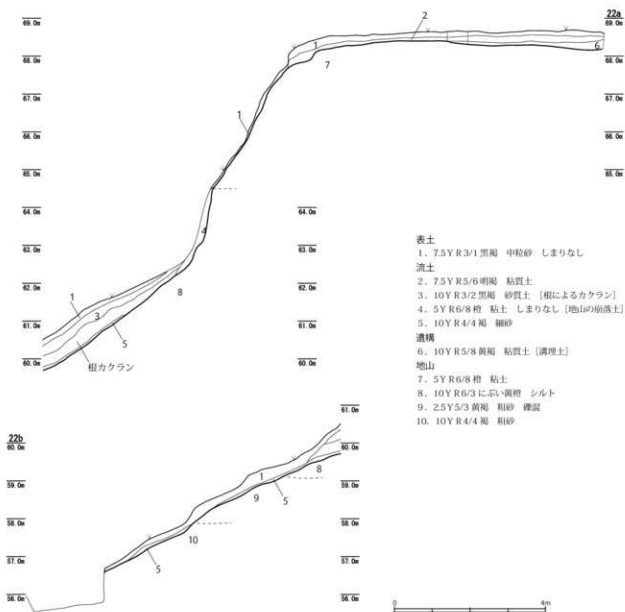
旧表土が残されていることから、曲輪1切の造成に際して斜面に特別な加工を施さず、造成を行ったことがわかる。造成土は下層においても灰色粘土質地山に由来するブロックが含まれることから、曲輪1の切岸や曲輪6・1切地山削り出しによる平坦面形成で生じた排土を利用したと考えられる。(高松)
(17) 曲輪17・18・19(第29～30図)

曲輪17・18・19では、第7次西区の調査区南壁と中央で縦断、それに直行する横断、斜面下の下段で土層を観察した。

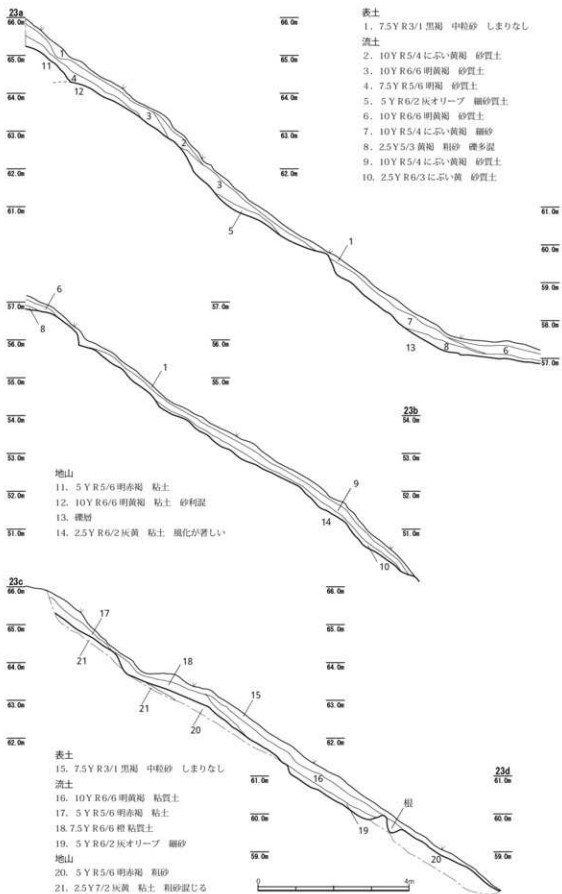
南壁(第29図17a～17b) 厚さ20～30mの表土・流土の下は地山で、灰色粘土およびその風化によって黄褐色・赤褐色を呈する。流土の堆積も顕著ではないことから、緩斜面において切土による平坦面造成と、その際に生じた排土を用いた平坦部端部へ盛土を行った程度と推測される。

中央縦断(第30図18a～18b) 土層SA103Qと曲輪17～19の土層を反映する。

SA103Qは、淡黄色極細粒砂の第8層と灰黄色極細粒砂を主体とする第3層が確認された。第8層は盛土あるいは地山の風化土と考えられる。いずれに



第34図 曲輪17・18・19土層図6(22a～22b) 1:100,第7次西区南北横断)



第 35 図 曲輪 17・18・19 土層図 7 (23a~23d 1 : 100, 第 7 次西区南北横断)

してもS A 103Qは大半を地山削り出しによって形成されていることがわかる。すなわちS A 103Qは東側の曲輪1の切土造成と西側のS D 910の掘削において、結果的に残された部分ということが出来る。

曲輪1は西側を地山削り出しによって形成されたと考えられる。東側は徐々に低くなるものの、盛土で高さを揃える整地層は確認できなかった。

斜面直下には溝状の落ち込みが1条確認できた。この溝は人為的なものか、雨水によるものかは明確には判断できなかった。

曲輪18は、西側を地山削り出しによって形成されたと考えられる。東側は徐々に低くなる。東端では、第18～3層が確認された(S Z 1034)。これらの層は、平坦面の拡張に伴う整地層と考えられる。この整地により平坦面が東へ約7m拡張されたといえる。

なお、これらの層は、斜堆積の傾向を示す第18～2層と水平堆積の傾向を示す第25～3層に大別できる。前者と後者については造成の時期が異なる可能性も考慮しておく必要がある。これらの整地層の下において地山の第3層が確認できた。

曲輪18と曲輪19の間は東側へと緩やかに下降しており、明確な平坦面形成は認められない。この平坦面では表土・流土のみが確認された。

曲輪19は、表土・流土の下において地山が確認された。この地山は、削り出しによる平坦面形成が認

められる。

南北横断(第31～39図) 表土・流土の下に地山を確認した。曲輪18のS Z 1034は盛土(第3図13～19層)であるが、曲輪18平坦面において盛土は確認されなかった。斜面では、切岸など人為的な改変は明確でなく、多少の凹凸は、地滑り等によるものと考えられる。

下段(第38図) 表土・流土下において地山を検出した。人為的な平坦面形成を明確に捉えることはできなかった。地滑り等による崩落部の下端に緩やかな平坦面状の地形が残されたと判断しておく。

(18) 曲輪20から北側斜面(第37・38図)

曲輪20では、第7次中区の調査区南壁で縦断、それに直行するベルトで横断の土層を観察した。

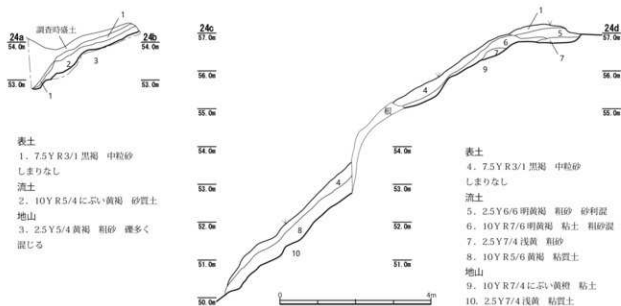
平坦面では、表土・流土の下で、灰色粘土および風化によって黄褐色に変色した地山に到達する。斜面においては、おおむね40度の傾斜で谷底へ向かう。この斜面付近において、切岸によって生じた排土・盛土は認められなかった。多少の凹凸があるものの自然地形と考えられる。

(19) 曲輪外

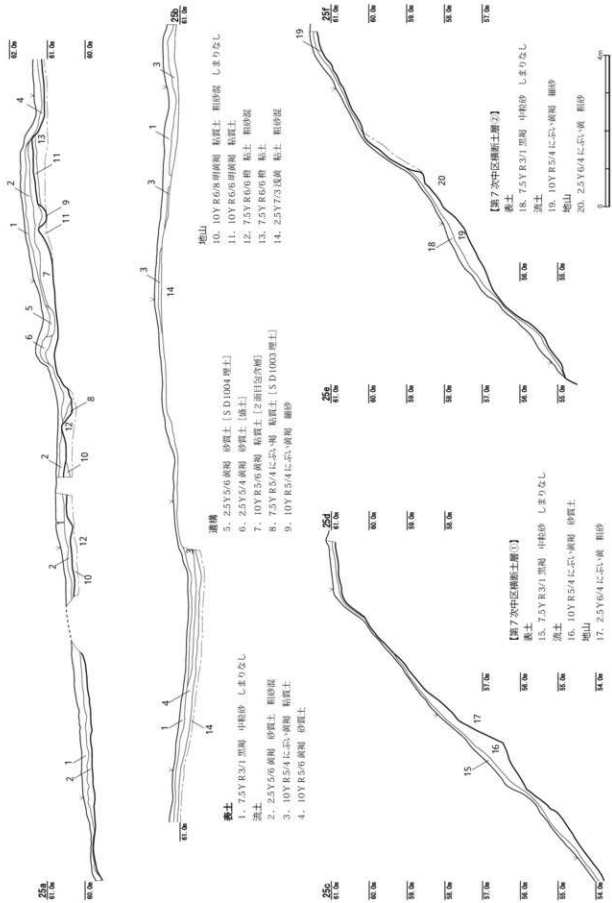
曲輪6・1の北東(第5次調査)

第5次調査区では、それぞれの調査区中央で土層を観察した。

西区(第38図: 27a～27b) 東西方向で土構S A



第36図 曲輪17・18・19土層図8(24a～24d 1:100,第7次西区下段)



第37図 曲輪20土層図1(25a~25f 1:100,第7次中区)

743の断ち割りを行い、旧表土と盛土を確認した。
東区（第39図：27c～27d） 表土および流土の堆積下において第27～30層が確認できた。これらの層は黄褐色系を呈し、シルト質の土質を主体とする。この点から、地山の崩落土と推測される。第27～30層の下には灰白色シルト質の地山に達した。この面で行くつかの段は認められるものの、明確な遺構は検出できなかった。

中区（第39図：27e～27f） 中区では、表土と流土の下に旧表土の可能性をもつ第40層を確認した。この層から陶器片や漆鉢が出土した。第40層の下には灰色粘土およびその風化層の地山が確認できた。断面においても人為的な盛土・切土による平坦面形成は認められなかった。

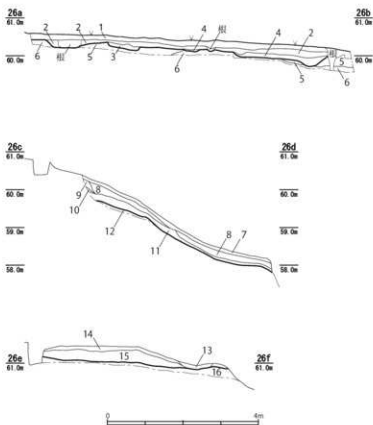
曲輪20の南東（第4次・第7次調査東区）

曲輪20から東方向に派生する小尾根（第4次斜面部：第40・41図28a～28b、29a～29d）では、表土下において、地山に由来する流土（第6～18層）が確認できた。これらの層の下において第28～40層の地山を確認した（第41図）。地山は灰色粘土および

その風化層を基本としており、間層として砂層を一部含む。

谷部では、第41図第19～27層、第42図第3～1層の堆積層を確認したが、厚さ約2mの表土・流土を除去しても、地山に到達しなかった。安全面を考慮して深掘は控えた。断面においても人為的な盛土・切土による平坦面形成は認められなかった。第4次調査の南東端（第42図30c～30e）では、厚さ2mの流土が堆積している。灰色粘土の風化により黄褐色系に変色した層が確認できる。地山は平滑ではなく凹凸が認められる。この点から、流出と倒樹木などが激しいことがうかがえる。人為的な盛土・切土による平坦面形成は認められなかった。

丘陵から東方向へ派生する小尾根（第7次東区第44図31a～31b）では、表土・流土の下に地山の第8～1層を確認した。地山は灰色粘土および風化により浅黄色系に変色した層を基本として、砂質の間層をいくつか含む構成をとる。人為的に平坦面を形成した痕跡や盛土は確認されなかったことから、自然地形と判断しておきたい。（水谷・高松）



第38図 曲輪20土層図2（26a～26f 1：100、第7次中区）

【中区横断土層③】

- 表土
1. 7.5Y R3/1 黒褐 中粒砂 しまりなし
流土
2. 10Y R6/4 にぶい・黄橙 砂質土
遺構
3. 2.5Y5/4 黄褐粘質土 炭化物を少量含む
[SK1002埋土]
4. 2.5Y5/4 黄褐 砂質土
地山
5. 10Y R5/6 黄褐 粘質土
6. 7.5Y R5/6 明褐 粘質土 粗砂混 一部不明

【中区横断土層④】

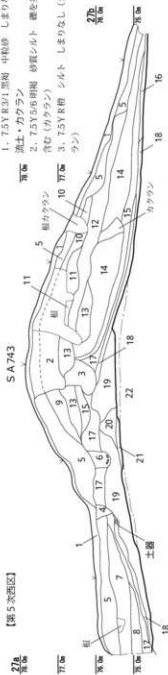
- 流土
7. 2.5Y5/4 黄褐 砂質土
8. 10Y R6/4 にぶい・黄橙 砂質土
9. 10Y R6/3 にぶい・黄橙 砂質土 よくしまる
10. 10Y R6/6 明黄褐 粗砂混粘質土
11. 10Y R5/4 にぶい・黄褐 粘質土
地山
12. 10Y R6/6 明黄褐 粗砂多く混粘質土

【中区横断土層⑤】

- 流土
13. 10Y R5/6 黄褐 砂質土 [上層薄]
14. 2.5Y6/6 明黄褐 砂質土
15. 10Y R6/4 にぶい・黄橙 砂質土
地山
16. 7.5Y R6/8 褐 砂質粘土

- 【第5次西区】
4. 7.5Y R4/6弱 シルト 小石混 粘質土 (カクラン)
5. 10Y R6/6明黄緑 粘土 小石混 (粘土)
6. 10Y R5/6黄緑 シルト 小石混 (カクラン)
- 平坦部堆積層
7. 7.5Y R6/6弱 シルト
8. 7.5Y R5/6明黄緑 シルト 粘質土
- 土壌SA743露土
9. 7.5Y R5/8明黄 砂質シルト
10. 7.5Y R3/6明黄 シルト しまりなし

- 【第5次西区】
- 表土
1. 7.5Y R3/1黒褐 中粒砂 しまりなし
- 流土・カクラン
2. 7.5Y R5/6明黄 砂質シルト 礫を多く含む (カクラン)
3. 7.5Y R6/6弱 シルト しまりなし (カクラン)



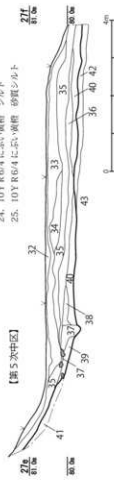
17. 7.5Y R6/6弱 シルト 粘質土
18. 10Y R4/6弱 粗砂~シルト 小石混(旧表土)
19. 7.5Y R6/6弱 シルト
20. 10Y R6/6明黄緑 砂質シルト 粗砂を互層状に含む
21. 10Y R6/6明黄緑 シルト (上部に流砂アリ)
- 地山
22. 10Y R8/6黄緑 粘土

11. 7.5Y R6/6弱 シルト
12. 7.5Y R5/6明黄 粘土
13. 7.5Y R5/6明黄 シルト
14. 7.5Y R5/6明黄 シルト 粘質土
15. 10Y R4/4弱 粘土~シルト (旧表土の可能性をもつ)
16. 10Y R4/3にぶい黄緑 シルト

- 【第5次東区】
- 表土
23. 7.5Y R3/1黒褐 中粒砂 しまりなし
- 流土
24. 10Y R6/4にぶい黄緑 シルト
25. 10Y R6/4にぶい黄緑 砂質シルト

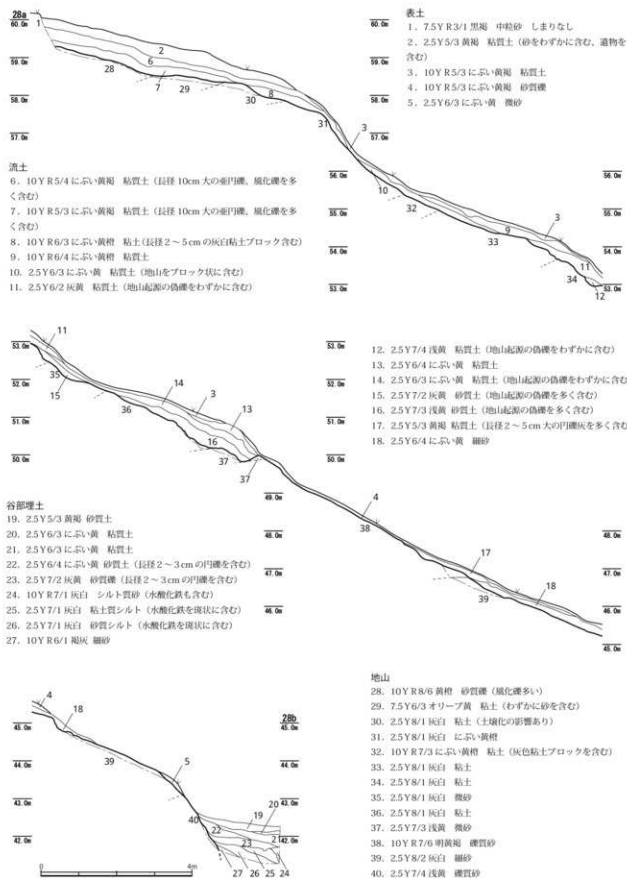


26. 2.5Y 6/4にぶい黄緑 砂質シルト
- 地山の露表土
27. 10Y R6/4にぶい黄緑 砂質シルト小石混
28. 2.5Y 7/4浅黄 シルト粗粒砂
29. 10Y R7/4にぶい黄緑 砂質シルト (7.5Y R6/6弱 中粒砂が互層状にみられる)
30. 2.5Y 7/4浅黄 シルト
- 地山
31. 2.5Y 7/1灰白 シルト

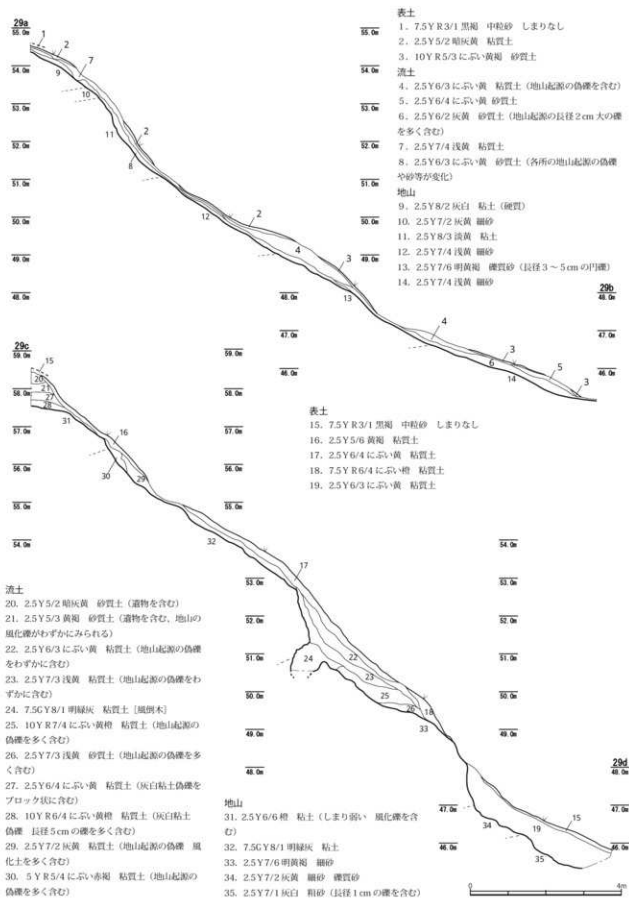


- 【第5次中区】
- 表土
32. 7.5Y R3/1黒褐 中粒砂 しまりなし
- 流土
33. 10Y R6/4にぶい黄緑 シルト
34. 2.5Y 6/4にぶい黄緑 粗粒砂
35. 10Y R7/6明黄緑 シルト
36. 10Y R8/4黄緑 粘土
37. 2.5Y 5/2粗黄緑 シルト粗粒砂 (カクラン)
38. 2.5Y 6/3にぶい黄 シルト
39. 2.5Y 6/2灰黄 粗粒砂
- 旧表土
40. 10Y R6/4にぶい黄緑 シルト粗粒砂
- 地山
41. 2.5Y R6/3にぶい黄 粗粒砂 礫を多く含む 地山の風化プロック (2.5Y R6/1黄緑 シルト) を多く含む
42. 2.5Y R6/3にぶい黄 粗粒砂 地山の風化プロック (2.5Y R6/1黄緑 シルト) を多く含む
43. 2.5Y 6/1黄緑 シルト

第39図 曲輪外土層図1 (27a~27f 1:100,第5次)



第40図 曲輪外土層図2 (28a~28b 1:100,第4次斜面部)



- 表土**
- 7.5Y R3/1 黒褐 中粒砂 しまりなし
 - 2.5Y5/2 暗灰黄 粘質土
 - 10Y R5/3 にふい黄褐 砂質土
- 流土**
- 2.5Y6/3 にふい黄 粘質土 (地山起源の偽礫を含む)
 - 2.5Y6/4 にふい黄 粘質土
 - 2.5Y6/2 灰黄 砂質土 (地山起源の長径2cm 大の礫を多く含む)
 - 2.5Y7/4 浅黄 粘質土
 - 2.5Y6/3 にふい黄 砂質土 (各所の地山起源の偽礫や砂等が変化)
- 地山**
- 2.5Y8/2 灰白 粘土 (硬質)
 - 2.5Y7/2 灰黄 細砂
 - 2.5Y8/3 浅黄 粘土
 - 2.5Y7/4 浅黄 細砂
 - 2.5Y7/6 明黄褐 礫質砂 (長径3~5cmの円礫)
 - 2.5Y7/4 浅黄 細砂

- 表土**
- 7.5Y R3/1 黒褐 中粒砂 しまりなし
 - 2.5Y5/6 黄褐 粘質土
 - 2.5Y6/4 にふい黄 粘質土
 - 7.5Y R6/4 にふい橙 粘質土
 - 2.5Y6/3 にふい黄 粘質土

- 流土**
- 2.5Y5/2 暗灰黄 砂質土 (遺物を含む)
 - 2.5Y5/3 黄褐 砂質土 (遺物を含む、地山の風化礫がわずかにみられる)
 - 2.5Y6/3 にふい黄 粘質土 (地山起源の偽礫をわずかに含む)
 - 2.5Y7/3 浅黄 粘質土 (地山起源の偽礫をわずかに含む)
 - 7.5G Y8/1 明緑灰 粘質土 [風倒木]
 - 10Y R7/4 にふい黄橙 粘質土 (地山起源の偽礫を多く含む)
 - 2.5Y7/3 浅黄 砂質土 (地山起源の偽礫を多く含む)
 - 2.5Y6/4 にふい黄 粘質土 (灰白粘土偽礫をブロック状に含む)
 - 10Y R6/4 にふい黄橙 粘質土 (灰白粘土偽礫 長径5cmの礫を多く含む)
 - 2.5Y7/2 灰黄 粘質土 (地山起源の偽礫 風化土を多く含む)
 - 5Y R5/4 にふい赤褐 粘質土 (地山起源の偽礫を多く含む)
- 地山**
- 2.5Y6/6 橙 粘土 (しまり強い 風化礫を含む)
 - 7.5G Y8/1 明緑灰 粘土
 - 2.5Y7/6 明黄褐 細砂
 - 2.5Y7/2 灰黄 細砂 礫質砂
 - 2.5Y7/1 灰白 粗砂 (長径1cmの礫を含む)

第4図 曲輪外土層図3 (29a~29d 1:100,第4次斜面部)

【平準長軸】

- 粘土
 1. 7.5Y R3/1 黒濁 中粗砂 しまりぬし
 2. 10Y R4/1 褐色 砂質土 (長径2~5cm大の礫を多く含む)
 流土
 3. 2.5Y 6/2 灰黄 粘質土 (礫少ない、しまりぬし)
 4. 5Y 6/1 灰 細砂 (粘土質を多く含む)
 5. 10Y R6/3 灰白 粘砂 (礫少ない)
 6. 2.5Y 7/3 黒黄 砂質土 (礫少ない)
 7. 2.5Y 7/3 黒黄 粘土質砂 (上面に長径5cm大の礫を多く含む)

13. 10Y R6/2 灰黄緑 粘土質砂 (長径2~5cmの礫を多く含む、しまりぬし)
 地山

14. 2.5Y 7/4 灰黄 細砂
 15. 2.5Y 8/4 灰黄 細砂

16. 10Y R6/3 灰白 黄粉 細砂 (長径2~5cm大の礫を多く含む)

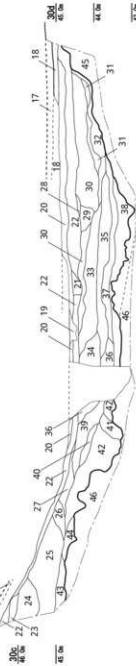


【平準短軸】

- 粘土
 17. 7.5Y R3/1 黒濁 中粗砂 しまりぬし
 流土
 18. 10Y R6/4 灰白 粘質土 (長径2cmの礫を多く含む)
 19. 7.5Y R3/1 黒濁 中粗砂 しまりぬし (灰色粘土質を多く含む) (黒濁粘土質を多く含む)
 20. 10Y R7/6 明黄緑 粘質土 (礫少ない)
 21. 10Y R7/6 明黄緑 粘質土 (灰色粘土質を多く含む) (黒濁粘土質を多く含む)
 22. 10Y R6/4 灰白 粘質土 (長径2~5cmの礫を多く含む)
 23. 10Y R7/6 明黄緑 粘質土 (長径2cm大の礫を多く含む)
 24. 2.5Y 6/3 灰黄 粘質土 (灰色粘土質を多く含む)
 25. 10Y R7/4 灰白 粘質土 (長径1~2cm程度の礫を多く含む)
 26. 7.5Y R7/3 灰白 粘質土 (灰色粘土質を多く含む)

27. 10Y R7/4 灰白 黄粉 粘質土
 28. 10Y R6/6 明黄緑 粘質土
 29. 10Y R7/4 灰白 黄粉 砂質土 (長径1cm以下の礫を多く含む)
 30. 10Y R6/4 灰白 黄粉 砂質土 (長径2~5cmの礫を多く含む)
 31. 10Y R6/4 灰白 黄粉 細砂
 32. 10Y R7/6 明黄緑 粘質土 (長径2~5cmの礫を多く含む)
 33. 10Y R6/4 灰白 黄粉 黄砂 (長径2~5cmの礫を多く含む)
 34. 10Y R6/4 灰白 黄粉 黄砂 (長径2~5cmの礫を多く含む)

35. 10Y R6/4 灰白 黄粉 砂質土 (第30・33層に比べてやや粘質あり)
 36. 10Y R6/3 灰白 黄粉 粘土質砂 (長径2~5cmの礫を多く含む)
 37. 10Y R6/4 灰白 黄粉 砂質土 (第30・33・35層に比べて礫の比率が高い)
 38. 10Y R6/2 灰黄緑 粘土質砂 (礫を少量含む)
 39. 10Y R7/3 灰白 黄粉 しまりぬし (長径2~5cmの礫を多く含む)
 40. 10Y R7/2 灰黄緑 粘質土 (長径2~5cmの礫を多く含む、地山起源の灰色粘土質を多く含む)
 41. 10Y R6/4 灰白 黄粉 粘質土 (灰色粘土質を多く含む) (粗による影響大きい)
 42. 10Y R6/4 灰白 黄粉 砂質土 (長径2~5cmの礫を多く含む)



第42図 曲輪外土層図4 (30a~30g 1:100,第4次部)

【平場下層】

表土

47. 7.5Y R3/1 黒褐 中粒砂 しまりなし
近現代の遺土
48. 10Y R6/4 にぶい黄橙 砂質土 (長径2～5cmの礫多く含む)

流土

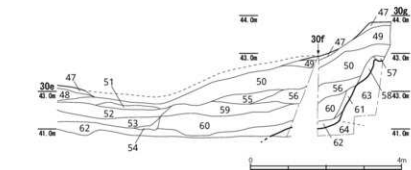
49. 10Y R6/4 にぶい黄橙 砂質土 (長径2～5cmの礫多く含む)
50. 10Y R7/6 明黄褐 砂質土 (長径2cmの礫を含む)

51. 10Y R7/3 にぶい黄橙 粘質土 (水酸化鉄が斑状にみられる)

52. 7.5Y R7/3 にぶい黄 砂質シルト (水酸化鉄が斑状にみられる)

53. 10Y R6/1 褐灰 砂質シルト (水酸化鉄が斑状にみられる)

54. 10Y R6/1 褐灰 シルト質砂 (水酸化鉄が斑状にみられる)



55. 10Y R6/6 明黄褐 砂質土 (長径1～2cmの礫を多く含む)
56. 10Y R 砂質礫 (長径1～2cmの礫を含む)
57. 10Y R6/6 明黄褐 砂質土 (礫を含まない)
58. 10Y R6/6 明黄褐 砂質土
59. 10Y R7/6 明黄褐 礫質砂 (長径2～5cmの礫を含む)
60. 10Y R6/4 にぶい黄橙 砂質礫 (長径2～5cmの礫を含む)

5cmの礫を含む

61. 10Y R6/6 明黄褐 砂質土

62. 10Y R5/1 褐灰 シルト質砂 (水酸化鉄が斑状にみられる)

地山

63. 5Y7/2 灰白 微砂 (水酸化鉄が多い)

64. 5Y6/2 灰白 微砂 (水酸化鉄が多い)

第43図 曲輪外土層図5 (30e～30g 1:100, 第4次谷部)

表土

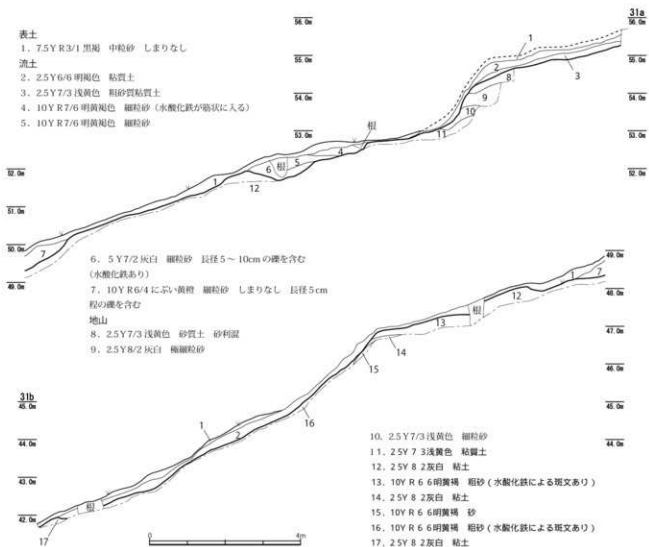
1. 7.5Y R3/1 黒褐 中粒砂 しまりなし

2. 2.5Y6/6 明褐色 粘質土

3. 2.5Y7/3 浅黄色 粗砂質粘質土

4. 10Y R7/6 明黄褐色 細粒砂 (水酸化鉄が斑状に入る)

5. 10Y R7/6 明黄褐色 細粒砂



6. 5Y7/2 灰白 細粒砂 長径5～10cmの礫を含む (水酸化鉄あり)

7. 10Y R6/4 にぶい黄橙 細粒砂 しまりなし 長径5cmの礫を含む

- 地山

8. 2.5Y7/3 浅黄色 砂質土 砂利混

9. 2.5Y8/2 灰白 極細粒砂

10. 2.5Y7/3 浅黄色 細粒砂

11. 2.5Y7/3 浅黄色 粘質土

12. 2.5Y8/2 灰白 粘土

13. 10Y R6/6 明黄褐 粗砂 (水酸化鉄による斑文あり)

14. 2.5Y8/2 灰白 粘土

15. 10Y R6/6 明黄褐 砂

16. 10Y R6/6 明黄褐 粗砂 (水酸化鉄による斑文あり)

17. 2.5Y8/2 灰白 粘土

第44図 曲輪外土層図6 (31a～31b 1:100, 第7次東区)

遺 構

1 曲輪1 (第46図)

伊坂城の中心となる曲輪で、最高所を占める。一辺約50m(土塁の芯々)の方形を呈し、周囲には土塁が巡る。曲輪全体の北側半分を調査した。

土塁の外側は切岸によって急峻な斜面となっており、北側斜面下の曲輪5の調査から、斜面下端の裾には当初、横堀がめぐっていたことが判明した。

縄張り図によると虎口は2か所ある。東方にある屋敷地(第1~3次調査区)の城道から続く東側と勝手側からの南側のうち、調査の対象となった東側虎口では、大型の礎石を用いた櫓門S B 715を確認した。

内部は一律に平坦ではなく、上段と下段に区画される。上段は下段に比して80cm高い。

上段平坦面は、溝(S D 706・710)でさらに区画され、南側には複数の掘立柱建物が並ぶが、北側では井戸と土坑が確認された程度であった。

下段平坦面では明確な建物は確認されなかった。

土塁の断ち割りや下層調査によって、改修の痕跡(溝S D 716・718、土坑S K 749)が確認されている。

(1) 土塁

S A 701 西辺を囲む土塁をさし、長さ約28m以上、内側平坦面での幅7.0m、高さ1.9mである。内側に小さな段を有するため一見すると2段築成のようにみえる。このうち下段は、地山掘り下げによって曲輪平坦面を形成した際に掘り残した地山や旧表土であり、上段は盛土である。この盛土は外側から積み上げたことが判明しており、結果的に盛土の及ばなかった部分がテラス状に残ったため、2段築成のようにみえたのである。なお、北半において土塁の幅が狭くなるが、これは地滑りの影響による。本来は、南半と同等の幅を有していたと推測される。

表土から器種・時期等不明の土師器が出土したものの、盛土中の遺物は確認できなかった。

S A 745 北辺を囲む土塁をさし、長さ約45m、幅5.8m、高さ1.5mである。

平面形はやや「く」の字状を呈するが、地滑りに

よって北半が流出したためと考えられる。S A 701と同様に、内側に小さな段を有し、2段築成のようにみえる部分がある。

盛土上部から器種・時期等不明の土師器が出土したほか、第19図第75層から瀬戸美濃陶器の天目茶碗(138)が出土した。

S A 756 東辺を囲む土塁をさし、櫓門S B 715の北側に位置する。長さ約11m、幅27~5.8m、高さ80cmである。築造以前にS D 716が掘割されていたことが、下層の調査で明らかとなった。

(2) 門

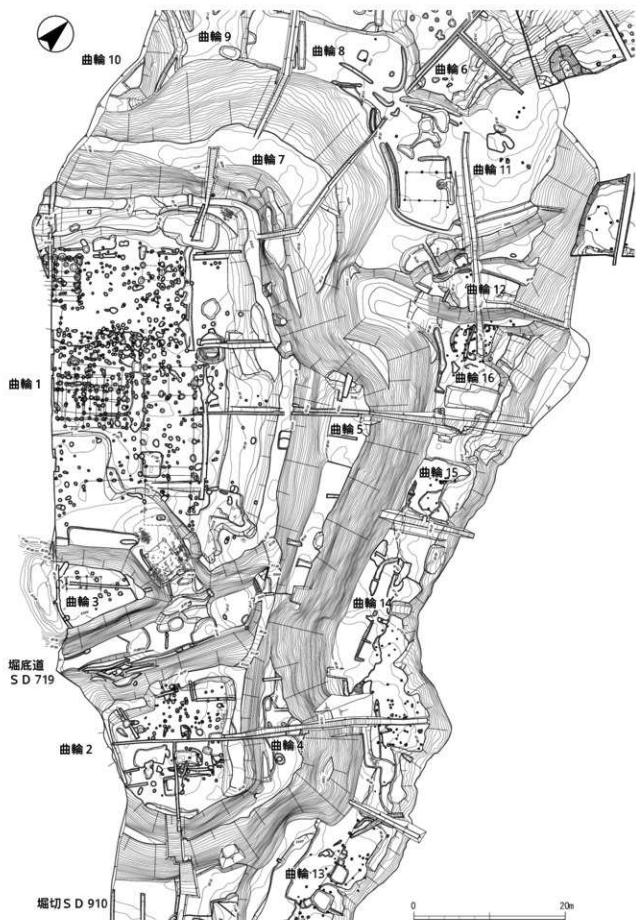
S B 715 (第47・48図) 曲輪1の虎口で検出した合計10石の礎石からなる櫓門である。中央に大きな礎石6石が3列(曲輪1外側から前列・中列・後列と呼称する)に並び、前列・中列の脇に小さな礎石4石が土塁に接するように据えられていた。門の規模は、幅5.15m(3間)、奥行3.94m(2間)で、門の開口は3.03m(1間)である。

鏡柱・控柱を据える礎石は長辺80cm前後、脇の礎石は長辺40cm以下で、鏡柱を据える石材は特に大きい。石材の厚さ・重量から、前列の礎石に荷重が掛かっていたとみられる。

鏡柱の据えられた礎石1(北側)は、長辺100cm、短辺56cm、厚さ21cm程度、材質は砂岩で、形状は重円礫の川原石、重量は目方で300kg。礎石2(南側)は、長辺90cm、短辺85cm、厚さ31cm程度、材質は砂岩で、形状は重円礫の川原石、重量は目方で500kg。礎石据え付け穴は、一辺1.0~1.1m、深さ10cmである。

中列の礎石3は、長辺81cm、短辺55cm、厚さ15cm、材質は砂岩で、形状は重円礫の川原石、重量は目方で150kg。礎石4は、長辺93cm、短辺56cm、厚さ18cm、材質は砂岩で、形状は重円礫の川原石、重量は目方で160kg。見かけの大きさに比して薄いことが特徴であり、あまり荷重が掛かっていなかったと推測される。

後列の礎石5は、長辺69cm、短辺43cm、厚さ31cmで、他の礎石と長軸方向が異なる。形状は円



第45図 伊坂城跡中心部遺構平面図(1:500)

礫に近い花崗岩の川原石で、重量は目方で220kg。花崗岩の川原石のため、平滑な面を上面に据えてはいるものの、平滑ではない。礎石6は、南側は長辺58cm、短辺51cm、厚さ20cm、形状は円礫に近い花崗岩の川原石で、重量は目方で150kg。

脇柱の礎石7は、北側は、長辺40cm、短辺35cm、厚さ20cm、形状は円礫に近い花崗岩の川原石で、重量は目方で70kg。礎石8は長辺38cm、短辺30cm、厚さ18cm、形状は円礫に近い花崗岩の川原石で、重量は目方で60kg。

中列の脇柱礎石9は、長辺33cm、短辺25cm、厚さ18cm、形状は円礫に近い花崗岩の川原石で、重量は目方で40kg。礎石10は長辺33cm、短辺38cm、厚さ14cm、形状は円礫に近い花崗岩の川原石で、重量は目方で40kg。

柱間寸法は、間口3.03m(10尺)、柱の芯々間で3.33m(11尺)を採る。間口10尺と鏡柱・控柱の太さを念頭に置いた設計といえる。門両脇の小柱までの柱間は芯々間で0.91m(3尺)を採る。奥行方向については、柱の芯々間で1.97m(6尺5寸)を採用する。厚は幅約1.5mのため、控柱までに収まることとなる。

南側には幅40～50cm、深さ10cmの排水溝とみられる溝がめぐる。

以上、礎石の配列、重量物に耐え得る礎石の存在、外側に最も大きな礎石を据えて荷重を支える構造等からみて、階上を檜とした2階建ての門、櫓門とした。櫓門には、2階が単独の檜のもの、渡り廊下状のものに大別されるが、S B 715は、土塁との距離が3m以上あることから、渡り廊下状のものを掛け渡した可能性は低く、前者と考えられる。

まとまった量の瓦は確認されていないことから、瓦葺ではなかった可能性が高い。

S B 715は、先行する溝S D 716を埋めた後に建てられていることから、城の改修に伴う建物である。この櫓門によって伊坂城の防御性はさらに高まったといえる。

(3) 掘立柱建物・櫓

曲輪1からは数多くの柱穴が検出された。建物として認定できたものには、上段の掘立柱建物10棟と、下段から上段にかけての櫓1列がある。

S B 721(第49図) 北隅角近くに位置する。柱筋のりが良好ではないものの、北西-南東方向を主軸とする掘立柱建物を想定した。大きさは、桁行2間(5.0m)、梁間2間(3.7m)と推定しておく。柱穴は直径20～40cmで不揃いで、深さも20cm程度の浅いものが多い。

上記の特徴から掘立柱建物として認定することは躊躇した。しかし、A-u21Pit 3からカマドの一部あるいはそれに関連する被熱した土塊が出土したこと、雨落ち溝の可能性をもつS D 706・758を検出したこと等を考慮して認定した。今後の類例とそれらの検討を期待したい。

S B 724(第50図) 最も大きなS B 725と直交する掘立柱建物である。桁行4間(8.0m)、梁間2間(5.76m)、床面積約46.1㎡の大きさである。

桁行の柱間寸法は、1.82mを基本とするが、南端のみ2.55mと異なる寸法を採用する。すなわち桁行は26尺4寸、6尺を基本としつつ、南端のみ8尺4寸となる。梁間は、3.79m(12尺5寸)、1.97m(6尺)を志向する。前者は概ね2間分に相当する。柱穴は直径40～50cm、深さ70cmを超えるものが多いが、最も北側の一列については柱穴の深度がやや浅い。

なお、桁行については北側へ1～2間分長くなる可能性がある。これらの柱穴の直径が40cmに達しないこと、深さにばらつきがみられることから、S B 724の一部とはみなさなかった。

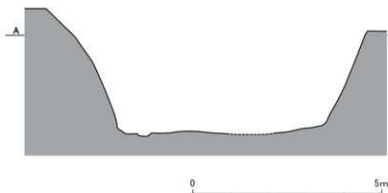
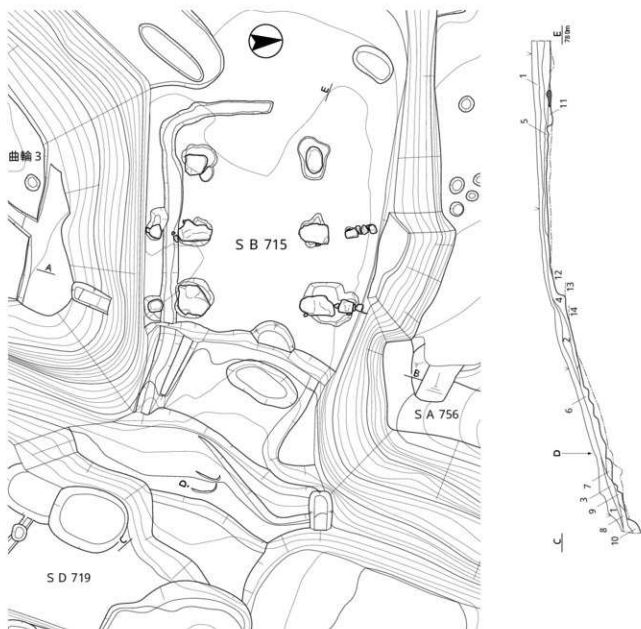
S B 724では桁行において6尺、梁間において6尺5寸と異なる柱間寸法を採用している点が特徴といえる。

なお、S B 724の柱穴はA-y22Pit 8の大堖を破壊していることから、このピットを伴うと考えられるS B 750→S B 724・S B 752の新旧関係をとらえることができる。S B 724周辺では合計4棟の掘立柱建物が確認されており、数回建て替えが行われたことがわかる。

S B 725(第51図) 最も大きな掘立柱建物である。桁行7間(14.36m)、梁行2間(北側で6.67m、南側で6.97m)、床面積97.8㎡の大きさである。南隅部を基点として桁行3間(6.64m)において30cm、すなわち1尺分突出する。

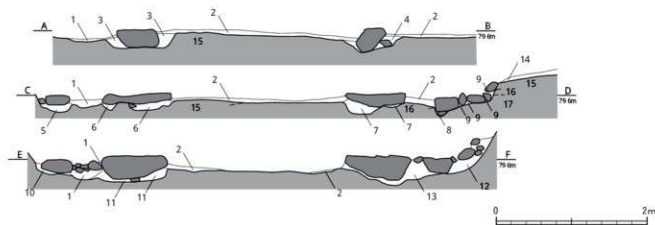
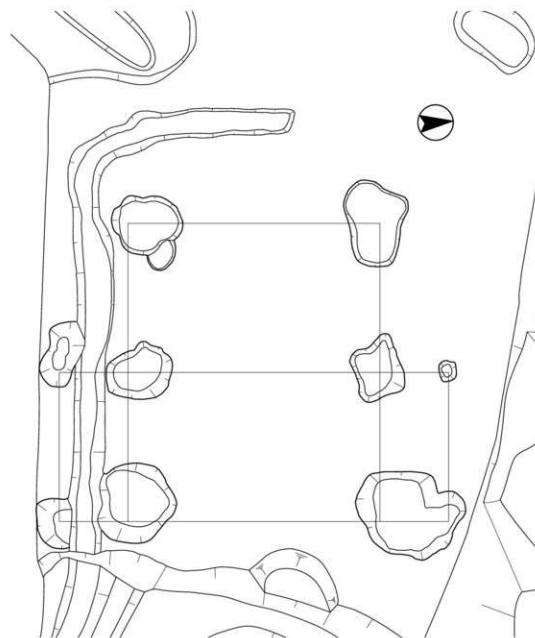
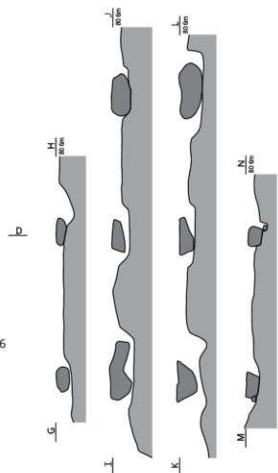
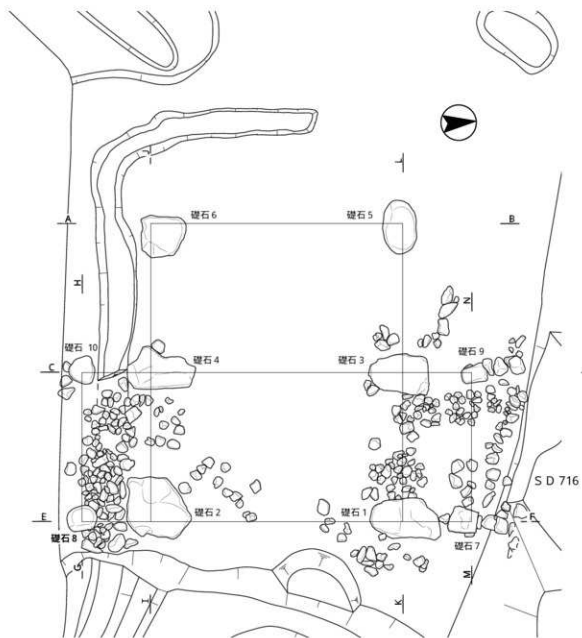


第 46 図 曲輪 1・3 遺構平面図 (1 : 250)



- 表土
 1. 7.5YR2 2黒褐 中粒砂 しまりなし
 流土
 2. 10YR3 4暗褐 極細粒砂-細粒砂 しまりなし
 3. 10YR5 4cぶい黄褐 極細粒砂-細粒砂 しまりなし
 4. 10YR4 2灰黄褐 極細粒砂 しまりなし
 5. 10YR4 3cぶい黄褐 極細粒砂-細粒砂
 しまりなし【流土が城の門設置のための覆土】
 6. 10YR6 6明黄褐 極細粒砂(一部シルト) しまりなし
 7. 10YR7 6明黄褐 シルト しまりなし
 8. 10YR4 4褐 粘土-シルト しまりなし
 9. 10YR6 6明黄褐 粘土(一部シルト) しまりなし
 10. 10YR4 3cぶい黄褐 シルト(一部粘土) しまりなし
 礎石埋土
 11. 2.5Y4 3オリーブ褐 細粒砂(一部極細粒砂) しまりなし
 堆土
 12. 2.5Y5 4暗褐 中粒砂 しまりあり
 長径 20m以下の横を 15%含む
 13. 2.5Y5 6暗褐 粗粒砂 しまりあり
 14. 2.5Y7 6明黄褐 粘土-シルト しまりあり
 15. 2.5Y7 4黄 粘土(一部シルト)しまりあり

第47図 SB 715(1 : 100)



排水溝埋土

1. 75VR5 6明溝 粗粒砂 しまりやあり
2. 10VR4 3に高低溝補 粗粒砂(一部粗粒砂) しまりやあり 天目茶碗 1点出土
3. 10VR4 4溝 細粒砂(一部粗粒砂) しまりやあり 長径6cm以下の礫を29%含む
4. 10VR4 6溝 細粒砂(一部粗粒砂) しまりやあり 長径4cm以下の礫を7%含む
5. 10VR4 6溝 細粒砂(一部粗粒砂) しまりやあり 長径8cm以下の礫を19%含む

整地層

7. 10VR4 6溝 細粒砂(一部粗粒砂) しまりやあり 長径8cm以下の礫を19%含む
8. 10VR5 6明溝補 シルト しまりやあり
9. 10VR4 4溝 粗粒砂 しまりなし
10. 10VR4 4溝 細粒砂(一部粗粒砂) しまりやあり 長径2cm以下の礫を10%含む
11. 10VR3 4明溝 粗粒砂—細粒砂 しまりやあり 長径8cm以下の礫を7%含む
12. 10VR4 6溝 粗粒砂—細粒砂 しまりやあり 長径8cm以下の礫を19%含む

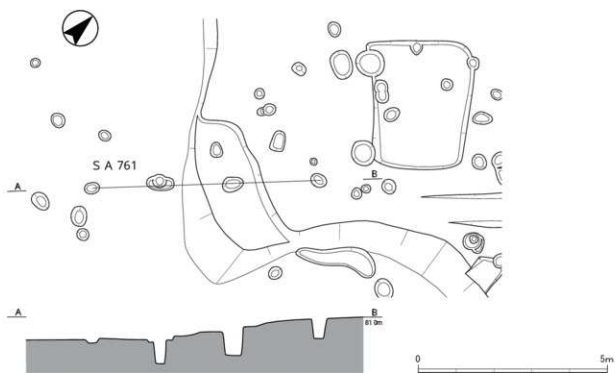
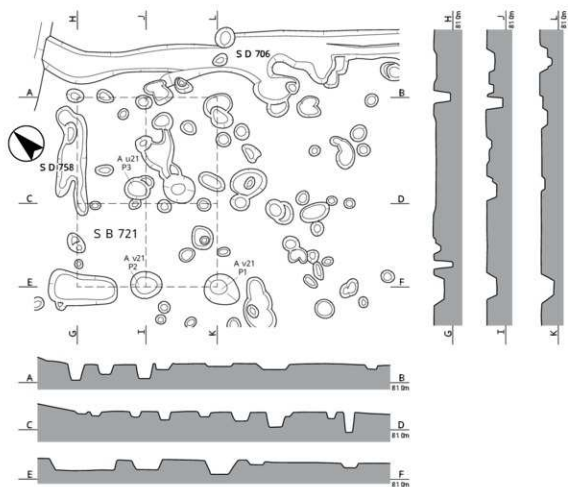
礎石層付坑埋土

13. 10VR3 4明溝 粗粒砂(一部粗粒砂) しまりやあり 長径4cm以下の礫を7%含む
14. 10VR4 2反黄溝 シルト しまりやあり 地山
15. 75VR5 8明溝 粗粒砂 しまりあり 長径25cm以下の礫を30%含む
16. 10VR5 8黄溝 粗粒砂 しまりあり
17. 25V7 4透黄 粘土—シルト しまりあり

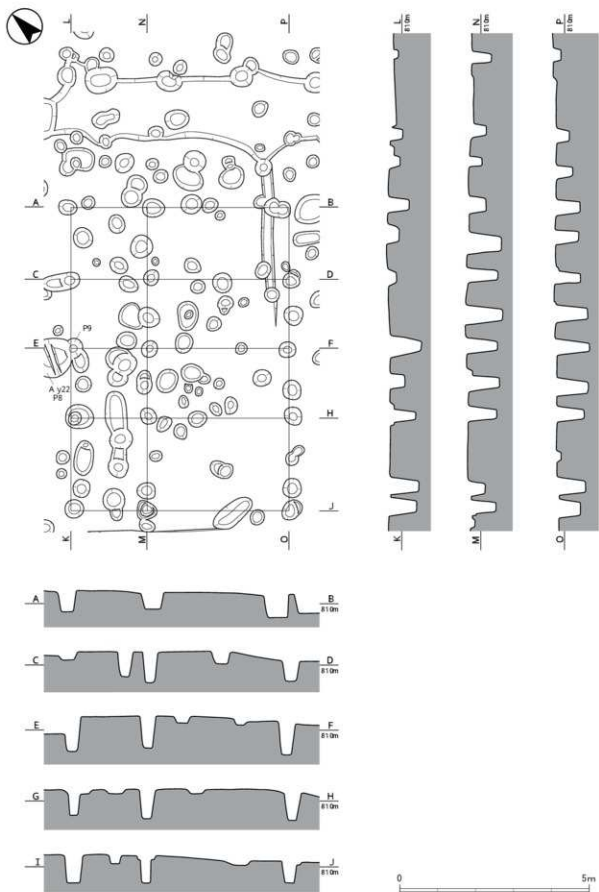
6. 10VR4 4溝 細粒砂(一部粗粒砂) しまりやあり 長径15cm以下の礫を20%含む
7. 10VR4 6溝 細粒砂(一部粗粒砂) しまりやあり 長径8cm以下の礫を19%含む
8. 10VR5 6明溝補 シルト しまりやあり
9. 10VR4 4溝 粗粒砂 しまりなし
10. 10VR4 4溝 細粒砂(一部粗粒砂) しまりやあり 長径2cm以下の礫を10%含む
11. 10VR3 4明溝 粗粒砂—細粒砂 しまりやあり 長径8cm以下の礫を7%含む
12. 10VR4 6溝 粗粒砂—細粒砂 しまりやあり 長径8cm以下の礫を19%含む

13. 10VR3 4明溝 粗粒砂(一部粗粒砂) しまりやあり 長径4cm以下の礫を7%含む
14. 10VR4 2反黄溝 シルト しまりやあり 地山
15. 75VR5 8明溝 粗粒砂 しまりあり 長径25cm以下の礫を30%含む
16. 10VR5 8黄溝 粗粒砂 しまりあり
17. 25V7 4透黄 粘土—シルト しまりあり

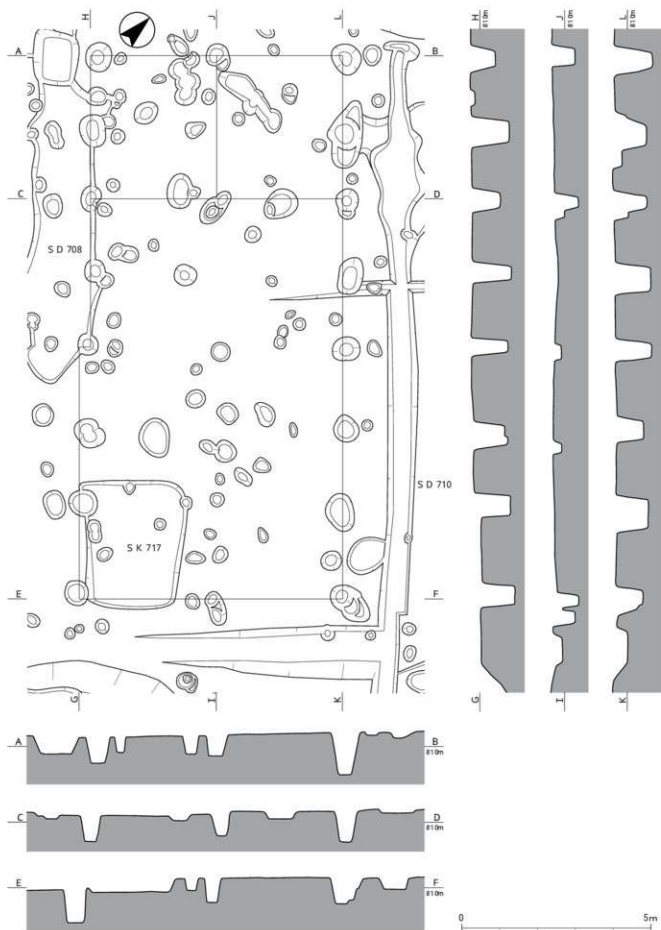
第48図 SB 715詳細図(1:50)



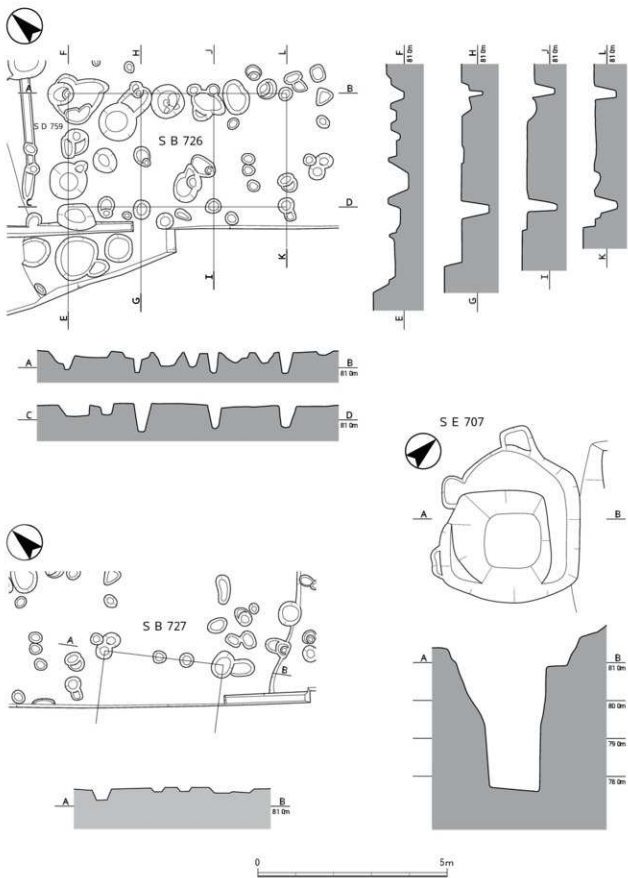
第49図 SB 721・SA 761(1 : 100)



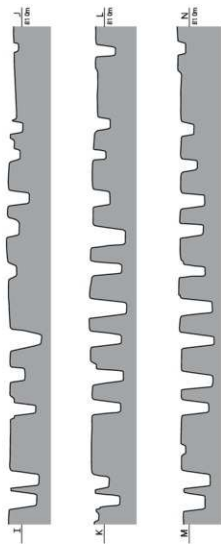
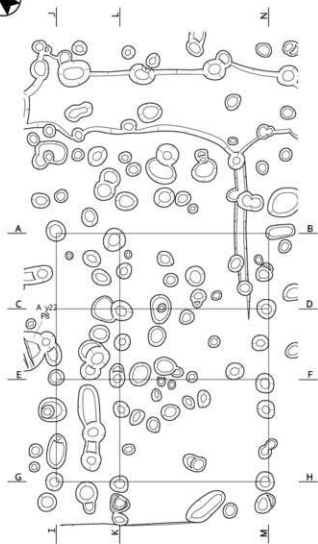
第50圖 S B 724(1 : 100)



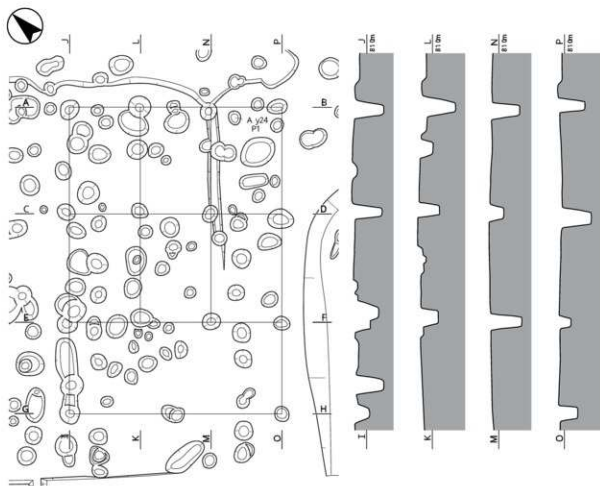
第51図 SB 725(1 : 100)



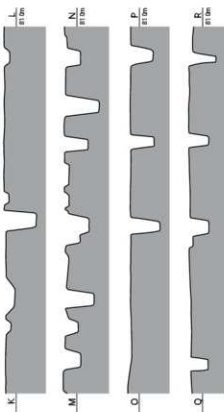
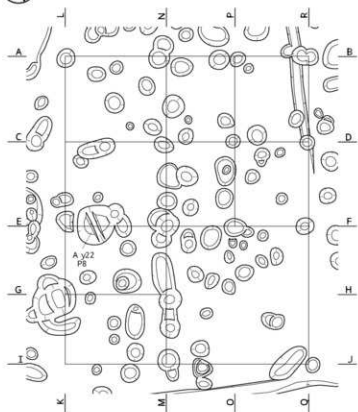
第52图 S B 726·S B 727·S E 707(1 : 100)



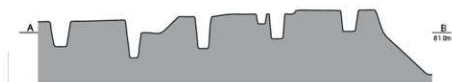
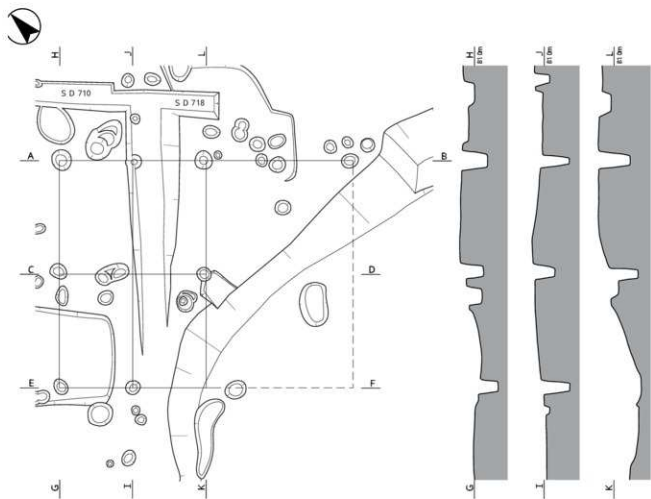
第53図 SB 750(1 : 100)



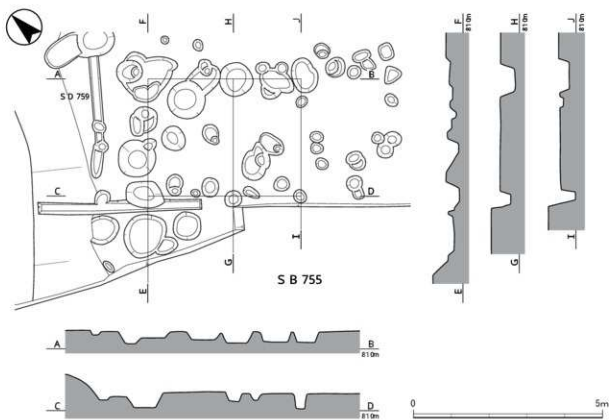
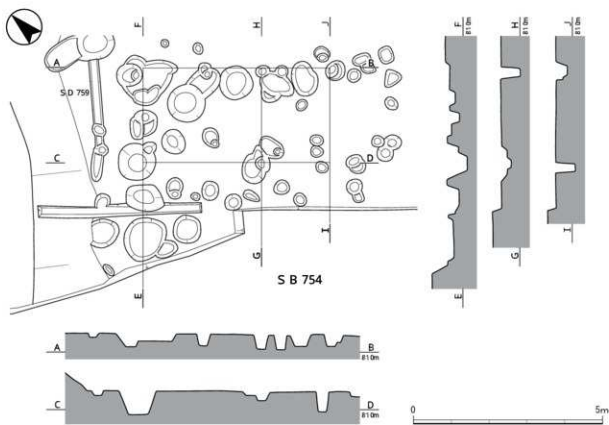
第54图 S B 751(1 : 100)



第55圖 S B 752 (1 : 100)



第56圖 SB 753(1 : 100)



第57圖 SB 754・SB 755(1 : 100)

桁行の柱間寸法は、南から242m - 212m - 212m - 197m - 197m - 179m - 197mを採用する。すなわち南側では8尺と7尺を使用し、北側4間では197m(6尺5寸)を基本としており、合計47尺4寸となる。

梁間の柱間寸法は、北辺では北側から339m(11尺2寸) - 327m(10尺8寸)で合計22尺、南辺では北側から339m(11尺2寸) - 358m(11尺8寸)で合計23尺となる。

柱穴は直径50cm以上、深さ80cm以上のものが大半を占める。建物内の柱穴が少ないことから、側柱で上屋の荷重を受け止めて、広い空間を確保しようとした意図がうかがえる。柱穴のいくつかに重複関係が確認できること、平面形が楕円形を呈するものがあることから、同じ位置で柱を据え直したことがわかる。

S B 725に関連する遺構として、建物内土坑のS K 717を確認できる。また、S D 710は、曲輪1を区画するとともに雨落ち溝としての機能が付与される。S D 708についてもS B 725に関連する雨落ち溝と考えられる。また、S B 725の桁行に沿って小さな小穴が点在する。これらについては、縁等の可能性を考慮すべきだが、確定には至らなかった。

位置関係から、S B 725とS B 753は同時に存在したとは考えにくい。S B 753に伴うS D 718を改修してS D 710が直角に折れ曲がったことから、S B 753→S B 725の先後関係をとらえることができる。

S B 726 (第52図) 桁行1間(3.03m)以上×梁間3間(5.72m)、床面積17.3㎡以上の掘立柱建物である。S B 724と平行する主軸を採る。調査区外へと建物が続くため、建物の規模は不明である。

柱間寸法は桁行3.03m(10尺)、梁間1.91m(6尺3寸)を基本とする。柱穴は直径20～40cmとやや小さく、深さ50cm程度である。

S B 726付近では、少なくとも2度の建て替えが行われた。柱穴の重複関係からS B 754→S B 726、S B 755→S B 726と判明した。

S B 726・754・755に関連する遺構として、雨落ち溝と評価できるS D 759が建物と土塁S A 701の間に確認できる。

S B 727 (第52図) S B 726の南側に位置する桁行1間以上、梁行2間(3.06m)の大きさである。

柱間寸法が5尺または5尺1寸と短小なこと、柱穴の深さが20cm程度と浅いことから、掘立柱建物以外の施設の可能性も残る。いずれにしても、遺構の大半が調査区外へと続くため、将来の調査に遺構の性格・評価を託したい。

S B 750 (第53図) S B 724とほぼ同じ位置に建てられている。桁行3間(6.55m)、梁行2間(5.61m)、床面積36.7㎡の大きさである。最も北側の柱列は柱通りが悪く、柱穴にいびつな形状のものも含まれる。また西側の桁行において柱穴が検出できなかった箇所も認められた。これらの点から、S B 750の平面形確定には困難が伴った。

桁行の柱間寸法は1.97m(6尺5寸)を基本として南側で2.61m(8尺6寸)を採用する。梁間は、南から順に3.79m(12尺5寸)、1.82m(6尺)である。南面側はS B 724と同様に概ね2間分に相当する。柱穴は直径40cm、深さ50cmを超えるものが多い。

なお、A-y22Pit 8はS B 750に近接する位置関係にある。このピットには常滑製品の大甍が3分の2を埋めるような状態で設置されていた。民家の水場付近において、家壁の外側に大甍を設置する風景が想起される。この大甍がS B 750に伴うとすれば、S B 750→S B 724の関係をとらえることができる。

S B 751 (第54図) 桁行3間(8.12m)、梁行3間(5.64m)、床面積約45.8㎡の大きさである。梁間は南辺において2間となる。

桁行の柱間寸法は、南から2.42m - 2.85m - 2.85mで、8尺 - 9尺4寸 - 9尺4寸となる。南端で異なる寸法を採用する。梁間は1.88m(6尺2寸)を採用し、南辺では2.82m(9尺3寸)となる。S B 751では南側において北側と異なる柱配置と柱間寸法を採用していること、北側が5.7m×5.64mのほぼ正方形の平面であることがわかる。

S B 751は柱穴の重複関係からS B 752に先行する。

S B 752 (第55図) 桁行4間(8.12m)、梁行3間(6.3m)、床面積約51.2㎡の大きさである。木の根に阻まれたこと等により、いくつかの柱穴が欠

落していることもあり、柱筋の通りが良好とはいえない。

桁行の柱間寸法は、南から18m-18m-223m-223mで、6尺-6尺-7尺4寸-7尺4寸を採用する。梁間も南から191m-191m-249m、6尺3寸-6尺3寸-8尺2寸を採用する。A-y22Pit 8の大変を破壊して、S B 752の柱穴が掘削されたことが遺構の重複関係から判明した。先述のS B 751との重複関係もあわせ考えると、A-y22Pit 8を伴う可能性をもつS B 750→S B 724・S B 752、ならびにS B 751→S B 752の間係をとらえることができる。

また、S B 724・750において類似した位置・柱配置・柱間寸法を採用すること、S B 750における広い柱間寸法の採用等を勘案すれば、S B 751→S B 750→S B 724→S B 752の順が想定できる。S B 753(第56図) 桁行4間(7.8m)以上×梁間2間(6.0m)、床面積46.8㎡以上の掘立柱建物である。曲輪1の虎口改修に伴って、南半が失われている。したがって、虎口の改修より前の建物といえる。なお、後述するS D 716・718の検討から、S B 753の桁行は4間にとどまる可能性が高い。

柱間寸法は桁行1.97m(6尺5寸)、梁間3.03m(10尺)を基本とする。柱穴は直径40cm前後、深さ50cm以上で構成される。また、S B 753の北側には溝S D 718が併走することから関連を想定できる。

柱穴からは時期の判明する土器類は出土しなかった。しかし、溝S D 718とS D 710の重複関係から、S B 753→S B 724の関係を把握できる。

S B 754(第57図) 桁行2間(4.97m)以上×梁間3間(4.91m)、床面積24.4㎡以上の掘立柱建物である。S B 726と同じ主軸を採る。調査区外へと建物が続くため、建物の規模は不明である。

柱間寸法は桁行2.49m(8尺2寸)、梁間1.64m(5尺4寸)を基本とする。柱穴は直径30~40cmとやや小さく、深さ30cm程度の浅いものが多い。柱筋の通りは良好とはいえない。

関連する遺構として、雨落ち溝と評価できるS D 759が建物と土塁S A 701の間に確認できる。柱穴の重複関係からS B 754→S B 726の先後関係にあ

る。

S B 755(第57図) 桁行1間(3.03m)以上×梁間2間(4m)、床面積12.1㎡以上の掘立柱建物である。S B 726と同じ主軸を採る。調査区外へと建物が続くため、建物の規模は不明である。

柱間寸法は桁行3.03m(10尺)、梁間1.82m(6尺)-2.18m(7尺2寸)を採用する。柱穴は直径30~40cm、深さ30~40cm程度と考えられる。しかし、柱抜き取り等の影響が大きく、本来の直径が不明な柱穴も多い。

関連する遺構として、雨落ち溝と評価できるS D 759が建物と土塁S A 701の間に確認できる。柱穴の重複関係からS B 755→S B 726の先後関係にある。S B 755とS B 726は類似した柱間寸法を採用していることから、S B 754→S B 755→S B 726の新古関係を想定しておく。

S A 761(第49図) 曲輪1の上位と下段を結ぶスロープと方向を揃える長さ6.0mの溝である。柱通りは良好とはいえないが、長さ6.0m、3間の溝で、柱間は一定せず、東から2.3m-1.9m-1.8mである。柱穴の大きさは、直径30~40cm、深さ50~60cmで、西端の柱穴のみ深さ10cmである。西端の柱穴は溝としてみなさないほうが適切かもしれない。

曲輪1の虎口から入ると、目の前に壁が立ち上がる。この壁から続くように溝が設置され、遮蔽の機能が期待されたと考えられる。

(4) 溝(建物などに付随するもの)

S D 703 南西-北東方向に主軸をとる長さ3.0m、幅45cm、深さ10cmのごく浅い溝である。これと同じ方向をもつ溝としてS D 758がある。この場合、曲輪1を区画する溝あるいは、建物の雨落ち溝にかかわる可能性がある。

S D 758 南西-北東方向に主軸をとる長さ2.8m、幅75cm、深さ10cmのごく浅い溝である。これと同じ方向をもつ溝としてS D 703がある。S D 703と関連した区画を意識した溝、あるいはS B 721に伴う雨落ち溝の可能性もある。遺物は出土しなかった。

S D 759 南西-北東方向に主軸をとる長さ3.2m、幅25cm、深さ10cmの溝である。出土遺物は

ないが、S B 726・754・755に伴う雨落ち溝の可能性があるので、名称を付した。

S D 706 北西-南東方向に主軸をとる長さ138m、幅70cm、深さ20cmの溝である。北端はS K 704と接する。断面は緩やかなU字形で、下端は明瞭ではない。S D 706はS D 710とともに曲輪1内を区画するための溝と考えられる。

なお、溝の深さと断面形状から、建物に伴う雨落ち溝の可能性についても配慮する必要がある。

S D 708 平面L字形を呈する溝で、長辺の主軸を北西-南東方向にとる。短辺は長辺の北西端から南西方向にのびる。長辺は長さ10.9m、幅1.6m、深さ10cm、短辺は長さ2.8m、幅2.2m、深さ10cmである。溝の断面は緩やかなU字形で、下端は明瞭ではない点から、掘立柱建物S B 725もしくはS B 724・750・751・752に伴う雨落ち溝の可能性があるので、土層断面の観察から、ごく最近まで凹地を呈していたことがわかる。

S D 710 平面L字形を呈する溝で、長辺の主軸を北西-南東方向にとる。短辺は長辺の南東端から南西方向にのびる。長辺は長さ16.8m、幅70cm、深さ20cm、短辺は長さ7.0m、幅1.4m、深さ30cmである。溝底の高さは北西端が高いことから、北西端は井戸S E 707に接するような位置から始まる。土層の観察の結果、元来、直線にのびていたが、直角に折れる形状へと改修されたことが判明した。改修前の溝部分はS D 718と呼称しておく。

溝の断面形状は、北西端付近において緩やかなU字形を呈し、下端が明瞭ではないが、南東端に向かって、次第に明瞭となる。溝底の標高は、長辺の北西端が高く、短辺の南西端が低いことから、雨水の流れが判明する。これらの点から、S B 725に伴う雨落ち溝であるとともに、明確な排水の意図がうかがえる。また、S D 706とともに曲輪1内を区画するという機能も備えていた可能性がある。

S D 711 南西-北東方向に主軸をとる長さ110m以上、幅2.5m、深さ60cmの溝で、南西端は調査区外へと続く。溝の下端が明瞭で、断面は逆台形を呈する。溝の底は、南西端において一段高く、北東端が低い。

S D 711は、当初S D 716と一体であったと考え

られる。しかし、S A 745築造およびS B 715造営による改修によってS D 716と分断されたと考えられる。S D 711の出土遺物は豊富で、古瀬戸後Ⅳ期～大窯第3・4段階の瀬戸美濃陶器が出土している。**S D 716** (第58図) 南西-北東方向に主軸をとる長さ11.6m、幅2.9m、深さ1.9mの断面方形を呈する溝である。下層の調査において検出した溝で、遺構の重複関係から、土塁S A 745・756に先行することが判明した。

溝の主軸方向、溝底の標高等から、この溝は本来、S D 711と一体で、曲輪1の北斜面へと続いていたと想定される。その後、虎口空間の改修によって、S B 715がS D 716底面よりも低い位置に建造された。これによりS D 711とS D 716は分断された。この時、S D 716は埋められ、虎口空間に面する面に拳大程度の石材を葺いたようで、その石材が1～2段程度、わずかに残る。また、S A 745・716もあわせて築かれたと考えられる。

遺物は、土師器の小皿・羽釜のほか、輸入陶磁器の染付磁器碗が出土した。

S D 718 (第58図) 北西-南東方向に主軸をとる長さ5.5m、幅75cm、深さ40cmの溝である。

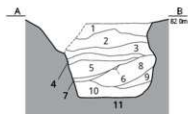
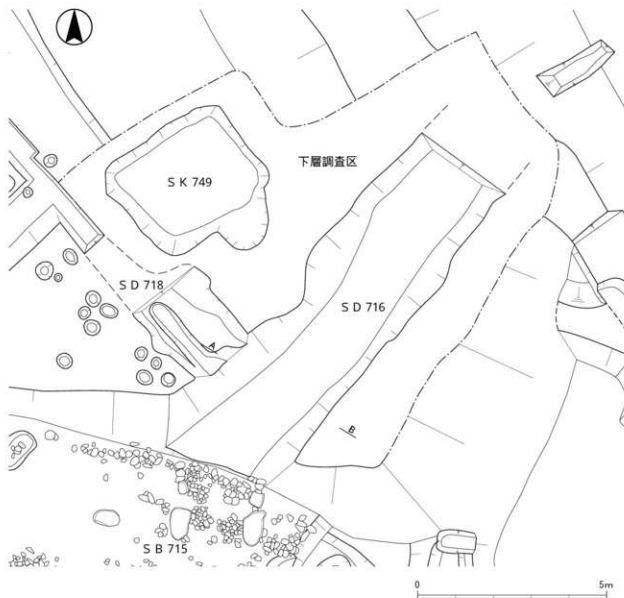
下端は明瞭で、断面は逆台形を呈する。下層の調査で検出した溝であり、土塁S A 756に先行する。土層観察の結果、S D 710は当初S D 718に接続し、直線的にのびていたが、改修によってS D 718を埋めて、L字形となったことが判明した。

なお、S D 718はS B 753と主軸が揃っていることから、曲輪1内を区画する機能とともにS B 753に関連する雨落ち溝としての機能もうかがえる。

そして、S D 718はS D 716との合流部において、1段深い。この点からS D 716が機能していた段階にS D 718が合流していたととらえることができる。この場合、S B 753は桁行4間にとどまる可能性が高くなる。

S D 720 長辺4.4m短辺3.7m、深さ10cmの溝状の遺構をさす。東隅角は長さ3.0m、幅1.9mの範囲にわたって突出しており、段状を呈する。遺物として、土師器の皿等を確認した。

S D 720の性格として、土塁S A 745・S A 756への上り口等の性格が想定できるものの、確定には



埋土 (SD 716及びSD 718)

1. 75Y R 4 6褐 細粒砂 しまりややあり 長径 15cm以下の礫を 10%含む
2. 75Y R 5 6明褐 細粒砂 しまりややあり 長径 15cm以下の礫を 29%含む
3. 75Y R 5 8明褐 細粒砂 (一部極細粒砂) しまりややあり 長径 8 cm以下の礫を 5%含む

4. 75Y R 4 6褐 極細粒砂 しまりややあり 長径 4 cm以下の礫を 5%含む

埋土 (SD 716)

5. 10Y R 4 6褐 極細粒砂-細粒砂 しまりややあり
6. 75Y R 4 6褐 極細粒砂-細粒砂 しまりややあり
7. 75Y R 5 8明褐 極細粒砂 しまりややあり 長径 8 cm以下の礫を 2%含む
8. 10Y R 4 3に赤い黄褐 細粒砂 しまりややあり 長径 1 cm以下の炭・焼土・土器を 7%含む
9. 75Y R 5 6明褐 細粒砂 しまりややあり 長径 4 cm以下の礫を 5%含む
10. 10Y R 5 3に赤い黄褐 極細粒砂 (シルト) しまりややあり 長径 2 cm以下の炭を 5%含む 土器多数含む

地山

11. 25Y 7 4浅黄 細粒砂 しまりあり 長径 20cm以下の礫を 29%含む

第58図 SD 716・SD 718・SK 749(1 : 100)

至らなかった。なお、下層を調査した結果、SK 749を検出した。

(5) 土坑

SK 702 長方形を呈する土坑で、長辺30m、短辺16m、深さ20cmである。底面は平坦で、断面は逆台形を呈する。

SK 704 SK 704は調査前から凹地を呈していた。長軸82m、短軸5.0mの不定形な楕円形を呈する。土坑の下端は不明瞭なため、底面が判然としない。不均等な凹凸を有することもあって、土坑の深さを明確にし難いが、概ね30cmとしておく。

遺物として、大窠第4段階の瀬戸美濃陶器折縁ソギ皿(4)が出土した。

遺構の性格として、当初、庭園の池等の可能性を想定した。しかし、配石等の明確な手がかりはできなかった。

なお、曲輪1北側斜面で確認された大規模な地滑りに伴う陥没の可能性もあるだろう。

SK 705(第59図) 一辺2.4m、深さ30cmの不正方形を呈する土坑である。土坑の上端・下端は緩やかである。土器類・炭の徳、ハマグリ・アカシガイなどの多量の貝殻が出土した。台所が近くにあったと推測できる。

なお、SK 705はSD 706よりも北東側に位置する。この溝より北東側では、井戸SE 707が確認できたものの、居住のための建物は確認されていない。この溝によって居住空間とそれ以外の空間に区画されていた可能性が高い。

SK 709(第59図) 長辺1.4m、短辺1.2m、深さ50cmの方形を呈する土坑である。土坑の断面は箱形であったため、墓の可能性を想定したが、明確な手がかりは得られなかった。遺構の先後関係は、SK 709→SD 708である。

SK 717(第59図) 長辺34m、短辺25m、深さ20cmの長方形を呈する。底面は平坦ではなく、中央がわずかに深い楕円状を呈する。このSK 717はSB 725の建物内の土坑といえる。土坑から土器類、炭等は出土しなかった。

SK 717は、南東隅土坑と称される土坑に該当する^①。その性格として、玄関、土間などが指摘されているが、規模と、楕円状を呈する底面形状から、

馬屋の可能性も考慮されよう^②。この場合、SB 725の間取りが中世末から近世の民家に類似することに気づく^③。SK 717の性格は、SB 725の性格や曲輪1での建物配置とその機能に関わってくるため、考察で後述したい。

SK 749(第58・59図) SD 720の下層で検出された。長辺3.6m、短辺3.0m、深さ40cmで、東辺に長さ90cmほどの突出部がみられる。土坑の上端・下端は明瞭で、底面は平坦である。埋土には炭を多く含む層を確認した。

遺物として、土師器の皿・羽釜・茶釜、瀬戸美濃陶器の天目茶碗・端反皿・楕円鉢などが出土した。その時期は大窠1～2段階とみられる。

土塁SA 745との先後関係は不明だが、SD 716・718と同時期の遺構の可能性がある。

(6) 井戸

SE 707(第52図) 井戸本体とその周りに掘り込まれた段で構成される。井戸本体は直径24m、深さ3.8m、段は長辺4.2m、短辺3.6m、深さ約40cmの方形を呈する。井戸は素掘りであり、壁面を保護するための石積等は確認されなかった。段については、水汲みの際の安全と便宜を図るために地上に設ける井桁設置に伴うものと考えられる。なお、覆屋に関連する遺構は確認できなかった。

井戸底面は、橙色を呈する礫層を突き抜けて、灰色粘土質層に到達していた。灰色粘土質地山の上端が滞水層にあたるため、この深度まで掘削したと考えられる。

ただし、調査時に井戸底からの湧水は確認できず、湧水による変色等も認められなかった。豊富な湧水だったとは考えにくく、雨水を溜めおく程度の機能だったと推測しておく。

なお、伊坂城跡において現在も滞水が確認できる井戸が調査区外に1基残されている。この井戸が主要な水源だった可能性を想定しておく。

井戸の廃絶時には、人頭大の石材を乱雑に投棄したような状況であった。掘削・土層観察には危険が伴ったため、図化等を十分に行うことができなかったことが悔やまれる。

SE 707は、調査以前から凹地をなしており、一部近世以降の出土品も一部含まれた。したがって、

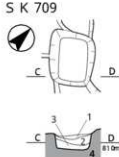
S K 705



埋土

1. 10Y R 3 3暗褐 極細粒砂 しまりややあり 長径 1 cm以下の炭を 2%含む
2. 10Y R 3 2黒褐 極細粒砂 しまりややあり 炭を 30%含む 長径 1 cm以下の炭を 2%含む 土器を 5%含む
3. 7.5Y R 4 6褐 シルト-極細粒砂 しまりややあり
- 地山
4. 7.5Y R 5 8明褐 極細粒砂(一部シルト) 長径 10cm以下の礫を 10%含む

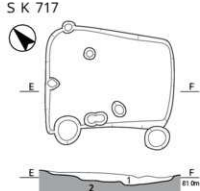
S K 709



埋土

1. 10Y R 5 4にぶい黄褐 シルト-極細粒砂 しまりなし
2. 10Y R 4 6褐 極細粒砂 しまりなし
3. 10Y R 4 4褐 極細粒砂 しまりなし
- 地山
4. 7.5Y R 5 8明褐 極細粒砂(一部シルト) 長径 10cm以下の礫を 10%含む

S K 717

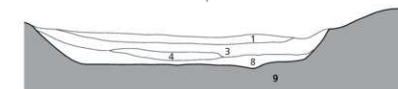
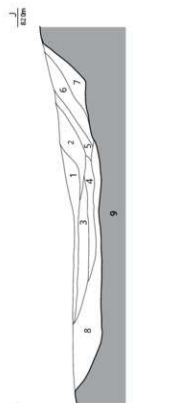
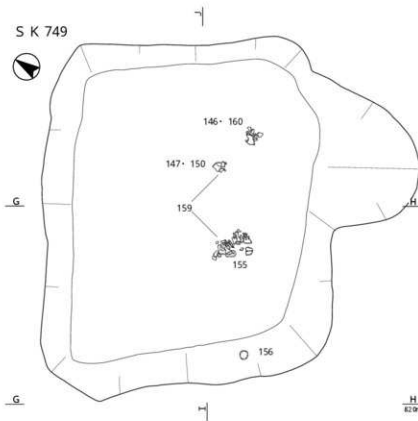


埋土

1. 10Y R 4 3にぶい黄褐 極細粒砂 しまりなし
- 地山
2. 7.5Y R 4 6褐 極細粒砂-細粒砂 しまりあり 長径 15cm以下の礫を 30%含む

0 5m

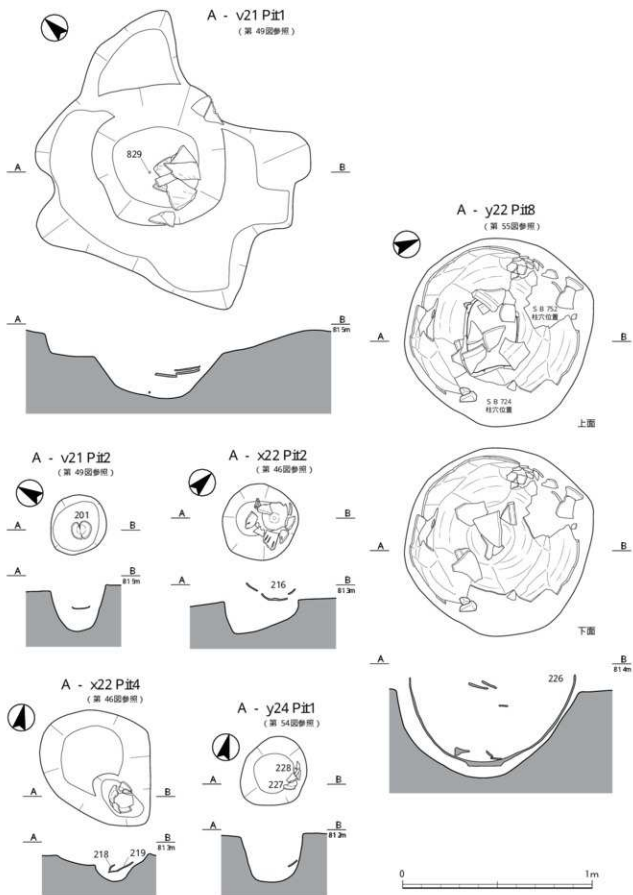
S K 749



埋土

1. 10YR4 4褐 細粒砂 しまりなし 長径 10cm以下の礫を 10%含む
2. 10YR5 6黄褐 細粒砂 しまりなし
3. 10YR3 2黒褐 細粒砂 しまりなし 長径 1 cm以下の炭を 10%含む(土器を含む)
4. 10YR3 4暗褐 細粒砂 しまりなし
5. 10YR4 4褐 細粒砂 しまりなし
6. 10YR4 6褐 極細粒砂-細粒砂
7. 7.5YR5 8明褐 細粒砂 しまりなし
8. 10YR3 3暗褐 極細粒砂 しまりなし 長径 1 cm以下の炭を 10%含む(土器を含む)
9. 7.5YR5 6明褐 細粒砂 しまりあり 長径 20cm以下の礫を 30%含む

第59図 S K 705・709・717(1:100) S K 749(1:40)



第60図 曲輪1ピット遺物出土状況図(1:20)

SE 707の埋没時期は、伊坂城廃絶後にも及ぶと考えられる。

(7) その他

S Z 712 曲輪1北隅部にあたる東西6.0m、南北1.7mの三角形を呈する部分をさす。曲輪1平坦面からの高さは40cmである。表土から銭貨のほか、アカシガイ等の貝殻が出土したため、祭祀的性格を有する可能性を考慮して遺構名を付与した。

調査の結果、段状部分は、土塁SA 701・745にみられる曲輪1側の段（曲輪1平坦面の切土形成時に残された部分）と一連のものと判断できた。

また、背面の土塁の断ち割り調査では、上部の盛土において炭等が確認できたため、銭貨・貝殻についても盛土に混入した可能性も考えられる。

(8) ビット (第60図)

A v21P 1 直径1.4mのいびつな円形を呈し、中央で1段低くなる。この低い部分で常滑製品の片口鉢とその下から火縄銃の弾1点(829)が、底面直上で銭貨(833)が出土した。

A v21P 2 直径30cm、深さ25cmで、埋土中位において土師器の小皿(201)が出土した。

A x22P 2 直径40cm、深さ15cmで、埋土上端において瀬戸美濃陶器鉢(216)が出土した。

A x22P 4 直径60cmのいびつな円形を呈するビットで、東端が1段深くなる。深い部分は長径35cm程度で、土師器の皿2点(218・219)が、内側を合わせるような状態出土した。

A y22P 8 直径1.0m、深さ50cmの穴で、常滑陶器の甕(226)が据えられた状態で出土した。SB 724とSB 752の柱穴と重複関係にあり、検出時には建物も新しいと判断していたが、重複部分の甕の破片が無いため、柱穴を掘削した際に除去されたと考えられる。

原位置を保っていたのは遺構検出面から下の壘下半部(約50cm)のみであるが、内部に落ち込んでいた上半部片が接合できた。甕の大きさは口径65.2cm、器高74.0cmである。また、鉄製品の釘(778)や棒状製品(775・776)も出土した。

A y24P 1 長径40cm、深さ25cmのややいびつな円形を呈する。埋土中位において土師器の皿(227・228)が出土した。

2 曲輪2 (第61図)

一辺約17mの略方形を呈する。北側には曲輪4を備えており、高低差は4.0mである。東側はSD 921・910、南側は城道とそれにかかる防壁施設、西側はSD 719が位置する。SD 910との高低差は約10mである。

防壁施設として土塁が四方を囲む。曲輪1に比べ規模は小さい。東側の土塁はわずかだが、これは崩落によって失われたためと判断される。土塁の外側は、切岸によって急峻な斜面となっていることが確認できた。

虎口は西側に1か所あり、堀底道SD 719へと接続する門SB 907を確認した。

平坦面内部でコマドSK 905等を確認した。

(1) 土塁

SA 929 北辺をめぐる土塁をさし、長さ18m、幅3.5m、高さ80cmである。

土塁の断ち割り調査の結果、土塁形成前に盛土によって高さを調節した整地層が確認された。また、盛土から古瀬戸後IV期新段階の瀬戸美濃陶器の天目茶碗(533)、貝殻などが出土した。

SA 930 西辺をめぐる土塁のうち、SB 907より北側の土塁をさす。長さ11.5m、幅2.3m、高さ50cmである。

SA 931 西辺をめぐる土塁のうち、SB 907より南側の土塁をさす。長さ8.0m、幅3.0m、高さ1.1mである。

SA 932 南辺をめぐる土塁をさし、長さ11.5m、幅1.3m以上、高さ50cmである。

SA 933 東辺をめぐる土塁をさし、長さ7.2m、幅1.2m、高さ20cmである。残存長がわずかな理由として、曲輪2東斜面の自然崩落によって遺失したためと考えられる。本来は、SA 929・932と一体となって曲輪2を囲っていたと想定される。

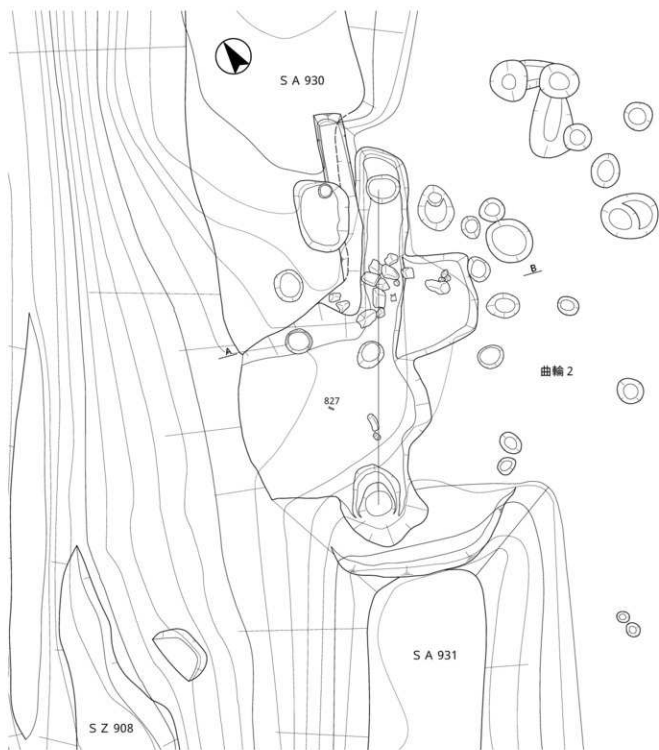
(2) 門

SB 907 (第62図) 土塁SA 930と土塁SA 931に挟まれた虎口において検出した間口1間の掘立柱建物である。柱穴2個と段で構成され、虎口で検出されたことから、門と考えた。

柱穴は直径30～40cm、深さ60～70cm程度で

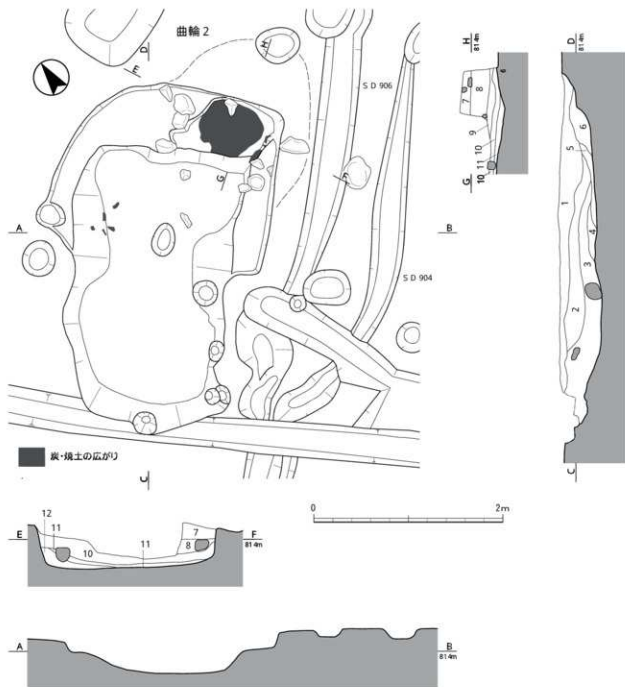


第61図 SD719-曲輪2・4-S D910・921-曲輪13・17遺構平面図(1:300)



- 表土
 1. 7SYR6 4にぶい橙 中粒砂 しまりなし
 流土
 2. 10YR4 3にぶい黄褐 細粒砂 しまりややあり
 3. 10YR7 6明黄褐 極細粒砂 しまりややあり
 4. 5YR5 6明赤褐 シルト〜極細粒砂 しまりややあり

第62図 SB 907 (1 : 40)



S K 903埋土層

1. 10Y R 4 4 褐 極細粒砂 しまりややあり
2. 10Y R 4 6 褐 極細粒砂 しまりややあり
3. 10Y R 4 3(赤)1黄褐 極細粒砂 しまりあり
4. 10Y R 5 4(赤)1黄褐 シルト-極細粒砂 しまりややあり
10. 10Y R 3 3暗褐 シルト-極細粒砂 しまりややあり
6. 7 5Y R 6 6暗 極細粒砂 しまりややあり

S K 905被熱部土層

7. 10Y R 4 6 褐 極細粒砂-細粒砂 しまりややあり
8. 10Y R 3 4暗褐 極細粒砂(一部細粒砂) しまりややあり 長径2 cm以下の焼土を10%含む
9. 10Y R 2 3暗褐 細粒砂(一部極細粒砂) しまりややあり 長径1 cm以下の炭を20%含む【炭層】
10. 10Y R 4 4 褐 極細粒砂 しまりややあり 長径1 cm以下の焼土を3%、長径1 cm以下の炭を2%含む【炭層】
11. 10Y R 3 4暗褐 極細粒砂 しまりややあり 長径1 cm以下の炭を3%、長径1 cm以下の焼土を5%含む【炭・焼土層】
12. 10Y R 4 6 褐 極細粒砂(一部細粒砂) しまりややあり

第63図 S K 905(1 : 40)

ある。柱間寸法は、柱の芯々間で3.33 m (11 尺) であることから、扉の開口は3.03 m (10 尺) を採用したと考えられる。扉の開口の規模は、曲輪1のS B 715と同規模だったことがわかる。

段は、門の手前(西側)に有する平坦面から曲輪2平坦面に至る位置において検出しており、その高さは約30cmである。また、北側の柱穴付近は、長さ1.1 m、幅55cmにわたって溝状に掘り込まれていたことを確認した。この点から、段に蹴返し等が据えられた可能性を想定しておく。

S B 907は、鏡柱と鏡柱の間に冠木を渡し、切妻造の屋根を載せた構造の棟門に復元できる。控柱が無いために不安定となるが、丹念に検出しても控柱の柱穴は検出できなかった。

出土遺物として、門に伴う可能性をもつ青銅製の飾り金具(827)が出土した。

(3) 土坑

S K 901 長辺2.6 m、短辺2.5 m、深さ30cmの方形を呈する土坑である。下端は明瞭で、断面は逆台形を呈する。

S K 902 長軸2.5 m、短軸2.4 m、深さ20cmの不定形な平面を呈する。北側でS K 903と一体となっている。形状・深さなどから、風倒木等の可能性が残る。

S K 903 長軸2.4 m、短軸1.6 m、深さ20cmの不定形な平面を呈する。南側においてS K 902と一体となっている。形状・深さなどから、風倒木等の可能性が残る。

S K 905(第63図) 長軸3.6 m、短軸2.4 m、深さ40cmの長方形を呈する。土坑北半に焼土・炭がみられ、特に東隅においては顕著に認められ、被熱した石2個も出土した。底面では、下から炭層・間層・炭層の層位が確認でき、壁面でも、ごく弱い被熱が観察できた。これらの点から、S K 905はカマドの可能性がある。

類例として、津市多気北畠氏遺跡での例があり、伊坂城跡においても近世と考えられる竈状遺構S F 315が、過去の調査で検出された¹⁰⁾。

なお、S K 905では時期の手がかりとなる明確な遺物は出土しなかった。そこで、出土した炭をもとに年代測定を行った。その結果、伊坂城に伴う可能

性が高いことが判明した。

(4) 溝

S D 904 南西-北東方向の主軸をとる長さ4.0 m、幅30cm、深さ10cmの溝である。主軸はS K 905と方向を揃える。溝の下端は不明瞭で、溝の断面は緩やかなU字形を呈する。

S K 905との位置関係や溝の深さ・形状から、カマドの簡易な覆屋の雨落ち溝と評価できる可能性がある。あくまで可能性にとどまるが、この点は指摘しておきたい。

S D 906 主軸は南西-北東方向の主軸をとる長さ3.3 m、幅40cm、深さ10cmの溝である。主軸はS K 905と方向を揃える。溝の下端は不明瞭で、溝の断面は緩やかなU字形を呈する。

S D 904と同様に雨落ち溝と評価できる可能性がある。

3 曲輪3(第46図)

用語として適切ではないが、曲輪1を囲む土塁のうち東辺を分離して、便宜的に曲輪3と呼称した。南北15 m以上、幅約9 mの範囲をさす。東側には堀底道S D 719が位置する。

簡易な礎石建物S B 713のほか、石つぶてS Z 714を確認した。なお、断ち割り調査の結果、上半を盛土、下半を地山削り出しで形成していることが判明した。

礎石建物S B 713(第64図) 南西-北東方向に主軸をとる桁行3間(4.55 m)、梁間1間(1.58 m)以上の礎石建物である。柱間寸法のうち、桁行は南から1.82 m(6尺)-0.91 m(3尺)-1.82 m(6尺)、梁間は1.58 m(5尺2寸)を採る。桁行において、中央の柱間が短小な点が特徴といえる。

礎石は、長辺30~40cm、厚さ10~20cmのごく小さな石材で、扁平な面が上面になるように据えてあった。礎石の規模から、簡易な建物だったと考えられる。これらの石材は橙色礫層地山を構成する礫に由来する。

なお、礎石が尖われているものの、S B 713の梁間は2間または3間だったと考えられる。2間の場合、建物の南側に兵士の行き来できる幅約2 mの通路的な空間を確保できる。連絡・兵士の移動・防衛

の面から、梁間を2間と推測しておく。

また、建物の軸は、曲輪1の門S B 715のそれと異なる。柱間寸法や礎石の大きさも勘案すれば、S B 713とS B 715は別の建物といえる。

石つぶてS Z 714 (第65図) 礎石建物S B 713に沿うように、多数の石がままとまっていた。その範囲は長軸8.1m、短軸2.8m、厚さ20cmで、不定形な楕円形を呈する。これらの石は、堀底道S D 719を見下ろす位置にあることから、眼下の敵に投げつけて撃退するための石つぶてと考えられる。

断面割り調査の結果、隙間なく、ぎっしり詰めたというよりも、まとめ置いた程度の密集度で、2段程度積み重なっていることが判明した。したがって、S Z 714は約3000個の石で構成されると推定できた。石はこぶし大で、400～500gの重さのものが最も多かった。しかし、長径20cm、重さ3kgを超えるものも確認できた。

石の形状は角のとれた円礫で、当地を構成する橙

色礫層地山に含まれる石と同種であった。したがって、伊坂城の築城・改修の際に不用な石をまとめて石つぶてに利用したと考えられる。

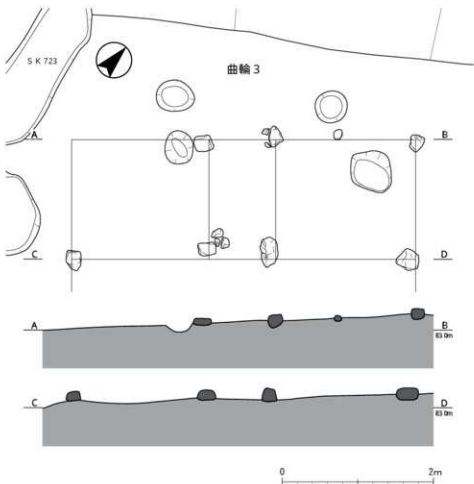
県内における類例として、津市上津部田城跡S X 4・S X 5が知られている³⁾。

土坑S K 723 長辺2.4m、短辺70cm、深さ10cmの不定形な長楕円形を呈する。遺物が出土したため、遺構番号を付したが、遺構形状・埋土から根拠乱等の可能性がある。

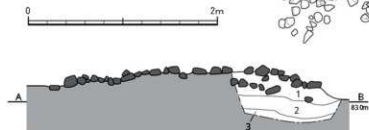
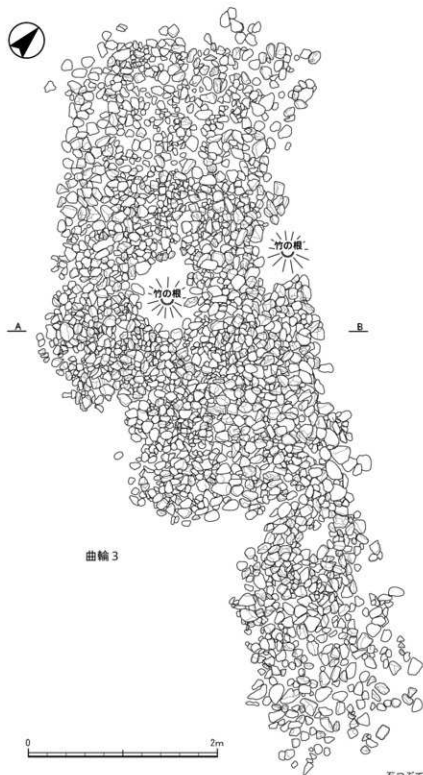
4 堀底道S D 719付近 (第66図)

曲輪1と曲輪2を分断する堀であり、かつ曲輪1への道としての機能も有する堀底道である。

S D 719の北側は、曲輪1と曲輪2の連絡路としても利用されていたとみられる土塁S A 744に突き当たる。堀の西側には曲輪1の虎口があり、東側斜面の上には曲輪2の虎口がある。曲輪2虎口までは急傾斜のため、梯子を利用するか、階段状遺構S Z

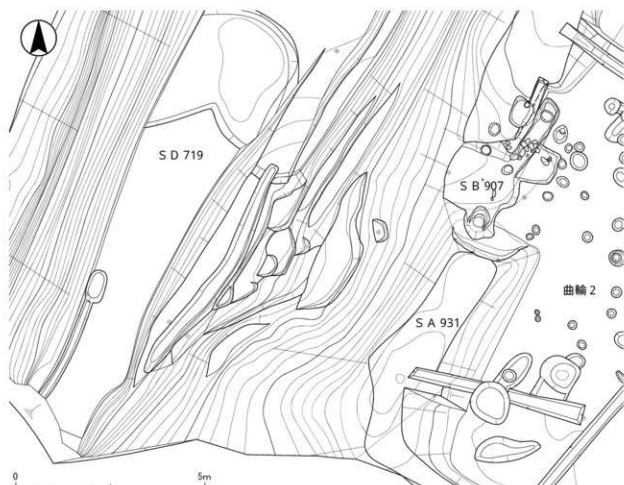


第64図 S B 713 (1 : 50)

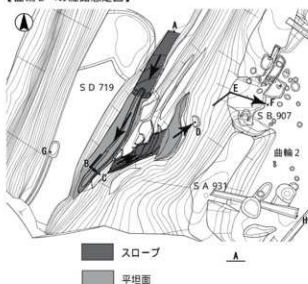


- 石つぶてを含む層
1. 10Y R 4 4 補 細粒砂(一部極細粒砂)
しまりなし
 - 曲輪3盛土
 2. 7.5Y R 5 保好層 細粒砂 しまりややあり
 3. 10Y R 4 4 補 細粒砂(一部中粒砂)
しまりややあり

第65図 S Z 714 (1 : 40)



【曲輪 2 への経路想定図】

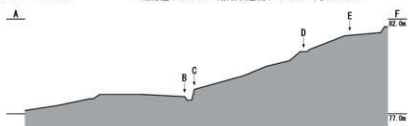


■ スロープ
 ■ 平坦面

0 10m



<堀底道 S D 719→階段状遺構 S Z 908→門 S B '907 >



第 66 図 S Z 908 (1 : 100)、曲輪 2 への経路想定図・断面図 (1 : 200)

908を介した可能性がある。

堀底道 S D 719 長さ27.2m以上、上端幅11.0m、下端最大幅4.3m、曲輪3との比高差6.1m、曲輪2の土塁 S A 931との比高差5.4m、曲輪2平坦面との比高差4.7mである。S D 719の南端は、調査区外へと続く。

なお、埋土の状況(第12図)から、少なくとも1回改修された可能性がある。当初は、標高約78mを底面として、やや東に主軸を振るものだったと想定される。この痕跡が、S Z 908の1段目、S B 715前の段(S B 715から数えて2段目)が当てはまる(第75図)。この場合、曲輪3との比高差は約5m、曲輪2平坦面との比高差は約3.7mとなる。その後、改修に伴って約1m深く掘削されたと考えられる。その際、掘削範囲がやや西に偏ったと想定される。

遺物として、常滑陶器や染付磁器の他、古代の須恵器が出土した。

土塁 S A 744 土塁であり、曲輪1と曲輪2の連絡路でもある。主軸を南東-北西方向にとる長さ約94m、後述のスロープ部まで含めた場合は長さ17.4m、下端幅4.1m、上端幅1.6m、高さ2.7mの土塁である。曲輪1との連結部は、長さ3.6m、幅1.9mのスロープ状にのびる。同じく曲輪2との連結部も、長さ4.4m、幅1.0mのスロープ状をなす。

盛土は確認されていない。地山削り出し形成には、① S A 744の高さまで曲輪1と曲輪2の間を掘削、② S A 744部分を残して、さらに深く S D 719を掘削と2段階の工程を想定でき、段階①における曲輪3との比高差は3.4m、曲輪2平坦面との比高差は約2mとなる。

曲輪1と曲輪2を結ぶ唯一の連絡路であるが、幅は1.6m未満と狭く、一度に多人数の移動は困難である。S A 744を削り残した意図を明らかにする必要がある。

溝 S D 722(第68・69図) 長さ3.9m以上、最大幅1.9m、深さ4.1mの溝状を呈する。S A 756と S A 744を流れ落ちるような形状で、やがて S D 719に到達する。当初、S A 744において溝状断面を検出した際は、S A 744を貫通し、曲輪5に到達すると想定した。しかし、貫通せずに西へ折れ曲がっ

たため、当初の想定は否定された。S D 722については性格不明としておくが、雨水等により形成された可能性もある。

遺物として瀬戸美濃陶器の播鉢や常滑陶器の甕のほか、貝殻の出土を確認した。

階段状遺構 S Z 908(第66図) 曲輪2西斜面において検出した長さ11m、幅5.3m、高低差4.2mの範囲をさす。S D 719から曲輪2に至る場合に登り口に当たる箇所、いくつかの段状遺構を検出し、まとめて S Z 908とした。

長さ3.7m、幅80cmのスロープ状の斜面から始まる。S D 719からこのスロープを南へ向かって登ると長さ6.2m、幅1.0mの平坦面に至る。そして長さ3.8m、幅1.0mのスロープを北東方向に登り、長さ3.9m、幅1.0mの平坦面に至る。さらに北東方向へ2.4m進むと、S B 907の手前にある平坦面にたどり着き、S B 907を通過して曲輪2平坦面に到着する。

幾度か改修した可能性があり、いくつかの小段はその名残りにとらえることもできる。S Z 908を階段状遺構としたものの、遺存状況に恵まれなかったため、性格の確定には至らなかった。今後の調査・類例増加によって検討されることを期待する。

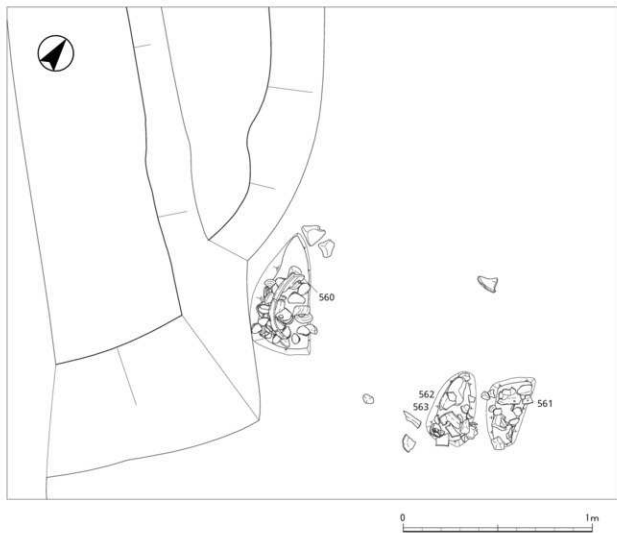
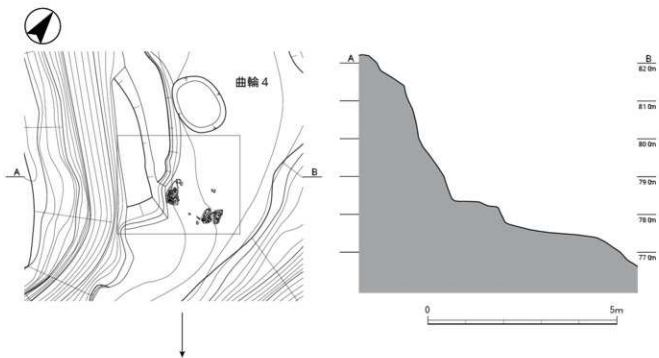
なお、時期の特定に至る遺物は出土しなかった。

5 曲輪4(第61図)

東西19.6m、最大幅5.7mで三日月状を呈する。曲輪2の北側に位置しており、高低差は約4mである。この曲輪において明確な建物は確認できなかった。出土品として、大量の貝がまとめて出土しており、これを S Z 928と呼称した。流土から出土した多くの土器は、曲輪2から廃棄されたものと思われる。

S Z 928(第67図) 1.5×1.1mの範囲で、大量の貝殻と土師器の羽釜が地山に接するように出土した箇所をさす。曲輪2斜面から曲輪4平坦地への傾斜変換地にあたり、土坑状の凹地等を示さなかった。貝殻は35.9kgもの量で、そのほとんどはハマグリである。

遺構の上方にあたる曲輪2斜面側からも大量の瀬戸美濃製品・常滑陶器が出土していることから、S Z



第67図 SZ 928(1 : 100・ 1 : 20)

928 およびその上層の遺物は、曲輪2から投棄された遺物と考えられる。なお、上層出土の瀬戸美濃陶器は古瀬戸後Ⅳ期から大濠3・4段階の時期を示す。

6 曲輪5

曲輪1の北側に位置し、長さ30m、幅5.2mの細長い形を呈する。曲輪1との高低差は3.3mである。この曲輪の西端において土塁SA737が築かれており、SD735を登る敵に対する防壁と考えられる。

SA737の下層において横堀SD736が検出された。これにより、SA737築造段階が最も新しく、前段階には、曲輪1北斜面下端の裾に横堀SD736をめぐらせていたことが判明した。また、この横堀には新旧があることから、合計3段階を設定できる。なお、曲輪5において明確な建物は確認できなかった。出土した土師器や鉄製品は、曲輪1から廃棄されたと考えられる。

土塁SA737 (第68・69図) 長さ5.1m、幅2.2m、残存高1.2mの土塁である。曲輪11を目指してSD735を登る敵兵に対して、横矢掛けを効果的に行える位置にある。横矢を射掛ける兵を守るために、土塁が築かれたと考えられる。土塁の積み方は、他地点と同様の方法による。

遺構の重複関係から、SD736を埋めて曲輪5の平坦面を造成した後、土塁SA737を形成したことがわかる。

盛土(第12層)から瀬戸美濃陶器の播鉢(466)が出土した。

堀SD736 (第68・69・75図) 長さ31.0m、幅10.0m、深さ5.1m、断面箱形を呈する堀である。堀底は北側のほうが低いことから、雨水は北流したことがわかる。土層の検討から、SD736には新古があることが判明している。SD736古は、堀の北半のみで認められる。

曲輪1をめぐる横堀として掘削されたと考えられる。その後、この堀底を攻め上るルートを遮断するためであろうか、深い堀となっていた部分をわざわざ改修して、曲輪1の斜面に接する位置に造りなおしている。さらにこの堀も埋めて平坦地としている。これには、曲輪1の改修に伴う多量の排土の処理と

も関連するのだろう。

7 堀切SD910・SD921(第61図)

伊坂城の城郭部分と屋敷地部分を分断する堀切である。もともと曲輪2の裾周りをめぐりような形状だったSD921を拡幅することによりSD910となった。

弓の飛距離に対応した防壁から、鉄砲への防壁へと転換したことが改修の要因と推察される。

堀切SD910 南西-北東方向に主軸を持つ長さ14.4m以上、上端幅14.4m、下端幅11.4m、深さ2.55mの堀切で、調査区外へとのびる。城郭として防壁の顕著な曲輪1・曲輪2と、顕著とはいえない曲輪17とを区切る重要な堀である。当初、幅の狭いSD921であったが、改修によって拡幅された結果、SD910となったと考えられる。

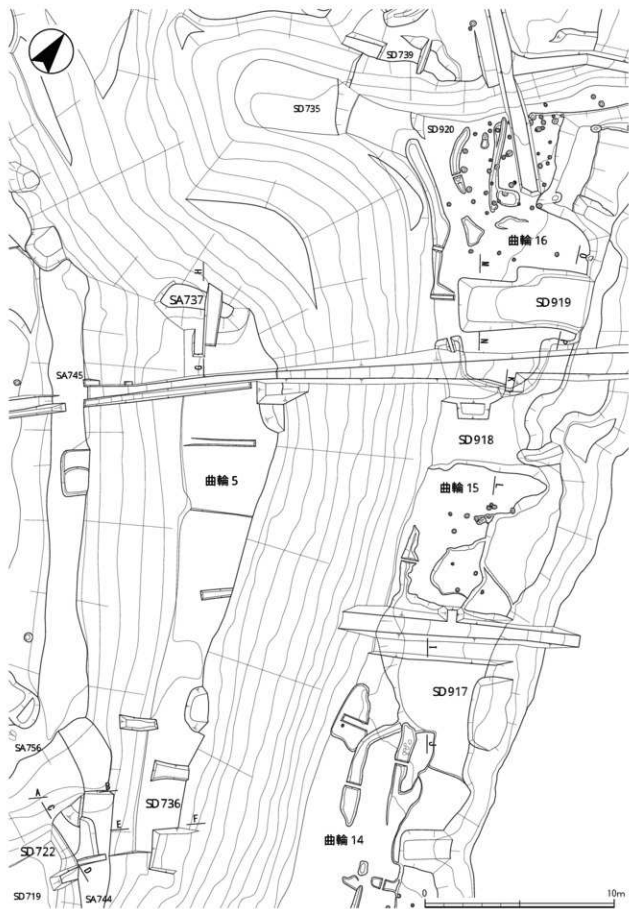
堀の下端は明瞭で、断面は逆台形を呈する。堀の底面は、南半が低く、北半において一段高くなっている。その段差は約35cmである。敵兵が城道を行って攻めてきた際、SD910南端で、道が北西方向と北東方向に分岐する。北西方向を選べば、曲輪2の南側からSD719、さらに曲輪1・2へ至る。北東方向を選べば、曲輪13～16を介して、曲輪1の背面に至る。SD910北半が1段高い理由として、背面へ回ろうとする敵兵を迎撃するための工夫だった可能性がある。

遺物として瀬戸美濃陶器や常滑陶器があるが、SD921との明確な時期差を示すような土器は確認できなかった。

堀切SD921 南西-北東方向に主軸を持つ長さ13.3m以上、下端幅3.5m、深さ1.3m以上の堀切である。同じ位置でSD910へと改修されたため、本来の上端幅・深さについては不明である。なお、SD921は曲輪2の斜面裾を巡るよう掘削されていることから、南隅角において折れ曲がり、曲輪2南側の城道と合流していた可能性がある。

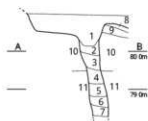
堀の下端は平坦で、断面は逆台形を呈する。下端幅から、幅の狭い堀切だったと推測される。

遺物として土師器の羽釜があるが、SD910との明確な時期差を示すものは出土しなかった。また、土層においても、SD910が機能していた段階で、



第68圖 S D 722・736・737・917・918・919平面圖 (1 : 200)

S D 722上段



埋土

1. 10Y R 5 6 黄褐 極細一級 しまりややあり 長径 15m以下の礫を7%含む
2. 10Y R 4 6 褐 細(一部細) しまりなし
3. 10Y R 4 4 褐 細(一部極細) しまりなし 長径 1m以下の礫を7%含む 貝片あり
4. 10Y R 4 3 にぶい黄褐 極細(一部細) しまりなし
5. 10Y R 5 4 にぶい黄褐 極細一級 しまりなし 長径 1m以下の土器片を2%含む
6. 10Y R 5 6 黄褐 極細一級 しまりなし
7. 10Y R 6 6 明黄褐 シルト(一部極細) しまりややあり 貝片含む

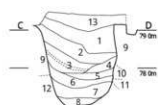
旧表土

8. 10Y R 4 6 褐 極細一級 しまりややあり

地山

9. 7SY R 5 6 明褐 極細一級 しまりややあり [風化土]
10. 5Y R 4 8 赤褐 細 しまりあり 長径 20m以下の礫を30%含む
11. 2SY 6 4 にぶい黄 細(一部中) しまりあり 長径 2m以下の礫を30%含む

S D 722下段



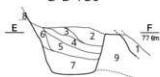
埋土

1. 10Y R 5 6 黄褐 極細一級 しまりなし 長径 15m以下の礫を5%含む
2. 10Y R 4 6 褐 細(一部中) しまりなし
3. 10Y R 4 4 褐 極細一級 しまりややあり 区分すると3つに分かれる
4. 10Y R 5 6 黄褐 極細一級 しまりなし 長径 15m以下の礫を20%含む
5. 7SY R 4 6 褐 細(一部中) しまりなし 長径 20m以下の礫を5%含む
6. 10Y R 4 4 褐 極細(一部細) しまりややあり 長径 15m以下の礫を3%含む
7. 10Y R 5 4 にぶい黄褐 極細一級 しまりなし 長径 20m以下の礫を25%含む
8. 2SY 6 3 にぶい黄 シルト しまりややあり
9. 2SY 6 4 にぶい黄 細(一部中) 長径 1m以下の礫を30%含む(黄砂)
10. 5Y R 7 4 にぶい橙 シルト(一部粘土) しまりあり
11. 10Y R 5 6 黄褐 細(一部中) しまりあり長径 2m以下の礫を25%含む(砂)
12. 10Y R 8 4 淡黄橙シルト(一部粘土) しまりあり

流土

13. 10Y R 4 6 褐 極細一級 しまりなし 長径 8m以下の礫を7%含む

S D 736



表土

1. 記なし

埋土

2. 7SY R 5 6 明褐 細 しまりなし 長径 1m以下の礫を10%含む
3. 10Y R 4 6 褐 細(一部極細) しまりなし
4. 10Y R 4 4 褐 極細一級 しまりややあり 長径 8m以下の礫を5%含む
5. 7SY R 4 6 褐 細(一部中) しまりなし 長径 2m以下の礫を15%含む(黄砂地山由来)
6. 7SY R 7 6 橙 シルト(一部粘土) しまりややあり(地山9層由来)
7. 10Y R 4 6 褐 細(一部中) しまりなし 長径 2m以下の礫を20%含む黄砂地山由来

地山

8. 10Y R 5 8 黄褐 細(一部中) しまりあり 長径 2m以下の礫を30%含む(黄砂)
9. 10Y R 8 4 淡黄褐 シルト(一部粘土) しまりあり



S A 737



表土

1. 7SY R 2 2 黒褐 中粒砂 しまりなし

流土

2. 10Y R 5 6 黄褐 極細一級 しまりなし
3. 10Y R 5 8 黄褐 極細一級 しまりややあり
4. 7SY R 5 8 明褐 極細一級 しまりややあり
5. 10Y R 4 6 褐 極細一級 しまりややあり
6. 7SY R 5 6 明褐 極細(一部細) しまりややあり 長径 3m以下の地山ブロック(2SY 8 3 淡黄 シルト(一部粘土) しまりややあり)を7%含む
7. 7SY R 6 6 橙 極細(一部シルト) しまりややあり
8. 10Y R 5 6 黄褐 極細一級 しまりややあり 長径 4m以下の礫を5%含む
9. 10Y R 6 6 明黄褐 シルト一級細 しまりややあり(灰色粘土の風化土由来)
10. 10Y R 4 4 褐 極細一級 しまりややあり
11. 10Y R 6 6 明黄褐 シルト一級細 しまりややあり(9層と似ている)
12. 7SY R 5 6 明褐 極細 しまりややあり(瀬戸美濃陶器器鉢 466出土)
13. 10Y R 6 6 明黄褐 シルト一級細 しまりややあり
14. 7SY R 4 6 褐 極細 しまりややあり

第69図 S D 722・736・737土層図(1:100)

S D 921 部分が埋没していたかどうかは明確にできなかった。したがって、S D 910 段階においても S D 921 部分が1段階低くなっていた可能性は残る点に留意しておく。

8 曲輪6 (第71図)

東西17.8m、南北13.4mの平坦面である。南側を地山削り出しによって形成しており、北側は排土を利用することで造成している。隣接する曲輪8も同様の工法であることから、曲輪6・8は一連の造成であろう。

北端には土橋 S A 743 があり、第5次調査西区にも続くが、自然地形の谷を渡ると城域外となる。ほかに、本来 S A 743 と一連の遺構と考えられる S A 741 や、後世の改変に伴うとみられる S A 757、ピット数基を確認した。

土橋 S A 743 長さ29.4m、幅8.0m、残存高1.6mの土橋状遺構である。東西方向の断ち割りを行い、旧表土を確認したことから、この尾根状の高ま

りは盛土により造成されたことを確認した。盛土は木や竹の根の擾乱が著しいが、明らかな版築や固くしまった様子は確認できなかった。遺構の重複関係として、S A 743→曲輪6平坦面形成の順が判明している。

なお、旧表土から古代の土師器杯(683)が出土したことから、古代の集落がこの付近まで広がっていたと考えられる。

土塁 S A 741 長さ6.5m、幅1.9m、残存高60cmである。断ち割り調査によって、S A 741 は本来、土橋 S A 743 であったが、赤道にともなう改変によって現状を呈するようになったと考えられる。

土塁 S A 757 長さ12.7m、幅1.2m、残存高20cmである。この土塁状遺構は、植林地で観察されたことから、後世の改変に伴うものと判断しておく。なお、S A 757 と曲輪6平坦面との間に溝はみられなかった。

S D 917



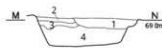
流土

1. 2.5Y 6 4 にぶい黄 シルト-極細粒砂 しまりよし
2. 2.5Y 7 3 浅黄 シルト しまりよし
3. 2.5Y 6 3 にぶい黄 シルト-極細粒砂 ややしまり

地山

4. 2.5Y 6 2 浅黄粘土 しまりあり
5. 2.5Y 7 4 シルト しまりややあり

S D 919



流土

1. 2.5Y 5 6 黄褐 シルト しまりよし 径3-5mの地山ブロック約9%まじる
2. 2.5Y 6 4 にぶい黄 シルト-極細粒砂 ややしまりあり
3. 2.5Y 6 3 にぶい黄 シルト-極細粒砂 ややしまりあり 径3-5mの地山ブロック多数まじる(7%)
4. 2.5Y 7 2 灰黄 シルト しまりあり 径30m大の地山ブロック多数まじる

地山

5. 2.5Y 7 4 浅黄 シルト しまりあり



S D 918



流土

1. 2.5Y 6 4 にぶい黄 シルト-極細粒砂 しまりあり
2. 10Y R 5 8 黄褐 細粒砂 しまりあり
3. 2.5Y 7 3 シルト-極細 しみりあり
4. 2.5Y 6 3 細-極細 ややしまりあり
5. 2.5Y 6 4 にぶい黄 シルト-極細粒砂
6. 2.5Y 7 4 浅黄 シルト しまりあり

S D 919



流土

1. 10Y R 5 6 黄褐 極細砂-細粒砂 ややしまりあり
2. 2.5Y 6 3 にぶい黄 シルト-極細粒砂 ややしまりあり 径3-5mの地山ブロックまじる(7-10%)
3. 2.5Y 7 2 灰黄 シルト ややしまりあり 径20-30m大の地山ブロック多数まじる
4. 10Y R 5 8 黄褐 細粒砂 ややしまりあり
5. 2.5Y 7 3 浅黄 シルト-極細粒砂 しまりあり

地山

6. 2.5Y 7 4 浅黄 シルト しまりあり

第70図 S D 917・918・919土層図(1:100)



第71図 曲輪6・7・8・9・10・11・12遺構平面図(1:300)

9 曲輪7 (第71図)

曲輪1の北西隅の下に位置する曲輪で、東西約24m、幅約6m、曲輪1との高低差は約3.9mである。平坦面から明確な遺構は確認できなかった。

断ち割り調査の結果、曲輪7は地滑りによる崩落土であることが判明した。曲輪1の西北部分の土塁が半分ほど地滑りをおこし、その崩落土をそのまま曲輪として取り込んだと考えられる。こうした事情からか、切岸で防御を固めた他斜面と対照的に、曲輪7の北斜面は傾斜が緩い。

なお、この地滑りは曲輪7から南西へ犬走り状にのびる部分に及ぶ。おおむね南西-北東方向で約33m、北西-南東方向で約20mの範囲が該当する。

下層調査で地滑り以前の溝を確認した(西区下層A・B・C地区:第75図)。

溝SD 746 (第72図) 地滑り層より下層で検出された長さ4.8m以上、幅90cm、深さ70cmの溝で、調査区外へ続く。溝の主軸は南西-北東であり、曲輪1北西斜面を流れ落ちる雨水とは直交方向にあたる。溝は曲輪1北西斜面下端部に位置しており、斜面を流れ落ちた雨水によって形成された可能性がある。

遺物として、溝の底面から5~10cm高い位置で瀬戸美濃陶器の端反皿(611~613)が出土した。これらは大窯1段階に相当する。これにより、地滑りが発生した時期を大窯1段階以降に示すことができる。

溝SD 747 (第73・74図) 曲輪7の下層調査において検出された溝をさす。L字形を呈し、南西-北東方向に主軸をもつ長辺は、長さ13.8m、幅3.1m、深さ25cmである。北隅から南西方向へ折れ曲がった短辺は、長さ6.4m、幅2.3mである。

長辺の南東端からは、長さ12.1m、幅1.4mの流路が延びておりSD 735へと至る。この部分は形状等から切岸や斜面の裾に形成される自然流路と判断した。この自然流路によりSD 747と周辺の排水機能が確保されたと考えられる。

遺物は、土師器の皿・羽釜などが出土した。

10 曲輪8 (第71図)

南西-北東方向の長さ約17m、幅約12mの大きさで、曲輪6の南西に位置する。築成方法は曲輪6と同様に南側は地山削り出し、北側は盛土による。時期が明確でない土塁状遺構がある。

土塁SA 742 長さ12.2m、幅1.4m、残存高40cmである。この土塁状遺構は、植林地で観察されたことから、後世の改変に伴うものと判断しておく。

11 堀切SD 733

曲輪6・8・11と曲輪1・7を分断する横堀で、堀切の機能を有する。

当初、この堀切より北側は城域外であったが、城の改修に伴って城域が拡大し、北側に曲輪6・8・11が形成されたため、横堀としては不自然な位置にある。

堀切SD 733 南西-北東方向に主軸をもつ長さ21.5m、下端幅7.1m、深さ50cmの堀切である。堀切の下端は明瞭で、断面逆台形を呈する。北端で矩形に折れて、南東方向にのびるが、曲輪11との高低差がほとんど無いため、両者の区分は不明瞭となる。SA 738付近においてわずかに堀切状の断面形状を示す。この点をふまえれば、北西-南東方向の長さは約31mとなる。土師器羽釜や常滑陶器片口鉢が出土した。

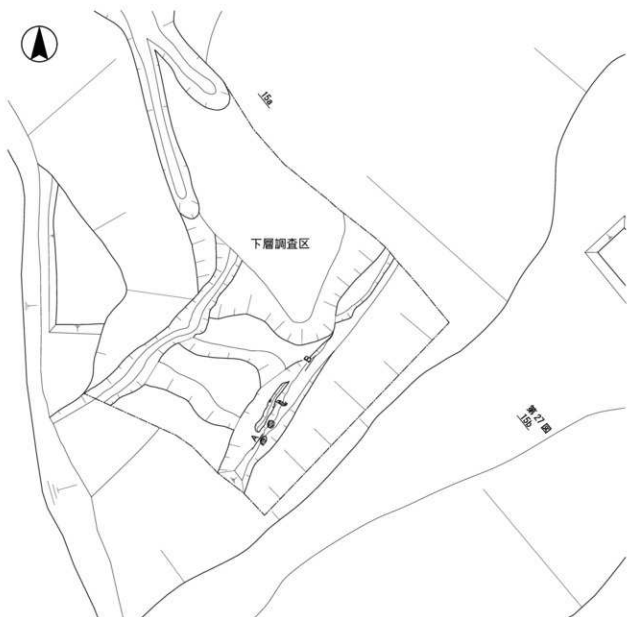
なお、地滑りによって生まれた曲輪7の下層にはSD 747がSD 733と同様に巡る。SD 733は、地滑り後の改修によって形成された堀切といえる。

SD 733はSD 910と同様の機能を備えた堀切で、城郭として防御の顕著な曲輪1・曲輪2と、顕著ではない曲輪6・8・11とを区切ったと考えられる。

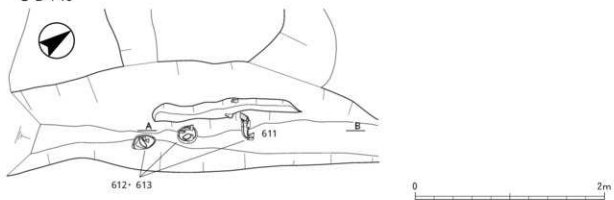
12 曲輪9 (第71図)

南西-北東方向の長さ9.3m、奥行13.5mの平坦面をさす。SD 733から一段下がった位置にある。明確な掘削を確認できなかったため、ひとまず曲輪9と称しておくが、曲輪9と北西方向に続く凹地・段を一連のものともみなして、堅堀と評価することもできる。

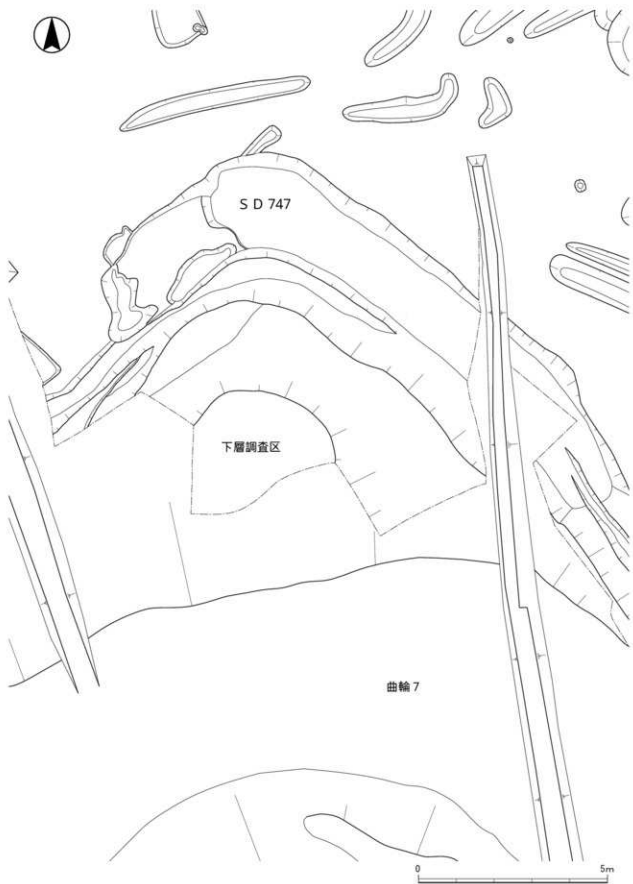
溝SD 730 東南東-西北西方向に主軸をもつ長



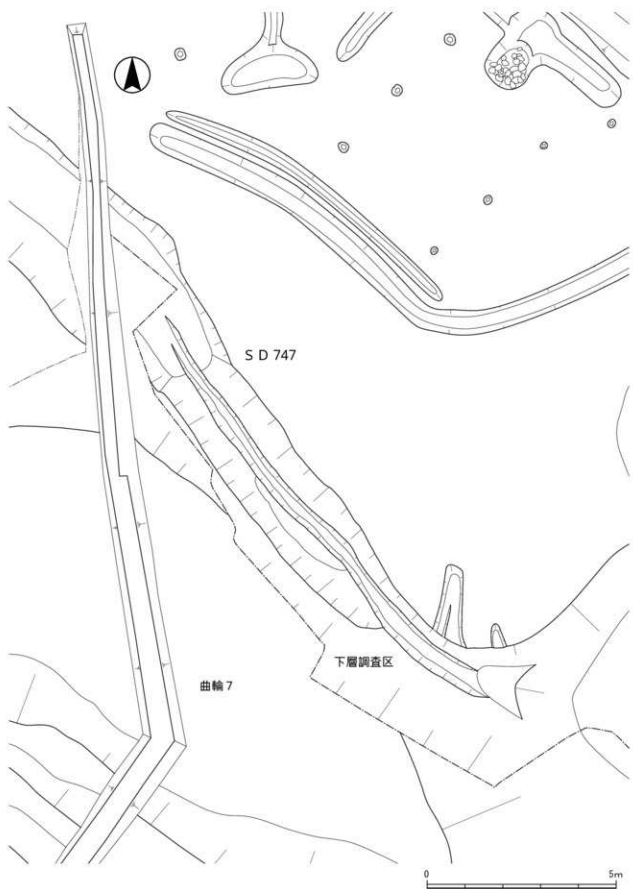
S D 746



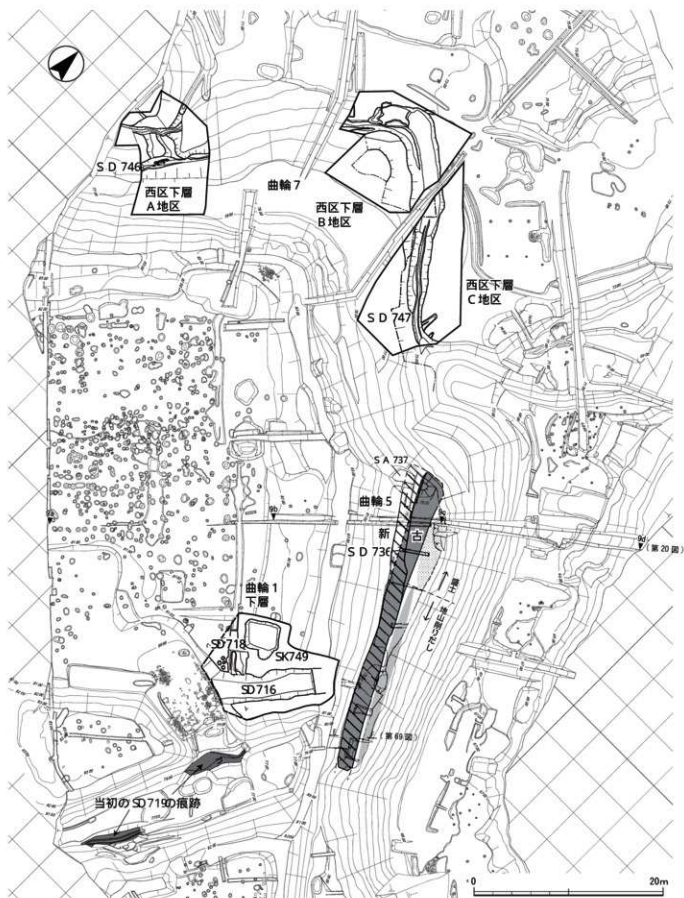
第72図 第6次西区下層A地区(1:100)・S D 746遺物出土状況図(1:40)



第73図 第6次西区下層B地区(1:100)



第74図 第6次西区下層C地区(1:100)



第75図 当初の姿や改修に関する痕跡 (1 : 400)

さ7.6m以上、幅1.5m、深さ20cmの溝で、調査区外へのびる。曲輪9からのびる堅堀とは異なる主軸をもつ。

この溝からは、近世の鬼瓦の一部(667)が出土した。この点から、雨水によって生じた小さな流路の可能性がある。SD 730については、防御施設として積極的に評価することは控えておきたい。なお、SD 730から北へ約2mに位置する同方向の溝についても同様の評価を与えておく。

13 曲輪 10 (第71図)

曲輪9の南西に位置し、1段上がった位置にある平坦地をさし、その高低差は約3mである。大半が調査区外であり、南西-北東方向の長さ3.2m、奥行約8mのわずかな範囲を調査した。西端に土塁状遺構SA 760を確認した。

土塁 SA 760 大半が調査区外にある土塁。断ち割ったため平面図には反映していないが、調査区の端で長さ40cmほどを調査した。このような土塁状遺構は、近隣の植林地で観察されたことから、後世

の改変に伴うものと判断しておく。

14 曲輪 11 (第71図)

南西-北東方向の長さ約24m、幅約16mで、SA 743の直下に位置する。なお、南端でSD 733と隣接する箇所は、明確な段が認められなかったため、SD 733の範囲まで含めた長さを示している。

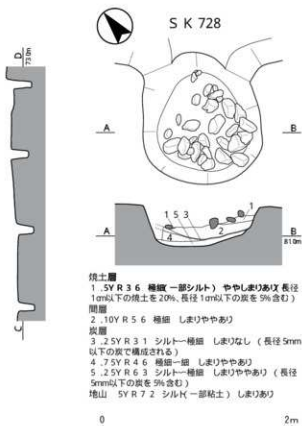
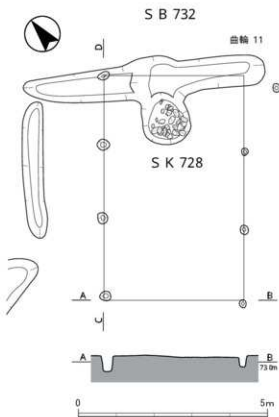
平坦面の南西側は地山削り出し、北東側は盛土による造成で平坦面を形成する。

遺構として、掘立柱建物SB 732とその建物内のカマドSK 728等を確認した。合戦時など非常に兵士が詰める場所といった曲輪の機能を考えるうえで注目に値する。

なお、曲輪東端に巡る土塁状遺構のSA 740・溝SD 748は、後世の改変と考えるべき。

(1) 土塁

SA 738 南南西-北北東に主軸をもつ長さ8.4m、幅2.8m、残存高75cmの土塁である。断ち割り調査の結果、地山削り出しによって形成されていることが判明した。



- 積土層**
1. 5Y R 3 6 極細(一部シルト) やしまりあり(長径1cm以下の積土を20%、長径1cm以下の炭を5%含む)
- 間層**
2. 10Y R 5 6 極細 しまりやあり
- 炭層**
3. 2.5Y R 3 1 シルト-極細 しまりなし(長径5mm以下の炭で構成される)
 4. 7.5Y R 4 6 極細-細 しまりやあり
 5. 2.5Y R 6 3 シルト-極細 しまりやあり(長径5mm以下の炭を5%含む)
- 地山** 5Y R 7 2 シルト(一部粘土) しまりあり

第76図 S B 732(1:100)・S K 728(1:40)

S A 740 S A 738と同方向に主軸をもつ長さ11.6m、幅1.9m、残存高10cmの土塁状遺構である。曲輪11平坦面側には、S D 748がS A 740に随走する。S A 740は植林地で観察されたことから、後世の改変に伴うものと判断しておく。

(2) 掘立柱建物

S B 732 (第76図) 桁行3間(5.79m)、梁間1間(3.7m)、床面積約21.4㎡の掘立柱建物である。桁行の柱間寸法は、南から1.97m-1.97m-1.85m、6尺5寸-6尺5寸-6尺1寸を採用する。梁間は3.7m(12尺2寸)である。

建物内の土坑S K 728には被熱した石材・焼土・炭が多く含まれていたため、台所あるいは風呂などの機能が考えられる。建物北側の曲輪11斜面に貝殻等が出土したことから、S B 732を台所とらえておきたい。合戦等の非常時において兵士は城に集まるが、その際に曲輪11等に駐屯したと想定される。S B 732はこれらの兵士たちに配食したのであろう。

時期については、炭の年代測定から伊坂城跡の時期に含まれる可能性が高い。

(3) 土坑

S K 728 (第76図) 直径1.2~1.3m、深さ35cmの略円形を呈する土坑である。掘立柱建物S B 732内の土坑で、被熱した石材・焼土・炭が多く含まれていたことから、カマドであったと考えられる。炭の年代測定から伊坂城跡の時期に含まれる可能性が高い。

S K 729 長軸1.6m、短軸80cm、深さ15cmの楕円形の土坑である。曲輪11の造成土を基盤としていることから、曲輪11平坦面形成後の遺構であることがわかる。

S K 731 長辺3.7m、短辺2.4m、深さ10cmの隅丸方形を呈する土坑である。曲輪11の造成土を基盤としていることから、曲輪11平坦面形成後の遺構であることがわかる。遺物として土師器の羽釜を確認した。

(4) 溝

S D 748 長さ11.0m、幅90cm、深さ30cmの溝で、S A 740に随走する。植林地際して平坦地の縁に排水・排湿等の機能を期待して掘削された可

能性が考えられる。なお、この際の排水を溝の外側に積み上げた結果、S A 740となったと判断しておく。

また、S D 748およびS A 740は、一連となって曲輪11平坦面における土壌の流出を防ぐことを目的とした可能性がある。

15 曲輪12(第71図)

南西-北東方向の長さ約18.2m、奥行約8mの平坦地で、曲輪11より1段下がった場所に位置する。その高低差は約3.1mである。曲輪11と同様に南西側は地山削り出し、北東側は盛土による造成によって平坦面を形成する。曲輪6・8・11と一連の土木工事によって形成されたといえよう。

遺構として、S D 735に対面する位置に土塁S A 739のほか、S D 734を確認した。S A 739は地山削り出しによるもので、S D 735を登る敵兵に対する防壁施設と考えられる。

土塁S A 739 長さ6.5m、幅2.1m、高さ70cmの土塁で、S D 735と同じ方向に主軸をとる。S D 735を攻め登る敵兵に対して、横矢を効かせる機能が期待されたと推測される。

断ち割り調査の結果、S A 739は地山削り出し形成であることが判明した。S A 739は、S D 735を掘削した際に、削り残された高まりで、結果として土塁として機能したと考えられる。

流路S D 734 南西-北東方向に主軸をもつ長さ13.6m、幅1.3m、深さ80cmの流路である。曲輪12の造成面に形成されていることから、平坦面造成後の流路と判断できる。S D 734の南端は、流路下端が不明瞭で断面も緩やかなU字形を呈する。また、S D 734よりも高い位置にある曲輪11斜面とも方向が揃わないため、両者の連動性も低い。これらの点から、雨水等によって形成された可能性を考慮しておく。

16 曲輪13(第61図)

S D 910から一段下った位置に形成された平坦面で、その高低差は約3.2mである。南北に長い形状で、長さ約28m、奥行約12mである。

成形方法は地山削り出しで、曲輪2・4の切岸を

急斜面に仕上げ、切岸下にできた平坦面を曲輪として取り込んだと考えられる。

遺構として、SK 913～915を検出した。城館内で検出されることの多い堅穴遺構を想起させるが、性格については第7章で詳述したい。

(1) 土坑(堅穴遺構?)

SK 913 (第77図) 長辺4.8m、短辺2.9m、深さ30cmの不定形な長方形を呈する土坑である。遺構の下端は比較的明瞭で、断面は逆台形を呈する。内部にはいくつかの段が確認できる。まず南半において、長辺2.3m、短辺1.9m、深さ30cmの長方形部に、長辺1.0m、短辺80cm、深さ20cmの張り出し部が東側に取り付け箇所が確認できる。北半では、長辺1.8m、短辺1.6m、深さ30cmの方形部に、長辺1.0m、短辺60cm、深さ20cmの張り出し部が北側に取り付け。これら2つのまとまりは、曲輪13平坦面から、段(張り出し部)を介して底面に至ったと考えられる。床面など内部に明確な柱穴は確認できなかった。

埋土は、灰褐色系の上層と灰色系の下層にわかれる。遺物は出土しなかった。

SK 914 (第77図) 長辺2.8m、短辺2.5m、深さ50cmのややいびつな方形部分に、一辺1.0m、深さ5cmの張り出し部が付く。張り出し部は、方形部分の南西隅部に、方形部と斜交する主軸で取り付く。遺構の下端は比較的明瞭で、断面は逆台形を呈する。曲輪13平坦面から、段(張り出し部)を介してSK 915の底面に至ったと考えられる。内部に明確な柱穴は確認できなかった。

埋土は、灰褐色系の上層と灰色系の下層にわかれる。遺物は出土しなかった。

SK 915 (第77図) 長辺2.4m、短辺2.0m、深さ30cmの方形部分に、一辺90cm、深さ25cmの張り出し部が付くため、全体として長辺3.3m、短辺2.0m、深さ30cmの大きさとなる。遺構の下端は比較的明瞭で、断面は逆台形を呈する。内部に明確な柱穴は確認できなかった。

埋土は、灰褐色系の上層と灰色系砂質土の下層にわかれる。遺物は出土しなかった。

(2) 柵

SA 923 3間(6.3m)の柵である。それぞれ

の柱間は、北から2.0m・1.95m・2.35mと揃っていない。柱穴は直径30cm程度、深さは概ね40cm程度である。灰色粘土質地山に由来する埋土で構成され、遺物は出土しなかった。

SA 924 2間(2.7m)の柵である。柱間は、北から1.45m・1.25mである。柱穴は直径20～30cm、深さは10～50cmと揃っていない。灰色粘土質地山に由来する埋土で構成され、遺物は出土しなかった。

SA 925 2間(3.8m)の柵である。柱間は、北から1.9m・1.9mである。柱穴は直径20～40cm、深さは25～40cmである。灰色粘土質地山に由来する埋土で構成され、遺物は出土しなかった。

SA 926 3間(5.65m)の柵である。柱間は、北から1.6m・1.75m・2.3mと揃っていない。柱穴は直径30cm程度、深さは10～45cmと揃わない。灰色粘土質地山に由来する埋土で構成され、遺物は出土しなかった。SK 913との先後関係は明確ではない。

SA 927 2間(4.0m)の柵である。柱間は、北から1.9m・2.1mである。柱穴は直径30cm程度、深さは10～65cmと揃わない。灰色粘土質地山に由来する埋土で構成され、遺物は出土しなかった。SK 913との先後関係は明確ではない。

(3) 溝

SD 922 曲輪13と曲輪14を画する溝状の落ち込みをさす。南東―北西方向を長軸として、長さ10.4m、幅5.1mの範囲に及ぶ。3段程度の段をもち、高低差は1.3mである。遺構の下端は不明瞭で、明確な意図をもって形成した可能性は低い。

その形状から、雨水の作用によって生じた流路の可能性が高い。

17 曲輪14(第78図)

曲輪4・5の東下方にあり、曲輪13の北側に位置する平坦面をさす。曲輪13の方が1段高く、その差は80cmであり、その間はSD 922で区切られる。

南北に細長い形状で、長さ約26m、奥行約9.5mである。成形方法は曲輪13と同じく地山削り出しで、曲輪2・4の切岸を急斜面に仕上げ、切岸下

にできた平坦面を曲輪として取り込んだと考えられる。

なお、平坦面から谷側にかけての斜面には明確な加工痕跡は認められなかったため、自然地形と判断した。

切岸の直下では、斜面に直交するように幅40cm以下、深さ40cm以下の溝がしばしば観察できた。

これは、斜面を流れ落ちる雨水によって形成された可能性が高い。S D 911・S D 912も、その形状と主軸方向から同様の性格と考えられる。

溝 S D 911 平面L字形を呈し、長辺の長さ5.4m以上、幅1.2m、深さ10cm、短辺の長さ1.1m、幅1.3m、深さ20cmの大きさである。土層観察用に残したアゼより北側に続くが、安全面を考慮して完掘を断念した。下端は不明瞭で、断面は緩やかなU字形を呈する。流路の可能性はある。

溝 S D 912 長さ3.4m以上、幅1.4m、深さ20cmの溝である。S D 912は土層観察のために残

した部分へと続くが、安全面から完掘を断念した。下端は不明瞭で、断面は緩やかなU字形を呈する。流路の可能性はある。

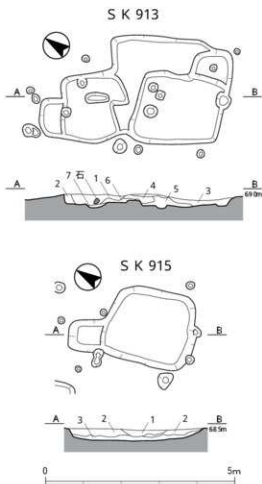
堀 S D 917 (第68・70図) 幅(南北方向)8.7m、奥行(東西方向)6.2m、深さ70cmの堀である。このS D 917によって曲輪14と曲輪15が分断される。本来は幅6.8m程度だったと想定されるが、曲輪14平坦面の流出等により、谷側の堀幅は広がる。

切岸下端裾には、斜面を流れ落ちた雨水によって形成されたと考えられる2本の自然流路がS D 917に合流しており、結果として排水機能も兼ねたと考えられる。

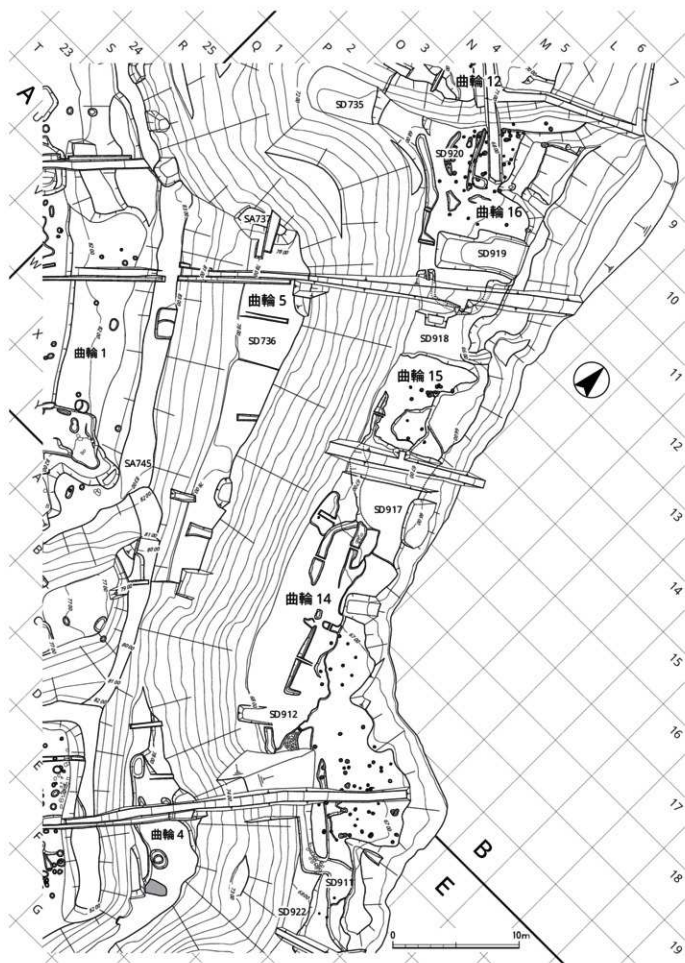
なお、S D 917は、わずか70cmの深さであり、防御施設としての機能に疑問が残る点に留意しておく。

18 曲輪 15(第78図)

曲輪5の東下方にあり、曲輪14の北側に位置す



第77図 S K 913・S K 914・S K 915(1 : 100)



第78図 曲輪14・15・16遺構平面図(1:300)

る平坦面をさす。曲輪 14 の方が 1 段高く、その差は 80cm である。なお、曲輪 14・15 の間は S D 917 で区切られる。

平坦面は南北の長さ約 7.5 m、幅約 7.5 m である。成形方法は地山削り出しで、曲輪 1・5 の切岸を急斜面に仕上げ、切岸下にできた平坦面を曲輪として取り込んだと考えられる。

堀 S D 918 (第 68・70 図) 幅 (南北方向) 4.5 m、奥行 (東西方向) 4.5 m、深さ 1.4 m の堀である。S D 918 によって曲輪 15 と曲輪 16 が分断される。谷側は複数の段が形成されているが、雨水等による形成と考えられるため、S D 918 に関連する遺構には含めなかった。

切岸下端部には、斜面を流れ落ちた雨水によって形成されたと考えられる 1 本の自然流路が S D 918 に合流しており、結果として排水機能も兼ねたと考えられる。

19 曲輪 16 (第 78 図)

曲輪 5 の東下方にあり、曲輪 15 の北側に位置する平坦面をさす。曲輪 16 の方が 1 段高く、その差は 50cm である。なお、曲輪 15・16 の間は S D 918 で区切られる。

平坦面は南北の長さ 12.5 m、幅 9.0 m である。成形方法は地山削り出しで、曲輪 1・5 の切岸を急斜面に仕上げ、切岸下にできた平坦面を曲輪として取り込んだと考えられる。

北西隅において堅堀 S D 735 に接続する。

堅堀 S D 735 東北東-西南西に主軸をもつ堅堀で、上端での長さ 12.4 m、下端での長さ 9.4 m、上端での幅 9.0 m、下端での幅 3.1 m、曲輪 11 平坦面からの深さ 4.6 m の大きさである。下端は明瞭で、断面は逆台形を呈する。堀底の奥側は 1 段高くなっており、段差は 70cm 以上である。

曲輪 13～16 を進んできた敵兵は、曲輪 11 にたどり着くために、S D 735 の堀底を登らなければならない。その高低差は 2.7 m 以上であり、明確な昇降施設は確認できなかった。平時は梯子等を使用していた、あるいは雨水等によって既に遺失していたと想定しておく。

堀 S D 919 (第 68・70 図) 南西-北東方向に主

軸をもつ長さ 8.5 m、幅 3.1 m、深さ 80cm の堀である。堀は傾斜地に立地しており、東西端の高低差は約 1 m である。

堀の下端は明瞭で、断面は逆台形を呈する。底は、奥側が 1 段高くなっており、段差は約 60cm である。

S D 919 は曲輪 15 から曲輪 16 への進行方向に対して直交するように設けられている。この点から、侵攻を妨げる堀としての機能を備えていたといえる。

溝 S D 920 弧状を呈する長さ 3.5 m、幅 50cm、深さ 10cm の溝である。溝下端はやや不明瞭である。
(高松)

20 曲輪 17 (第 61・79 図：概報では曲輪 A)

曲輪 2 の東方にあり、堀切 S D 910・921 により隔てられる。南北約 30 m、東西最大約 12 m の曲輪が想定される平坦地であるが、調査地はその北部の南北約 16 m である。南斜面は急斜面に削られており、曲輪 18 との高低差は約 2 m である。

掘立柱建物 2 棟と方形土坑、雨落ち溝の可能性のある溝、曲輪 18 からの登り口の可能性をもつ段状遺構等を検出した。掘立柱建物はいずれも柱穴が径 20cm 程度と小さなもので、柱通りや柱間が不揃いなことから、簡易的な建物であったと考えられる。

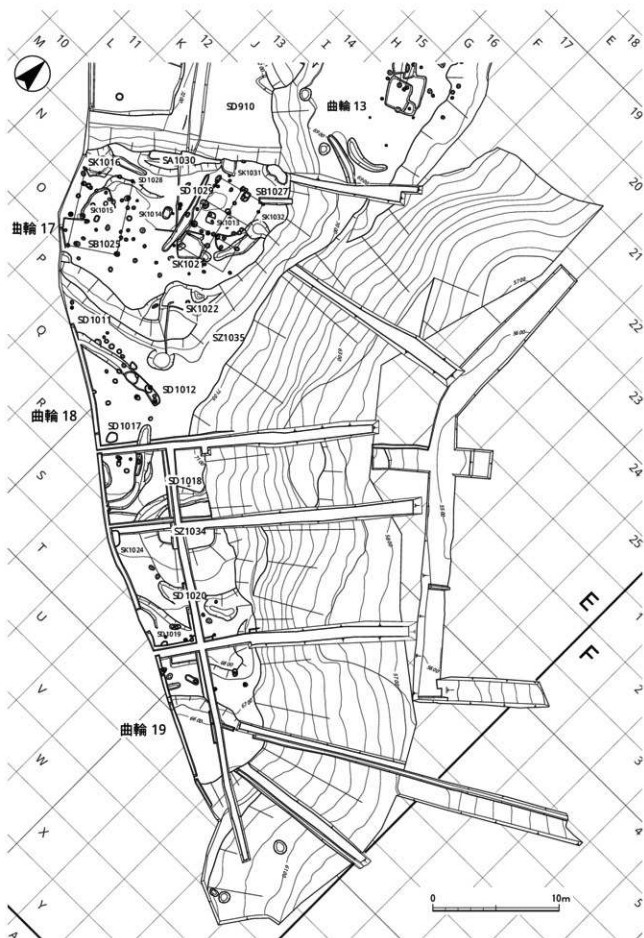
(1) 土塁

S A 1030 南西-北東方向に主軸をもつ長さ 6.7 m、幅 2.4 m、残存高 1.2 m の土塁である。断ち割りの結果、土塁の大半は地山削り出しによって形成されていることが判明した。すなわち堀切 S D 921 を拡幅して S D 910 を形成した際、および曲輪 17 を形成した際に、削り残された部分が S A 1030 といえる。S D 910 に進入した敵兵に対する曲輪 17 の防衛施設としての機能が想定される。

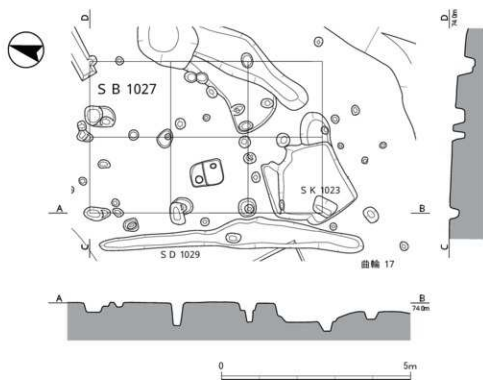
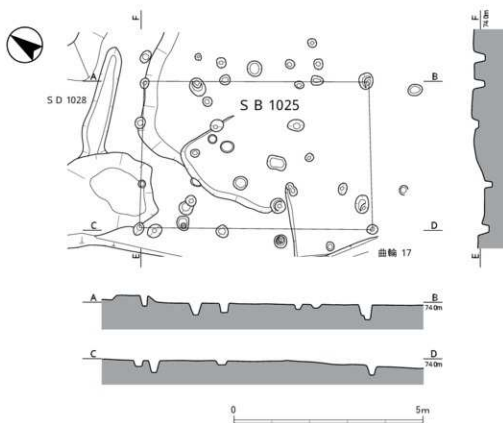
(2) 掘立柱建物

調査段階では掘立柱建物を 3 棟検討していたが、S B 1026 は確定に至らなかった。

S B 1025 (第 80 図) 西端で検出した掘立柱建物である。南東-北西方向に主軸をもち、桁行 6.05 m、梁間 3.95 m、床面積 23.9 m² である。柱筋の通りが良好ではないものの、桁行 3 間、梁間 3 間と考えられる。柱穴は直径 20～40cm、深さ 20～



第79図 曲輪17・18・19遺構平面図(1:300)



第80図 S B 1025・S B 1027 (1 : 100)

40cmで、不揃いなものが多い。

北側のS D 1028は建物に伴う雨落ち溝の可能性がある。

S B 1027 (第80図) 東側において検出された掘立柱建物である。柱筋の通りが良好ではないものの、南南東-北北西方向を主軸とする掘立柱建物を想定した。桁行3間(6.18m)、梁間2間(3.95m)、床面積24.4㎡と想定される。なお、東側は平坦面の流出が著しく、柱穴が検出されなかった箇所がある。桁行の柱間寸法は北側から2.27m(7尺5寸)-1.97m(6尺5寸)-1.97m(6尺5寸)で、梁間は1.97m(6尺5寸)である。桁行の一部、梁間において6尺5寸への志向がうかがえる。柱穴は、直径30cm以上、深さ30~50cmである。

西側のS D 1029は建物に伴う雨落ち溝の可能性がある。

(3) 土坑

S K 1016 (第82図) 長軸23m、短軸2.0m、深さ25cm以上の不定形な土坑である。東側でS D 1028が接続するため、排水機能を備えていた可能性が有る。

S K 1021 (第82図) 一辺2.1m、深さ30cmの方形を呈する土坑である。S B 1027の建物内土坑の可能性が有る。

(4) 溝

S D 1028 東西方向に主軸をもつ長さ2.9m、幅約0.6m、深さ15cmの溝である。S B 1025の北側に位置しており、方向も揃う点と考慮すると、S D 1028はS B 1025に伴う雨落ち溝の可能性が有る。

西端で、S K 1016に接続する点も排水に関わる遺構の可能性を示唆する。

S D 1029 南南東-北北西主軸の溝で、長さ7.0m、幅0.4m、深さ15cmである。S B 1027の主軸に併走することから、雨落ち溝の可能性が有る。

(5) その他

斜面 S D 1011 曲輪17の南側斜面は、切土成りである。このため自然地形の斜面と区別するために、S D 1011と称す。その範囲は、概ね東西11.2m、南北2.0mで、高低差1.9mである。この高低差のために、曲輪17と曲輪18との連絡は、階段状遺構

S K 1022を介した昇降に限られる。

テラス状遺構 S K 1022 北東隅で確認した2段のテラス状の遺構である。曲輪18から曲輪17に上る通路として利用された可能性がある。上段は3.2m×1.6mで曲輪17との比高は約30~40cm、下段は2.0m×2.0mで、上段との比高は約40cm、曲輪18との比高は約1mである。

曲輪17は平坦面の端を削り、切岸としている。曲輪17と曲輪18との比高は約2mであり、S K 1022を使わないと上るは困難である。

21 曲輪18(第79図:概報では曲輪B)

曲輪17を取り囲む南北約15mの一段低い平坦面である。その東部、東西約10mを調査した。

弧状に巡る溝、曲輪13との通路とみられる犬走り状の平坦地や、造成土の可能性が有る盛土も確認された。また、須恵器が出土しており、古代の集落が付近に広がっていたことが判明した。

(1) 溝

S D 1012 東西方向に主軸をもつ長さ8.2m以上、幅90cm、深さ30cmの溝である。東に向かって浅くなって途切れ、やや弧状を呈する。西端は調査区外へと続くと。S D 1017とは途切れるが、一連の溝と考えられる。

S D 1017 S D 1012の南に位置する溝で、L字に曲がる。S D 1012とは途切れるが、一連の溝と考えられる。L字の長辺の長さは6.4m、幅90cm前後、深さ約20cmである。短辺の長さは3.0mで、調査区外へと続く。

S D 1012・1017の機能として、曲輪18の区画や排水等が想定できる。しかし時期を特定する手がかりを得なかったため、これらが後世の改変による可能性を残すため、性格・評価は控えておく。

S D 1018 盛土S Z 1034の西側をめぐり長さ6.5m、最大幅1.6m、深さ30cmの弧状を呈する溝状の遺構である。盛土S Z 1034は曲輪平坦面を拡張するために盛られた造成土の可能性が有る。S D 1018が東側斜面まで到達している点を十分説明できないが、曲輪18から下段へ至る通路等として使用された結果、溝状の凹地となった可能性が有る。

(2) その他

犬走り状遺構 S Z 1035 曲輪 18 の北部には曲輪 17 の東側に犬走り状を呈する長さ約 19 m、幅 0.8 ~ 2.0 m の平坦地を確認した。この犬走り状の平坦地は曲輪 13 とつながっており、通路として利用されたものと思われる。なお、赤道が近在していることから、時期が後世に下る可能性がある。

盛土 S Z 1034 東西約 11.0 m、南北約 7.0 m、南東側からの高さ約 3 m の楕円形を呈する高まりである。盛土上面でいったん検出を行ったが、遺構は確認できなかった。この盛土から須恵器が出土したため、古墳および下層遺構の可能性も想定しつつ確認を行った。その結果、S Z 1034 は、西側を盛土成形した後、高まりの幅をさらに拡張するために東側に盛土を行っていることが明らかとなった。盛土からは中世後期の遺物が出土しており、伊坂城に伴うものと考えられる。なお、曲輪 18 の下層において遺構は確認されなかった。

曲輪 18 平坦面と S Z 1034 は、標高がおおむね一致する。この点と盛土の積み方から、S Z 1034 は曲輪 18 平坦面を拡張するために積まれた造成土の可能性はある。

S D 1020 曲輪 18 と曲輪 19 の間の斜面に位置する。盛土 S Z 1034 の南側をめぐる長さ 2.2 m、最大幅 1.0 m、深さ 30 cm の溝状の落ち込みをさす。

22 曲輪 19 (第 79 図: 概報では曲輪 C)

曲輪 18 からならかな斜面を下った箇所に位置

する。調査面積が狭いため、遺構も確認されず、詳細は不明だが、縄張り図を参考に曲輪とした。

23 曲輪 20 (第 81 図: 第 7 次調査中区)

曲輪 19 の南東側、2.2 m ほど低いところにある平坦面。城の主軸方向で約 50 m あり、北東端を第 7 次中区として調査した。

溝で囲まれた土壇状遺構や、火葬土坑の可能性が高い土坑 2 基などを確認した。

曲輪の東端は硬くしまっており、通路として利用されていた可能性がある。

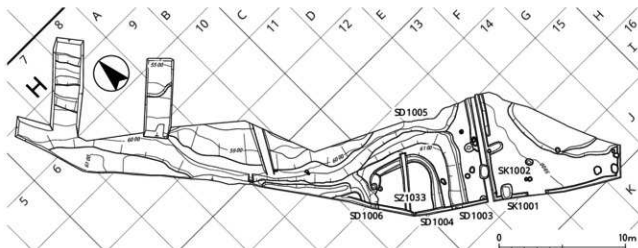
曲輪の東側斜面は、自然崩落による影響が大きく、平坦地等の人為的な加工痕跡は認められなかった。

(1) 火葬土坑

調査段階から火葬土坑と想定された 2 基の土坑のうち S K 1002 については、放射性炭素年代測定、炭化材の樹種同定、人骨同定を行った (第 VI 章)。

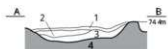
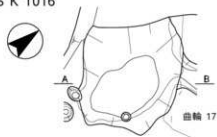
S K 1001 (第 82 図) 長辺約 1.1 m、短辺約 90 cm、深さ 40 cm の隅丸方形の土坑で、長辺は北東 - 南西方向である。壁面は熱を受けて硬化・赤変し、埋土は炭化材が多量に出土した。底部は焼けていない。人骨は出土していないものの、S K 1002 と類似する遺構であることから、火葬土坑と考えられる。

S K 1002 (第 82 図) 長辺約 1.1 m、短辺約 80 cm、深さ 40 cm の隅丸方形の土坑で、長辺方向は北西 - 南東方向であり、S K 1001 と直交する方向である。壁面は熱を受けて硬化・赤変し、埋土からは炭化材が多量に出土した。また、炭化材に混じっ



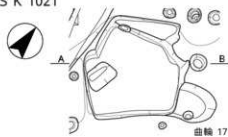
第 81 図 曲輪 20 遺構平面図 (1 : 300)

S K 1016



- 埋土
 1. 2.5Y4 2暗灰黄 砂質土
 2. 2.5Y6 3Cぶい黄 粘質土
 3. 2.5Y7 3残黄 砂質土
 4. 2.5Y7 2灰白シルト
 地山
 4. 2.5Y7 2灰白シルト
 5. 2.5Y6 3Cぶい黄シルト
 (地山ブロック含む)

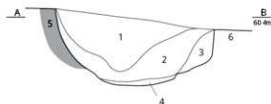
S K 1021



- 表土
 1. 7.5YR3 3濃褐 中粒砂
 2. 2.5Y6 3Cぶい黄 粘質土
 3. 10YR6 4Cぶい黄橙 粘質土 (地山
 ブロック少量含む)
 4. 10YR6 4Cぶい黄橙 粘質土 (地山
 ブロック多く含む)
 5. 10YR7 4Cぶい黄橙 砂質土 (地山
 ブロック小を含む)

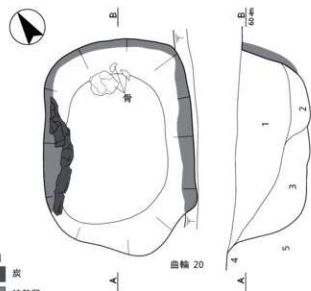


S K 1001



- 埋土
 1. 2.5Y5 4暗褐 粘質土 (炭化物少量含む)
 2. 炭層
 3. 2.5Y5 4暗褐 粘質土
 4. 2.5Y6 4Cぶい黄 粘質土 (粗粒砂を多く含む)
 5. 焼土 2.5YR4 6赤褐
 6. 検出面 2.5Y6 6暗黄褐 砂質土
 地山
 7. 2.5Y7 4残黄 細砂

S K 1002



- 埋土
 1. 2.5Y5 4暗褐 粘質土 (炭化物少量含む)
 2. 7.5YR5 4Cぶい褐 粘質土 焼土混 (骨小片含む)
 3. 炭層
 4. 検出面 2.5Y6 6暗黄褐 砂質土
 地山
 5. 2.5Y7 4残黄 細砂



て人骨が出土している。

(2) 溝

S D 1003 土壇状遺構の外側をめぐる溝で、長さ13.9m、幅60cm、深さ10cmで、調査区外へと続く。

S D 1004 土壇状遺構の内側をめぐる溝で、南西-北東方向の長さ4.6m、南東-北西方向の長さ4.8m、幅70cm、深さ20cmで、調査区外へ続く。

S D 1006 土壇状遺構の外側をめぐる溝で、S D 1003と一連の溝と考えられる。長さ2.5m、幅90cm、深さ15cmで、調査区外へ続く。

(3) 土壇状遺構

S Z 1033 南東-北西方向の長さ8.1m、南西-北東方向の長さ辺り6.0m以上、上面は一辺5-6m、東から見た場合の高さ1.0m、西側からの高さ50cmの土壇状遺構である。西側は調査区外へ続く。時期・性格は不明であり、類例の増加を期待したい。

24 曲輪外

(1) 曲輪6・11の北東(第5次調査)

曲輪6で南端が確認された土橋S A 743は、第5次調査西区で域外へと続くが、その東側平坦面では、多数の小穴が確認された。建物としてまともならず、時期も不明であるが、簡易な掘立柱建物か構が存在した可能性がある。その平坦面と曲輪11の間にある竪堀状の落ち込みは、調査前から確認されており、後世の木材の運び出しの為に掘削された可能性が考えられる。

曲輪11東方の谷(第5次中区)やその東の平坦面(第5次東区)では、遺構は確認されず、遺物も僅かであった。自然地形と考えられる。

(2) 曲輪20の南東

(第4次・第7次調査東区)

曲輪20から東方向に派生する小尾根(第4次斜面部)では、切岸や盛土の痕跡は認められず、流出土の堆積や風倒木による地形の変化により平坦面が形成されたと考えられた。また、丘陵裾でも堀は確認されなかった。

丘陵から東方向へ派生する小尾根(第7次東区)では、3段ほどの段を確認したが、遺構と判断でき

る手がかりは得られなかった。したがって自然地形の可能性を考えておきたい。ただし、城と谷部との通路に利用していた可能性は残されている。

この二つの小尾根に挟まれた谷の平坦地(第4次谷部)は、断続的な丘陵流出土の堆積によって形成された自然地形であることが判った。

なお、第4次調査で遺跡外側にむかって筋状に配置した調査区では、表土下にシルトや粗砂などが厚く堆積しており、地表下約2.3mで極めて軟弱なグライ層となった。各層を精査したが、遺構・遺物はなかった。この状況から、中世以前の谷部は低湿な環境であったと推測される。

遺構に伴わないもの、須臾器が複数出土している。過去の伊坂城跡の調査でも古墳時代の竪穴住居や土坑などが見つかり、丘陵全体に伊坂城築城以前の集落が存在していたものと思われる。

(水谷・高松)

【註】

①浅尾悟「土坑を伴う中世掘立柱建物について」『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要VI』(三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990年)

②藤崎謙治『馬小屋の考古学』(高志書院 2010年)

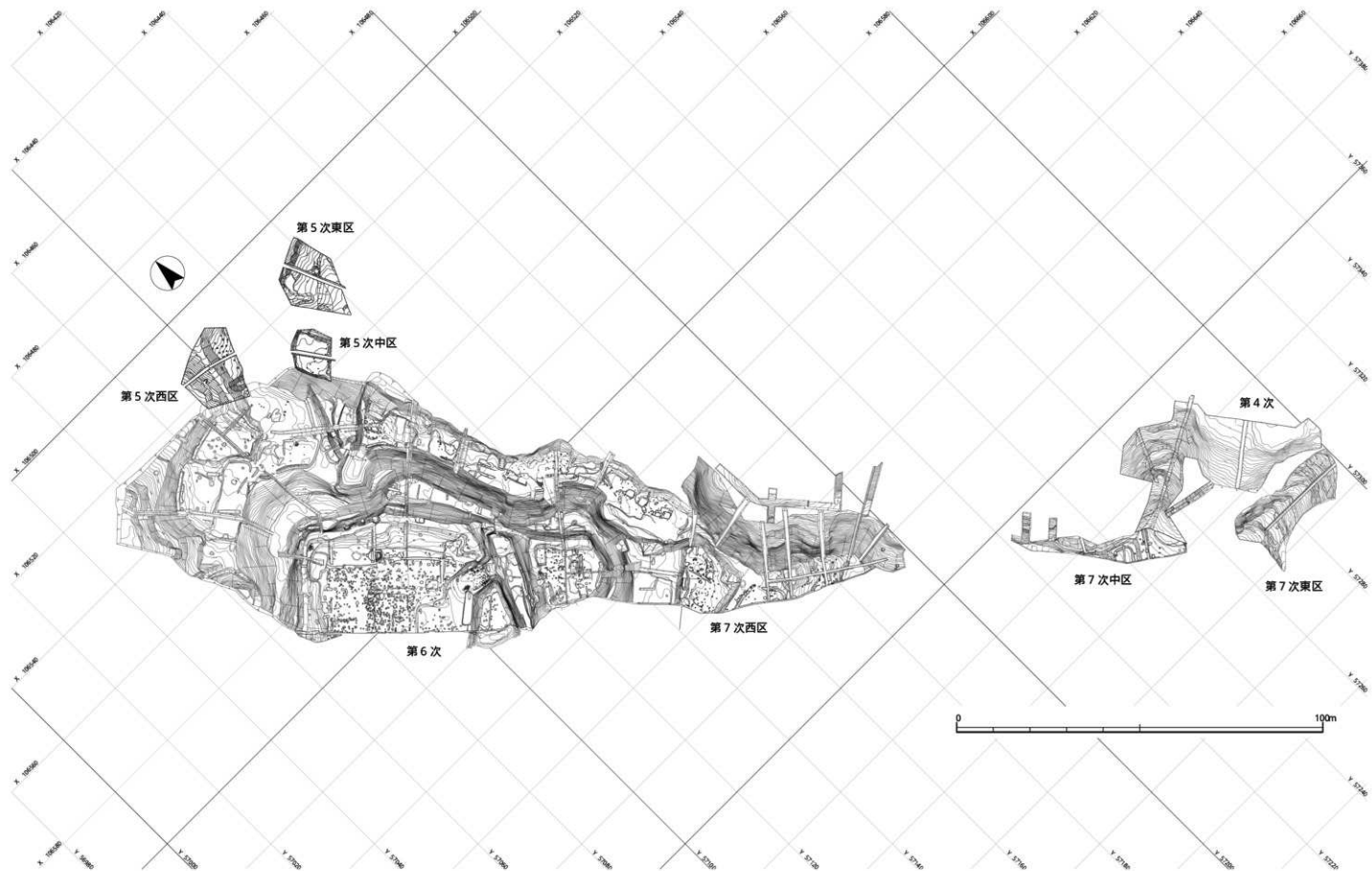
③宮本長二郎「民家と町並 近畿」『日本の美術』第288号(至文堂 1990年)

④三重県埋蔵文化財センター『多気遺跡群発掘調査報告II』(1996年)

・三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡発掘調査報告』(2003年)

⑤津市教育委員会『上津部田城址(第3次)発掘調査報告』(1994年)

・千田嘉博『日本とヨーロッパの城と戦い』『織豊系城郭の形成』(東京大学出版会 2000年)



第83図 伊坂城跡 遺構全体図 (1 : 1 000)

第2表 伊坂城跡(第4～7次)遺構一覧表

遺構番号	次数 曲輪名等	地区名	性格	規模(m)			特記事項	遺構文(頁)	遺物(図)
				長	幅	高さ			
SA 701	⑥曲輪1	A-u19他	土塁	28～	7.0	高さ1.9	曲輪1西辺土塁	62	
SK 702	⑥曲輪1	A-v19-20	土坑	3.0	1.6	0.2	—	82	
SD 703	⑥曲輪1	A-v20	溝	3.0	0.45	0.1	区画溝か雨落ち溝?	79	
SK 701	⑥曲輪1	A-s21他	土坑	8.2	5.0	0.3	地帯りに伴う陥没? 瀬戸美濃陶器ノギ皿出土	82	84
SK 705	⑥曲輪1	A-u24他	土坑	2.4	2.4	0.3	貝殻多数出土	82	84
SD 706	⑥曲輪1	A-u23他	溝	13.8	0.7	0.2	区画溝か雨落ち溝?	80	84 108
SE 707	⑥曲輪1	A-v24他	井戸	2.4	2.4	3.8	元符通貫、金銅製品出土	82	85 109
SD 708	⑥曲輪1	A-y24他	L字溝	10.9	1.6	0.1	雨落ち溝? 短辺:長2.8m、幅2.2m、深0.1m	80	85
SK 709	⑥曲輪1	A-x23	土坑	1.4	1.2	0.5	SK 709→SD 708 土師器皿出土	82	85
SD 710	⑥曲輪1	B-x1他	L字溝	16.8	0.7	0.2	区画溝兼雨落ち溝 短辺:長7.0m、幅1.4m、深0.3m	80	85
SD 711	⑥曲輪1	E-d1他	溝	11.0～	2.5	0.6	調査区外へ延びる 瀬戸美濃陶器出土	80	86 108
SZ 712	⑥曲輪1	A-r22他	平坦面	6.0	1.7	—	表土から銭貨・貝殻出土	85	87 108
SB 713	⑥曲輪3	E-e2他	礎石建物	4.55	1.58～	—	3間×1間～ 床面積7.19㎡～	89	
SZ 714	⑥曲輪3	E-f1他	集積遺構	8.1	2.8	厚さ0.2	石つぶて	90	
SB 715	⑥曲輪1	E-C3他	櫓門	奥行3.94	5.15	—	礎石建物 門の開口:3.03m	62	87
SD 716	⑥曲輪1	E-a4他	溝	11.6	2.9	1.9	大半は下層で検出 調査時はSZ	80	87
SK 717	⑥曲輪1	E-a1他	土坑	3.4	2.5	0.2	S B 725内土坑	82	
SD 718	⑥曲輪1	E-a3他	溝	5.5	0.75	0.4	大半は下層で検出	80	87 108
SD 719	⑥堀底道 SD719	E-e5他	堀底道	27.2～	上端11.0 下端4.3	6.1	曲輪1・2の間 常滑陶器・発付磁器・須恵器・鉄 製品出土	93	98 108
SD 720	⑥曲輪1	B-y4他	溝状遺構	4.4	3.7	0.1	東隅角に突出部がつく	80	
SD 721	⑥曲輪1	A-u21他	竪立柱 建物?	5.0	3.7	—	2間×2間?	64	
SZ 722	⑥堀底道 SD719	E-a6	性格不明	3.9～	1.9	4.1	瀬戸美濃陶器・常滑陶器 ・貝殻出土	93	98
SK 723	⑥曲輪3	E-e41	土坑	2.4	0.7	0.1	根椋丸?	90	
SB 724	⑥曲輪1	A-y22他	竪立柱 建物	8.0	5.76	—	4間×2間 床面積16.1㎡	64	
SB 725	⑥曲輪1	A-x24他	竪立柱 建物	14.36	北側6.67 南側6.97	—	7間×2間、床面積97.8㎡ 建物内に土坑SK 717あり	64	89
SB 726	⑥曲輪1	A-u19他	竪立柱 建物	3.03～	5.72	—	1間～×3間 床面積17.3㎡～	78	
SB 727	⑥曲輪1	A-y20他	竪立柱 建物?	1.4～?	3.06	—	1間～×2間 大半は調査区外で規模不明	78	
SK 728	⑥曲輪11	B-1-a1	土坑	1.3	1.2	0.35	S B 732内土坑	106	
SK 729	⑥曲輪11	B-j1	土坑	1.6	0.8	0.15	曲輪11造成後	106	102
SD 730	⑥曲輪9	A-o16他	溝	7.6～	1.5	0.2	調査区外へ延びる 瓦出土	100	103
SK 731	⑥曲輪11	B-j1-2	土坑	3.7	2.4	0.1	曲輪11造成後	106	102
SB 732	⑥曲輪11	B-m1他	竪立柱 建物	5.79	3.7	—	3間×1間、床面積21.4㎡ 建物内に土坑SK 728あり	105	
SD 733	⑥堀切 SD733	A-120他	堀切	21.5	7.1	0.5	北端で矩形に折れる	100	102
SD 734	⑥曲輪12	B-w4他	流路	13.6	1.3	6.8	曲輪12造成後	106	
SD 735	⑥曲輪16	B-p3他	塹壕	12.4	9.0	4.6	—	110	
SD 736	⑥曲輪5	B-14他	堀	31.0	10.0	5.1	曲輪1の横堀か?改修あり	95	
SA 737	⑥曲輪5	B-s3他	土塁	5.1	2.2	高さ1.2	盛土から瀬戸美濃器鉢出土	95	
SA 738	⑥曲輪11	B-n2他	土塁	8.4	2.8	高さ0.75	地山削り出し	105	
SA 739	⑥曲輪12	B-o3-4	土塁	6.5	2.1	高さ0.7	地山削り出し	106	
SA 740	⑥曲輪11	B-13他	土塁状 遺構	11.6	1.9	高さ0.1	後世の改変か	105	
SA 741	⑥土構 SA713	A-h24他	土塁状 遺構	6.5	1.9	高さ0.6	後世の改変か 元々SA 743の一部?	98	

第3表 伊坂城跡(第4~7次)遺構一覧表

遺構番号	次数 曲輪名等	地区名	性格	規模(m)			特記事項	遺構文(頁)	遺物(図)
				長	幅	高さ			
SA 742	⑥曲輪8	A-118他	土塁状遺構	12.2	1.4	高さ0.4	後世の改変か	100	
SA 743	⑥土橋 SA743	A-h25他	土橋	29.4	8.0	1.6	地表上から古代の土師器皿出土	98	
SA 744	⑥堀底道 SD719	E-b7他	土塁	17.4	4.1	2.7	曲輪1・2の連絡路 SA909を被合	93	
SA 745	⑥曲輪1	B-u2他	土塁	45	5.8	高さ1.5	曲輪1北辺土塁	62	88
SD 746	⑥下層	A-t17・18	溝	4.8~	0.9	0.7	西区下層A地区	100	102
SD 747	⑥下層	A-m23他	溝	13.8	3.1	0.25	西区下層B・C地区	100	102
SD 748	⑥曲輪11	B-13他	溝	11.0	0.9	0.3	後世の改変か	106	
SK 749	⑥曲輪1 下層	B-y3他	土坑	3.6	3.0	0.4	炭を多く含む 土師器・瀬戸系濃灰器出土	82	88 108
SB 750	⑥曲輪1	A-y22他	竪立柱 建物	6.55	5.61	—	3間×2間 床面積36.7㎡	78	89
SB 751	⑥曲輪1	A-y23他	竪立柱 建物	8.12	5.64	—	3間×3間 床面積45.8㎡	78	89
SB 752	⑥曲輪1	A-y22他	竪立柱 建物	8.12	6.3	—	4間×3間 床面積51.2㎡	78	89
SB 753	⑥曲輪1	E-u3他	竪立柱 建物	7.8~	6.0	—	4間×2間 床面積46.8㎡~ 2間×3間 床面積24.4㎡~	79	
SB 754	⑥曲輪1	A-w19他	竪立柱 建物	4.97~	4.91	—	1間×2間 床面積12.1㎡~	79	89
SB 755	⑥曲輪1	A-w19他	竪立柱 建物	3.03~	4.0	—	1間×2間 床面積12.1㎡~	79	
SA 756	⑥曲輪1	E-a5他	土塁	11	2.7~5.8	高さ0.8	曲輪1東辺土塁 SD716~SA736	62	
SA 757	⑥曲輪6	A-h21他	土塁	12.7	1.2	0.2	後世の改変	98	
SD 758	⑥曲輪1	A-t21他	溝	2.8	0.75	0.1	SD703と一連?	79	
SD 759	⑥曲輪1	A-w19他	溝	3.2	0.25	0.1	SB726-754-755に伴う?	79	
SA 760	⑥曲輪10	A-a16他	土塁状 遺構	1.0~	—	—	後世の改変か 平面図に表示せず	105	
SA 761	⑥曲輪1	E-b1他	溝	6.0	—	—	3間 2.3m, 1.9m, 1.8m	79	
SD 762	⑥曲輪9	A-n17他	塹壕	13.5	9.3	—	—曲輪9		
SK 901	⑥曲輪2	E-h8	土坑	2.6	2.5	0.3	風倒木?	89	99
SK 902	⑥曲輪2	E-h7・8	土坑	2.5	2.4	0.2	風倒木?	89	99
SK 903	⑥曲輪2	E-g8他	土坑	2.4	1.6	0.2	風倒木?	89	99
SD 904	⑥曲輪2	E-g9	溝	4.0	0.3	0.1	雨落ち溝?	89	
SK 905	⑥曲輪2	E-g9他	カマド?	3.6	2.4	0.4	塼土・炭含む	89	
SD 906	⑥曲輪2	E-f-g9	溝	3.3	0.4	0.1	雨落ち溝?	89	
SB 907	⑥曲輪2	f-6~7, e7	門	3.33	—	—	1間 青銅製鎖金具出土	85	99 109
SZ 908	⑥堀底道 SD719	E-f5他	階段状 遺構	11.0	5.3	高さ4.2	SD719から曲輪2への登り口 遺物なし	93	
欠番 909	⑥曲輪 1・2	—	—	—	—	—	SAとして調査 調査後SA744に被合		
SD 910	⑥堀切 SD910	E-k13他	堀切	14.4~	14.4	2.55	SD921の改修後	95	101
SD 911	⑥曲輪14	E-b13他	溝	6.5~	1.2	0.1	流路?調査時はSK	108	
SD 912	⑥曲輪14	E-a11	溝	3.4~	1.4	0.2	流路?調査時はSK	108	104
SK 913	⑥曲輪13	E-115他	土坑	4.8	2.9	0.3	竅穴遺構?	107	
SK 914	⑥曲輪13	E-g15	土坑	2.8	2.5	0.5	竅穴遺構?	107	
SK 915	⑥曲輪13	E-f14・15	土坑	3.3	2.0	0.3	竅穴遺構?	107	
欠番 916	—	—	—	—	—	—	—		
SD 917	⑥曲輪14	B-y9他	堀	8.7	6.2	0.7	曲輪14と曲輪15の間 防壁施設かは疑問がのこる	108	104
SD 918	⑥曲輪15	B-r8他	堀	4.5	4.5	1.4	曲輪15と曲輪16の間	110	
SD 919	⑥曲輪16	B-q6他	堀	8.5	3.1	0.8	進行方向に直交	110	
SD 920	⑥曲輪16	B-o-p5	溝	3.5	0.5	0.1		110	
SD 921	⑥堀切 SD910	E-j11他	堀切	13.3	3.5	1.3	改修後はSD910に 高低差 1.3	95	
SD 922	⑥曲輪13	E-c14他	溝	10.4	5.1	高さ 1.3	曲輪13と曲輪14の間 雨水による流路か	107	
SA 923	⑥曲輪13	E-e14他	溝	6.3	—	—	3間	107	
SA 924	⑥曲輪13	E-e-f15	溝	2.7	—	—	2間	107	
SA 925	⑥曲輪13	E-g15他	溝	3.8	—	—	2間	107	
SA 926	⑥曲輪13	E-h15他	溝	5.65	—	—	3間	107	

第4表 伊坂城跡(第4～7次)遺構一覧表

遺構番号	次数 曲輪名等	地区名	性格	規模(m)			特記事項	遺構文 (頁)	遺物 (図)
				長	幅	深さ			
S A 927	⑥曲輪13	E-h15他	溝	4.0	—	—	2間		107
S Z 928	⑥曲輪4	E-e11	集積遺構	1.5	1.1	—	貝殻の分布範囲	93	100
S A 929	⑥曲輪2	E-e9他	土塁	18.0	3.5	0.8	曲輪2北辺土塁		85
S A 930	⑥曲輪2	E-d7他	土塁	11.5	2.3	0.5	曲輪2西辺土塁北半		85
S A 931	⑥曲輪2	E-g6他	土塁	8.0	3.0	1.1	曲輪2西辺土塁南半		85
S A 932	⑥曲輪2	E-b6他	土塁	11.5	1.3~	0.5	曲輪2南辺土塁		85
S A 933	⑥曲輪2	E-b9他	土塁	7.2	1.2	0.2	曲輪2東辺土塁		85
S K 1001	⑦中区 曲輪20	H-112	火葬土坑	1.1	0.9	0.4	壁面硬化赤変 人骨出土		114
S K 1002	⑦中区 曲輪20	H-112	火葬土坑	1.1	0.8	0.4	壁面硬化赤変 人骨出土		114
S D 1003	⑦中区 曲輪20	H-112	溝	13.9	0.6	0.1	土壇状遺構の外側の東溝		116
S D 1004	⑦中区 曲輪20	H-G-H11	溝	9.4	0.7	0.2	土壇状遺構の内側の溝		116
S D 1005	⑦中区 曲輪20	H-G11	落ち込み	—	—	—	北斜面への落ち込み		
S D 1006	⑦中区 曲輪20	H-G10	溝	2.5	0.9	0.15	土壇状遺構の外側の西溝		116
S D 1007	⑦中区	H-G-H11	溝	3.6	0.6~0.8	0.3	S Z 1033の下層で確認された弧状の溝		
S D 1011	⑦西区 曲輪17	E-P13-14	切土成形 斜面	11.2	2.0	1.9	曲輪17の南側斜面		113
S D 1012	⑦西区 曲輪18	E-P14~16	溝	8.2~	0.9	0.3	S D 1017と一連 方形に沿る溝		113
S K 1013	⑦西区 曲輪17	E-M14-15	ピット	0.8	0.6	0.02			
S K 1014	⑦西区 曲輪17	E-N14	ピット	0.55	0.4	0.2			105
S K 1015	⑦西区 曲輪17	E-N13	土坑	2.8	2.0~	0.2	方形 東辺は削平のため不明		
S K 1016	⑦西区 曲輪17	E-N12	土坑	2.1	2.0	0.25	不定形		113
S D 1017	⑦西区 曲輪18	E-Q-R17	溝	9.4	0.9	0.2	方形にめぐる溝 性格不明		113
S D 1018	⑦西区 曲輪18	E-L11	溝状遺構	6.5	1.6	0.3	結果的な溝状窪地か?		113
S D 1019	⑦西区 曲輪18-19	E-S19-20	落ち込み	5.0	1.4	0.4			
S D 1020	⑦西区 曲輪18-19	E-M14	落ち込み	2.2	1.0	0.3	S Z 1034の南側をめぐる		114
S K 1021	⑦西区 曲輪17	E-N15	土坑	2.1	2.1	0.3	S B 1027の建物内土坑?		113
S K 1022	⑦西区 曲輪17	E-N-015	テラス状 遺構	上段3.2 下段2.0	1.6 2.0	高低差 0.4	2段のテラス状の遺構		113
S K 1023	⑦西区 曲輪17	E-N15	掘立柱建物 柱穴	0.6	0.45	0.3	S B 1026の柱穴		
S K 1024	⑦西区	E-S18	土坑	1.2	0.4	0.04	古墳の可能性? 須恵器出土		106
S B 1025	⑦西区 曲輪17	E-N12他	掘立柱 建物	6.05	3.95	—	3間×3間 床面積23.9㎡		110
欠番 1026	⑦西区	—	掘立柱 建物	—	—	—	掘立柱建物を検討したが、欠番		
S B 1027	⑦西区 曲輪17	E-M15他	掘立柱 建物	6.18	3.95	—	3間×2間 床面積21.4㎡		113
S D 1028	⑦西区 曲輪17	E-M13他	溝	2.9	0.6	0.15	S B 1025に伴う雨落ち溝?		113
S D 1029	⑦西区 曲輪17	E-M14	溝	7.0	0.4	0.15	S B 1027に伴う雨落ち溝		113
S A 1030	⑦西区 曲輪17	E-114他	土塁	6.7	2.4	高さ 1.2	地山削り出し		110
S K 1031	⑦西区	E-L14	土坑	1.0	1.2	0.05			
S K 1032	⑦西区	E-M15他	土坑	1.6	1.7	0.6			
S Z 1033	⑦中区 曲輪20	H-H10・11	不明	8.1	6.0	1.0	土壇状遺構		116
S Z 1034	⑦西区 曲輪18	E-R18他	盛土	11.0	7.0	3.0	盛土から中世後期の遺物出土		114
S Z 1035	⑦西区 曲輪18	E-N16他	大走状 遺構	19.0	0.8	—	後世の通路か		114

⑥=第6次調査

⑦=第7次調査

第5表 掘立柱建物・櫓・門一覧

遺構名	次数	地区	ピット	ピットの遺物など	間 (m) × 間 (m)	方位 (N基準)	備考
SB713	6	—	—	—	3間 (4.55) × 1間 (1.58)	N45° E	礎石建物
SB715	6	—	—	—	3間 (5.15) × 2間 (3.94)	N 6° E	櫓門
SB721	6 A U 21	2	なし		2間 (5.0) × 2間 (3.7)	N42° W	
	6 A Y 21	1	瀬戸美濃丸碗 (大室1)				
SB724	6 A Y 22	9	土師器皿、羽釜、鉄製品		4間 (8.00) × 2間 (5.76)	N43° W	SB752と共有
	6 D A 22	1	土師器小片				
	6 D A 22	2	なし				
	6 D A 23	2	土師器皿、炭				
	6 D A 24	1	土師器小片				
	6 D A 24	3	土師器皿				
SB725	6 D B 23	1	土師器皿		7間 (14.36) × 2間 (6.67~6.97)	N44° E	
	6 D B 23	3	瀬戸美濃丸碗? (大室1?)				
	6 D B 23	3	土師器皿				
	6 A W 24	1	土師器皿				
	6 A W 25	2	土師器皿、染付碗、砥石				
	6 A W 25	3	土師器皿				
	6 A X 23	1	土師器皿				
	6 A X 24	3	土師器皿				
	6 A X 25	1	瀬戸美濃天目茶碗 (大室1) 常滑焼・片口鉢				
	6 A Y 24	2	土師器皿、鉄製品				
SB726	6 A W 19	3	土師器		1間 (3.03) ~ × 3間 (5.72)	N42° W	SB754・755と共有
	6 A W 19	3	瀬戸美濃榊鉢 (大室1・2)				
	6 B M 1	1	なし				
	6 B M 1	1	なし				
SB727	6	—	—	なし	1間 ~ × 2間 (3.06)	N37° W	
SB732	6	—	—	なし	3間 (5.79) × 1間 (3.7)	N44° W	
SB750	6 A Y 22	2	土師器皿		3間 (6.55) × 2間 (5.61)	N44° W	
	6 A Y 23	1	土師器皿、炭				
	6 A Y 23	3	土師器皿				
	6 D A 22	4	土師器皿				
	6 D A 24	2	土師器皿				
	6 D B 23	2	土師器皿				
SB751	6 A Y 23	2	土師器皿		3間 (8.12) × 3間 (5.64)	N43° W	SB752と共有 SB752と共有
	6 A Y 24	4	土師器皿				
	6 D A 22	5	土師器皿				
	6 D A 23	1	土師器皿				
	6 D A 23	3	瀬戸美濃天目茶碗 (後IV新)				
SB752	6 A Y 22	1	土師器皿、常滑小片、鉄製品		4間 (8.12) × 3間 (6.3)	N38° W	SB751と共有 SB751と共有 SB724と共有
	6 A Y 22	5	土師器皿				
	6 A Y 24	5	土師器小片				
	6 D A 22	3	土師器皿				
	6 D A 22	6	土師器皿、土師器鍋、鉄製品				
	6 D A 23	1	土師器皿、瀬戸美濃天目茶碗				
SB753	6 D A 23	3	土師器皿		4間 (7.8) ~ × 2間 (6.0)	N43° W	SB725より古い
	6 D A 24	1	土師器小片				
SB754	6 E A 3	2	土師器皿		2間 (4.97) ~ × 3間 (4.91)	N42° W	SB726・755と共有
	6 A W 19	2	土師器皿				
SB755	6 A X 20	3	土師器皿、白磁皿		1間 (3.03) ~ × 2間 (4.00)	N44° W	SB726・754と共有
	6 A W 19	3	土師器				
SA761	6 A W 20	2	瀬戸美濃榊鉢 (大室1・2)		3間 (6.0)	N43° E	
	6 A X 20	3	土師器皿、白磁皿				
SB907	6 E F 7	—	—	土師器皿 (油煙付着)	1間 (3.33)	N31° E	
SA923	6 E E 14	5	なし		3間 (6.3)	N17° W	
	6 E F 14	3	なし				
SA924	6 E E 15	1	なし		2間 (2.7)	N 1° W	
	6 E F 15	3	なし				
SA925	6 E F 15	4	なし		2間 (2.7)	N 9° W	
	6 E G 15	1	なし				
SA926	6 E G 14	1	なし		3間 (5.65)	N37° W	
SA927	6 E H 15	7	なし		2間 (4.0)	N25° W	
SB1025	7	—	—	なし	3間 (6.05) × 3間 (3.95)	N32° W	
SB1027	7 E N 14	SK 1023	土師器羽釜		3間 (6.18) × 2間 (3.95)	N14° W	

遺物

大半が第6次調査区から出土した。種類としては土師器・瀬戸美濃陶器・常滑陶器・磁器のほか、須恵器や金属製品などがある³⁾。第6次→第5次→第7次→第4次の順で曲輪ごとに記述し、金属製品は最後に一括した(第84～110図)。

1 第6次調査

(1) 曲輪1

S K 704 (1～8) 1は土師器の茶釜である。口縁部は直立し、端部外側につまみ出され、上端に面を持つ。2は青磁の碗で、口縁部外面に沈線が施される。3は瀬戸美濃陶器の稜皿で大窯の第2段階、口縁部は大きく外反する。4は瀬戸美濃陶器の折縁皿で大窯の第4段階前半、体部内面にソギが施される。5は瀬戸美濃陶器の徳利で、大窯の第2・3段階のものである。常滑陶器の甕(6～8)のうち、6は常滑編年の11型式で、口縁部の内側が角張る。7は底部の破片で15～16世紀、8は10型式のもので口縁部の内側が盛り上がる。

S K 705 (9～37) 9～18は土師器の皿である。器壁が薄く直線的に立ち上がり、色調がやや白っぽいもの(9～11)、器壁がやや厚く色調はやや橙色を呈するもの(12～18)がある。11は京都系の土師器の皿で、18の口縁部には、油煙が付着する。19～29は土師器の羽釜である。口縁部が内傾し、端部が肥厚した状態で面を持つものが多い。30・31は土師器の茶釜である。直立する口縁部で、端部は外側につまみ出され、上端に面を持つ。32～35は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。32は大窯の第2段階で、口縁部は緩やかに外反する。33・34は大窯の第1段階、35は古瀬戸後IV期で、器壁が薄く口縁部が外反する。36・37は瀬戸美濃陶器の灰軸端反皿である。36は大窯の第1・2段階で、丸皿の可能性もある。37は大窯の第1段階である。ともに底部内面に印花文が施される。

S K 706 (38・39) 38は瀬戸美濃陶器の徳利、大窯の第1・2段階である。39は常滑陶器の赤物、片口鉢2類である。12型式と思われる。

S E 707 (40～48) 40・41は土師器の皿である。40は口縁部が直線的に大きく開く。41は器壁が厚く、緩やかに立ち上がる。42は瀬戸美濃陶器の灰軸丸碗で、大窯の第1段階のものである。43は瀬戸美濃陶器の播鉢で、大窯の第2段階のものである。44は常滑陶器の赤物、片口鉢2類である。11型式のものである。45は常滑陶器の風炉である。46・47は常滑陶器の甕で、11～12型式のものである。48は甕斗瓦である。

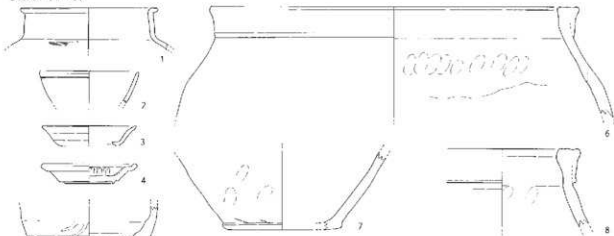
S D 708 (49) 染付磁器の碗である。

S K 709 (50～68) 50～65は土師器の皿である。器壁が薄いもの(50～54・58～61)と厚いもの(55～57・62～65)がある。薄いものうち、50～52は直線的に立ち上がり、53・54は口縁部をやや外反させ、58～61は緩やかに立ち上がる。なお、52はやや白っぽい色調を呈する。厚いものうち、55～57は緩やかに立ち上がり、62～65は丸く立ち上がる。大きさも様々である。66は瀬戸美濃陶器の天目茶碗で、大窯の第3段階後半である。67は中国製の白磁の端反皿である。68は瀬戸美濃陶器の桶で、古瀬戸後IV期の新段階のものである。

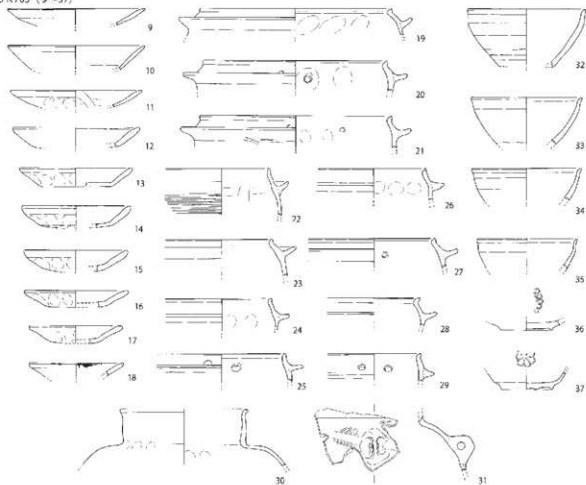
S D 710 (69～74) 69は土師器の皿で、口縁部は直線的に開く。色調はやや白っぽい。70・71は土師器の羽釜である。72は瀬戸美濃陶器の天目茶碗で、古瀬戸後IV期の新段階である。73・74は瀬戸美濃陶器の播鉢である。73はI類で、大窯の第4段階前半のもので、口縁上端が角張る。74はII類で、大窯の第2段階後半のものである。

S D 711 (75～111) 75～87は土師器の皿である。75・76は器壁が薄く、直線的に立ち上がる。75の色調はやや白っぽい。81～84は器壁が厚く、緩やかに立ち上がり、83の口縁部には油煙が付着する。88～97は土師器の羽釜である。口縁部が内傾し、端部が肥厚した状態で面を持つものが多い。98は土師器の茶釜である。直立する口縁部で、端部は外側につまみ出され、上端に面を持つ。99・100は尾張第12型式の山茶碗である。101・102は

SK704 (1~6)



SK705 (9~37)



SK706 (38~39)



0 20 cm

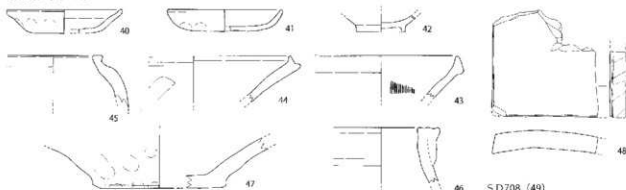
第 84 図 伊坂城跡 (第 4~7 次) 遺物実測図 1 (1~39)

瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。101は古瀬戸後IV期の新段階、102は器壁が薄く、口縁端部は緩やかに外反する。古瀬戸後IV期である。103は瀬戸美濃陶器の灰軸丸碗で、大窯の第1・2段階である。104は瀬戸美濃陶器の灰軸反皿で、大窯の第1段階である。105・106は瀬戸美濃陶器の口広有耳壺で、古瀬戸後IV期の新段階のものである。107～110は

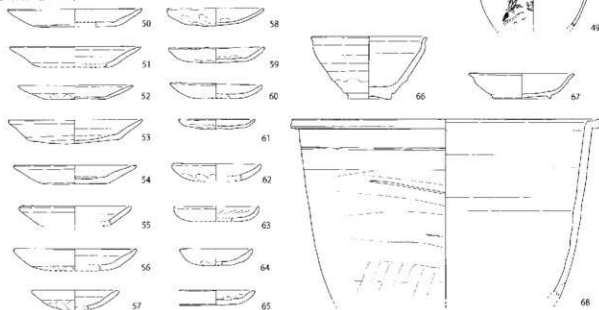
瀬戸美濃陶器の播鉢である。107は大窯の第2段階、I類で口縁部が上方下に伸びる。108はII類で、大窯の第2段階の後半、109は大窯の第1段階、I類で口縁部が上方に伸びる。110は大窯の第3・4段階である。111は常滑陶器の甕で、15～16世紀のものである。

S Z 712 (112～122) 112～114は土師器の

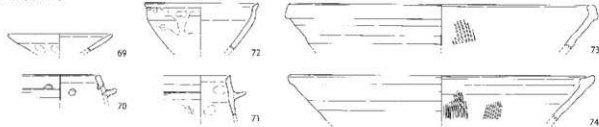
SE707 (40～48)



SK709 (50～68)



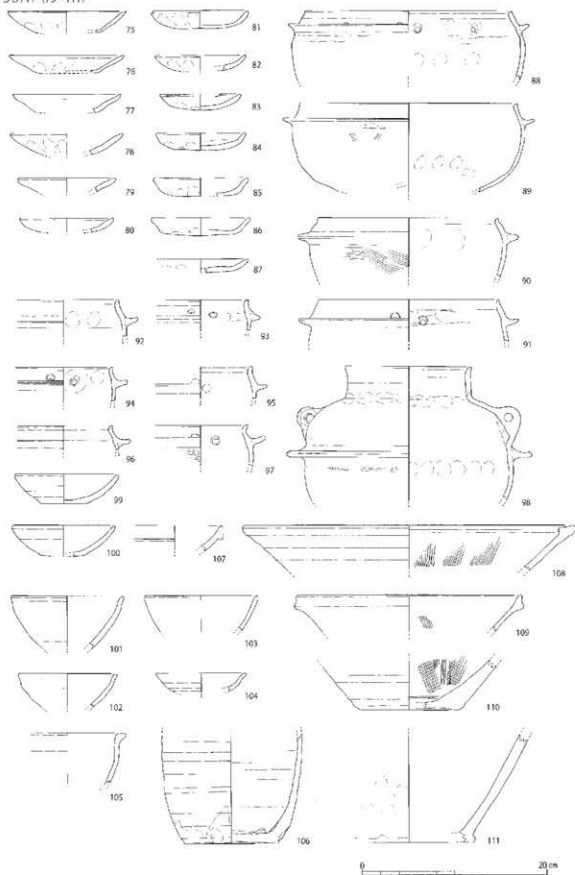
SD710 (69～74)



0 20cm

第85図 伊坂城跡(第4～7次) 遺物実測図2(40～74)

SD711 (75~111)



第 86 図 伊坂城跡 (第 4~7 次) 遺物実測図 3 (75~111)

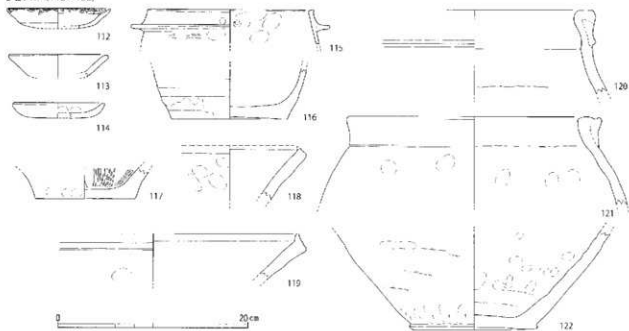
皿で、112と114の口縁部には、油煙が付着する。115は土師器の羽釜である。口縁部が内傾し、端部が肥厚した状態で面を持つ。116は瀬戸美濃陶器の徳利で、古瀬戸後Ⅳ期である。117は瀬戸美濃陶器の播鉢で、大窯第1段階である。118・119は常滑陶器の片口鉢2類である。118は12型式、119は11型式の赤物で、口縁端部が拡張される。120～122は常滑陶器の甕である。120は10型式、121は11型式、122は15～16世紀のものである。

S B 715 (123) 瀬戸美濃陶器の天目茶碗で、大窯の第3段階の後半である。

S D 716 (124～126) 124は土師器の甕である。器壁は厚く緩やかに立ち上がる。125は土師器の羽釜である。126は染付磁器の碗もしくは皿である。

S D 718 (127～137) 127～130は土師器の皿である。いずれも口縁部が直線的に立ち上がる。127は色調が白っぽい。128と130の口縁部には油煙が付着する。131は土師器の羽釜である。132は

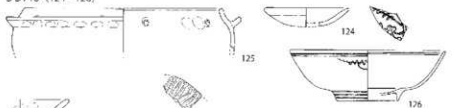
S Z 712 (112～122)



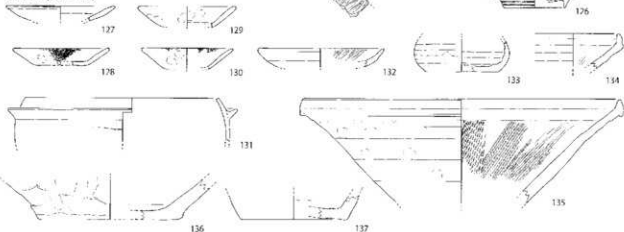
S B 715 (123)



S D 716 (124～126)



S D 718 (127～137)



第 87 図 伊坂城跡 (第 4～7 次) 遺物実測図 4 (112～137)

瀬戸美濃陶器の灰釉丸皿で、体部内面に丸ノミ状工具によるソギが施される。大窯の第2段階の前半である。133は瀬戸美濃陶器の小壺もしくは小瓶である。134・135は瀬戸美濃陶器の播鉢で、134は大窯の第1段階、135は大窯の第2段階、口縁部が上方下方に伸びる。136は常滑陶器の赤物の片口鉢2類で、11～12型式である。137は常滑陶器の壺で、15～16世紀のものである。

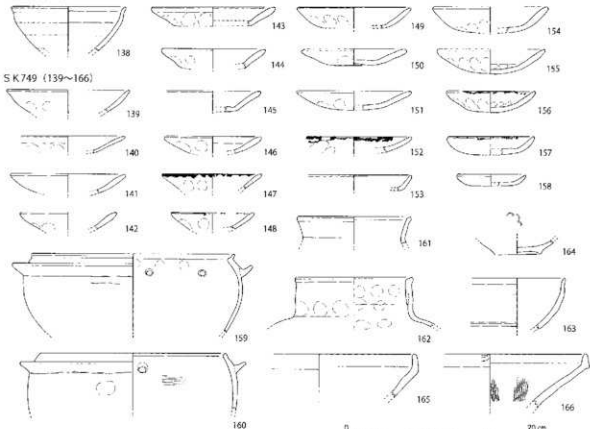
S A 745 (138) 瀬戸美濃陶器の天目茶碗で、口縁部がやや強く外反する。古瀬戸後Ⅳ期の新段階のものである。

S K 749 (139～166) 139～158は土師器の皿である。器壁が薄く直線的に立ち上がるもの、器壁が厚く底部から緩やかに立ち上がるもののほか、口径も様々である。147・148・152・156～158の口縁部には油煙が付着する。なお、140・151・155の色調はやや白っぽい。159・160は土師器の羽釜である。159は口縁部が外側に開き、端部に面を持つ。

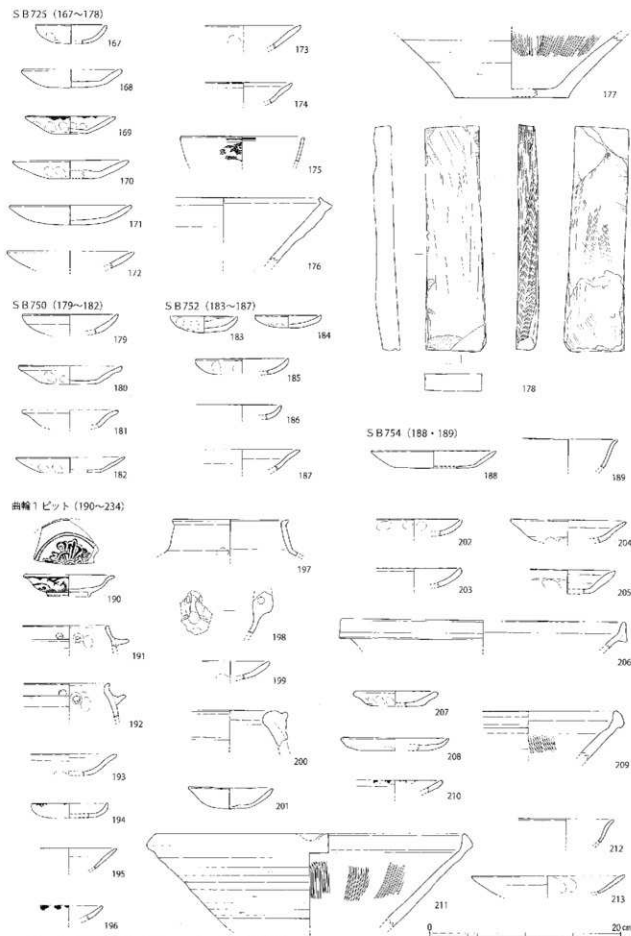
つ。伊藤裕作編年²⁾のⅠa段階～Ⅰb段階のものである。161・162は土師器の茶釜である。直立する口縁部で端部は外側にややつまみ出され、上端に面を持つ。163は瀬戸美濃陶器の天目茶碗で、古瀬戸後Ⅳ期の新段階である。164は瀬戸美濃陶器の灰釉端反皿で、大窯の第1段階のものである。高台端部が尖る。165は瀬戸美濃陶器の播鉢で、大窯の第1・2段階である。166は瀬戸美濃陶器の播鉢である。大窯の第1段階、Ⅰ類で口縁部が上方に伸びる。

S B 725 (167～178) 167～174は土師器の皿である。口縁部が大きく開くものが多い。167・169・171・172の色調は灰白色を呈する。また、169の口縁部には油煙が付着する。175は染付磁器の碗である。なお、168・169・174・175は同一ピットからの出土である。176は常滑陶器の片口鉢2類で、10型式のものである。177は瀬戸美濃陶器の播鉢、大窯の第2～第4段階のものである。178は大型の磁石で、側面にノコギリ痕がある。

S A 745 (138)



第 88 図 伊坂城跡 (第 4～7 次) 遺物実測図 5 (138～166)



第 89 図 伊坂城跡 (第 4~7 次) 遺物実測図 6 (167~213)

S B 750 (179～182) 土師器の皿である。底部から緩やかに内湾するもの、直線的に大きく開くもの、外反するもの様々である。182の色調は灰白色を呈する。なお、180と181は同一ビットからの出土である。

S B 752 (183～187) 土師器の皿である。小型で緩やかに内湾するものが多い。全て同一ビットからの出土である。

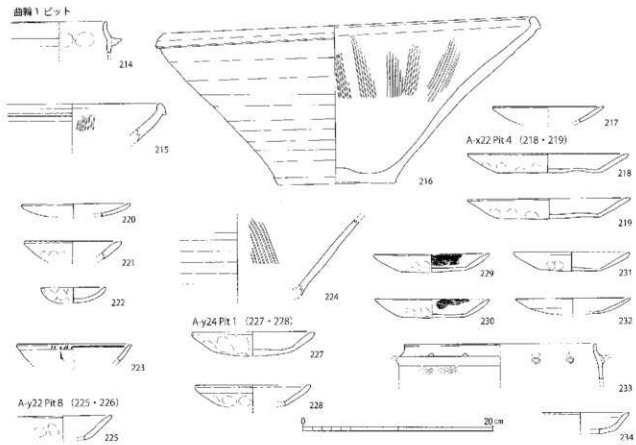
S B 754 (188～189) 188は土師器の皿である。底部から口縁部は直線的に大きく開く。色調は灰白色を呈する。189は白磁の皿で、口縁端部が外反する。

曲輪1・ビット (190～234) 190は染付磁器の端反皿である。口縁端部が大きく外反する。191・192は土師器の羽釜である。口縁部が短く内傾して、端部を肥厚させる。193～196は土師器の皿である。194と196の口縁部には油煙が付着する。なお、193と194は、同一ビットからの出土である。197・198は土師器の茶釜である。197は直立する口縁部で端部は外側につまみ出され、上端に面を持つ。ともに同一ビットからの出土である。199は土師器の皿である。200は常滑陶器の甕である。口縁部の内側が盛り上がり、緑帯が痕跡的に外縁に付着する。10型式のやや新しい時期のものである。199と200は同一ビットからの出土である。201～205は土師器の皿である。201・202・203は底部から緩やかに口縁部に至る。202・203は同一ビットからの出土である。204・205は底部から直線的に大きく口縁部が開く。206は瀬戸美濃陶器の播鉢である。I類、大窯の第2段階で、口縁端部が上下に伸びる。204～206は、同一ビットからの出土である。207・208は土師器の皿である。209は瀬戸美濃陶器の播鉢である。大窯の第3段階の前半である。210は土師器の皿で、口縁部には油煙が付着する。211は瀬戸美濃陶器の播鉢、大窯の第1段階である。210と211は同一ビットからの出土である。212は白磁の端反皿、213は京都系の土師器の皿である。色調は灰白色を呈する。212・213は同一ビットからの出土である。214は土師器の羽釜である。口縁部はやや短く内傾し、端部を肥厚させる。215は瀬戸美濃陶器の播鉢である、大窯の第1段階であろうか。216は

瀬戸美濃陶器の播鉢である。I類で緑帯の幅は狭く、口縁部外面が若干窪む。大窯の第1段階である。217～222は土師器の皿である。底部から口縁部が大きく開くものや底部から緩やかに口縁部に至るものがあり、大きさも様々である。217・218・219・222は色調が灰白色を呈する。218と219は京都系の土師器の可能性があり、同一ビットからの出土である。また、220～222は同一ビットからの出土である。223は染付磁器の皿である。224は瀬戸美濃陶器の播鉢であり、古瀬戸後Ⅳ期の新段階～大窯の第1段階のものである。225は土師器の皿、226は常滑陶器の甕で、10型式である。外面の下半に板ナデによる工具のあたり痕がみられる。口縁部の内側が盛り上がり、緑帯は痕跡的に外縁に付着する形になる。225・226は同一ビットからの出土である。227～232は土師器の皿である。底部から緩やかに口縁部に至るものや口縁部が大きく開くものがある。227・228は口縁端部へ向かい厚みはやや肥厚する。同一ビットからの出土である。229・230は内面に油煙が付着する。229・230・231は同一ビットからの出土である。232は土師器の羽釜で、232と同一ビットからの出土である。234は土師器の皿である。

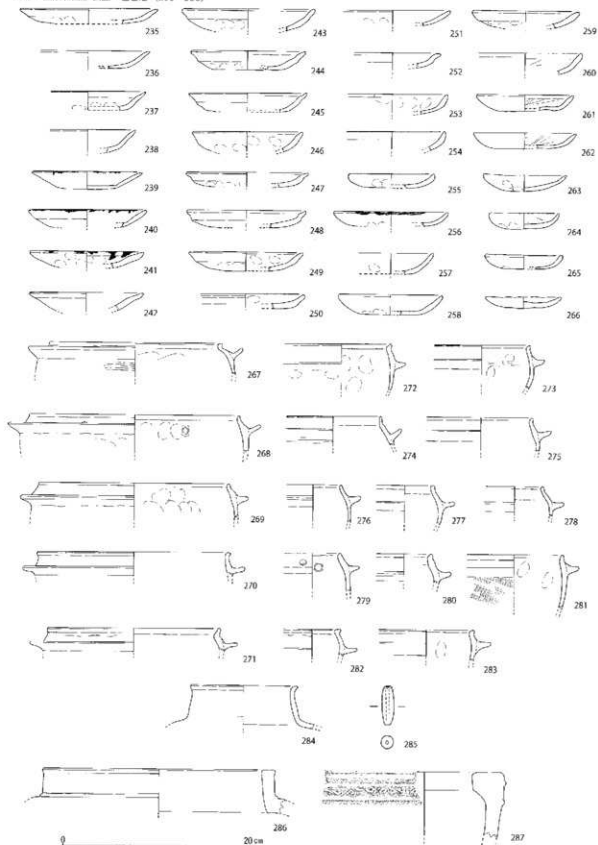
曲輪1上段北西部表土・包含層 (235～338)

235～266は土師器の皿である。器壁が薄いもの、やや厚いもの、口縁部が直線的に大きく開くもの、緩やかに立ち上がるもの、大きさも様々である。239の色調はやや白っぽい。239・240・241・256・263・265・266の口縁部には油煙が付着する。267～283は、土師器の羽釜である。口縁端部がやや外側に開き、面を持つものが多い。284は土師器の茶釜である。285は土鉢である。286は瓦質土師器の風炉である。287は瓦質土師器の火鉢である。288・289は染付磁器の碗・小杯である。290・291は青磁碗、292は桜花皿、293は青磁で器種は不明である。294は磁器の碗、近世の可能性もある。295～307は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。295・296は古瀬戸後Ⅳ期の新段階、297～301は大窯の第1段階、302は大窯の第3段階の後半、303は大窯の第2段階である。304～307は底部の部分、加工円盤である。308～310は瀬戸美濃陶器の灰軸丸碗であ



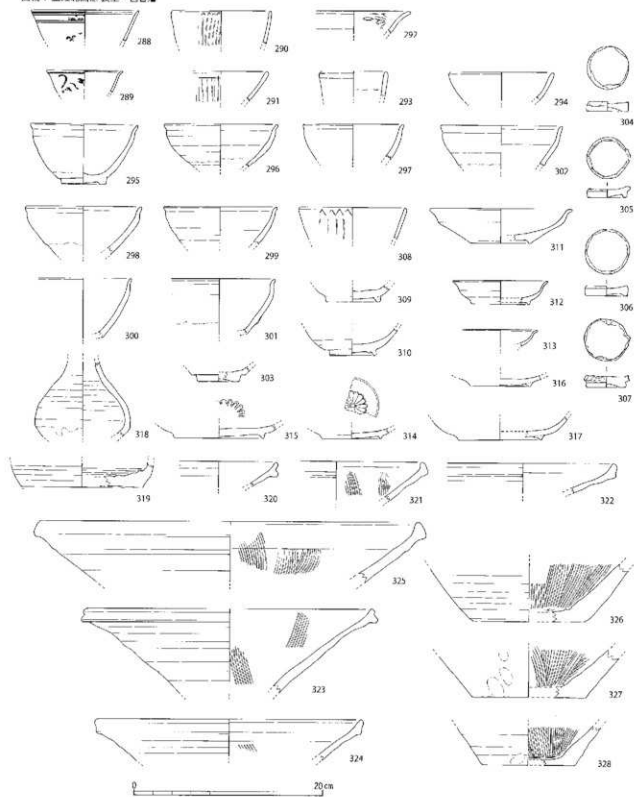
第90図 伊坂城跡(第4～7次) 遺物実測図7(214～234)

曲輪 1 上段北西部表土・包土層 (235~338)



第 91 図 伊坂城跡 (第 4—7 次) 遺物実測図 8 (235—287)

曲輪1 上段北西部表土・包含層



第 92 図 伊坂城跡 (第 4—7 次) 遺物実測図 9 (288—328)

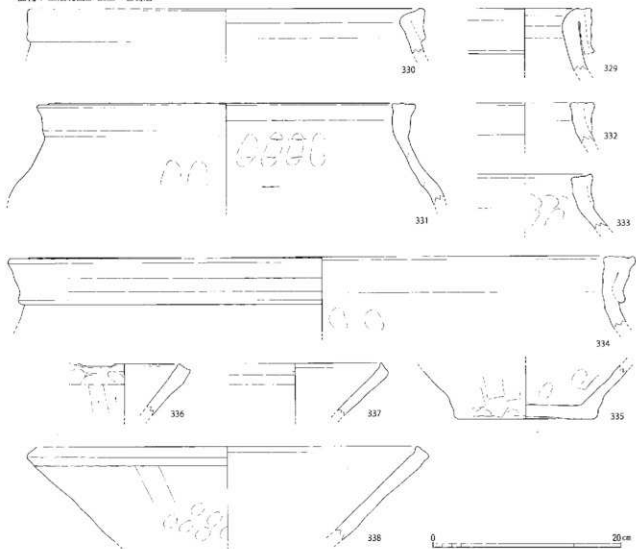
る。308・309は大窯の第1段階、310は大窯の第1段階の後半である。311～313は灰釉端反皿である。いずれも大窯の第1段階のものである。314は灰釉丸皿である。底部内面に印花文が施される。大窯第2段階の前半である。315～317は灰釉端反皿もしくは丸皿である。大窯の第1・2段階である。318は瀬戸美濃陶器の小瓶、大窯の第1段階のものである。319は瀬戸美濃陶器の徳利、大窯の第1・2段階である。320～328は瀬戸美濃陶器の播鉢である。320～324は大窯の1段階、325は大窯の第3段階の前半、326は大窯の第2・3段階、327・328は大窯の第3・4段階である。329～335は常滑陶器の甕である。329は8型式で、緑帯が頸部に接するまでには至っていない。330は10型式で、口縁

部の内側が盛り上がり、緑帯は痕跡的に外縁に付着する。331～334は11型式で、口縁部の内側が角張る。335は底部の破片で、15～16世紀のものである。336～338は常滑陶器の片口鉢2類である。336・338は11型式の赤物で、口縁端部が拡張される。337は12型式である。

曲輪1上段南東部表土・包含層 (339～437)

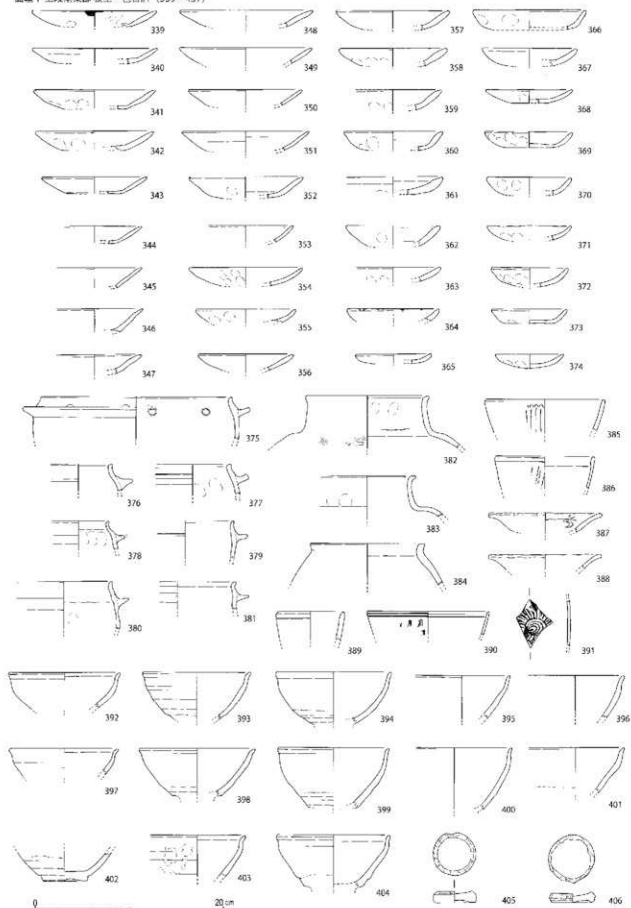
339～374は土師器の皿である。器壁が薄いもの、やや厚いもの、口縁部が直線的に大きく開くもの、緩やかに立ち上がるもの、大きさも様々である。339・355・364の口縁部には油煙が付着する。375～381は土師器の羽釜である。口縁端部がやや外側に開き、面を持つものが多い。382・383は土師器の茶釜である。直立する口縁部で端部は外側に

曲輪1上段北西部表土・包含層



第93図 伊坂城跡(第4～7次) 遺物実測図10(329～338)

血輪 1 上段南東部表土・包含層 (339~437)

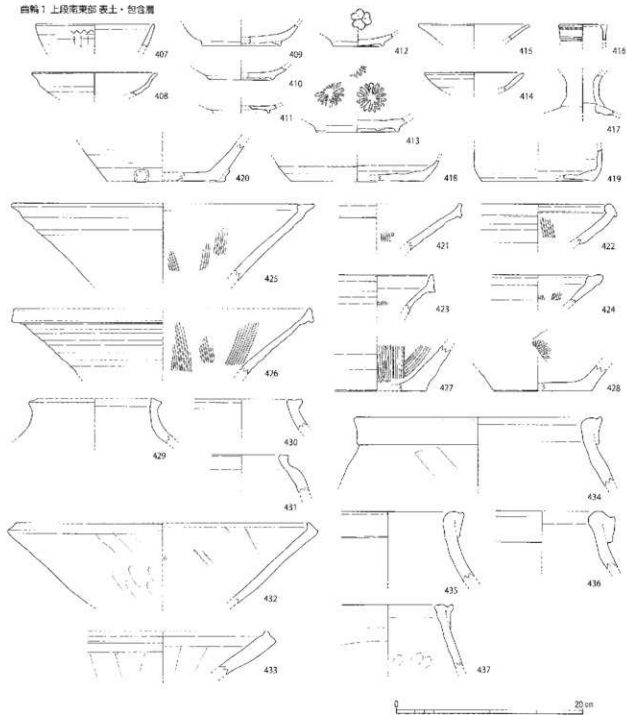


第 94 図 伊坂城跡 (第 4~7 次) 遺物実測図 11 (339~406)

ややつまみ出され、上端に面を持つ。384は土師質であるが、器種は不明。385・386は青磁の碗である。387・388は中国製の青磁棧花瓶である。389は青磁で、壺・瓶・香炉の可能性ある。390は中国製染付磁器の碗である。391は染付であるが、器種は不明である。392～406は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。392～394は古瀬戸後IV期の後半、体部

は直線的で口縁部はやや外反する。395～400は大窯の第1段階、体部の立ち上がりはやや強い。401は大窯の第1段階後半、402・403は大窯の第2段階、404は大窯の第3段階である。405・406は底部片で、加工円盤である。405は大窯の第3段階、406は大窯の第1段階である。407は瀬戸美濃陶器の灰軸丸碗である。大窯の第1段階、外面に連弁文

曲輪1 上段南東部 表土・包含層

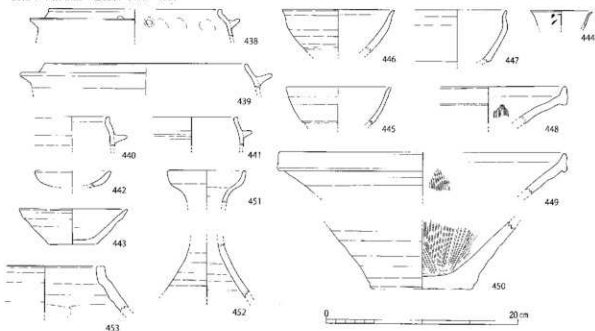


第95図 伊坂城跡(第4～7次) 遺物実測図12(407～437)

が施される。408～413は瀬戸美濃陶器の灰釉端反皿である。409～412は大窯の第1・2段階で、丸皿の可能性もある。その他は大窯の第1段階で、口縁端部や高台端部はやや丸みを持つ。412には片喰(?)、413には菊花の印花文が施される。414は瀬戸美濃陶器の鉄軸椀皿である。大窯の第3段階、口縁はやや外反する。415は瀬戸美濃陶器の灰釉反

り皿である。大窯の第1・2段階である。416は瀬戸美濃陶器の筒形香炉、大窯の第1段階のものである。417は瀬戸美濃陶器の徳利で、古瀬戸後Ⅳ期のものである。418は瀬戸美濃陶器の鉄軸壺の底部である。419は器種不明。420は瀬戸美濃陶器の壁の底部、古瀬戸後Ⅳ期のものである。421～428は瀬戸美濃陶器の播鉢である。421・422は大窯の第1

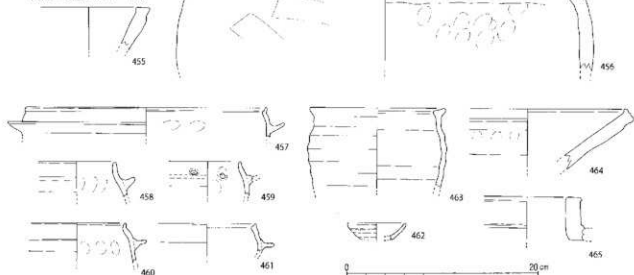
曲輪1 下段 叢土・包倉型 (438～453)



SK723 (454)

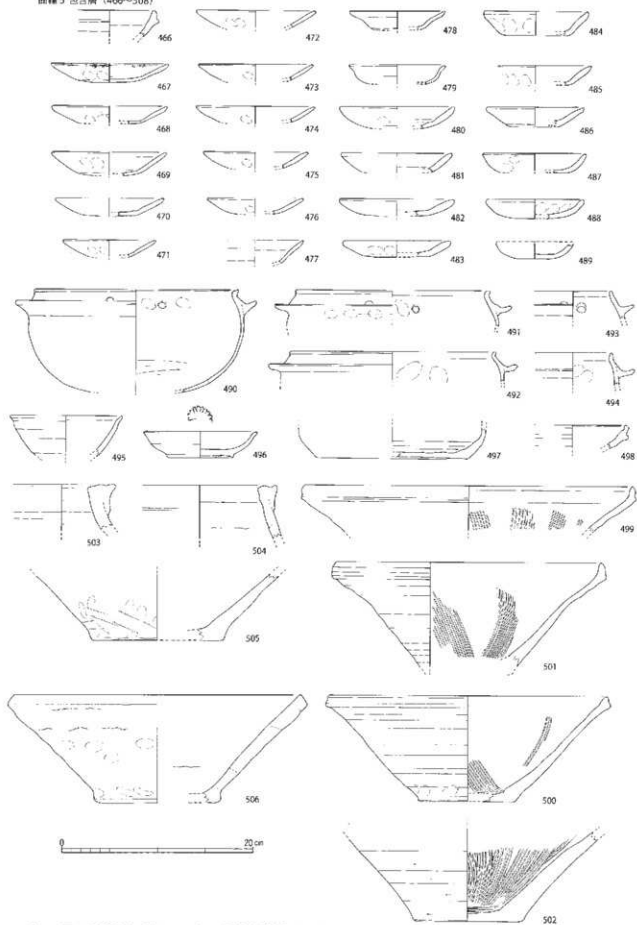


曲輪3 包倉型 (455～465)



第96図 伊坂城跡(第4～7次) 遺物実測図13(438～465)

曲輪5 包含層 (466~508)



第 97 図 伊坂城跡 (第 4—7 次) 遺物実測図 14 (466—506)

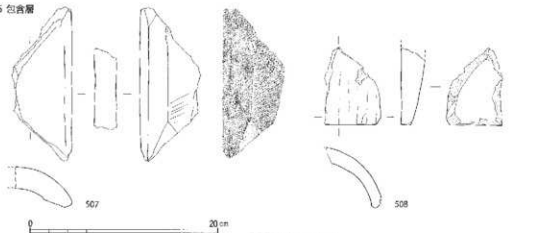
段階、421はⅠ類で、口縁部が上方に伸びる。423～425は大窯の第2段階、423はⅠ類で口縁部が上方にさらに伸びる。424・425はⅡ類で口縁端部は丸みを帯びる。426は大窯の第3段階の前半、口縁部が下方に垂れ下がる。427は大窯の第2・3段階である。429・430は常滑陶器の壺である。ともに12型式のものである。431は常滑陶器の赤物の風炉

である。432・433は常滑陶器の片口鉢2類、432は12型式、433は11型式である。434～437は常滑陶器の甕である。434～436は10型式、口縁部の内側が盛り上がり、縁帯は痕跡程度に外縁に付着する。437は11型式、口縁部の内側が角張る。

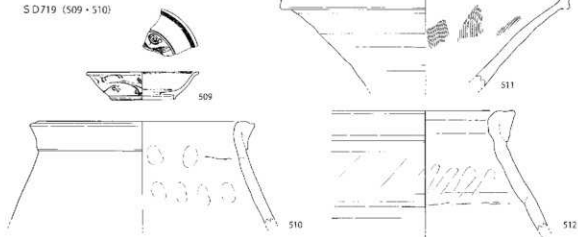
曲輪1下段表土・包含層(438～453)

438～441は土師器の羽釜である。口縁端部はや

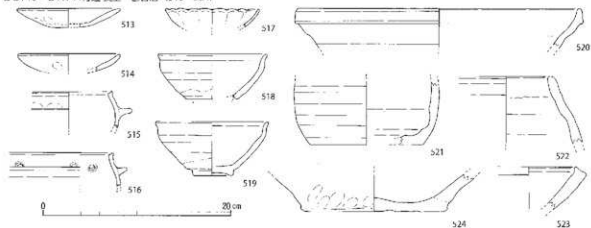
曲輪5 包含層



SD719 (509・510)



SD719・SA744付近表土・包含層(513～524)



第98図 伊坂城跡(第4～7次) 遺物実測図 15(507～524)

や外側に開き、面を持つものがある。442は土師器の皿である。小型で、器壁はやや厚い。443は尾張12型式の山茶碗である。444は染付磁器の小杯である。445～447は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。445は大窯の第1段階、446は大窯の第1段階の後半、447は大窯の第2段階のものである。448～450は瀬戸美濃陶器の播鉢である。448・449は大窯の第2段階、I類で口縁部が上方へ伸びる。450は大窯の第2・3段階である。451・452は瀬戸美濃陶器の徳利である。451は古瀬戸後IV期の新段階、452は大窯の第2・3段階である。453は常滑陶器、器種は不明である。

(2) 曲輪3

S K 723(454) 常滑陶器の片口鉢2類で、12型式の赤物である。

包含層(455～465) 455は常滑陶器の片口鉢2類で、11型式の赤物である。456は常滑陶器の甕で、10型式である。口縁部の内側が盛り上がり、緑帯は痕跡的に外縁に付着する。457～461は土師器の羽釜である。口縁部は外側に開き、端部に面を持つものが多い。462は瀬戸美濃陶器の小碗で、大窯の第2・3段階のものである。463は瀬戸美濃陶器の甕で、大窯の第1・2段階のものである。464は常滑陶器の片口鉢2類で、11型式の赤物である。465は瓦質土器の風炉である。

(3) 曲輪5

包含層(466～508) 466は瀬戸美濃陶器の播鉢である。I類で、大窯の第1段階である。467～489は土師器の皿である。器壁が薄いもの、やや厚いもの、口縁部が直線的に大きく開くもの、緩やかに立ち上がるもの、大きさも様々である。467の口縁部には全面に油煙が付着する。470・473・476・485の色調はやや白っぽい。490～494は土師器の羽釜である。口縁端部がやや外側に開き、面を持つものが多い。495は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。古瀬戸後IV期の新段階である。496は瀬戸美濃陶器の灰軸端反皿である。大窯の第1段階である。497は瀬戸美濃陶器の壺か瓶の底部片である。大窯期のものである。498～502は瀬戸美濃陶器の播鉢である。498～500は大窯の第1段階、501は大窯の第2段階、502は大窯の第2・3段階である。503～505は常

滑陶器の甕である。503・504は11型式で口縁部の内側が角張る。505は底部で、15～16世紀のものである。506は常滑陶器の片口鉢2類で、12型式の赤物である。507・508は瓦瓦である。

(4) 堀底道S D 719付近

S D 719(509・510) 509は中国製の染付の端反皿である。510は常滑陶器の甕である。10型式で、口縁部の内側が盛り上がり、緑帯は痕跡的に外縁に付着する。

S D 722(511・512) 511は瀬戸美濃陶器の播鉢である。大窯の第3段階の前半、I類で口縁部下方は丸みを帯びる。512は常滑陶器の甕である。10型式で、口縁部の内側が盛り上がり、緑帯は痕跡的に外縁に付着する。

S D 719・S A 744付近表土・包含層(513～524) 513・514は土師器の皿である。513の色調は白っぽい。515・516は土師器の羽釜である。ともに口縁部は外側に開き、端部に面を持つ。517は白磁の剪皿である。518・519は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。518は古瀬戸後IV期の新段階、519は大窯の第3段階の前半である。520は瀬戸美濃陶器の播鉢である。大窯の第2段階、I類で口縁端部は上方へ伸びる。521は瀬戸美濃陶器の甕で、古瀬戸後IV期である。522は常滑陶器であるが器種は不明、12型式のものである。523は常滑陶器の片口鉢2類で、12型式の赤物である。524は常滑陶器の甕で、15～16世紀のものである。

(5) 曲輪2

S K 901(525) 土師器の皿である。器壁が薄く、外側に大きく開く。口縁端部に油煙が付着する。

S K 902(526・527) 526は土師器の皿で、器壁が厚く、外側に大きく開く。口縁部から内面に油煙が多量に付着する。527は土師器の羽釜である。

S K 903(528) 常滑陶器の片口鉢2類である。11形式で、口縁端部が拡張される。

S B 907(529～532) 529は瀬戸美濃陶器の仏前具で、大窯の第1段階のものである。530は瀬戸美濃陶器の花瓶で、古瀬戸後IV期のものである。531・532は瀬戸美濃陶器の播鉢である。531はII類で、大窯の第3段階の後期のものと思われる。

表土・包含層・ピット(533～559) 533は瀬

戸美濃陶器の天目茶碗である。古瀬戸後Ⅳ期の新段階のものである。534は瀬戸美濃陶器の祖母権茶壺で、大窯期のものである。535は土師器の皿である。器壁はやや厚く、底部から緩やかに口縁部に至る。536は瀬戸美濃陶器の播鉢である。大窯の第1段階である。537は常滑陶器の甕の底部である。15～16世紀のものである。538～541は土師器の皿である。底部から緩やかに口縁部に至るもの、口縁部が大きく開くものなどがある。542～547は土師器の羽釜である。口縁端部が外側に開き、面を持つものが多い。548は中国製の青磁花皿である。549は中国製の染付磁器碗である。550・551は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。ともに大窯の第1段階のものである。552は瀬戸美濃陶器の鉢である。大窯の第3段階の前半のものである。553～557は瀬戸美濃陶器の播鉢である。553・554は大窯の第2段階、Ⅰ類で口縁部が上方に伸びる。555は大窯の第3段階の前半、Ⅰ類で口縁端部が下方にも伸びる。556は大窯の第3段階の後半、Ⅰ類である。557は大窯の第1段階である。558は常滑陶器、器種は壺の可能性が大きい。559は常滑陶器の片口鉢Ⅱ類で、Ⅰ1型式の赤物である。

(6) 曲輪4

S Z 928 (560～563) 土師器の羽釜である。内傾する口縁部で、端部はやや肥厚する。

表土・包含層 (564～605) 564～572は土師器の皿である。564・565は器壁が薄く、平らな底部から口縁部は直線的に大きく開く。大型で色調はやや白っぽい。その他、器壁がやや厚く、底部から緩やかに口縁部に至るもの、内湾気味になるものなどがある。573～578は土師器の羽釜である。内傾する口縁部で、端部はやや肥厚するものや、面を持つものが多い。579は土師器の茶釜である。580は染付磁器の碗である。581は青磁の碗である。582は白磁の口壳皿である。583は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。大窯の第1段階である。584は瀬戸美濃陶器の灰軸端反皿である。大窯の第1段階で、高台や口縁端部はやや丸みを帯び、底部内面に菊花の印花文が施される。585は中国製の白磁の端反皿である。586は瀬戸美濃陶器の小壺、茶入れか。大窯の第1段階である。587・588は瀬戸美濃陶器の

袴腰形香炉である。587は古瀬戸後Ⅳ期の新段階、588は古瀬戸後Ⅳ期である。589は瀬戸美濃陶器の口広有耳壺である。古瀬戸後Ⅳ期の古段階である。590は瀬戸美濃陶器の仏前具である。大窯の第1段階である。591は瀬戸美濃陶器の徳利である。古瀬戸後Ⅳ期のものであろうか。592は瀬戸美濃陶器の小瓶である。大窯の第1段階である。593は瀬戸美濃陶器の花瓶である。大窯の第1段階である。594～597は、瀬戸美濃陶器の播鉢である。594は大窯の第1段階で、Ⅰ類である。595・596は大窯の第2段階、Ⅰ類で口縁端部は上方に伸びる。597は大窯の第3・4段階の底部である。598～601は常滑陶器の甕である。598は10型式である。口縁部の内側が盛り上がり、緑帯は痕跡的に外縁に付着する。599は11型式である。口縁部の内側が角張る。600・601は底部で15～16世紀のものである。602は常滑陶器の壺で、15～16世紀のものである。603は常滑陶器の片口鉢Ⅱ類の11型式で、口縁端部が拡張される。604は石臼である。605は須恵器の杯である。

(7) 堀切 S D 910

S D 910 (606・607) 606は常滑陶器の甕、10型式である。607は瀬戸美濃陶器の播鉢である。大窯の第3段階の後半、Ⅰ類で、口縁部上端は丸く膨らむ。

S D 921 (608) 土師器の羽釜である。内傾する口縁部で、端部はやや肥厚する。

(8) 曲輪6～12

S K 729 (609) 土師器の皿である。器壁はやや厚く、口縁部は底部から緩やかに立ち上がる。

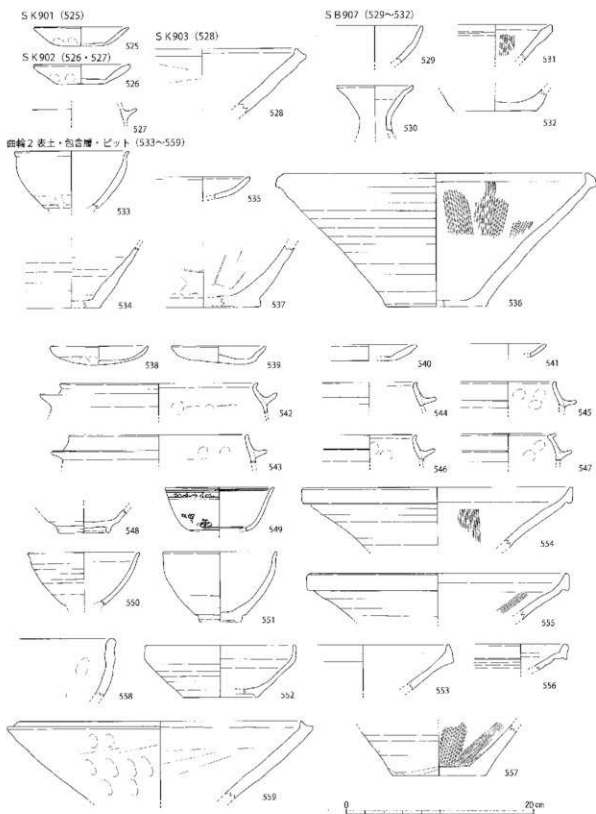
S K 731 (610) 土師器の羽釜である。口縁部は内傾せず、端部は横に張り出して肥厚させる。

S D 746 (611～613) 瀬戸美濃陶器の端反皿である。大窯の第1段階で、高台端部や口縁端部がやや丸みを帯びる。

S D 747 (614～616) 614は土師器の皿である。器壁は厚く、底部は丸い。615・616は土師器の羽釜である。口縁部は内傾し、端部はやや肥厚する。

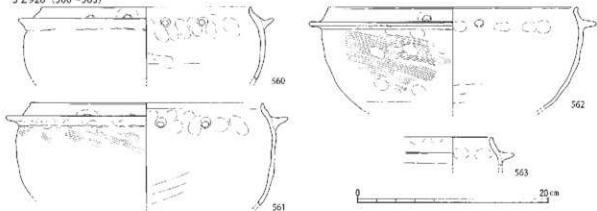
曲輪 12旧表土直上・トレンチ (617～619)

617は常滑陶器の片口鉢Ⅱ類、Ⅰ1型式の赤物で、口縁端部が拡張される。618は瀬戸美濃陶器の播鉢

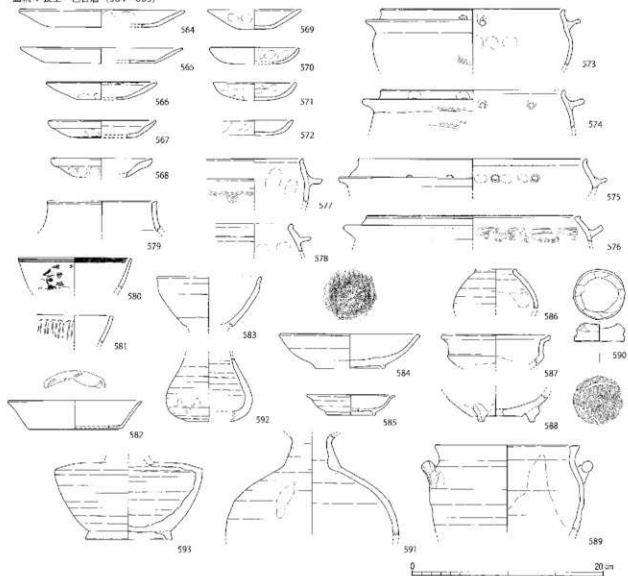


第 99 図 伊坂城跡 (第 4—7 次) 遺物実測図 16 (525—559)

S 2928 (560~563)

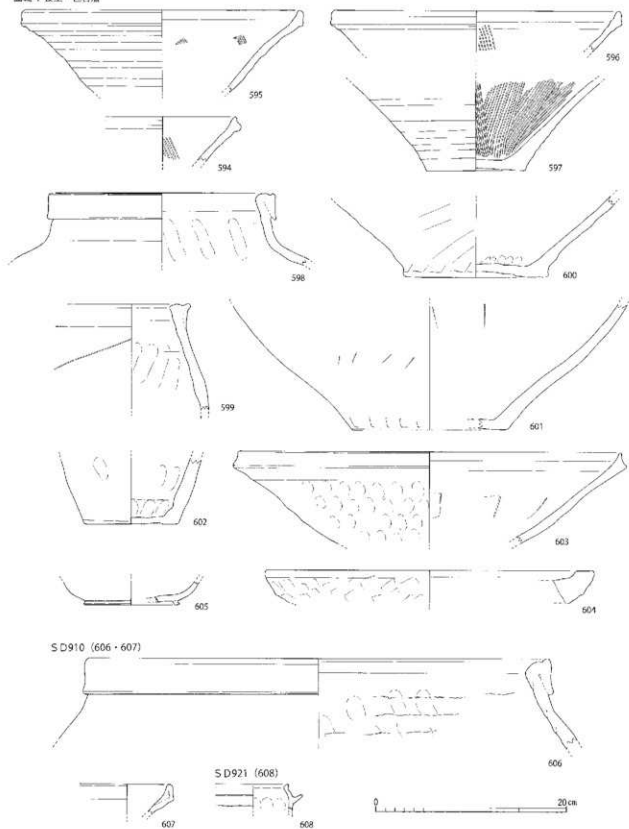


曲輪4 表土・包合層 (564~605)

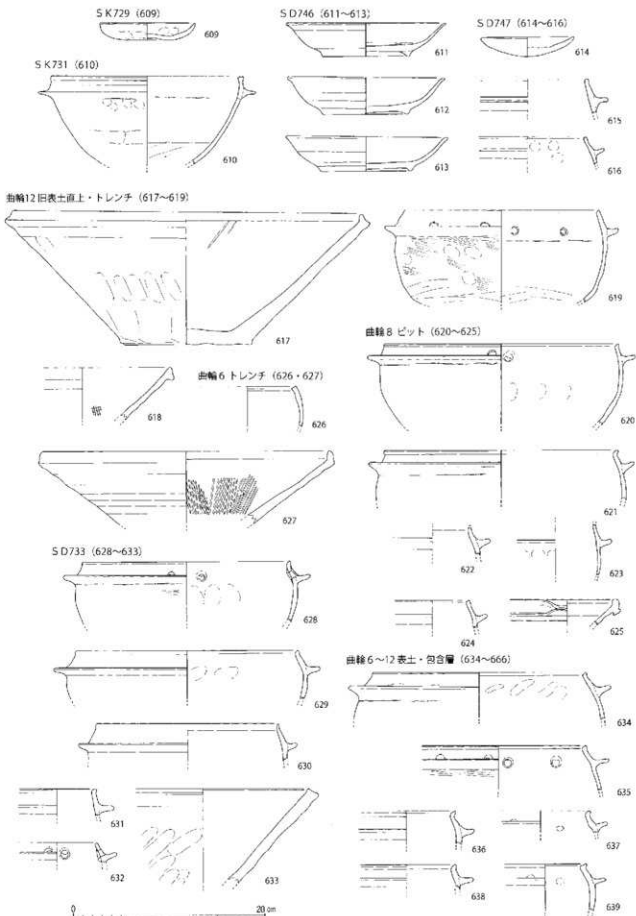


第 100 図 伊坂城跡 (第 4~7 次) 遺物実測図 17 (560~593)

曲輪4 表土・包含層

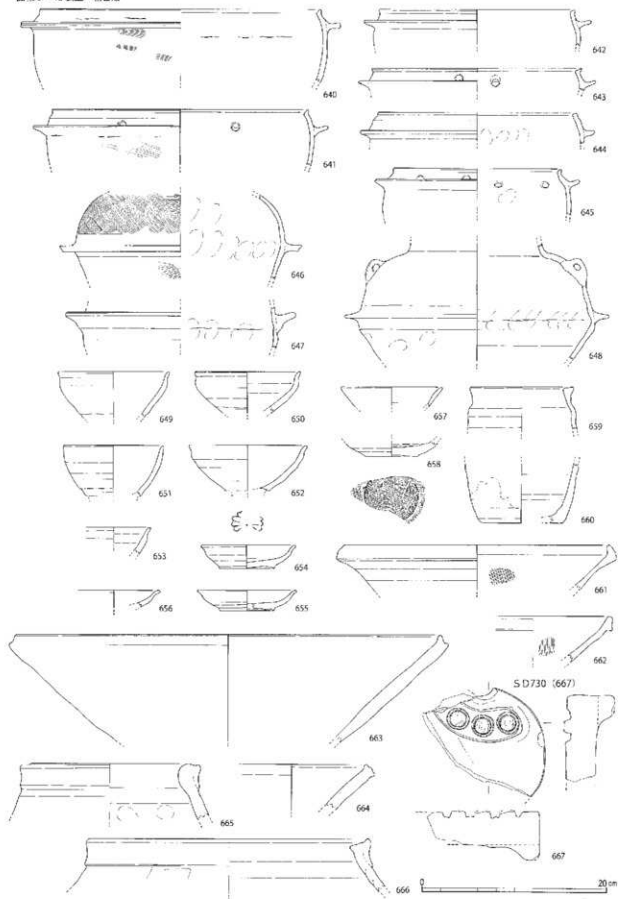


第 101 図 伊坂城跡 (第 4～7 次) 遺物実測図 18 (594～608)



第 102 図 伊坂城跡 (第 4~7 次) 遺物実測図 19 (609~639)

白輪6~12表土・包含層



第 103 図 伊坂城跡 (第 4~7 次) 遺物実測図 20 (640~667)

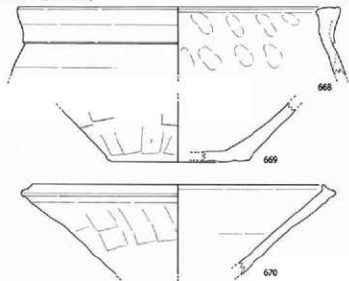
である。大窯の第1段階のものである。619は土師器の羽釜である。口縁部はやや内傾する。

曲輪 8 ビット (620～625) 620～624は土師器の羽釜である。口縁部はやや内傾し、端部に面を持つものが多い。625は瀬戸美濃陶器の播鉢である。大窯の第3段階の後半、1類で口縁部の下方が外側に引き出される。

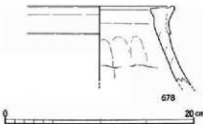
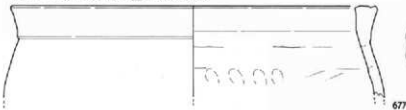
曲輪 6 トレンチ (626・627) 626は土師器の内耳鍋である。緩やかに内湾する。627は瀬戸美濃陶器の播鉢である。大窯の第1段階のものである。

S D 733 (628～633) 628～632は土師器の羽釜である。口縁部は内傾し、端部がやや肥厚するものが多い。633は常滑陶器の片口鉢2類で、12型式の赤物である。

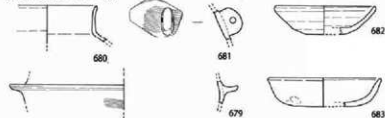
SD917 (668～670)



曲輪14～16 表土・包含層・ビット (672～678)



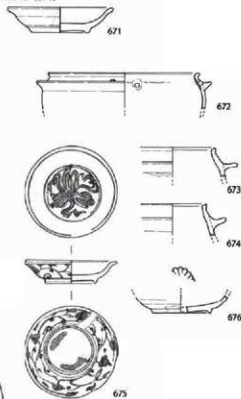
第5次 包含層 (679～683)



曲輪 6～12 表土・包含層 (634～666)

634～645は、土師器の羽釜である。口縁部は内傾し、端部が肥厚するものや面を持つものがある。646～648は土師器の茶釜である。649・650は瀬戸美濃陶器の天目茶碗で、古瀬戸後IV期の新段階である。651は瀬戸美濃陶器の丸碗である。大窯の第1段階であろうか。652・653は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。652は大窯の第1段階、653は第4段階である。654～656は瀬戸美濃陶器の端反皿である。654・655は大窯の第1段階で、654の底部内面には、菊花の印花文が施される。656は大窯の第1段階の後半のものである。657は瀬戸美濃陶器の椀皿で、大窯の第2段階のものである。658は瀬戸美濃陶器の縁軸はさみ皿で底部外面に糸切り痕が

SK912 (671)

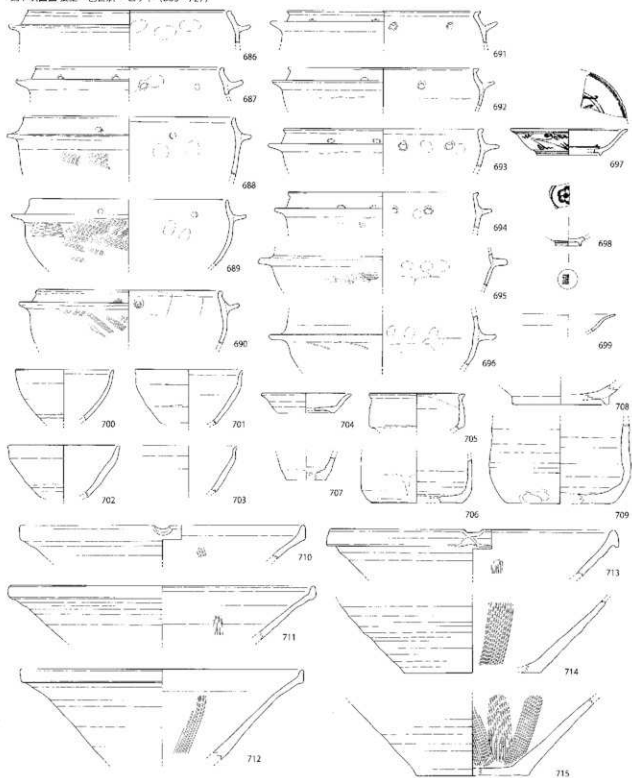


第104図 伊坂城跡(第4～7次) 遺物実測図 21(668～683)

S K 1014 (684)

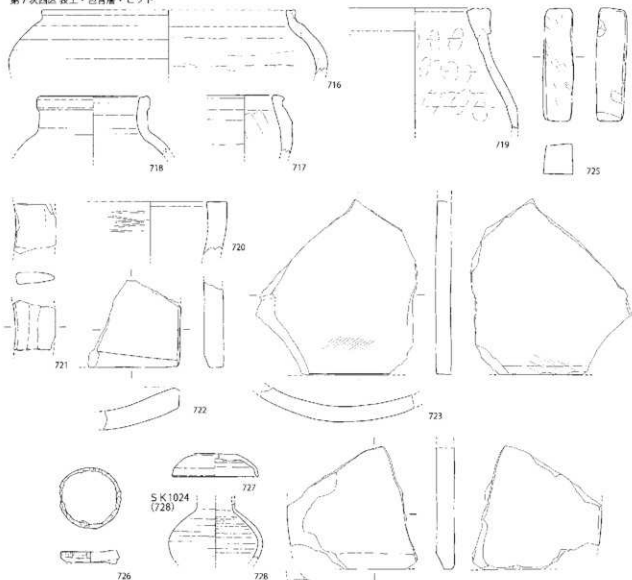


第7次西区表土・包含例・ビット (685~727)

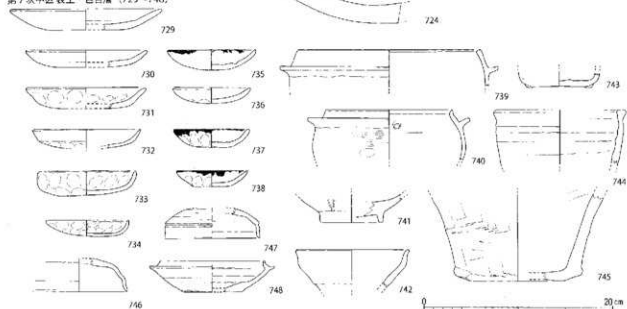


第 105 図 伊坂城跡 (第 4-7 次) 遺物実測図 22 (684-715)

第7次西区表土・包含層・ビット



第7次中区表土・包含層 (729~748)



第 106 図 伊坂城跡 (第 4~7 次) 遺物実測図 23 (716~748)

残る。大窯の第1段階のものである。659は瀬戸美濃陶器の口広有耳壺、660は瀬戸美濃陶器の壺で、ともに古瀬戸後Ⅳ期のものである。661・662は瀬戸美濃陶器の搦鉢である。661は大窯の第2段階、662は大窯の第4段階前半のものである。663・664は常滑陶器の片口鉢2類、Ⅱ型式で口縁端部が拡張される。665・666は常滑陶器の壺である。665は10型式、666は11型式である。

S D 730 (667) 667は鬼瓦の一部である。

(9) 曲輪 14～16

S D 917 (668～670) 668・669は常滑陶器の壺である。668はⅡ型式、669はⅢ～Ⅳ型式である。670は常滑陶器の片口鉢2類で、Ⅱ型式の赤物である。

S K 912 (671) 671は瀬戸美濃陶器の灰釉端反皿である。大窯の第1段階後半のものである。

表土・包含層・ピット (672～678) 672～674は土師器の羽釜である。口縁部はやや内傾し、端部に面を持つものが多い。675は染付磁器の端反皿である。676は瀬戸美濃陶器の灰釉端反皿もしくは丸皿である。大窯の第1・2段階で、底部内面に菊花の印花文が施される。677・678は常滑陶器の壺である。ともに第Ⅱ型式で、口縁部の内側が角張る。

2 第5次調査

包含層 (679～683) 679～681は土師器の茶

釜である。680の口縁部は直立し、端部外側につまみ出される。682は尾張第12型式の山茶碗である。683土師器の杯である。古代のものであろう。

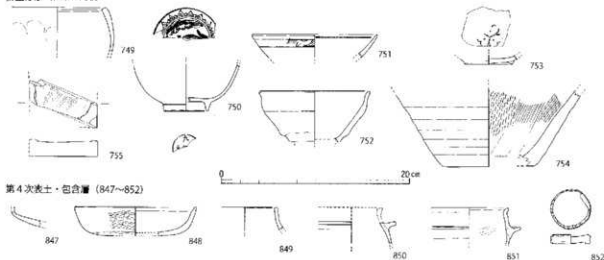
3 第7次調査

(1) 西区

S K 1014 (684) 瀬戸美濃陶器の搦鉢である。大窯の第3段階の前半、Ⅰ類で口縁部の下方が丸みを帯び斜めに伸びる。

表土・包含層・ピット (685～727) 685は瀬戸美濃陶器の端反皿である。大窯の第1段階で、高台や口縁端部がやや丸みを帯びる。686～694は土師器の羽釜である。686は口縁部がやや内傾し、端部外面下を若干肥厚させるが、その他は口縁部がやや内傾し、端部に面を持つものが多い。695・696は土師器の茶釜である。696の内面はケズリ調整を施す。697は染付磁器の端反皿、698は染付磁器の小杯、699は白磁の端反皿である。700～703は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。いずれも概ね大窯の第1段階であるが、702は大窯の第1段階の後半であらう。704は瀬戸美濃陶器の棧皿である。大窯の第2段階で、口縁部の外反が強い。705は瀬戸美濃陶器の香炉で、大窯の第1段階であらうか。706は瀬戸美濃陶器、大窯期の壺である。707は瀬戸美濃陶器の小壺もしくは小瓶で、古瀬戸後期のものである。708は瀬戸美濃陶器、大窯期の鉢である。709は瀬戸美濃陶器の壺で、古瀬戸後Ⅳ期のものであ

緑土ほか (749～755)



第107図 伊坂城跡(第4～7次) 遺物実測図 24(749～755・847～852)

る。710～715は瀬戸美濃陶器の描鉢である。710～712は大窯の第1段階のI類で、口縁部が上方にやや伸びる。713は大窯の第3段階の前半のI類で、口縁部が下方に斜めに伸びる。714は古瀬戸後Ⅳ期の新段階～大窯の第1段階、715は大窯の第1・2段階のものであろう。716は常滑陶器の風炉、717は常滑陶器の赤物の壺であらうか。718は常滑陶器の壺で、11型式である。玉縁の口縁部で内外面ともに角張った形である。719は常滑陶器の壺で、口縁部の内側が角張る。11型式である。720は瓦質土器の鉢である。721は瓦質の土器であるが、器種は不明である。722～724は平瓦である。725は紙石で6面全部使用痕がある。726は山茶碗の底部で、いわゆる加工円盤である、尾張第6型式である。727は須恵器の杯蓋で飛鳥時代頃のものであろうか。

(2) 中区

S K 1024 (728) 古墳時代の須恵器の壺である。表土・包含層(729～748) 729～738は土師器の皿で、口縁部が大きく直線的に開くもの、内弯するもの、底部から口縁部が緩やかに開くものなど様々である。729はやや大型の皿である。735・737・738は口縁部に油煙が付着する。739・740は土師器の羽釜である。739の口縁部はやや内弯し、740の口縁部は内傾し端部に面を持つ。741は青磁の碗である。742は瀬戸美濃陶器の天目茶碗である。大窯の第4段階前半のものである。743は瀬戸美濃陶器の袴腰形香炉で、古瀬戸後Ⅳ期のものである。744は瀬戸美濃陶器の壺で、古瀬戸後Ⅳ期のものである。745は常滑陶器の壺で、15～16世紀のものである。746・747は須恵器の杯蓋、748は須恵器の杯身である。概ね6世紀の後半～7世紀の前半のものであろう。

4 第4次調査

表土・包含層(847～852) 847は須恵器の壺の肩部小片である。848は土師器の杯で、奈良時代のものであろうか。849～851は土師器の羽釜である。851は口縁端部を肥厚させる。852は瀬戸美濃陶器の天目茶碗、いわゆる加工円盤である。

5 その他

排土ほか(749～755) 749は土師器の内耳鍋である。口縁端部にかけて緩やかに肥厚し内弯する。750・751は朱付磁器の碗である。750の口縁端部は不明であるが、内弯し深い形状をする。底部外面に「天」の文字を含む何らかの文句が描かれる。752は瀬戸美濃陶器の天目茶碗で、大窯の第1段階のものである。753は瀬戸美濃陶器の端反皿もしくは丸皿である。大窯の第1・2段階のもので、底部内面には片喰(?)の印花文が施される。754は瀬戸美濃陶器の描鉢である。大窯の第2・3段階のものである。755は石製品の硯である。(服部)

6 金属製品

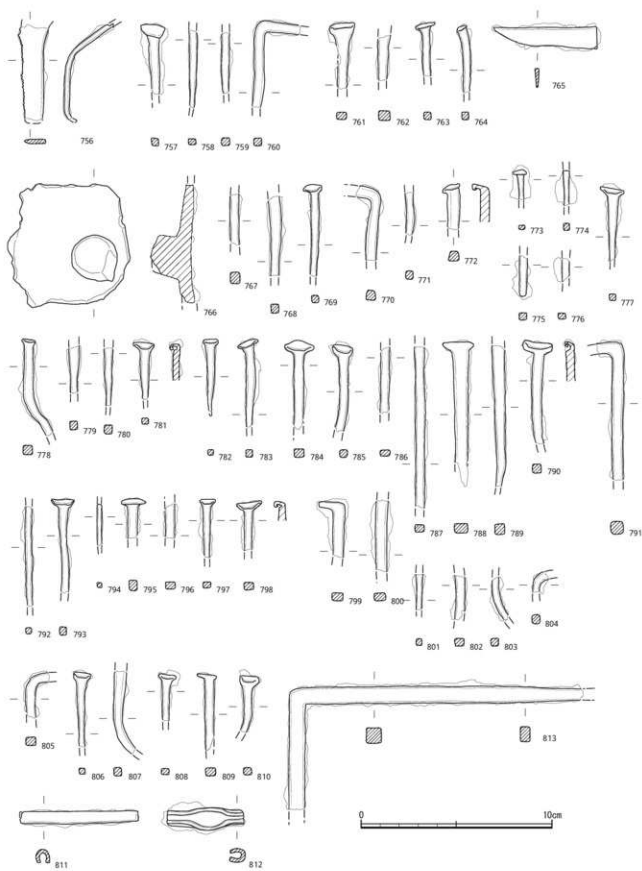
曲輪1遺構出土鉄製品(756～766) 756は鋸で、図上左側面にわずかが歯を確認できる。大きく変形しているため、鉄素材として再利用を試みたと考えられる。757は釘で頭部を打ち延ばして丸めて成形している。こうした成形法による釘を建築用語にしたがって、かしら巻き釘と呼称しておく。758・759・760・762は棒状を呈しており、釘の身部と思われる。765は刀子の一部と考えられる。図上の右端が直線的であることから、刃部をノミ等で切断した可能性がある。素材として再利用を試みたと考えられる。766は鋼等の一部と考えられる。鋳果の可能性をもつ空洞がX線写真において観察できたことから、鋳造品と判断した。円形の突出部が湯口あるいは湯道などの可能性がある。

曲輪1ビット出土鉄製品(767～783) 769・772・773・777・778・781～783はかしら巻き釘である。767・768・771・774～776・779・780は棒状製品で釘の身部と思われる。770は矩形に折り曲がっているので、鋸の可能性はある。

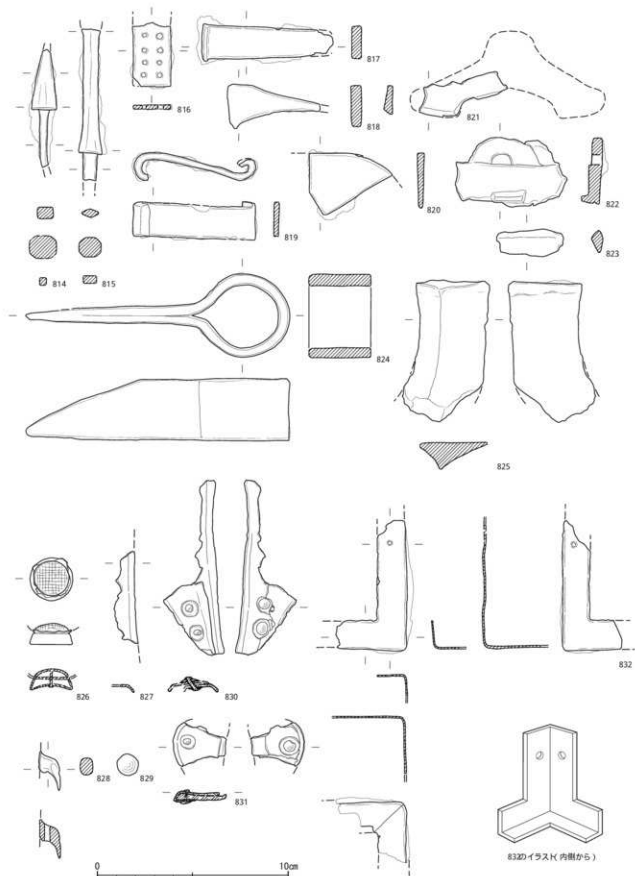
表土・包含層出土鉄製品(784～825)

(1) 釘・棒状製品など

曲輪1から出土した784・785・788・790はかしら巻き釘、786・787・789・791・792は棒状製品で釘の身部と思われる。791は矩形に折り曲がっているため、鋸の可能性はある。曲輪5から出土した793・795・797・798はかしら巻き釘、794・796・



第 108 図 伊坂城跡 (第 4～7 次) 遺物実測図 25 (756～813. 金属製品)



第 109 図 伊坂城跡(第 4~7 次) 遺物実測図 26(814~832 金属製品)

800～804は棒状製品で釘の身部と思われる。799は、他と異なり、頭部を折り曲げて形成した釘と考えられる。それ以外から出土した806・808はかしら巻き釘、805・807は棒状製品で釘の身部と思われる。曲輪17から出土した809・810はかしら巻き釘である。811・812は断面がU字状を呈しているが、用途は不明である。813はL字形で断面が方形を呈するが、所属時期にやや不確定な要素を残し、近世の遺物である可能性を残す。

(2) 武器・武具

814・815は鎌である。814の鎌身は、長さ3.2cmと短く、断面は長方形から八角形を呈する。津野仁氏による分類⁹⁾に従えば、鑿根Ⅱ式あるいは丸根Ⅱ式あるいは角根Ⅱ式に相当し、戦国時代の所産と考えられる。814は、津野氏のいう柳葉1式に相当する可能性があり、その形態から14～16世紀と考えられる。816は小札で、長さ3.4cm以上、幅2.0cmで、直径2mm程度の孔が2列に穿たれており、8個残存している⁹⁾。

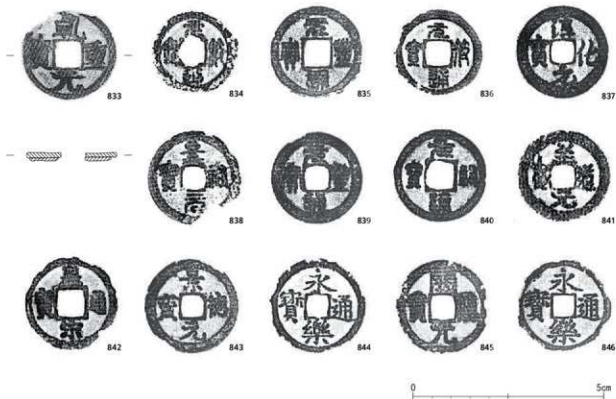
(3) 工具等

817は工具等の柄杓と考えられる。819は素材として再利用を試みたようで、図上の左端が折り曲

がっている。818は鎌等の一部、819は工具等の一部と考えられ、後者はS字状に曲げられている。820は鎌等の刃部で、ノミ等で切断したと考えられる。821は火打金の一部と考えられる。822は長方形部分に半円形部分が付き、器種は不明である。X線写真では、不鮮明だが半円形部分に孔が穿たれている可能性がある。823は板状製品で、断面は三角形を呈する。X線写真から鑄造品の可能性が考えられる。824は匙口状製品。匙口とは、長い柄の先にトビのくちばしに似た鉄製品を取り付けた道具で、丸太の運搬・移動や木造建物の解体等に使用する。輪状を呈する部分の内面には深さ1mmの溝が数条観察できる。当初、出土位置から門扉の肘金具の可能性も考慮したが、X線写真で目釘孔は確認できなかったため、その可能性は極めて低い。825は器物の脚部と考えられ、断面は三角形である。器物との接合面にはごくわずかな盛り上がりが認められる。821～823・825は無数の亀裂が認められることから、十分温度が上がりがきらない状態で再利用のための加工等を行った可能性がある。

銅・鉛製品 (826～832)

金銅製品1点、青銅製品5点、鉛製品1点が出土



第110図 伊坂城跡(第4～7次) 遺物実測図27(833～846、金属製品)

している。826は金銅製の花形飾り金具である。凸面には鍍金後、格子文が線刻してある。格子文のある凸部の周囲には、花弁状の飾りが取りついていたものと思われ、その基部のみが残存している。裏面は凹面を呈し、中央には紙が打ち込まれている。X線写真を考慮すれば、断面図のような複雑な構造を有すると推測される。なお、出土したS E 707には近世の遺物が含まれるので、所属時期には不安定な要素が残る。827は青銅製飾金具でS B 907から出土した。取り上げ時の不手際により、S B 907付近の表土からの出土となっている830・831も同じ金具と考えられる。これらは、棟門と想定されるS B 907に伴う飾り金具の可能性がある。828は厚さ約1mmの板状製品で約45°折り曲げている。器種は不明であるが、器物の把手状を呈し、基部には方形の孔が貫通している。829は火縄銃の弾である。A - v21Pit 1の播鉢の下から出土した。材質は鉛製で、直径11mm、6.73gである⁸⁾。風化等によって軽量となっている可能性がある。832は木箱等の隅角金具である。長辺6.7cm以上、厚さ1～2mmで、直径2mmの孔が穿かれている。1枚の青銅板を折って成形しており、底面は折り合わせ部が確認できる。

銭貨 (833～846)

曲輪1などから15枚(銭種不明1枚を含む)が出土した。833はA - v21Pit 1出土の乳元重寶、834はS E 707出土の元符通寶で、他は表土や包含層からの出土である。内訳は、唐銭2枚(開元通寶845、乳元重寶833)、北宋銭(淳化元寶837、至道元寶841、景德元寶843、景祐元寶838、皇宋通寶842、元豊通寶835・839、元祐通寶840、元符通寶834・836)、明銭2枚(永樂通寶844・846)である。なお、乳元重寶の裏面には種類不明の銭貨1枚が錆着している。

他に、時代は新しいが、表土から寛永通寶が9枚出土した。(高松・松永)

【註】

- ①瀬戸美濃陶器および山茶碗については藤澤良祐氏に、常滑陶器については中野晴久氏にご教示頂いた。
- ②伊藤裕偉「中北勢地域の中世土器」『三重県史 資料編 考古2 (三重県 2008年)』

- ③橋場信雄『建築用語図解辞典』(理工学社 1970年)
- ④津野仁「古代・中世の鉄器」『物質文化54』(物質文化研究会 1990年)
- ⑤小札の幅は古い時代は幅広く、時代が降るにしたがって細くなる傾向が指摘されている。鎌倉時代後期の小札幅は約3cm、室町時代末期頃には幅1～2cmのものもあるという。
・笹間良彦『図解日本甲冑事典』(雄山閣出版 1988年)
- ⑥当時の弾は6匁(1匁=3.75g)が標準だったとされるから、かなり小さい。
・市立長浜歴史博物館「特別展国友鉄砲造治-その世界-改訂版」(1991年)
・片岡博「江州国友鉄砲造治と力尾城の関係」『力尾城跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2001年)

【参考文献】

- 【瀬戸美濃陶器】
- ・藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』(1982年)
 - ・藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ-古瀬戸後期様式の編年-」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅱ』(1991年)
 - ・藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号(三重県埋蔵文化財センター 1994年)
 - ・(財)瀬戸市埋蔵文化財センター編『研究紀要』第5輯(1997年)
 - ・藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』(古志書院 2008年)
- 【常滑陶器】
- ・中野晴久「赤羽・中野[生産地における編年について]」『全国シンポジウム「中世常滑焼をとおして」資料集』(日本福祉大学知多半島総合研究所 1994年)
 - ・中野晴久「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』(中世土器研究会 1995年)
- 【銭貨】
- ・永井久美男「中世の出土銭」(兵庫埋蔵財調査会 1994年)

第6表 伊坂城跡(第4～7次) 遺物観察表(1 / 17)

調査年度	調査地区	発見	発見層	位置		出土	形状・数量	材質	用途	所出	備考	図録	写真	備考	
				掘削区画	調査区画										
1	600-6	土師器	雑瓦	4-223	②00704	14.6	—	—	内:テラコッタ・ハコ	表	焼	焼	焼	焼	—
2	600-3	雑瓦	瓦	4-721	②00704	19.4	—	—	焼いた土の瓦内面至期	表	瓦	瓦	瓦	瓦	1層外周に設置
3	600-5	瀬戸瓦器	雑瓦	4-922	②00704	49.6	2.2	5.9	内:テラコッタ 飯山高砂 内:テラコッタ	表	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
4	600-4	瀬戸瓦器	雑瓦	4-923	②00704	9.9	2.4	5.2	内:テラコッタ 内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
5	600-7	瀬戸瓦器	雑瓦	4-922	②00704	—	—	11.9	内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
6	600-1	青磁陶器	鏡	4-922	②00704	26.8	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	鏡	鏡	鏡	鏡	1層式
7	600-2	青磁陶器	鏡	4-922	②00704	—	—	11.9	内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	鏡	鏡	鏡	鏡	1層式
8	600-2	青磁陶器	鏡	4-724	②00704	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	鏡	鏡	鏡	鏡	1層式
9	600-7	土師器	瓦	4-924	②00705	14.7	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
10	600-4	土師器	瓦	4-924	②00705	14.6	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
11	600-3	土師器	瓦	4-924	②00705	14.2	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
12	600-10	土師器	瓦	4-924	②00705	13.4	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
13	600-8	土師器	瓦	4-924	②00705	12.4	2.8	2.5	内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
14	600-8	土師器	瓦	4-924	②00705	11.3	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
15	600-1	土師器	瓦	4-924	②00705	10.9	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
16	600-11	土師器	瓦	4-924	②00705	11.9	1.8	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
17	600-2	土師器	瓦	4-924	②00705	9.6	1.9	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
18	600-4	土師器	中瓦	4-924	②00705	10.6	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
19	600-6	土師器	雑瓦	4-924	②00705	26.4	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
20	600-3	土師器	雑瓦	4-924	②00705	19.4	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
21	600-2	土師器	雑瓦	4-924	②00705	26.4	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
22	600-3	土師器	雑瓦	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
23	600-9	土師器	雑瓦	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
24	600-4	土師器	雑瓦	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
25	600-1	土師器	雑瓦	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
26	600-3	土師器	雑瓦	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
27	600-2	土師器	雑瓦	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
28	600-4	土師器	雑瓦	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
29	600-3	土師器	雑瓦	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
30	600-1	土師器	雑瓦	4-924	②00705	12.4	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
31	600-3	土師器	雑瓦	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
32	600-2	瀬戸瓦器	瓦片 瓦脚	4-924	②00705	12.4	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
33	600-2	瀬戸瓦器	瓦片 瓦脚	4-924	②00705	11.8	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
34	600-1	瀬戸瓦器	瓦片 瓦脚	4-924	②00705	10.7	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
35	600-3	瀬戸瓦器	瓦片 瓦脚	4-924	②00705	10.7	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
36	600-4	瀬戸瓦器	瓦片 瓦脚	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
37	600-5	瀬戸瓦器	瓦片 瓦脚	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
38	600-2	瀬戸瓦器	瓦片 瓦脚	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
39	600-1	瀬戸瓦器	瓦片 瓦脚	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
40	600-2	瀬戸瓦器	瓦片 瓦脚	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
41	600-2	瀬戸瓦器	瓦片 瓦脚	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
42	600-2	瀬戸瓦器	瓦片 瓦脚	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
43	600-4	瀬戸瓦器	瓦片 瓦脚	4-924	②00705	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
44	600-4	青磁陶器	瓦片 瓦脚	4-924	②00707	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	鏡	鏡	鏡	鏡	1層式
45	600-3	青磁陶器	鏡	4-924	②00707	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	鏡	鏡	鏡	鏡	1層式
46	600-3	青磁陶器	鏡	4-924	②00707	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	鏡	鏡	鏡	鏡	1層式
47	600-1	青磁陶器	鏡	4-924	②00707	—	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	鏡	鏡	鏡	鏡	1層式
48	600-3	瓦	瓦片 瓦脚	4-924	②00707	11.1	1.1	1.8	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
49	719-3	瓦片 瓦脚	瓦	4-923	②00708 掘上土層	11.9	4.3	—	焼いた土の瓦内面至期	表	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
50	611-4	土師器	瓦	4-921	②00709	14.6	1.9	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
51	610-3	土師器	瓦	4-921	②00709	13.6	—	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	表	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
52	600-1	土師器	瓦	4-921	②00709	12.4	1.1	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷
53	600-3	土師器	瓦	4-921	②00709	13.8	2.6	—	内:テラコッタ 内:テラコッタ	中・外	瓦	瓦	瓦	瓦	1層敷

第7表 伊坂城跡(第4～7次) 遺物観察表(2 / 17)

番号	調査年度	場所	遺物種別	出土位置		埋藏深度		成層・調査目的等備考	出土	形状	数量	保存状況	備考	
				状況	用途・用途	11m	12m							
84	810-0	土師器	皿	0-23	②0070	42.7	2.8	内・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
85	810-0	土師器	皿	0-23	②0070	31.4	-	内・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
86	810-1	土師器	皿	0-23	②0070	42.4	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
87	811-0	土師器	小皿	0-23	②0070	9.9	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
88	810-2	土師器	小皿	0-23	②0070	9.9	1.8	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
89	810-1	土師器	小皿	0-23	②0070	9.9	1.6	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
90	810-7	土師器	小皿	0-23	②0070	9.9	1.6	内・オオムス・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
91	400-4	土師器	小皿	0-23	②0070	4.8	1.1	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
92	811-0	土師器	小皿	0-23	②0070	9.2	18.83	内・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
93	811-2	土師器	小皿	0-23	②0070	9.8	1.6	内・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
94	600-2	土師器	小皿	0-23	②0070	7.4	1.7	内・オオムス・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
95	810-8	土師器	小皿	0-23	②0070	-	-	内・オオムス・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
96	600-1	瀬戸式瓦器	瓦片	0-23	②0070	11.9	6.5	3.3	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無
97	810-9	石鏡	鏡	0-23	②0070	30.8	2.7	5.6	銅	片断	1	片断	無	
98	600-2	瀬戸式瓦器	瓦片	0-23	②0070	20.8	19.9	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無
99	817-4	土師器	鉢	0-32	②0070	40.9	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
100	817-1	土師器	鉢	0-32	②0070	-	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
101	817-2	土師器	鉢	0-32	②0070	-	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
102	817-3	土師器	鉢	0-32	②0070	-	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
103	600-1	瀬戸式瓦器	瓦片	0-32	②0070	11.8	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
104	810-1	瀬戸式瓦器	瓦片	0-32	②0070	31.4	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
105	817-0	瀬戸式瓦器	瓦片	0-32	②0070	21.4	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
106	811-0	土師器	鉢	0-34	②0071	42.8	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
107	811-0	土師器	鉢	0-34	②0071	42.3	-	内・オオムス・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
108	811-0	土師器	鉢	0-32	②0071	41.3	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
109	811-1	土師器	鉢	0-34	②0071	42.9	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
110	811-0	土師器	鉢	0-34	②0071	40.4	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
111	811-0	土師器	鉢	0-34	②0071	40.9	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
112	811-7	土師器	鉢	0-32	②0071	30.6	1.8	-	内・オオムス・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無
113	812-1	土師器	小皿	0-32	②0071	9.6	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
114	812-2	土師器	小皿	0-32	②0071	8.8	1.7	-	内・ナツ	葉	片断	1	片断	無
115	812-4	土師器	小皿	0-34	②0071	8.6	1.9	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無
116	812-0	土師器	皿	0-34	②0071	40.9	2.0	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無
117	812-10	土師器	皿	0-34	②0071	40.4	-	内・オオムス・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
118	812-1	土師器	皿	0-32	②0071	-	-	内・オオムス・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
119	810-2	土師器	鉢	0-30	②0071	22.3	-	内・オオムス・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
120	810-2	土師器	鉢	0-30	②0071	23.3	-	内・ナツ	葉	片断	1	片断	無	
121	812-2	土師器	鉢	0-34	②0071	40.3	-	内・オオムス・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
122	812-3	土師器	鉢	0-34	②0071	40.4	-	内・オオムス・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
123	812-4	土師器	鉢	0-34	②0071	-	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
124	812-7	土師器	鉢	0-32	②0071	-	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
125	812-8	土師器	鉢	0-34	②0071	-	-	内・オオムス・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
126	812-3	土師器	鉢	0-34	②0071	-	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
127	812-4	土師器	鉢	0-32	②0071	-	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
128	810-1	土師器	葉	0-34	②0071	43.3	-	内・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無	
129	810-3	山吹瓦	瓦	0-34	②0071	40.5	3.2	1.8	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無
130	812-4	山吹瓦	瓦	0-34	②0071	40.9	3.4	3.0	内・オオムス・ナツ	今中葉	片断	1	片断	無
131	811-7	瀬戸式瓦器	瓦片	0-34	②0071	42.9	-	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無
132	810-8	瀬戸式瓦器	瓦片	1-30	②0071	40.4	-	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無
133	810-6	瀬戸式瓦器	瓦片	0-34	②0071	42.0	-	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無
134	811-4	瀬戸式瓦器	瓦片	0-34	②0071	9.8	-	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無
135	811-1	瀬戸式瓦器	瓦片	0-34	②0071	-	-	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無
136	810-5	瀬戸式瓦器	瓦片	0-34	②0071	-	-	-	内・オオムス・ナツ	葉	片断	1	片断	無

第9表 伊坂城跡(第4～7次) 遺物観察表(4 / 17)

調査 番号	調査 年度	場所	遺物種別	出土位置		埋藏深さ(m)		形状・数量及び特徴	出土 状況	調査 方法	調査 時期	調査 者	備考	
				探検位置	探検深度	11層	12層							
190	427-1	土師器	甕	9-13	①142.0 埋 1.1	19.3	—	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	全中絶	貫	江古川遺跡(3)14	11層跡 2-12		
191	427-3	土師器	甕	9-13	①140.0	11.8	—	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	全中絶	貫	江古川遺跡(3)13	11層跡 4-12		
192	427-4	土師器	甕	9-13	①140.0	12.1	—	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	全中絶	貫	江古川遺跡(3)14	11層跡 2-12		
193	429-10	瀬戸式土師 器	文目 瓦葺	9-13	①147.0	—	—	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	兼	貫	遺跡(遺跡2)127-2 跡1(瓦葺)跡14	11層跡 非土	瓦葺・瓦葺 (瀬戸式土師器)	
194	429-9	瀬戸式土師 器	瓦葺	9-13	①147.0	—	1.8	内内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	兼	貫	遺跡(遺跡2)127-2 跡1(オオムス)跡136-3	11層跡 4-12	瓦葺(瓦葺)	
195	430-2	瀬戸式土師 器	瓦葺	9-13	①147.0	—	—	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	兼	貫	遺跡(遺跡2)127-2 跡1(オオムス)跡136-3	11層跡 4-12	瓦葺(瓦葺)	
196	430-1	瀬戸式土師 器	瓦葺	9-13	①147.0	—	—	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	兼	貫	遺跡(遺跡2)127-2 跡1(オオムス)跡136-3	11層跡 4-12	瓦葺(瓦葺)	
197	447-2	土師器	小皿	9-123	①14.2 埋2.2	7.2	2.9	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	全中絶	貫	成石跡108-2	11層跡 2-12		
198	437-8	土師器	甕	4-125	①14.2 埋2.2	10.1	2.9	内:ナツ	全中絶	貫	跡7(3)12-6	11層跡 2-12		
199	437-6	土師器	甕	4-125	①14.2 埋2.2	9.3	1.9	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	全中絶	貫	成石跡108-2	11層跡 2-12	遺跡付表	
170	441-1	土師器	甕	9-12	①14.3 埋2.2	12.9	1.9	3.8	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	全中絶	貫	江古川遺跡(3)14	11層跡 2-12	
171	437-7	土師器	甕	4-125	①14.3 埋2.2	12.6	2.1	—	内:ナツ	全中絶	貫	成石跡108-2	11層跡 2-12	
172	446-7	土師器	甕	9-123	①14.3 埋2.2	13.2	—	—	内:ナツ	全中絶	貫	成石跡108-2	11層跡 2-12	
173	443-8	土師器	甕	9-123	①14.3 埋2.2	—	—	—	内:オオムス 内:ナツ	全中絶	貫	江古川遺跡(3)14	—	
174	437-5	土師器	甕	4-125	①14.2 埋2.2	—	—	—	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	全中絶	貫	江古川遺跡(3)14	—	
175	718-7	瓦葺跡	瓦	4-125	①14.2 埋2.2	12.8	2.7	—	跡1の北内内内面不現	兼	瓦葺跡(=417×10C-1086) 跡1(瓦葺)跡14	11層跡 1-12		
176	447-1	瓦葺跡	瓦片群 瓦葺	4-125	①14.1 埋2.2	—	—	—	内:ナツ	兼	瓦葺跡(3)14-2	—	11層式	
177	445-3	瀬戸式土師 器	瓦葺	9-14	①14.2 埋2.2	—	11.8	—	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	全中絶	貫	遺跡(遺跡2)128-3 跡1(瓦葺)跡14	表面 2-12	瓦葺2～4
178	439-1	石敷	石	4-125	①14.2 埋2.2	—	—	—	断面にノコギリ痕	—	—	—	—	
179	444-4	土師器	小皿	9-123	①14.4 埋2.2	10.6	—	—	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	全中絶	貫	成石跡108-4	11層跡 2-12	
190	444-8	土師器	甕	9-123	①14.2 埋2.2	10.8	1.9	4.1	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	兼	成石跡108-3	11層跡 2-12		
191	444-7	土師器	甕	9-123	①14.2 埋2.2	10.6	—	—	内:ナツ	兼	成石跡108-3	11層跡 2-12		
192	444-10	土師器	甕	9-123	①14.2 埋2.2	11.4	1.6	6.9	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	兼	成石跡108-3	11層跡 1-12		
193	440-9	土師器	甕	4-122	①14.1 埋2.2	7.9	1.8	—	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	全中絶	貫	江古川遺跡(3)14	11層跡 4-12	
194	440-10	土師器	甕	4-122	①14.1 埋2.2	6.8	1.2	—	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	兼	江古川遺跡(3)14	11層跡 2-12		
195	440-11	土師器	甕	4-122	①14.1 埋2.2	9.8	1.6	—	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	全中絶	貫	江古川遺跡(3)14	11層跡 2-12	
196	441-2	土師器	小皿	4-122	①14.1 埋2.2	—	—	—	内:ナツ	兼	跡7(3)12-6	—		
197	441-1	土師器	甕	4-122	①14.1 埋2.2	—	—	—	内:ナツ	兼	跡7(3)12-6	—		
198	437-9	土師器	甕	4-119	①14.2 埋2.2	12.9	1.9	—	内:ナツ	全中絶	貫	成石跡108-3	11層跡 4-12	
199	440-1	石葺	石	4-120	①14.3 埋2.2	—	—	—	跡1の北内内内面不現	兼	瓦葺跡(=417×10C-1086) 跡1(瓦葺)跡14	11層跡 1-12		
199	718-6	瓦葺跡	瓦片群 瓦葺	4-120	①14.1	8.2	2.3	6.2	跡7で埋つた瓦葺跡不現	兼	瓦葺跡(=417×10C-1086) 跡1(瓦葺)跡14	表面 4-12		
191	434-3	土師器	甕	4-121	①14.2	—	—	—	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	兼	江古川遺跡(3)14	—		
192	434-2	土師器	甕	4-121	①14.3	—	—	—	内:ナツ	兼	江古川遺跡(3)14	—		
193	435-1	土師器	甕	4-122	①14.1	—	—	—	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	兼	江古川遺跡(3)14	—		
194	435-3	土師器	小皿	4-122	①14.1	7.8	1.5	—	内:ナツ	兼	跡7(3)12-6	11層跡 3-12	遺跡付表	
195	435-5	土師器	甕	4-122	①14.3	—	—	—	内:ナツ	兼	江古川遺跡(3)14	—		
196	435-4	土師器	小皿	4-123	①14.1	—	—	—	内:ナツ	全中絶	貫	跡7(3)12-6	—	遺跡付表
197	435-6	土師器	瓦葺	4-124	①14.1	11.8	—	—	内:ナツ	全中絶	貫	江古川遺跡(3)14	11層跡 4-12	
198	435-7	土師器	甕	4-121	①14.1	—	—	—	内:ナツ・ナツ 内:オオムス・ナツ	兼	江古川遺跡(3)14	—		
199	436-1	土師器	小皿	4-120	①14.1	—	—	—	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	全中絶	貫	江古川遺跡(3)14	—	
200	436-7	瓦葺跡	瓦	4-120	①14.1	—	—	—	内:ナツ	全中絶	貫	跡1(瓦葺)跡14	—	11層式
201	436-2	土師器	小皿	4-121	①14.2	8.7	2.2	—	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	兼	成石跡108-3	11層跡 1-12		
202	437-1	土師器	甕	4-121	①14.1	—	—	—	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	全中絶	貫	江古川遺跡(3)14	—	
203	437-4	土師器	甕	4-122	①14.1	—	—	—	内:ナツ	全中絶	貫	成石跡108-2	11層跡 1-12	
204	436-4	土師器	甕	4-123	①14.2	—	—	—	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	兼	跡7(3)12-6	11層跡 1-12		
205	436-4	土師器	瓦葺	4-123	①14.2	29.4	12.85	—	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	全中絶	貫	遺跡(遺跡2)128-4 跡1(瓦葺)跡14	11層跡 1-12	瓦葺 瓦葺2
206	436-3	土師器	小皿	4-123	①14.3	8.2	1.8	—	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	全中絶	貫	成石跡108-3	11層跡 4-12	
208	436-6	土師器	甕	4-121	①14.1	11.6	1.3	—	内:オオムス・ナツ 内:ナツ	全中絶	貫	成石跡108-2	11層跡 1-12	
209	436-2	瀬戸式土師 器	瓦葺	4-119	①14.1	—	—	—	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	全中絶	貫	遺跡(遺跡2)128-6 跡1(瓦葺)跡14	—	瓦葺 瓦葺2
210	437-2	土師器	小皿	4-120	①14.1	—	—	—	内:ナツ	全中絶	貫	跡7(3)12-6	—	遺跡付表
211	436-1	瀬戸式土師 器	瓦葺	4-120	①14.1	10.2	—	—	内:オオムス・ナツ 内:オオムス・ナツ	全中絶	貫	遺跡(遺跡2)128-6 跡1(瓦葺)跡14	11層跡 2-12	瓦葺 瓦葺1
212	436-2	石葺	瓦葺	4-123	①14.1	—	—	—	跡1の北内内内面不現	兼	成石跡108-2	—	瓦葺 瓦葺2	

第 10 表 伊坂城跡(第 4～7 次) 遺物観察表(5 / 17)

番号	調査年度	場所	発見層	位置			形状・数量・材質	説明	出所	種類	用途	備考
				経度	緯度	高さ						
313	637-9	土師器	Ⅱ	4-221	②D11-3	19.8	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
314	637-12	土師器	Ⅱ	4-126	②D11-1	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
315	638-3	瀬戸式土師器	Ⅱ	4-121	②D11-1	—	—	—	陶・土器	片取	—	瀬戸式土師器
316	640-1	瀬戸式土師器	Ⅱ	4-122	②D11-2 No.1	38.8	16.6	12.2	陶・土器	片取	—	瀬戸式土師器
317	640-6	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-3	14.8	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
318	640-1	土師器	Ⅱ	4-122	②D11-1 No.1	16.8	2.0	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
319	640-2	土師器	Ⅱ	4-122	②D11-4 No.2	17.8	2.1	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
320	637-11	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-6	11.1	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
321	640-5	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-6	16.6	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
322	637-10	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-6	6.7	1.7	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
323	719-1	野付磁器	Ⅱ	4-121	②D11-5	12.6	1.9	—	陶・土器	片取	—	野付磁器
324	640-3	瀬戸式土師器	Ⅱ	4-121	②D11-2	—	—	—	陶・土器	片取	—	瀬戸式土師器
325	640-9	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-9	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
326	719-1	野付磁器	Ⅱ	4-121	②D11-8	46.2	14.8	14.5	陶・土器	片取	—	野付磁器
327	642-2	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-4 No.1	12.8	2.0	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
328	642-3	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-4 No.1	12.8	12.21	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
329	641-1	土師器	Ⅱ	4-113	②D11-2	12.1	1.9	6.3	陶・土器	片取	—	遺跡表
330	444-3	土師器	Ⅱ	4-113	②D11-2	12.6	2.6	6.8	陶・土器	片取	—	遺跡表
331	444-2	土師器	Ⅱ	4-113	②D11-2	12.6	2.6	6.2	陶・土器	片取	—	遺跡表
332	444-5	土師器	Ⅱ	4-113	②D11-3	12.6	1.6	1.9	陶・土器	片取	—	遺跡表
333	645-1	土師器	Ⅱ	4-113	②D11-3	26.9	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
334	640-1	土師器	Ⅱ	4-141	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
335	634-6	土師器	Ⅱ	4-139	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
336	641-6	土師器	Ⅱ	4-129	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
337	641-6	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
338	636-1	土師器	Ⅱ	4-119	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
339	636-9	土師器	Ⅱ	4-119	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
340	637-7	土師器	Ⅱ	4-119	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
341	709-2	土師器	Ⅱ	4-113	②D11-3	11.8	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
342	634-1	土師器	Ⅱ	4-119	②D11-3	11.8	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
343	634-3	土師器	Ⅱ	4-119	②D11-3	11.8	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
344	636-4	土師器	Ⅱ	4-129	②D11-3	11.9	2.9	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
345	636-5	土師器	Ⅱ	4-129	②D11-3	12.3	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
346	634-2	土師器	Ⅱ	4-119	②D11-3	11.4	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
347	636-3	土師器	Ⅱ	4-129	②D11-3	12.9	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
348	640-4	土師器	Ⅱ	4-129	②D11-3	12.4	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
349	644-3	土師器	Ⅱ	4-119	②D11-3	11.8	2.6	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
350	640-9	土師器	Ⅱ	4-129	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
351	640-7	土師器	Ⅱ	4-129	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
352	638-5	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
353	704-1	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
354	640-11	土師器	Ⅱ	4-129	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
355	640-1	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-3	9.8	1.5	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
356	640-2	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-3	12.6	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
357	634-1	土師器	Ⅱ	4-119	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
358	640-1	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-3	16.8	2.1	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
359	640-12	土師器	Ⅱ	4-129	②D11-3	11.1	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
360	640-13	土師器	Ⅱ	4-129	②D11-3	—	—	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
361	640-14	土師器	Ⅱ	4-129	②D11-3	10.1	1.7	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
362	640-2	土師器	Ⅱ	4-129	②D11-3	10.7	1.6	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
363	638-9	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-3	8.8	1.7	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
364	641-4	土師器	Ⅱ	4-121	②D11-3	1.3	1.7	—	陶・土器	片取	—	遺跡表
365	636-2	土師器	Ⅱ	4-119	②D11-3	8.9	1.5	—	陶・土器	片取	—	遺跡表

第 12 表 伊坂城跡(第 4~7 次) 遺物観察表(7 / 17)

番号	調査年度	発掘区画	発掘層	出土品			成層・観察注目点	出土品	種類	数量	保存	備考
				区画	層	位置						
315	408-1	瀬戸内式土器	陶瓦葺+瓦葺	4-125	伊坂式	-	瓦・土	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
316	410-2	瀬戸内式土器	陶瓦葺+瓦葺	4-124	伊坂式	-	瓦・土	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
317	407-3	瀬戸内式土器	陶瓦葺+瓦葺	4-121	伊坂式	-	瓦・土	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
318	740-4	瀬戸内式土器	小瓦	4-414	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
319	608-2	瀬戸内式土器	磁器	4-119	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
320	438-1	瀬戸内式土器	磁器	4-120	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
321	600-3	瀬戸内式土器	磁器	4-122	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
322	436-2	瀬戸内式土器	磁器	4-120	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
323	740-3	瀬戸内式土器	磁器	4-118	伊坂式	30.0	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
324	408-4	瀬戸内式土器	磁器	4-123	伊坂式	27.4	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
325	400-2	瀬戸内式土器	磁器	4-125	伊坂式	60.0	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
326	436-3	瀬戸内式土器	磁器	4-119	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
327	437-4	瀬戸内式土器	磁器	4-121	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
328	402-3	瀬戸内式土器	磁器	4-124	伊坂式	60.0	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
329	608-3	瓦葺跡	塊	4-123	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
330	608-1	瓦葺跡	塊	4-120	伊坂式	11.3	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
331	711-1	瓦葺跡	塊	4-118	伊坂式	37.3	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
332	408-8	瓦葺跡	塊	4-410	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
333	406-4	瓦葺跡	塊	4-122	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
334	410-3	瓦葺跡	塊	4-121	伊坂式	66.1	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
335	740-2	瓦葺跡	塊	4-410	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
336	430-8	瓦葺跡	瓦葺土層	4-124	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
337	430-3	瓦葺跡	瓦葺土層	4-123	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
338	432-1	瓦葺跡	瓦葺土層	4-121	伊坂式	60.0	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
339	437-3	土層	瓦	4-122	伊坂式	13.2	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
340	440-2	土層	瓦	4-123	伊坂式	13.9	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
341	438-7	土層	瓦	4-125	伊坂式	12.8	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
342	439-4	土層	瓦	4-121	伊坂式	12.4	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
343	437-8	土層	瓦	4-124	伊坂式	66.8	1.8	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
344	423-5	土層	瓦	4-11	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
345	430-5	土層	瓦	4-122	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
346	430-3	土層	瓦	4-123	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
347	432-10	土層	瓦	4-121	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
348	440-1	土層	瓦	4-121	伊坂式	14.0	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
349	437-4	土層	瓦	4-122	伊坂式	13.4	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
350	430-4	土層	瓦	4-122	伊坂式	12.4	1.9	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
351	437-8	土層	瓦	4-120	伊坂式	13.0	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
352	437-0	土層	瓦	4-122	伊坂式	11.8	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
353	430-1	土層	瓦	4-123	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
354	437-7	土層	瓦	4-124	伊坂式	12.4	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
355	430-2	土層	瓦	4-125	伊坂式	10.4	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
356	440-7	土層	瓦	4-121	伊坂式	10.0	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
357	440-8	土層	瓦	4-123	伊坂式	12.6	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
358	438-9	土層	瓦	4-125	伊坂式	11.2	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
359	430-7	土層	瓦	4-121	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
360	430-4	土層	瓦	4-123	伊坂式	10.4	2.4	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
361	440-5	土層	瓦	4-121	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
362	437-2	土層	瓦	4-122	伊坂式	10.0	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
363	430-11	土層	瓦	4-124	伊坂式	-	瓦	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
364	440-9	土層	瓦	4-123	伊坂式	9.8	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
365	430-9	土層	瓦	4-124	伊坂式	8.0	1.0	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2
366	440-1	土層	瓦	4-121	伊坂式	11.8	-	内内・外外土器	1	1	瓦葺・瓦葺付土器	高取 大塚 1・2

第 13 表 伊坂城跡 (第 4～7 次) 遺物観察表 (8 / 17)

番号	調査年度	場所	発掘層	出土品			形状・数量目録の付録	所出	種類	数量	検出年度	備考	
				種別	品名・通称	寸法							
367	470-6	土師器	Ⅷ	0-03	空缶片	10.0	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	1	2014-調査報告書 1-13	14年度 1-13	
368	470-3	土師器	Ⅷ	0-05	空缶片	9.2	1.6	9.9	兼	1	2014-調査報告書 1-13	14年度 1-13	
369	460-3	土師器	Ⅷ	0-03	空缶片	9.3	1.7	—	内:オサマ 内:オサマ・ナツ	中々	兼	調査報告書	14年度 1-13
370	460-5	土師器	Ⅷ	0-03	空缶片	8.8	—	—	内:オサマ 内:オサマ	中々	兼	2014-調査報告書 1-13	14年度 1-13
371	460-4	土師器	Ⅷ	0-03	空缶片	8.8	—	—	内:オサマ 内:オサマ	中々	兼	調査報告書	14年度 1-13
372	460-6	土師器	Ⅷ	0-03	空缶片	8.6	—	—	内:オサマ 内:オサマ	中々	兼	2014-調査報告書 1-13	14年度 1-13
373	457-6	土師器	Ⅷ	0-03	空缶片	7.8	1.5	3.2	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書	14年度 1-13	
374	460-1	土師器	Ⅷ	0-02	空缶上	7.2	1.5	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	中々	兼	調査報告書	14年度 1-13
375	467-4	土師器	Ⅷ	0-03	空缶片	10.0	—	—	内:オサマ 内:オサマ	兼	2014-調査報告書 1-13	14年度 1-13	
376	461-2	土師器	Ⅷ	0-02	空缶片	—	—	—	内:オサマ 内:オサマ	兼	2014-調査報告書 1-13	—	
377	464-3	土師器	Ⅷ	0-03	空缶片	—	—	—	内:オサマ 内:オサマ・ナツ	中々	兼	調査報告書	14年度 1-13
378	470-1	土師器	Ⅷ	0-04	空缶片	—	—	—	内:オサマ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書	14年度 1-13	
379	467-3	土師器	Ⅷ	0-11	空缶片	—	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書	14年度 1-13	
380	700-1	土師器	Ⅷ	0-02	空缶上	—	—	—	内:オサマ 内:オサマ・ナツ	中々	兼	2014-調査報告書 1-13	—
381	700-5	土師器	Ⅷ	0-03	空缶上	—	—	—	内:オサマ 内:オサマ	中々	兼	調査報告書	—
382	700-8	土師器	Ⅷ	0-03	空缶上	12.8	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	中々	兼	調査報告書	14年度 1-13
383	467-1	土師器	Ⅷ	0-04	空缶片	—	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書	—	
384	467-2	土師器	Ⅷ	0-03	空缶片	12.0	—	—	内:オサマ 内:オサマ	中々	兼	調査報告書	14年度 1-13
385	710-3	青磁	Ⅷ	0-03	空缶片	12.4	3.3	—	駒のたの内部至胴	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
386	710-5	青磁	Ⅷ	0-12	空缶片	19.1	3.6	—	駒のたの内部至胴	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
387	467-0	青磁	Ⅷ	0-03	空缶上	11.4	—	—	駒のたの内部至胴	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
388	717-7	青磁	Ⅷ	0-11	空缶上	11.4	1.7	—	駒のたの内部至胴	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
389	710-1	青磁	Ⅷ	0-02	空缶片	6.8	3.2	—	駒のたの内部至胴	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
390	710-2	青磁	Ⅷ	0-02	空缶片	12.8	2.4	—	駒のたの内部至胴	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
391	710-0	白磁器	Ⅷ	0-03	空缶片	—	2.4	—	駒のたの内部至胴	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
392	704-2	瀬戸式土器	Ⅷ	0-02	空缶上	14.6	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
393	430-4	瀬戸式土器	Ⅷ	0-03	空缶片	14.2	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
394	704-5	瀬戸式土器	Ⅷ	0-04	空缶上	12.4	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
395	700-3	瀬戸式土器	Ⅷ	0-04	空缶上	—	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
396	700-1	瀬戸式土器	Ⅷ	0-03	空缶上	—	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
397	430-2	瀬戸式土器	Ⅷ	0-03	空缶片	11.2	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
398	704-1	瀬戸式土器	Ⅷ	0-04	空缶上	12.0	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
399	430-1	瀬戸式土器	Ⅷ	0-02	空缶片	14.8	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
400	700-7	瀬戸式土器	Ⅷ	0-04	空缶片	—	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
401	700-0	瀬戸式土器	Ⅷ	0-04	空缶上	—	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
402	430-2	瀬戸式土器	Ⅷ	0-03	空缶片	—	4.6	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
403	430-3	瀬戸式土器	Ⅷ	0-03	空缶片	—	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
404	400-1	瀬戸式土器	Ⅷ	0-01	空缶片	11.7	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
405	430-3	瀬戸式土器	Ⅷ	0-03	空缶片	—	1.2	4.5	打方瓦片 高内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
406	467-6	瀬戸式土器	Ⅷ	0-02	空缶片	—	1.3	3.8	打方瓦片 高内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
407	717-1	瀬戸式土器	Ⅷ	0-02	空缶片	12.4	3.5	—	駒のたの内部至胴	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
408	400-2	瀬戸式土器	Ⅷ	0-03	空缶上	13.2	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
409	700-0	瀬戸式土器	Ⅷ	0-04	空缶上	—	—	3.4	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
410	700-1	瀬戸式土器	Ⅷ	0-04	空缶上	—	—	6.8	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
411	407-10	瀬戸式土器	Ⅷ	0-04	空缶片	—	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
412	400-1	瀬戸式土器	Ⅷ	0-03	空缶上	—	—	5.1	内内:オサマ・ナツ 内内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
413	400-1	瀬戸式土器	Ⅷ	0-04	空缶片	—	—	4.8	内内:オサマ・ナツ 内内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	
414	407-9	瀬戸式土器	Ⅷ	0-04	空缶片	16.4	—	—	内:オサマ・ナツ 内:オサマ・ナツ	兼	調査報告書 1-13	14年度 1-13	

第 14 表 伊坂城跡 (第 4～7 次) 遺物観察表 (9 / 17)

発見 番号	調査 年度	場所	発見層	出土品			成形・調整技法の特長	出土 状況	備考	出所	保存 状況	備考
				品名・遺物	材質	形状						
415	111-4	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片巻	4-222	伊豆瓦葺	11.8	1.7	—	輪切の内外両面平削	素白	黒溝・灰泥焼成900℃ 輪・灰泥・90℃	11層目 大塚3・3
416	111-5	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片巻	4-222	伊豆瓦葺	4.8	1.8	—	輪切の内外両面平削	素白	黒溝・灰泥・900℃ 輪・灰泥・90℃ 灰サリゾク2.18x2	11層目 大塚3
417	104-5	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-119	伊豆上	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・灰泥・900℃ 輪・灰泥・90℃	11層目 大塚3
418	104-7	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-121	伊豆上	—	—	14.9	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・灰泥・900℃ 輪・灰泥・90℃	11層目 大塚3
419	104-6	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-121	伊豆上	—	—	12.9	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・灰泥・900℃ 輪・灰泥・90℃	11層目 大塚3
420	428-4	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-223	伊豆瓦葺	—	—	12.9	内・ワコトナツ。高麗半切 内・ワコトナツ	素白	灰泥・900℃	11層目 大塚3
421	428-5	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-223	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
422	442-2	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-120	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・灰泥・900℃ 輪・灰泥・90℃	11層目 大塚3
423	438-2	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-221	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
424	449-3	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-45	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・灰泥・900℃ 輪・灰泥・90℃	11層目 大塚3
425	105-1	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-119	伊豆上	32.4	—	—	内・ワコトナツ。ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗・900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
426	439-1	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-221	伊豆瓦葺	11.8	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
427	442-4	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-121	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
428	442-7	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-121	伊豆瓦葺	—	—	8.4	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗・900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
429	459-4	瓦葺跡	瓦片	4-125	伊豆上	12.4	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	900℃・900℃	11層目 大塚3
430	104-2	瓦葺跡	瓦片	4-121	伊豆上	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	灰泥・900℃	11層目 大塚3
431	479-2	瓦葺跡	瓦片	4-45	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	焼成900℃	—
432	418-2	瓦葺跡	瓦片 瓦片 瓦片	4-119	伊豆上 伊豆上 伊豆上	11.1	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	焼成・900℃	11層目 大塚3
433	465-5	瓦葺跡	瓦片 瓦片 瓦片	4-119	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	高麗900℃	—
434	469-1	瓦葺跡	瓦片	4-45	伊豆瓦葺	26.9	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃	11層目 大塚3
435	104-2	瓦葺跡	瓦片	4-119	伊豆上	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	灰泥・900℃	11層目 大塚3
436	104-4	瓦葺跡	瓦片	4-119	伊豆上	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	灰泥・900℃	11層目 大塚3
437	104-3	瓦葺跡	瓦片	4-119	伊豆上	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	灰泥・900℃	11層目 大塚3
438	474-1	土層	瓦片	4-C4	伊豆瓦葺	17.8	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃	11層目 大塚3
439	467-5	土層	瓦片	4-45	伊豆瓦葺	28.8	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	焼成・900℃	11層目 大塚3
440	471-1	土層	瓦片	4-C4	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	焼成900℃	—
441	471-1	土層	瓦片	4-C2	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	焼成900℃	—
442	107-2	土層	瓦片	4-46	伊豆上	7.8	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	灰泥・900℃	11層目 大塚3
443	474-6	土層	瓦片	4-C4	伊豆瓦葺	11.7	3.7	5.2	内・ワコトナツ。高麗半切 内・ワコトナツ	素白	灰泥・900℃	11層目 大塚3
444	119-6	瓦葺跡	瓦片	4-C3	伊豆瓦葺	6.4	1.6	—	輪切の内外両面平削	素白	白磁土 = 417+402-900	11層目 大塚3
445	474-7	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片 瓦片	4-C4	伊豆瓦葺	19.4	—	—	内・ワコトナツ。ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
446	107-4	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片 瓦片	4-121	伊豆上	11.8	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・灰泥・900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
447	467-6	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-120	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ。ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
448	469-2	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-120	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
449	106-2	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-C4	伊豆上	—	—	18.3	内・ワコトナツ。高麗半切 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
450	467-7	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-120	伊豆瓦葺	4.8	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・灰泥・900℃	11層目 大塚3
451	479-5	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-121	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・灰泥・900℃	11層目 大塚3
452	474-3	瓦葺跡	瓦片	4-C4	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・灰泥・900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
453	422-4	瓦葺跡	瓦片	4-121	伊豆上	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	焼成900℃	—
454	114-4	瓦葺跡	瓦片	4-121	伊豆上	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	焼成900℃	—
455	114-2	瓦葺跡	瓦片	4-121	伊豆上	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	焼成900℃	—
456	472-2	土層	瓦片	4-121	伊豆瓦葺	24.8	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃	11層目 大塚3
457	474-4	土層	瓦片	4-C2	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃	11層目 大塚3
458	447-1	土層	瓦片	4-121	伊豆上	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃	11層目 大塚3
459	448-6	土層	瓦片	4-121	伊豆上	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃	11層目 大塚3
460	448-5	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-121	伊豆上	6.9	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
461	479-4	瀬戸瓦葺 陶器	瓦片	4-121	伊豆瓦葺	11.8	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	黒溝・高麗900℃ 輪・灰泥・900℃	11層目 大塚3
462	474-9	瓦葺跡	瓦片	4-121	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	焼成900℃	—
463	474-11	瓦葺跡	瓦片	4-121	伊豆瓦葺	—	—	—	内・ワコトナツ 内・ワコトナツ	素白	焼成900℃	—

第 15表 伊坂城跡(第4～7次) 遺物観察表(10 / 17)

番号	調査年度	発掘区画	遺物種別	出土位置			形状・数量等の特徴	出土	検出	所属	検出位置	備考	
				遺物種別	数量	位置							
996	423-1	瀬戸古墳跡	埴輪	0-03	②B47 SA371 x No. 1	—	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺構・遺跡群1009-9 輪1352/1	—	埴輪 大塚1
997	477-2	土師器	皿	0-30	②B48	12.2	2.9	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-2	1177 定石	遺跡群 5-31
998	477-3	土師器	皿	0-30	②B48	12.8	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-4	1178 定石	1178 定石
999	477-4	土師器	皿	0-30	②B48	42.8	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-9	1179 定石	1179 定石
1000	480-3	土師器	皿	0-30	②B48	11.9	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	穴吹1009-2	1180 定石	1180 定石
1001	479-2	土師器	皿	0-30	②B48	9.6	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-3	1181 定石	1181 定石
1002	477-1	土師器	皿	0-30	②B48	12.4	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-4	1182 定石	1182 定石
1003	477-9	土師器	皿	0-30	②B48	12.9	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	穴吹1009-2	1183 定石	1183 定石
1004	477-7	土師器	皿	0-30	②B48	12.4	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-4	1184 定石	1184 定石
1005	477-1	土師器	皿	0-30	②B48	10.8	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-4	1185 定石	1185 定石
1006	477-9	土師器	皿	0-30	②B48	10.9	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	穴吹1009-2	1186 定石	1186 定石
1007	464-3	土師器	皿	0-03	②B48	—	—	—	西・ナツ 内・ナツ	瀬戸	二上447, 1003-3	—	—
1008	927-05	土師器	皿	0-30	②B48	10.9	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-6	1187 定石	1187 定石
1009	479-4	土師器	皿	0-30	②B48	10.9	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-4	1188 定石	1188 定石
1010	479-3	土師器	皿	0-30	②B48	11.8	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-9	1189 定石	1189 定石
1011	479-6	土師器	皿	0-30	②B48	11.8	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	927, 1002-6	1190 定石	1190 定石
1012	479-5	土師器	皿	0-30	②B48	12.8	1.8	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	927, 1002-6	1191 定石	1191 定石
1013	479-8	土師器	皿	0-30	②B48	11.8	1.7	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	927, 1002-6	1192 定石	1192 定石
1014	480-4	土師器	皿	0-30	②B48	10.7	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	927, 1002-6	1193 定石	1193 定石
1015	480-6	土師器	皿	0-30	②B48	—	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	穴吹1009-2	—	—
1016	480-2	土師器	皿	0-30	②B48	10.1	2.9	—	西・ナツ 内・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-6	1194 定石	1194 定石
1017	479-1	土師器	皿	0-30	②B48	10.4	2.9	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-4	1195 定石	1195 定石
1018	460-7	土師器	皿	0-11	②B48	10.1	—	—	西・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	遺跡群1009-4	1196 定石	1196 定石
1019	479-7	土師器	皿	0-30	②B48	—	—	—	西・ナツ 内・ナツ	今中	遺跡群1009-4	1197 定石	1197 定石
1020	479-2	土師器	皿	0-30	②B48	—	—	—	西・ナツ 内・ナツ	今中	927, 1002-6	1198 定石	1198 定石
1021	479-1	土師器	皿	0-30	②B48	—	—	—	西・ナツ 内・ナツ	今中	927, 1002-6	1199 定石	1199 定石
1022	460-1	土師器	皿	0-11	②B48	21.9	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	二上447, 1003-3	1200 定石	1200 定石
1023	460-4	土師器	皿	0-11	②B48	20.1	—	—	西・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	二上447, 1003-3	1201 定石	1201 定石
1024	460-3	土師器	皿	0-11	②B48	21.1	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	二上447, 1003-3	1202 定石	1202 定石
1025	460-7	土師器	皿	0-30	②B48	—	—	—	西・ナツ 内・ナツ	今中	遺跡群1009-3	1203 定石	1203 定石
1026	460-1	土師器	皿	0-11	②B48	—	—	—	西・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	二上447, 1003-3	1204 定石	1204 定石
1027	423-3	瀬戸古墳跡	土師器 瓦片 土師器	0-30	②B48	11.3	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺構・遺跡群1009-3 輪1350/1	1205 定石	1205 定石
1028	440-2	瀬戸古墳跡	埴輪	0-11	②B48	11.8	2.7	4.8	内輪: オオムス・ナツ 外輪: オオムス・ナツ 内輪: 埴輪(土師器)	今中	遺構・穴吹1009-3 輪1350/1	1206 定石	1206 定石
1029	460-9	瀬戸古墳跡	埴輪	0-47	②B48	—	—	13.8	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	遺構・遺跡群1009-3 輪1350/1	1207 定石	1207 定石
1030	460-4	瀬戸古墳跡	埴輪	0-30	②B48	—	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺構・遺跡群1009-3 輪1350/1	1208 定石	1208 定石
1031	460-1	瀬戸古墳跡	埴輪	0-11	②B48	14.2	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	遺構・遺跡群1009-4 輪1350/1	1209 定石	1209 定石
1032	462-1	瀬戸古墳跡	埴輪	0-71	②B48	28.8	11.9	5.9	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺構・穴吹1009-2 輪1350/1	1210 定石	1210 定石
1033	479-2	瀬戸古墳跡	埴輪	0-30	②B48	27.4	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	遺構・穴吹1009-2 輪1350/1	1211 定石	1211 定石
1034	479-1	瀬戸古墳跡	埴輪	0-30	②B48	—	—	11.2	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	遺構・穴吹1009-2 輪1350/1	1212 定石	1212 定石
1035	472-6	瓦葺陶器	埴	0-30	②B48	—	—	—	西・ナツ 内・ナツ	今中	遺跡1009-2	—	1213 定石
1036	480-5	瓦葺陶器	埴	0-11	②B48	—	—	—	西・ナツ 内・ナツ	今中	遺跡・穴吹1009-2 輪1350/1	—	1214 定石
1037	477-1	瓦葺陶器	埴	0-30	②B48	—	—	13.1	西・奥オオムス・オオムス・ナツ 内・ナツ	今中	927/2-6	1215 定石	1215 定石
1038	460-2	瓦葺陶器	瓦葺 土師器	0-47	②B48	20.8	11.3	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-4	1216 定石	1216 定石
1039	460-4	瓦	瓦	0-11	②B48	—	—	—	西・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	穴吹1009-2	—	1217 定石
1040	460-9	瓦	瓦	0-30	②B48	—	—	—	内輪: ナツ	今中	穴吹1009-2	—	—
1041	423-1	瓦葺陶器	瓦葺	0-11	927/9	11.8	2.9	4.8	輪の内内輪内瓦葺	瀬戸	1177/1 = 417 x 412 x 400	1218 定石	1218 定石
1042	710-3	瓦葺陶器	埴	0-41	927/9	22.0	—	—	西・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	二上447, 1003-3	1219 定石	1219 定石
1043	423-2	瀬戸古墳跡	埴輪	0-46	927/22 No. 1	30.0	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-3	1220 定石	1220 定石
1044	423-3	瓦葺陶器	埴	0-30	927/22	—	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	二上447, 1003-3	1221 定石	1221 定石
1045	472-3	土師器	皿	0-44	②B48	10.8	2.9	—	西・オオムス・ナツ 内・ナツ	今中	穴吹1009-2	1222 定石	1222 定石
1046	422-4	土師器	皿	0-07	927/11 遺土	10.8	—	—	西・オオムス・ナツ 内・ナツ	瀬戸	遺跡群1009-2	1223 定石	1223 定石
1047	107-3	土師器	埴	0-05	②B48	—	—	—	西・オオムス・ナツ 内・オオムス・ナツ	今中	二上447, 1003-3	1224 定石	1224 定石
1048	471-2	土師器	埴	0-23	②B48	—	—	—	西・ナツ 内・オオムス・ナツ	瀬戸	927/6-5	—	1225 定石
1049	710-6	石葺	瓦葺	0-30	②B48	9.8	2.9	—	外成層	瀬戸	遺構・穴吹1009-2 輪1350/1	1226 定石	1226 定石

第 16 表 伊坂城跡 (第 4~7 次) 遺物観察表 (11 / 17)

調査年度	調査番号	発掘	埋蔵層	遺物			成形・調整技法の特徴	出土	種類	数量	保存方法	備考
				種類	数量	位置						
318	472-1	瀬戸式土器	文目 黒陶	E-63	白土層	13.1	-	-	内・ロココナド・ロココナド内・ロココナド	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器 瀬戸式土器
319	472-2	瀬戸式土器	文目 黒陶	E-61	白土層	11.8	3.7	3.1	内・ロココナド・ロココナド内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器 瀬戸式土器
320	423-3	瀬戸式土器	磁器	E-57	白土層	20.6	-	-	内・ロココナド内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器 瀬戸式土器
321	710-4	瀬戸式土器	磁器	E-54	白土層	-	-	12.9	内・ロココナド・ロココナド内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器 瀬戸式土器
322	699-4	宮内陶器	瓦葺	E-66	白土層	-	-	-	内・ナツノ内・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
323	623-2	宮内陶器	瓦葺 土製	E-57	白土層	-	-	-	内・ナツノ内・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
324	699-2	宮内陶器	瓦	E-68	白土層	-	-	13.5	内・オオムネ・ナツノ内・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
325	430-3	土師器	瓦	E-58	白土層	10.0	2.8	-	内・オオムネ・ナツノ内・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
326	430-4	土師器	瓦	E-58	白土層	10.2	2.1	-	内・オオムネ・ナツノ内・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
327	430-5	土師器	瓦葺	E-59	白土層	-	-	-	内・ナツノ内・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
328	430-6	宮内陶器	瓦葺 土製	E-58	白土層	-	-	-	内・オオムネ・ナツノ内・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
329	431-4	瀬戸式土器	白磁器	E-47	白土層	-	-	-	内・ロココナド内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
330	431-1	瀬戸式土器	白磁器	E-47	白土層	-	-	-	内・ロココナド内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
331	431-2	瀬戸式土器	白磁器	E-47	白土層	-	-	13.22	内・ロココナド内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
332	431-3	瀬戸式土器	白磁器	E-47	白土層	-	-	-	内・ロココナド・スギ土内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
333	431-4	瀬戸式土器	白磁器	E-47	白土層	-	-	3.8	内・ロココナド・瀬戸式土器内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
334	714-1	瀬戸式土器	文目 黒陶	E-56	白土層	12.4	-	-	内・ロココナド・ロココナド内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
334	717-3	瀬戸式土器	瓦葺 瓦製	E-49	白土層	1	-	6.5	内・ロココナド内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
335	440-5	土師器	瓦	E-49	白土層	1	-	-	内・ナツノ内・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
336	440-1	瀬戸式土器	磁器	E-49	白土層	22.2	14.2	6.4	内・ロココナド内・ロココナド・スギ土内・ロココナド	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
337	440-2	宮内陶器	瓦葺	E-49	白土層	1	-	-	内・ロココナド内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
338	473-1	土師器	瓦	E-57	白土層	10.2	2.9	-	内・オオムネ・ナツノ内・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
339	473-9	土師器	瓦	E-57	白土層	10.0	1.8	-	内・ナツノ内・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
340	707-4	土師器	瓦	E-47	白土層	1	-	-	内・ナツノ内・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
341	473-9	土師器	瓦	E-49	白土層	1	-	-	内・ナツノ内・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
342	473-4	土師器	瓦葺	E-59	白土層	20.8	-	-	内・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
343	473-1	土師器	瓦葺	E-49	白土層	18.8	-	-	内・オオムネ・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
344	473-5	土師器	瓦葺	E-49	白土層	1	-	-	内・ナツノ内・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
345	473-6	土師器	瓦葺	E-47	白土層	1	-	-	内・ナツノ内・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
346	473-2	土師器	瓦葺	E-49	白土層	1	-	-	内・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
347	473-7	土師器	瓦葺	E-49	白土層	1	-	-	内・オオムネ・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
348	707-6	砂器	埴土瓦	E-47	白土層	1	-	3.1	瀬戸式土器内瓦葺	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
349	707-6	磁器	埴土瓦	E-47	白土層	1	-	-	瀬戸式土器内瓦葺	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
350	473-2	瀬戸式土器	文目 黒陶	E-59	白土層	11.6	-	-	内・ロココナド・ロココナド内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
351	473-1	瀬戸式土器	文目 黒陶	E-58	白土層	11.8	7.5	1.1	内・ロココナド・ロココナド内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
352	473-3	瀬戸式土器	磁	E-49	白土層	13.8	3.5	3.8	内・ロココナド内・ロココナド内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
353	714-5	瀬戸式土器	磁器	E-56	白土層	1	-	-	内・ロココナド内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
354	647-2	瀬戸式土器	磁器	E-110	白土層	20.4	-	-	内・ロココナド内・ロココナド・スギ土内・ロココナド	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
355	706-3	瀬戸式土器	磁器	-	白土層	12.6	-	-	内・ロココナド内・ロココナド・スギ土内・ロココナド	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
356	306-1	瀬戸式土器	磁器	E-59	白土層	1	-	-	内・ロココナド内・ロココナド	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
357	711-3	瀬戸式土器	磁器	E-47	白土層	1	-	3.9	内・ロココナド内・ロココナド	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
358	474-10	宮内陶器	瓦葺	E-53	白土層	1	-	-	内・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
359	473-5	宮内陶器	瓦葺 土製	E-57	白土層	100.10	-	-	内・オオムネ・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
360	442-1	土師器	瓦葺	E-51	白土層	21.7	-	-	内・ナツノ内・オオムネ・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
361	442-2	土師器	瓦葺	E-51	白土層	24.3	-	-	内・ナツノ内・オオムネ・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
362	444-1	土師器	瓦葺	E-51	白土層	25.8	-	-	内・ナツノ内・オオムネ・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
363	440-2	土師器	瓦葺	E-51	白土層	17.0	1.8	-	内・オオムネ・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
364	442-2	土師器	瓦	E-59	白土層	17.0	1.8	-	内・ナツノ内・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
365	442-1	土師器	瓦	E-59	白土層	16.8	1.8	-	内・ナツノ内・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
366	440-5	土師器	瓦	E-51	白土層	12.1	1.9	-	内・オオムネ・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
367	444-4	土師器	瓦	E-51	白土層	11.0	1.8	-	内・オオムネ・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	表層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
368	710-1	土師器	瓦	E-51	白土層	10.1	-	-	内・オオムネ・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器
369	709-2	土師器	瓦	E-51	白土層	9.3	2.1	-	内・オオムネ・ナツノ内・オオムネ・ナツノ	中・中層	黒土	遺物・土層 1層 瀬戸式土器

第 17 表 伊坂城跡(第 4～7 次) 遺物観察表(12 / 17)

番号	調査年度	場所	遺物種別	出土位置		埋藏状況		出土層	出土量	調査者	調査方法	出土状況	保存状況	備考
				埋藏状況	出土状況	埋藏状況	出土状況							
310	879-1	土師器	皿	E-59	遺棄上	9.2	1.7	---	内:オサユ・ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡	伊藤 2-13
311	883-3	土師器	皿	E-59	遺棄上	9.8	---	---	内:オサユ・ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡	伊藤 4-7
312	883-4	土師器	皿	E-59	遺棄上	---	---	---	内:オサユ・ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡	伊藤 4-7
313	892-3	土師器	須臾	E-59	遺棄上	19.6	---	---	内:オサユ・ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡	伊藤 2-13
314	882-4	土師器	須臾	E-59	遺棄上	19.6	---	---	内:ハツ・ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡	伊藤 2-13
315	1100-1	土師器	須臾	---	遺棄跡面直上	23.4	---	---	内:ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡	伊藤 2-13
316	113-1	土師器	須臾	---	遺棄上	22.6	---	---	内:ハツ・ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
317	888-1	土師器	須臾	E-C0	遺棄上	---	---	---	内:ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
318	106-3	土師器	須臾	---	遺棄上	---	---	---	内:オサユ・ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
319	882-7	土師器	須臾	E-59	遺棄上	11.4	---	---	内:ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
320	119-3	磁器類	瓶	---	遺棄上	11.8	3.2	---	動物のたの肉面直下	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 1-12	
321	881-3	磁器類	瓶	E-59	遺棄上	---	---	---	動物のたの肉面直上	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 1-12	
322	879-2	石組	石瓦	E-59	遺棄上	11.8	2.9	3.8	動物のたの肉面直下	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 1-12	
323	879-1	瀬戸式土器	文目	E-59	遺棄上	10.7	---	---	内:ロココナツ・ロココナツ内:ロココナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
324	886-3	瀬戸式土器	陶瓦	E-41	遺棄上	11.1	---	7.2	内:内:ロココナツ内:ロココナツ内:ロココナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
325	891-2	石組	陶瓦	E-59	遺棄上	9.2	2.1	3.9	動物のたの肉面直下	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 4-7	
326	117-2	瀬戸式土器	瓦人形	E-59	遺棄上	1.9	1.2	---	内:ナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
327	881-4	瀬戸式土器	須臾	E-59	遺棄上	11.9	---	---	内:ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
328	879-3	瀬戸式土器	須臾	E-59	遺棄上	---	---	---	内:ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
329	883-4	瀬戸式土器	須臾	E-59	遺棄上	15.1	---	---	内:ロココナツ内:ロココナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
330	879-3	瀬戸式土器	須臾	E-59	遺棄上	---	---	---	内:内:遺棄上	中	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
331	883-3	瀬戸式土器	須臾	E-59	遺棄上	---	---	---	内:ロココナツ内:ロココナツ	中	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
332	108-4	瀬戸式土器	小瓶	---	遺棄上	---	---	4.8	内:ロココナツ内:ロココナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 1-12	
333	881-2	瀬戸式土器	瓦	E-59	遺棄上	---	---	8.9	内:ロココナツ内:ロココナツ内:ロココナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
334	879-4	瀬戸式土器	須臾	E-59	遺棄上	---	---	---	内:ロココナツ内:ロココナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
335	309-2	瀬戸式土器	須臾	---	遺棄上	28.4	---	---	内:ロココナツ内:ロココナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
336	879-4	瀬戸式土器	須臾	E-59	遺棄上	20.1	---	---	内:ロココナツ内:ロココナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
337	881-1	瀬戸式土器	須臾	E-C0	遺棄上	---	---	20.3	内:内:遺棄上	中	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
338	881-4	瓦葺器類	須臾	E-59	遺棄上	23.2	---	---	内:ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
339	881-3	瓦葺器類	須臾	E-59	遺棄上	---	---	---	内:内:遺棄上	中	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
340	709-3	瓦葺器類	須臾	---	遺棄上	---	---	11.8	内:内:遺棄上	中	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
341	880-1	瓦葺器類	須臾	E-59	遺棄上	---	---	16.4	内:内:遺棄上	中	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
342	879-7	瓦葺器類	須臾	E-59	遺棄上	---	---	9.8	内:内:遺棄上	中	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
343	887-4	瓦葺器類	片目	E-41	遺棄上	48.9	---	---	内:オサユ・ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
344	106-1	石組	石	---	遺棄上	36.2	13.0	---	内:ロココナツ内:ロココナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
345	114-2	石組	石	---	遺棄上	---	---	9.8	内:ロココナツ内:ロココナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
346	113-4	瓦葺器類	須臾	E-41	遺棄上	48.2	---	---	内:ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
347	113-4	瓦葺器類	須臾	E-41	遺棄上	---	---	---	内:ロココナツ内:ロココナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
348	832-4	土師器	須臾	E-412	遺棄上	---	---	---	内:ナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
349	822-3	土師器	皿	E-31	遺棄上	9.8	1.8	1.8	内:オサユ・ナツ内:オサユ・ナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
350	822-4	土師器	須臾	E-31	遺棄上	18.8	---	---	内:オサユ・ナツ内:オサユ・ナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
351	823-7	瀬戸式土器	須臾	E-118	遺棄上	16.8	3.5	8.0	内:オサユ・ナツ内:オサユ・ナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
352	823-1	瀬戸式土器	須臾	E-118	遺棄上	16.8	3.8	8.8	内:オサユ・ナツ内:オサユ・ナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
353	823-2	瀬戸式土器	須臾	E-118	遺棄上	16.8	3.4	8.1	内:オサユ・ナツ内:オサユ・ナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
354	828-1	土師器	皿	E-412	遺棄上	9.3	2.9	---	内:ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
355	828-2	土師器	須臾	E-412	遺棄上	---	---	---	内:ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
356	828-3	土師器	須臾	E-412	遺棄上	---	---	---	内:ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
357	112-1	瓦葺器類	片目	E-36	遺棄上	28.1	---	13.6	内:オサユ・ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13
358	113-3	瀬戸式土器	須臾	E-36	遺棄上	---	---	---	内:ロココナツ内:ロココナツ	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13	
359	709-2	土師器	須臾	E-36	遺棄上	29.9	---	---	内:オサユ・ナツ内:オサユ・ナツ	中々	表	真直	浅瀬群跡跡跡跡	伊藤 2-13

第 18 表 伊坂城跡 (第 4~7 次) 遺物観察表 (13 / 17)

番号	遺物	場所	発掘層	出土位置		形状・数量・材質	説明	図説	備考	図説	備考	図説	備考	図説	備考	
				東	西											
620	620-2	土師器	遺跡	4-200	遺跡1	24.2	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	貝	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
621	620-3	土師器	遺跡	4-200	遺跡1	24.2	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	貝	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
622	620-4	土師器	遺跡	4-100	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
623	620-7	土師器	遺跡	4-100	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
624	620-4	土師器	遺跡	4-200	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
625	620-1	瀬戸瓦器 磁器	遺跡	4-100	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
626	710-2	土師器	内庭	—	—	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
627	710-3	瀬戸瓦器 磁器	—	—	—	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
628	680-4	土師器	遺跡	4-600	遺跡1	23.8	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
629	680-2	土師器	遺跡	4-600	遺跡1	23.8	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
630	680-7	土師器	遺跡	4-600	遺跡1	18.9	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
631	680-1	土師器	遺跡	4-600	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
632	680-2	土師器	遺跡	4-120	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
633	680-3	瓦葺瓦 土製	瓦葺 土製	4-600	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
634	680-1	土師器	遺跡	4-600	遺跡1	22.9	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
635	700-4	土師器	遺跡	4-50	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
636	680-2	土師器	遺跡	4-200	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
637	680-4	土師器	遺跡	4-100	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
638	680-1	土師器	遺跡	4-600	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
639	680-4	土師器	遺跡	4-600	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
640	647-4	土師器	遺跡	4-620	遺跡1	36.9	—	—	内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
641	647-5	土師器	遺跡	4-620	遺跡1	25.4	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
642	640-1	土師器	遺跡	4-100	遺跡1	29.9	—	—	内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
643	640-3	土師器	遺跡	4-620	遺跡1	22.4	—	—	内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
644	640-2	土師器	遺跡	4-200	遺跡1	23.3	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
645	680-7	土師器	遺跡	4-600	遺跡1	18.9	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
646	700-7	土師器	瓦葺	4-10	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
647	630-1	土師器	瓦葺	4-620	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
648	680-4	土師器	瓦葺	4-600	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
649	700-2	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺 瓦葺	4-50	遺跡1	13.7	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
650	680-7	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺 瓦葺	4-100	遺跡1	13.2	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
651	680-7	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺	4-60	遺跡1	16.4	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
652	700-1	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺	4-50	遺跡1	12.4	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
653	630-1	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺	4-600	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
654	640-1	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺	4-60	遺跡1	39.1	2.4	3.9	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
655	640-3	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺	4-100	遺跡1	36.3	3.2	16.8	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
656	630-4	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺	4-600	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
657	640-4	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺	4-60	遺跡1	16.9	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
658	710-1	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺	4-200	遺跡1	—	1.7	3.9	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
659	640-4	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺	4-200	遺跡1	11.8	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
660	630-2	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺	4-600	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
661	647-5	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺	4-620	遺跡1	26.4	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
662	680-4	瀬戸瓦器 磁器	瓦葺	4-600	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
663	680-1	瓦葺瓦 土製	瓦葺	4-600	遺跡1	45.4	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
664	680-2	瓦葺瓦 土製	瓦葺	4-600	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
665	700-7	瓦葺瓦 土製	瓦葺	4-10	遺跡1	19.4	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
666	640-2	瓦葺瓦 土製	瓦葺	4-200	遺跡1	36.2	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
667	620-1	瓦	瓦葺	4-600	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
668	630-2	瓦葺瓦 土製	瓦葺	4-600	遺跡1	23.4	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
669	630-1	瓦葺瓦 土製	瓦葺	4-600	遺跡1	—	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—
670	630-2	瓦葺瓦 土製	瓦葺	4-600	遺跡1	16.8	—	—	内・ヤマト 内・ヤマト	赤	赤	遺跡1, 3000-6	—	—	—	—

第 20 表 伊坂城跡 (第 4～7 次) 遺物観察表 (15 / 17)

調査年度	調査区	場所	埋没深度 (m)	土質			土質 説明	形状・数量・状態	位置・高さ	遺物・観察項目	出土	種類	数量	写真有無	備考
				表層	中層	底層									
132	770-1	瓦	早瓦	7次西区 E-121	黄土	黄土 10.0	瓦片 1.0	—	—	—	中々	瓦	瓦片10枚	—	イ5L1
133	771-1	瓦	早瓦	7次西区 E-122	黄土	黄土 10.0	瓦片 1.0	—	—	—	中々	瓦	瓦片10枚	—	イ5L1
134	772-1	瓦	早瓦	7次西区	黄土	黄土 10.0	瓦片 1.0	—	—	—	中々	瓦	瓦片10枚	—	イ5L1
135	773-1	瓦	早瓦	7次西区	黄土	黄土 10.0	瓦片 1.0	—	—	—	中々	瓦	瓦片10枚	—	イ5L1
136	767-2	山形陶	縄文	7次西区 E-120	黄土	黄土 10.0	山形陶 1.0	—	—	—	表	山形陶	山形陶1枚	—	イ5L1
137	767-3	硬磁器	弥生	7次西区 E-121	コンクリート	9.0	2.4	—	—	—	中々	硬磁器	硬磁器1枚	—	イ5L1
138	768-3	硬磁器	弥生	7次西区 E-119	コンクリート	—	—	—	—	—	表	硬磁器	硬磁器1枚	—	イ5L1
139	767-1	土師器	縄文	7次西区	黄土	15.0	2.2	—	—	—	中々	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
140	768-8	土師器	縄文	7次西区 E-119	黄土	12.0	1.8	—	—	—	中々	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
141	767-2	土師器	縄文	7次西区 E-119	黄土	12.0	2.2	—	—	—	中々	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
142	767-4	土師器	縄文	7次西区	黄土	11.0	—	—	—	—	中々	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
143	767-1	土師器	縄文	7次西区 E-119	黄土	10.0	2.6	—	—	—	中々	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
144	767-3	土師器	縄文	7次西区 E-119	黄土	8.7	1.7	—	—	—	中々	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
145	767-4	土師器	縄文	7次西区 E-119	黄土	8.0	2.1	—	—	—	中々	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
146	767-2	土師器	縄文	7次西区 E-119	黄土	8.9	—	—	—	—	中々	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
147	767-3	土師器	縄文	7次西区 E-119	黄土	7.8	2.1	—	—	—	中々	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
148	767-4	土師器	縄文	7次西区	黄土	7.4	1.7	—	—	—	中々	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
149	767-2	土師器	弥生	7次西区	黄土	19.0	—	—	—	—	中々	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
150	767-1	硬磁器	弥生	7次西区 E-119	黄土	13.0	—	—	—	—	中々	硬磁器	硬磁器1枚	—	イ5L1
151	767-3	硬磁器	弥生	7次西区 E-119	黄土	10.0	—	—	—	—	表	硬磁器	硬磁器1枚	—	イ5L1
152	767-2	瀬戸内式 陶器	瓦片 茶碗	7次西区 E-119	黄土	11.0	—	—	—	—	中々	瀬戸内式 陶器	瓦片1枚 茶碗1枚	—	イ5L1
153	767-3	瀬戸内式 陶器	硬磁器 瓦片	7次西区 E-119	黄土	11.0	—	—	—	—	中々	瀬戸内式 陶器	硬磁器1枚 瓦片1枚	—	イ5L1
154	767-4	瀬戸内式 陶器	硬磁器 瓦片	7次西区 E-119	黄土	11.0	—	—	—	—	中々	瀬戸内式 陶器	硬磁器1枚 瓦片1枚	—	イ5L1
155	767-2	瓦	早瓦	7次西区 E-119	黄土	—	—	—	—	—	中々	瓦	瓦片10枚	—	イ5L1
156	767-3	瓦	早瓦	7次西区 E-119	黄土	—	—	—	—	—	中々	瓦	瓦片10枚	—	イ5L1
157	767-4	瓦	早瓦	7次西区 E-119	黄土	—	—	—	—	—	中々	瓦	瓦片10枚	—	イ5L1
158	767-1	瓦	早瓦	7次西区 E-119	黄土	—	—	—	—	—	中々	瓦	瓦片10枚	—	イ5L1
159	717-3	土師器	内瓦	7次西区	黄土	3.0	—	—	—	—	表	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
160	881-9	瓦	早瓦	7次西区	黄土	—	—	—	—	—	表	瓦	瓦片10枚	—	イ5L1
161	718-9	瓦	早瓦	7次西区	黄土	13.0	2.3	—	—	—	表	瓦	瓦片10枚	—	イ5L1
162	718-3	瀬戸内式 陶器	瓦片 茶碗	7次西区	黄土	11.0	—	—	—	—	中々	瀬戸内式 陶器	瓦片1枚 茶碗1枚	—	イ5L1
163	688-2	瀬戸内式 陶器	硬磁器 瓦片	7次西区	黄土	—	—	—	—	—	中々	瀬戸内式 陶器	硬磁器1枚 瓦片1枚	—	イ5L1
164	709-4	瀬戸内式 陶器	硬磁器 瓦片	7次西区	黄土	—	—	—	—	—	中々	瀬戸内式 陶器	硬磁器1枚 瓦片1枚	—	イ5L1
165	711-2	土師器	瓦	7次西区	黄土	—	—	—	—	—	表	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
167	711-3	硬磁器	瓦	7次西区	黄土	—	—	—	—	—	表	硬磁器	硬磁器1枚	—	イ5L1
168	711-4	土師器	瓦	7次西区	黄土	—	—	—	—	—	表	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
169	711-2	土師器	瓦	7次西区	黄土	—	—	—	—	—	表	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
171	711-1	土師器	瓦	7次西区	黄土	—	—	—	—	—	表	土師器	土師器1枚	—	イ5L1
182	711-3	瀬戸内式 陶器	瓦片 茶碗	7次西区	黄土	—	—	—	—	—	表	瀬戸内式 陶器	瓦片1枚 茶碗1枚	—	イ5L1

第 21 表 伊坂城跡 (第 4~7 次) 遺物観察表 (16 / 17、金属製品)

報告番号	実測番号	種類	器種	次数	曲輪	地区	遺構・層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考	処理番号
756	723-11	鉄製品	鋸	6	1	E-a3	SD718	5.1	1.1	0.2		10-03
757	723-09	鉄製品	釘	6	1	E-a3	SD718	3.7	0.4	0.4	釘頭幅1.3	10-01
758	723-3	鉄製品	棒状製品	6	1	E-a3	SD718	4.1	0.4	0.3		4
759	725-2	鉄製品	棒状製品	6	1	E-a3	SD718	3.2	0.4	0.4		34
760	723-10	鉄製品	鋸状製品	6	1	E-a3	SD718	4.6	0.4	0.4		10-02
761	724-15	鉄製品	釘	6	—	E-d5	SD719	3.5	0.5	0.4	釘頭幅1.3	26
762	724-3	鉄製品	棒状製品	6	1	E-c1	SD711	2.4	0.6	0.5		16
763	724-9	鉄製品	釘	6	1	A-y22	SZ712	2.8	0.4	0.4	釘頭幅1.1	20
764	723-1	鉄製品	釘	6	1	B-y3	SK749	3.5	0.4	0.4		2
765	723-6	鉄製品	刀子	6	1	B-y3	SK749	5.5	1.0	0.2		7
766	723-5	鉄製品	鍋	6	1	A-y24	SD706	6.2	6.2	2.1	鋳造品	6
767	724-16	鉄製品	棒状製品	6	1	A-y22	SB724 Pi19	2.7	0.5	0.6		27
768	724-18	鉄製品	棒状製品	6	1	A-y24	SB725 Pi12	4.2	0.4	0.5		29
769	724-12	鉄製品	釘	6	1	D-a22	SB752 Pi16	4.8	0.4	0.4	釘頭幅1.0	23
770	724-5	鉄製品	鋸状製品	6	1	A-y22	SB752 Pi11	3.9	0.5	0.5		18-01
771	724-6	鉄製品	棒状製品	6	1	A-y22	SB752 Pi11	2.2	0.4	0.5		18-02
772	724-20	鉄製品	釘	6	1	A-y22	SB752 Pi11	2.4	0.5	0.5	釘頭幅0.9	31
773	728-1	鉄製品	釘	6	1	A-x19	Pi11	1.6	0.3	0.2	釘頭幅0.7	1-a
774	728-2	鉄製品	棒状製品	6	1	A-x19	Pi11	1.8	0.3	0.4		1-b
775	728-3	鉄製品	棒状製品	6	1	A-x19	Pi11	2.1	0.4	0.4		1-c
776	728-4	鉄製品	棒状製品	6	1	A-x19	Pi11	1.2	0.4	0.3		1-d
777	723-15	鉄製品	釘	6	1	A-x22	Pi15	3.9	0.3	0.3	釘頭幅1.2	42
778	725-10	鉄製品	釘	6	1	A-y22	Pi18	5.1	0.5	0.5	釘頭幅0.7	16-01
779	725-11	鉄製品	棒状製品	6	1	A-y22	Pi18	2.5	0.4	0.5		42-02
780	725-12	鉄製品	棒状製品	6	1	A-y22	Pi18	3.0	0.4	0.5		42-03
781	724-7	鉄製品	釘	6	1	B-y3	Pi13	3.0	0.3	0.3	釘頭幅1.1	19-01
782	724-8	鉄製品	釘	6	1	B-y3	Pi13	3.8	0.3	0.3	釘頭幅0.8	19-02
783	724-4	鉄製品	釘	6	1	E-a3	Pi13	4.6	0.3	0.4	釘頭幅1.1	17
784	725-7	鉄製品	釘	6	1	A-t24	表土	4.7	0.5	0.4	釘頭幅1.1	39
785	725-3	鉄製品	釘	6	1	A-t25	表土	4.6	0.4	0.4	釘頭幅1.0	35
786	724-19	鉄製品	棒状製品	6	1	A-u21	包含層	3.5	0.5	0.3		30
787	725-6	鉄製品	棒状製品	6	1	A-w18	表土	8.6	0.5	0.4		38
788	723-7	鉄製品	釘	6	1	B-t2	包含層	7.7	0.7	0.5	釘頭幅1.6	8
789	724-14	鉄製品	棒状製品	6	1	E-c2	包含層	7.4	0.5	0.6		25
790	724-1	鉄製品	釘	6	1	E-c2	表土	5.4	0.5	0.5	釘頭幅1.6	13
791	724-13	鉄製品	鋸状製品	6	1	E-g2	表土	7.3	0.7	0.7		24
792	725-4	鉄製品	棒状製品	6	1	B-w3	包含層	5.3	0.3	0.3		36
793	725-12	鉄製品	釘	6	5	B-x6	包含層	5.0	0.3	0.4	釘頭幅1.2	11-1
794	723-13	鉄製品	棒状製品	6	5	B-x6	包含層	2.2	0.2	0.2		11-2
795	726-5	鉄製品	釘	6	5	B-x6	包含層	2.1	0.4	0.5	釘頭幅1.3	44-04-01
796	726-6	鉄製品	棒状製品	6	5	B-x6	包含層	1.8	0.5	0.4		44-04-02
797	726-7	鉄製品	釘	6	5	B-x6	包含層	3.1	0.4	0.3	釘頭幅0.8	44-05
798	726-8	鉄製品	釘	6	5	B-x6	包含層	2.6	0.5	0.4	釘頭幅1.8	44-06
799	726-3	鉄製品	釘	6	5	B-x6	包含層	2.9	0.6	0.4	釘頭幅1.4	44-03-01
800	726-4	鉄製品	棒状製品	6	5	B-x6	包含層	3.8	0.6	0.4		44-03-02
801	726-12	鉄製品	棒状製品	6	5	B-x6	包含層	1.9	0.3	0.4		44-07-04
802	726-9	鉄製品	棒状製品	6	5	B-x6	包含層	2.4	0.5	0.4		44-07-01
803	726-11	鉄製品	棒状製品	6	5	B-x6	包含層	2.3	0.4	0.4		44-07-03
804	726-10	鉄製品	棒状製品	6	5	B-x6	包含層	1.2	0.4	0.5		44-07-02

第 22 表 伊坂城跡 (第 4～7 次) 遺物観察表 (17 / 17、金属製品)

報告番号	実測番号	種類	器種	次数	曲輪	地区	遺構・層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考	処理番号
805	724-2	鉄製品	棒状製品	6	8	A-k20	表土	2.5	0.5	0.4		14
806	724-21	鉄製品	釘	6	17	A-n19	表土	4.0	0.3	0.3	釘頭幅0.9	32
807	723-2	鉄製品	棒状製品	6	11	B-m2	包含層	4.4	0.4	0.4		3
808	723-4	鉄製品	釘	6	16	B-n7	包含層	2.5	0.4	0.3	釘頭幅0.9	5
809	726-14	鉄製品	釘	7	17	E-m15	包含層	4.1	0.5	0.4	釘頭幅1.0	74
810	726-15	鉄製品	釘	7	17	E-m15	包含層	3.0	0.4	0.4	釘頭幅1.0	75
811	724-17	鉄製品	U字状製品	6	1	E-a3	包含層	6.2	0.6	0.7		28
812	725-15	鉄製品	U字状製品	6	5	B-x6	包含層	4.0	0.8	0.8		43-03
813	726-13	鉄製品	L字形製品	7	17	E-n16	表土	15.6	0.8	0.8	近世?	73
814	726-2	鉄製品	鏝	6	5	B-x6	包含層	6.2	基部0.4	基部0.4	鏝身部長3.2、間部幅1.4、間部厚1.2	44-02
815	726-1	鉄製品	鏝	6	5	B-x6	包含層	8.0	基部0.7	基部0.4	鏝身部長0.4、頭部長6.2、間部幅1.2、間部厚1.1	44-01
816	723-14	鉄製品	小札	6	1	B-w2	包含層	3.4	2.0	0.2		12
817	725-8	鉄製品	板状製品	6	5	B-u4	包含層	6.9	1.7	0.5		40
818	724-10	鉄製品	板状製品	6	2	E-g7	表土	4.9	2.2	0.5		21
819	725-1	鉄製品	板状製品	6	1	D-b23	包含層	6.5	1.8	0.3		33
820	725-14	鉄製品	板状製品	6	5	B-x6	包含層	4.4	2.9	0.4		43-02
821	724-11	鉄製品	火打金	6	5	B-x6	包含層	4.6	1.5	0.5		22
822	725-9	鉄製品	板状製品	6	2	E-g7	表土	5.8	3.5	0.6		41
823	725-5	鉄製品	板状製品	6	1	A-r21	包含層	3.5	1.2	0.6		37
824	723-8	鉄製品	鹿口状製品	6	1	D-b25	表土	14.0	3.3	0.6	内側部外径4.4	9
825	725-13	鉄製品	器物脚部	6	5	B-x6	包含層	7.4	3.5	1.4		43-01
826	727-6	青銅製品	花形飾金具	6	1	A-v24	SE707	2.3	2.1	1.1		49
827	727-4	青銅製品	飾金具	6	2	E-r6	SB907	4.9	0.8	0.1		47
828	727-5	青銅製品	器物把手?	6	6	A-r22	Pit1	2.1	1.1	0.9		48
829	727-7	鉛製品	火縄銃の弾	6	1	A-v21	Pit1	1.1	1.1	1.1		72
830	727-2	青銅製品	飾金具	6	2	E-r6	表土	9.2	2.7	0.9		46-01
831	727-3	青銅製品	飾金具	6	2	E-r6	表土	2.8	2.3	0.7		46-02
832	727-1	青銅製品	隅角金具	6	1	A-u25	包含層	6.9	3.7	0.1		45
833	722-9	青銅製品	銭貨	6	1	A-v21	Pit1取上No.4	2.4	2.3	0.1	乳元重寶	69
834	722-10	青銅製品	銭貨	6	1	A-v25	SE707	2.2	2.2	0.1	元符通寶 (篆書)	70
835	721-2	青銅製品	銭貨	6	1	A-r22	表土	2.4	2.4	0.1	元豊通寶 (篆書)	51
836	721-3	青銅製品	銭貨	6	1	A-r22	表土	2.3	2.3	0.1	元符通寶 (篆書)	52
837	721-4	青銅製品	銭貨	6	1	A-r22	表土	2.4	2.4	0.1	淨化元寶 (行書)	53
838	721-5	青銅製品	銭貨	6	1	A-r22	表土	2.4	2.4	0.1	景祐元寶 (篆書)	54
839	721-6	青銅製品	銭貨	6	1	A-r22	表土	2.4	2.4	0.1	元豊通寶 (篆書)	55
840	721-7	青銅製品	銭貨	6	1	A-r22	表土	2.4	2.4	0.1	元祐通寶	56
841	722-7	青銅製品	銭貨	6	1	A-r21	包含層	2.5	2.5	0.1	至道元寶 (真書)	67
842	722-6	青銅製品	銭貨	6	1	A-r23	表土	2.4	2.4	0.1	皇宋通寶 (篆書)	66
843	721-1	青銅製品	銭貨	6	1	A-w18	表土	2.5	2.5	0.1	景徳元寶	50
844	721-8	青銅製品	銭貨	6	1	A-w21	表土	2.5	2.5	0.1	永樂通寶	57
845	722-8	青銅製品	銭貨	6	2	E-e6	表土	2.4	2.4	0.1	開元通寶	68
846	722-11	青銅製品	銭貨	6	4	E-d10	黒色粘土層	2.4	2.3	0.2	永樂通寶	71

自然化学分析

1 分析の目的

伊坂城跡では、S K 705、S Z 928(曲輪4)のほか、土壘S A 745(曲輪1)・S A 929(曲輪2)等において貝殻が出土した。この貝殻の性格を明らかにするため、貝種の同定を行った。

S K 905(曲輪2)・S K 728(曲輪11)については被熱痕を伴う土坑だが、土器等が出土しなかったため、時期の特定が困難であった。そこで、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定によって年代を導き出し、伊坂城に関わる遺構の可能性が高いことが判明した。

また、骨片・炭化材・被熱痕跡が確認されたS K 1001・1002(曲輪20)についても、土器等が出土しなかったことから、放射性炭素年代測定法によって年代を特定した。さらに、炭化材の樹種同定および骨の分析を行うことで、火葬土坑と特定できた。

2 貝種同定結果

(1) 貝の分析

貝種の同定は三重県総合博物館の中野環氏に依頼した。この同定に基づき、高松が貝類の特徴や考古学的な所見を加えた。

(2) 貝類と出土した遺構について

確認された貝種は、ハマグリ、パカガイ、バイ、シオフキ、アカニシ、マテガイ、イタヤガイ、カキの一種、オオタニシ、イセノナミマイマイ、シジミの一種の1種類である。貝類の総重量は48.9kgで、ハマグリが47kgと最も多く、全体の96%を占める。次いでアカニシが15kgであり、バイ225g、シオフキ159gと続く(第23-25表)。

伊坂城跡における貝類の出土地は11ヶ所以上に及ぶ。曲輪1では、土壘S A 701・S A 745 土坑S K 705・S K 749 溝S D 716 性格不明遺構S Z 712から出土しており、合計重量10.6kg ハマグリは88%を占める。大半の貝類がS K 705から出土していること、土壘の盛土中から出土していることが特徴といえる。また、S A 745に関連する曲輪5の貝類も

含めると、アカニシの出土例が目立つことも特徴といえよう。

曲輪4ではS Z 928とその周辺から出土しており、その重量は35.9kgに及ぶ。大半がハマグリで99.5%を占める。S Z 928では貝類が羽釜とともに出土していること、ハマグリと似たシオフキが多く確認されたことが特徴といえる。

このほか、曲輪8・曲輪11でも貝類が確認されている。曲輪2では土壘S A 929から出土していることを特徴とする。曲輪11では重量1.7kgに及び、ハマグリが95%を占める。

(3) 貝類の特徴

以下、同定した貝種名と簡単な生態分布等の特徴を記す。

二枚貝

ハマグリ

殻長8cm程度の二枚貝で、淡水の影響のある内湾の潮間帯下の砂泥底に生息する。日本では、北海道南西部以南に分布する。『三重の貝類(三重県産貝類目録)』によると桑名・富田・白子・津・大淀・二見などの潮間帯から水深5m付近に棲息することが報告されている(伊勢湾内種)。

なお、伊坂城跡においてチョウセンハマグリは確認されなかった。チョウセンハマグリは日本の関東から九州までの地域に分布し、潮間帯から水深20m程度の砂泥底に棲息する外洋性のハマグリである。ハマグリと比べて殻がぶ厚いことを特徴とする。このチョウセンハマグリが確認できなかったことは、貝の採取地を特定する上で大きな意味をもつ。

シオフキ

殻長4cm程度の二枚貝。北海道以南に分布し、内湾・潮間帯一水深20mの砂地、砂泥地に生息する。ハマグリと似ているため、ハマグリとともに採取された可能性を考えておきたい。

パカガイ

殻長6cm程度の二枚貝。北海道以南に分布し、内湾・潮間帯一水深20mの砂地、砂泥地に生息する。アオヤギとも称される。ハマグリと似ているた

め、ハマグリとともに採取された可能性を考えておきたい。

イタヤガイ

殻長7 cm程度の二枚貝。北海道南部以南に分布し、水深10～100m位の砂地、砂泥地に生息する。放射肋が8本程度、殻頂の両側に耳状突起がつく。

マテガイ

殻長10cm程度の細長い形をした二枚貝。北海道南部以南に分布し、内湾・潮間帯の砂地に生息する。西日本で多く食用とされる。塩分濃度に敏感で、マテガイの穴に塩を振り込んでしばらく待つと飛び出してくる。

カキの一種

マガキやイワガキなどの種類がある。

シジミの一種

殻長2～3 cmの二枚貝で、淡水域や汽水域に生息する。日本の在来種としては、汽水性のヤマトシジミ、淡水性のマシジミ等が確認できる。伊坂城跡からの出土例は、淡水性の可能性があるが、断定には至らなかった。

巻貝

アカニシ

殻長10cm程度の巻貝。殻は大型で重厚。殻口は赤く、表面は黄褐色で黒褐色のかすり模様がある。北海道南部以南に分布し、内湾・潮間帯～水深20mの岩礁、砂地、砂泥地に生息する。主として内湾に多くみられる。アカニシは、サザエの代わりに利用されることもある。

第2表の管理番号9のアカニシを観察すると、殻口上部の結節部に円形の破損部が認められた。アカニシは身を取り出すのが困難な時、殻を打ち割ることがある。この点から、伊坂城跡でも殻を打ち割って食したと推測しておきたい。貝を食したことを示す証拠といえよう。

バイ

殻長7 cm程度の巻貝。北海道南部以南に分布し、潮下帯～水深30m位の砂地、砂泥地に生息する。殻はなめらかで黄白色の地に褐色の模様が入る。食用とされる。

その他

オオタニシ

殻長6 cm程度のタニシの一種で、本州・四国・九州に分布する。水のあまり流れていない田んぼや池、沼などで主に生活している淡水貝である。食用とされることもあるが、伊坂城跡では、わずか133 gと少量の出土のため、何らかの事情によって混入したとみなしておきたい。

イセノナマイマイ

殻長4 cmほどの伊勢湾周辺に分布するカタツムリの一種。わずか0.3gと少量の出土のため、オオタニシと同様に何らかの事情による混入とみなしておきたい。

(4) その評価

貝種の特徴として、ハマグリが圧倒的に多い、ハマグリ・アカニシなど、内湾を好む貝が多数を占める、チョウセンハマグリ・アサリ・アワビは確認できなかった、以上の3点にまとめることができる。

次にこれらの特徴から、貝類採取地を推定したい。まず、ハマグリは内湾性、チョウセンハマグリは外洋性の貝とされている。現在の三重県の海岸部では、ハマグリが伊勢湾の奥まった海域、チョウセンハマグリが志摩半島などの外洋に生息している。これらの点から、桑名や四日市などの伊勢湾の奥まった海域で採取された貝類が伊坂城跡にもたらされた可能性が高い。

次にアサリが含まれない点に注目したい。アサリは殻長3 cm程度の二枚貝で、北海道南部以南に分布。潮間帯～水深10mの砂地、砂泥地に生息する。内湾に多く分布するが、外洋に近い海域にもみられ、潮干狩りの獲物として広く知られる。アサリはハマグリと似た分布・生息を示すにもかかわらず、伊坂城跡では確認されなかった。ハマグリとアサリの漁法は基本的同じで、一定の間隔で刃がついたジョレンのような漁具を引くことで採取したと推測される。刃の間隔を5 cm程度にすれば、アサリはほとんど採取されないのだろうが、皆無とは考えにくい。漁師による採取や採取後の選別を経た可能性が高いことから、商品としてのハマグリが伊坂城跡にもたらされた可能性を考えておきたい。当時の流通を考えると重要な事例となろう。

第2表 出土した貝の種類と重量（地点別）

管理番号	地区	遺構・層位	貝		
			種類とおよその数	特記事項	重量（g）
1	A-120	曲輪8 F11	ハマグリ（多数）		163.76
2	B-13	曲輪11 表土	ハマグリ（多数）		1360
			バイ（1）		23.86
3	B-13	曲輪11 表土	シオフキ（1）		38.63
			ハマグリ（多数）		266.41
4	A-821	曲輪1 包含層（S7712の周辺）	シオフキ（4）		10.49
5	A-820	曲輪1SA701 表土	ハマグリ		2.20
6	A-822	曲輪1S2712 表土	ハマグリ		6.99
7	A-723	曲輪1 表土（SK705）	アカニシ（1）		22.73
8	A-124	曲輪1 SK705 包含層	ハマグリ（多数）		8.55
			ハマグリ		22.6
9	A-123	SK705	ハマグリ		21.37
10	A-124	SK705	アカニシ（1）	特大	148.33
			ハマグリ（多数）		1245
			バイ（1）		4.76
11	A-124	SK705	アカニシ（1）	輪符のみ	48.68
			ハマグリ（多数）		2818
			アカニシ（1）		44.53
12	A-124	SK705	バイ（6）		37.72
			シジミの一種（1）		0.37
			ハマグリ（多数）		3639
13	A-124	SK705	アカニシ（1）		85.4
			バイ（11）		158.23
14	B-V3	曲輪1SA745南北1F 塚上中	ハマグリ		1503
15	B-V3	曲輪1SA745南北1F 塚上中	アカニシ（1）		22.83
			ハマグリ		203.82
16	B-V3	曲輪1SA745 表土	アカニシ（2）		290.1
			ハマグリ		103.13
17	B-V3	SA749	アカニシ（2+a）		140.87
18	B-V5	SA745	バイ（1）		2.64
19	B-V5	SA749	アカニシ		41.9
20	B-V5	SA746	アカニシ		70.41
21	B-V5	SA746	アカニシ（3）		153.96
22	B-V5	SA745 表土	ハマグリ		4.73
23	B-V3	曲輪1SA745南北1F 塚上	アカニシ		1.78
24	B-V3	曲輪1西側向流 包含層	二枚貝、ハマグリ		1.62
25	B-V3	曲輪1西側向流 包含層	アカニシ（1）	口唇部	4.92
26	B-V3	曲輪1西側向流 包含層	ハマグリ		6.15
27	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		162
28	B-V3	SA744 表土	ハマグリ		9.63
29	B-V3	SA744 表土	アカニシ		26.93
30	B-V3	SA744 表土	アカニシ		29.73
31	B-V3	SA744 表土	アカニシ		42.25
32	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）	輪符	15.14
33	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
34	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
35	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
36	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
37	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
38	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
39	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
40	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
41	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
42	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
43	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
44	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
45	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
46	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
47	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30
48	B-V3	SA744 表土	アカニシ（1）		84.30

管理番号	地区	遺構・層位	貝		
			種類とおよその数	特記事項	重量（g）
49	E-11	曲輪4S2928	ハマグリ（多数）		3779
50	E-11	曲輪4S2928	ハマグリ		1263.4
51	E-11	曲輪4S2928	シオフキ（1）		2.38
			ハマグリ		2269
52	E-11	曲輪4S2928	シオフキ（2）		18.14
			ハマグリ		999
53	E-11	曲輪4S2928	シオフキ（1）		8.3
			ハマグリ		2969
54	E-11	曲輪4S2928	シオフキ（1）		5.44
			ハマグリ		1315
55	E-11	曲輪4S2928	シオフキ（1）		16.1
			ハマグリ		3168
56	E-11	曲輪4S2928	シオフキ（3）	大型	19.52
			ハマグリ（多数）		2876
57	E-11	曲輪4S2928	ハマグリ		16.1
			シオフキ（4）		27.98
			オオタニシ（4）		1.33
			イセノナミマイマイ（3）		0.3
58	E-11	曲輪4S2928	シオフキ（2）		0.82
			イセノナミマイマイ（1）		7.6
			カキの一種		0.53
59	E-11	曲輪4S2928	ハマグリ（多数）		1966
			ハマグリ		1966

第24表 ハマグリ割合（曲輪別）

出土地点	すべての貝(g)	ハマグリ(g)	ハマグリの比率
曲輪8	163.76	163.76	1.000
曲輪11	1734.39	1661.41	0.958
曲輪1	10591.24	9359.64	0.879
曲輪3	8.15	6.15	1.000
04744・S0722	171.63	9.63	0.056
曲輪2	169.71	70.22	0.414
曲輪5	98.91	0	0.000
曲輪4	33931.03	30750.48	0.909
合計	48867.36	46971.29	0.961

第25表 ハマグリ以外の貝の重量

貝種	重量（g）
アカニシ	1896.28
シオフキ	359.13
バイ	224.57
バカガイ	0.68
イタヤガイ	7.6
シジミ	0.82
カキの一種	0.53
シジミの一種	0.37
オオタニシ	1.33
イセノナミマイマイ	0.3
その他	4.26
合計	1896.07

(5) 貝類の使用目的

次に、食用としての貝のほか、貝殻の使用目的を考えてみたい。

凝固剤としての石灰分

凝固剤を撒いて盛土を固める技術は古墳時代から知られている。鳥根県今市大念寺古墳の盛土において「ニガリ」の使用が指摘されている。当初、S A 745・S A 929の盛土中から貝殻が出土したため、凝固剤としての利用を考慮した。しかし、土層盛土の単位が大きく、丁寧に積み上げられた形跡が認められなかったこと、伊坂城跡貝殻の93%がS K 705・S Z 912からの出土であることから、その可能性は低いと判断した。

鉄製品における造滓剤

製錬遺構・铸造遺構等から出土する貝殻について、神崎勝氏は造滓剤の可能性を指摘する。造滓剤として貝殻を利用する場合、厚みを有するしっかりとした貝が好まれるであろう。しかし、伊坂城跡では大規模な金属生産・加工にかかる遺構・遺物が認められなかったため、鉄・鋼製品における造滓剤の可能性も低いといえる。

儀礼に伴う食事

当時の出陣の儀式として総大将は出陣式、いわゆる「三献の儀式」を執り行う。膳は白木の三方または折敷で、三つ重ねの盃(かわらけ)と縁起の良い肴が三品、すなわち打ちあわび、勝ち栗、昆布が用意される。

酒を一の盃で受け、第一の肴(打ちあわび)を口にしてから酒を飲み干す。次に二の盃で第二の肴(勝ち栗)さらに三の盃で第三の肴(昆布)と進めていく。いわゆる式三献にあたるもので、敵に「打(討)ち、勝ち、よろこぶ」という縁起である。福陣(凱旋)では、「この軍に勝ち栗、この敵を打ちあわび、よろこぶ」となるため、初献に「勝ち栗」、二献で「打(討)ちあわび」、三献で「昆布」を口に運ぶ。

このような儀式が伊坂城において執り行われた可能性が期待された。しかし、アワビは出土しなかったため、その可能性は低いと考えられる。

宴会等での食事

S K 705はS E 70に隣接しており、土器等とともに

貝殻が出土している。S Z 928では羽釜とともに貝殻が出土しており、曲輪2から投棄された可能性がある。貝殻の9割以上を占める両遺構については、宴会等の食事において饗された後、投棄された可能性を考えておきたい。以上の検討から、伊坂城跡では おもな使用目的とと考えておく。

(6) まとめ

近隣における出土例

伊坂城跡周辺における貝類の出土例として、四日市市赤堀城跡、桑名市志知南浦遺跡、東員町山田城跡などがある。山田城跡では貝の種類は不明だが、S A 4において相当量出土したことが報告されている。赤堀城跡ではハマグリ・バイ・アカニシ・マガキ・ヤマトシジミの他、サルボウ・サザエ・マダカアワビ・ウニ等、志知南浦遺跡ではタニシ・カワニナ・アカニシ・ハマグリなどが確認されている。赤堀城跡でのアワビについては、先述の儀礼を検討する必要があるだろう。

桑名(富田)の焼き蛤

伊坂城跡近辺におけるハマグリといえば、「桑名の焼き蛤」が想起される。「桑名の焼き蛤」は、もともと「富田の焼き蛤」と呼ばれていたが、やがて藩名の桑名で呼ばれるようになったものである。『東海道中膝栗毛』にも当地の名物として登場する。現在の富田には往時をしのぶものは皆無だが、かつては伊坂城跡から遠望できる海岸でハマグリが採取されたようである。

ただし、中世のハマグリについて不明点が多い。中世における富田は、「富田御厨」と呼ばれており、富田一色の漁民は蛤などを伊勢神宮への供え物として捧げることで漁業権を得ていたと考えられる。漁獲高や商品流通の程度、どのような調理方法だったのかは不明としておく。

まとめ

以上から、ハマグリは採取地は眼前の伊勢湾と考えられること、商品として流通した可能性があること、主として食用であり、カルシウム成分としての貝殻利用ははっきりしないことなどが明らかになった。県内において貝類の分類・研究に乏しいため、今後の資料増加をもって改めて検討されることを期待したい。(高松)

【註】

貝類の特徴については、以下の文献を参考にした。

・松本幸雄編『三重の貝類(三重県産貝類目録)』(鳥羽水族館 1979年)

・行田善三『貝の図鑑 - 採集と標本の作り方 - 』(南方新社 2009年)

・池田等『貝の図鑑&採集ガイド-見て、さわって、不思議を学ぶ-』(実業之日本社 2012年)

前掲註 松本編

出雲市教育委員会『史跡今大念寺古墳保存修理事業報告書』(1988年)

神崎勝『冶金考古学概論』(雄山閣 2006年)

永山久夫『戦国の食術』学研新書 101 (株式会社学研マーケティング 2011年)

東員町教育委員会『山田城跡発掘調査報告』(1984年)

・本田裕『貝類遺体鑑定結果』『赤堀城跡』(四日市市教育委員会 1986年)

・丸山真史・松井章『志知南浦遺跡から出土した動物遺存体』『志知南浦遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2008年)

四日市市『四日市市史』第1巻通史編近代 (2000年)

・四日市市『四日市市史』第5巻史料編民俗 (1999年)

3 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭彦・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹

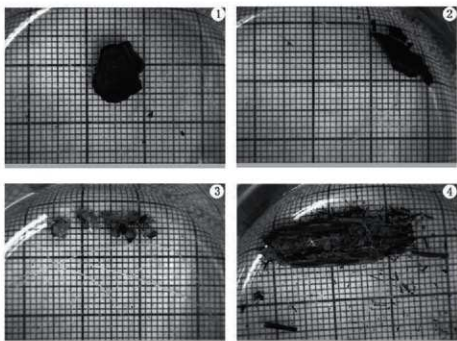
小林隼一・Zaur Lon tlatdze・小林克也

(1) はじめに

伊坂城跡の S K 728・S K 905・S K 1001・S K 1002 から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を行った。なお、一部の試料については樹種同定も行われている (樹種同定の項参照)。

(2) 試料と方法

伊坂城跡 (第7次) の試料は、火葬土坑である S K 100 から採取された炭化材 1 点 (試料 No11: PLD 29801) と、同じく火葬土坑である S K 1002 から採取された炭化材 1 点 (試料 No21: PLD 29802) の計 2 点、伊坂城跡 (第6次) の試料は、カマドの可能性をもつ S K 905 から採取された炭化材 1 点 (試料 No4: PLD 29803) と、同じくカマドと考えられて S K 728 から採取された炭化材 1 点 (試料 No7: PLD 29804) の計 2 点で、合計 4 点である。樹種同定の結果、試料 No11 と 21 はマツ属複雑管束亜属であった。また、実体顕微鏡での観察の結果、



1 PLD 29801 2 PLD 29802 3 PLD 29803 4 PLD 29804

第11図 放射性炭素年代測定試料

第26表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-29801	遺跡名：伊板城跡（第7次） 遺構：SK1001 試料No. 1-1	種類：炭化材（マツ属複雑管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-29802	遺跡名：伊板城跡（第7次） 遺構：SK1002 試料No. 2-1	種類：炭化材（マツ属複雑管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-29803	遺跡名：伊板城跡（第6次） 遺構：SK905 試料No. 4 遺物No.：土壇サンプル1	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.4N, 塩酸：1.2N）
PLD-29804	遺跡名：伊板城跡（第6次） 遺構：SK728 試料No. 7	種類：炭化材（タケ亜科） 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

第27表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-29801 SK1001 試料No. 1-1	-26.38 \pm 0.16	316 \pm 17	315 \pm 15	1522-1575 cal AD (51.6%) 1585-1590 cal AD (3.7%) 1625-1640 cal AD (12.8%)	1497-1506 cal AD (2.3%) 1512-1601 cal AD (72.6%) 1616-1644 cal AD (20.5%)
PLD-29802 SK1002 試料No. 2-1	-27.61 \pm 0.16	299 \pm 17	300 \pm 15	1524-1558 cal AD (48.9%) 1631-1645 cal AD (19.3%)	1520-1593 cal AD (68.9%) 1620-1649 cal AD (26.5%)
PLD-29803 SK905 試料No. 4	-29.08 \pm 0.19	450 \pm 20	450 \pm 20	1434-1449 cal AD (68.2%)	1423-1459 cal AD (95.4%)
PLD-29804 SK728 試料No. 7	-29.43 \pm 0.19	356 \pm 18	355 \pm 20	1474-1521 cal AD (42.2%) 1592-1620 cal AD (26.0%)	1460-1525 cal AD (48.6%) 1557-1633 cal AD (46.8%)

試料 No.7 はタケ亜科であった。発掘調査所見によれば、いずれも1世紀後半～1世紀の遺構と考えられている。測定試料の情報、調製データは第26表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（バレー・ラボ、コンパクト AMS: NEC製 15SDH）を用いて測定した。得られた ^{13}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

第2表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 (^{13}C)、同位体分別効果の補正を行って暦年校正に用いた年代値と校正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第11表に暦年校正結果をそれぞれ示す。暦年校正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年校正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年校正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD 1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libbyの半減期 5568年を使用した。

また、付記した ^{14}C 年代誤差 (1) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年校正の詳細は以下のとおりである。

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 40年) を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年校正には OxCal2 (校正曲線データ: IntCal3) を使用した。なお、1 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

(4) 考察

以下、2 暦年代範囲(確率 95.4%)に着目して結果を整理する。

伊坂城跡(第7次)では、S K 100の試料No11 (PLD 29801)は 1497 1506 calAD (23)、1512 1601 calAD (726)、1616 1644 calAD (205) で、1世紀末～1世紀中頃の暦年代を示した。また、S K 1002の試料 No21(PLD 29802)は 1520 1593 calAD (689)および 1620 1649 calAD (265) で、1世紀前半～1世紀中頃の暦年代を示した。いずれも室町時代～江戸時代前期に相当する。なお、これらの測定試料は最終形成年輪を含めて測定が行われており、測定結果は試料の枯死もしくは伐採年代を示す。発掘調査所見による遺構の推定時期はいずれも1世紀後半～1世紀であり、測定結果は遺構の推定時期に対して整合的であった。

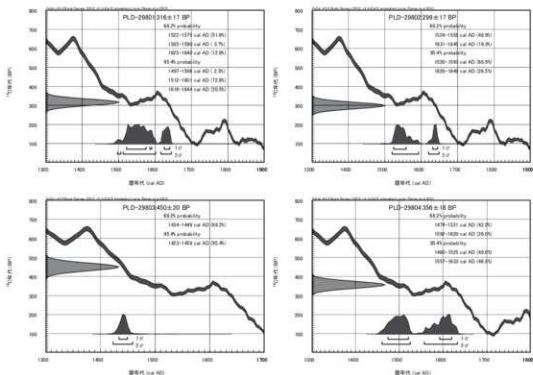
伊坂城跡(第6次)では、S K 905の試料No4 (PLD 29803)は 1423 1459 calAD (954) で、1世紀前半～中頃の暦年代を示した。これは、室町時代に相当する。なおこの試料は、最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であった。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が

得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる(古木効果) 試料No4は古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。試料No4の測定結果は、発掘調査所見による遺構の推定時期である1世紀後半～1世紀よりもやや古い年代値を示した。これは、古木効果の影響である可能性がある。

S K 728の試料No7(PLD 29804)は 1460 1525 calAD (486) および 1557 1633 calAD (468) で、1世紀中頃～1世紀前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。試料No7はタケ亜科であり、測定結果は、試料の枯死もしくは伐採年代を示す。発掘調査所見によるS K 728の推定時期は1世紀後半～1世紀であり、測定結果は遺構の推定時期に対して整合的である。

【参考文献】

- Bronk Ramsey C 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates Radiocarbon 51 1 337 360
中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎、日本先



第 112 図 暦年代校正結果

史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」:
320, 日本第四紀学会。

Reimer P J Bard E Bayliss A Beck J W Blackwell
P G Bronk Ramsey C Buck C E Cheng H Edwards
R L Friedrich M Grootes P M Guilderson T P
Ha Thson H Hajas I Hatté C Heaton T J Ho mann
D L Hogg A G Hughen K A Kaiser K F Krner B
Manning S W Niu M Reimer R W Richards D A
Scott E M Southon J R Staff R A Turney C S M
and van der Plicht J 2013 *IntCal13 and Marine13
Radiocarbon Age Calibration Curves 0 50000 Years cal
BP Radiocarbon* 55.4 1869 1887

4 炭化材の樹種同定

小林克也(パレオ・ラボ)

(1) はじめに

伊坂城跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、一部の試料については放射性炭素年代測定も行われている(前部参照)。

(2) 試料と方法

試料は、火葬土坑であるS K 100から採取された炭化材3点と、S K 100から採取された炭化材3点の、計6点である。発掘調査所見による遺構の推定時期は1世紀後半～1世紀代で、試料No1と21の放射性炭素年代測定の結果は室町時代～江戸時代前期に相当する暦年代を示した。

各試料について、木取りの確認と復元直径、残存半径、残存年輪数の計測を行なった。復元直径は、1 cm刻みの同心円に試料の最外部または年輪のカーブを沿わせて計測した。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計数した。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)・接線断面(板目)・放射断面(柱目)について、カミソリと手で断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM 5900LV)にて検鏡および写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、いずれの試料も針葉樹のマツ属複維

管束亜属であった。年輪の計測では、残存半径2.5cm内に14年輪みられた試料No22のように年輪幅の詰まった試料もみられたが、残存半径3.9cm内に10年輪みられた試料No23のように、年輪幅の広い試料が多かった。同定結果を第2表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、第11図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen Diploxylon* マツ科 1a1(No11) 2a2(No12) 3(No21) 4(No22) 5(No23) 仮道管と放射仮道管、放射組織、垂直および水平樹脂道で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列のもの、水平樹脂道を含む多列のものがみられる。分隔壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側に向かって鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育する。どちらも材質は重硬だが、切削等の加工は容易である。

(4) 考察

火葬土坑であるS K 100およびS K 100から出土した炭化材は、いずれもマツ属複維管束亜属であった。試料はいずれも遺体を茶毘に付す際の燃料材であったと考えられる。マツ属複維管束亜属を燃料材としてみると、油分を多く含み、高火力で燃焼する、という材質を持つ(伊東ほか, 2012)。燃焼性の高いマツ属複維管束亜属を燃料材として選択的に利用していたと考えられる。

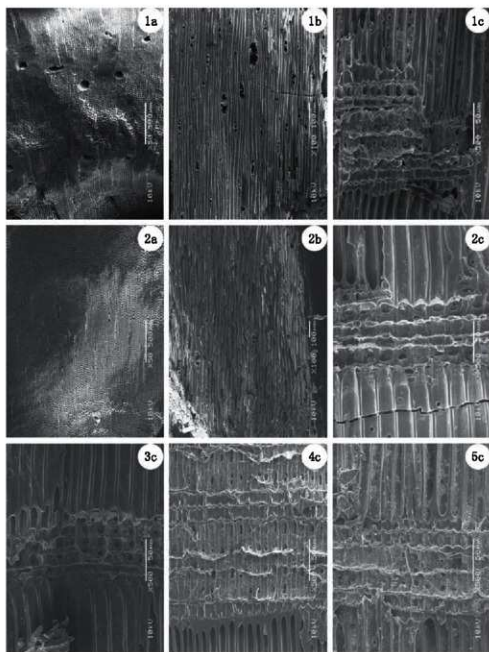
また試料の復元直径と木取りを確認すると、直径の小さな試料は芯持丸木だが、直径の大きな試料はみかん割りであった。直径の大きな材は割って大きさを揃え、燃料材として利用していたと考えられる。

【引用・参考文献】

平井信二 1996) 木の百科科・解説編, 642p, 朝倉書房。
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和樹(2011) 日本有用樹木誌, 23p, 海青社。
伊東隆夫・山田昌久編(2012) 木の考古学, 449p, 海青社。

第 28 表 伊坂城跡(第 7 次) 出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	地区	グリッド	遺構名	種類	樹種	木取り	残存半径 (cm)	残存年輪数	復元直径 (cm)	年代測定番号
1-1	中区	H-112	SK1001	燃料材	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	1.8	8	4.0	PLD-29801
1-2	中区	H-112	SK1001	燃料材	マツ属複維管束亜属	みかん割り	2.4	8	18.0	
1-3	中区	H-112	SK1001	燃料材	マツ属複維管束亜属	みかん割り	2.3	5	6.0	
2-1	中区	H-112	SK1002	燃料材	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	1.2	6	2.0	PLD-29802
2-2	中区	H-112	SK1002	燃料材	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	2.5	14	5.0	
2-3	中区	H-112	SK1002	燃料材	マツ属複維管束亜属	みかん割り	3.9	10	11.0	



1a 1c マツ属複維管束亜属 No11、2a 2c マツ属複維管束亜属 No12、3c マツ属複維管束亜属 No21、4c マツ属複維管束亜属 No22、5c マツ属複維管束亜属 No23
a 横断面、b 接線断面、c 放射断面

第 113 図 伊坂城跡(第 7 次) 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

5 SK 100から出土した人骨

中村 賢太郎 (パレオ・ラボ)

(1) はじめに

火葬土坑と考えられるSK 100から出土した人骨について報告する。なお、人骨同定にあたって、名古屋大学の新美倫子先生にご助言をいただいた。

(2) 試料と方法

SK 100は、炭化材が多量に見られ、壁面が被熱により赤変し硬化していた。試料は、SK 100の埋土から出土した人骨片である。なお、SK 100から出土した炭化材を試料とした放射性炭素年代測定の結果、1世紀前半～1世紀中頃の暦年代が得られている。

試料の観察は肉眼と実体顕微鏡で行った。

(3) 結果

骨片は人骨であった。破片となっており、最大で5cm程度であった。

いずれの人骨片も白くなるまでよく焼けていた。

一部の人骨片には、収縮による亀裂が見られた。

同定されたのは、頭蓋骨が3片、肋骨が1片、四肢骨が1片である。その他に部位不明破片(0.5～3cm程度)が約100片ある。

頭蓋骨には縫合が未癒合の破片も見られた。

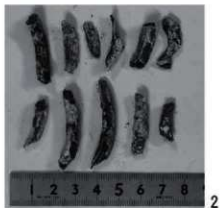
(4) 考察

収縮による亀裂が見られ、白くなるまで焼けている点から、軟質部が付着しているような生の状態で、高温で焼かれたと考えられる。つまり、人骨の観察から、ヒトの遺体が茶毘に付されたという遺構の性格が支持される。

同定された部位の偏りを考えると、頭蓋骨のほとんど、下顎骨、椎骨、四肢骨はSK 100から運び出され、別の場所に埋葬されたと考えられる。

性別については、性差を示す部位が残っていないために不明であった。

年齢についても詳細不明であるが、頭蓋骨の縫合に未癒合の部分がある点から、高齢の老人である可能性は低いであろう。



1頭蓋骨 2肋骨 3四肢骨
第114図 SK 100出土人骨

考 察

今回の伊坂城跡の調査では、曲輪1内部や城全体の構造、築造・改修・廃絶の変遷状況や時期など、数多くの知見を得ることができた。

城は1世紀後半～1世紀初めに築造され、何度かの改修が試みられながら、約100年使用されたこと、最も注目すべき遺構の櫓門SB719は改修後に築かれたこと、この大規模な改修は城の守りを強固なものとし、その性格を著しく変化させたことなどが明らかになった。

発掘調査により得られた成果を検討し、縄張り研究や文献史料の視点も盛り込みながら、遺跡全体について考えてみたい。

1 伊坂城以前

中世以前の遺物として、須恵器146点が出土した。実測図掲載遺物(7点)は第7次調査区のものが多いが、その出土地点は、曲輪1・2にまで及ぶ。

伊坂城跡第3次調査ならびに伊坂遺跡において古墳時代後期～古代の竪穴住居などが確認されており、過去の屋敷地部分の調査(第1・2次)においても古代の遺構・遺物が検出されていたが、今回の調査によって、丘陵頂部付近、すなわち曲輪1・2にまで古代の集落の広がりが及んだ可能性が高まった。また、第5次調査西区土橋SA743の断ち割り調査によって古代の土師器(683)が出土している。丘陵頂部よりもさらに北側にまで、集落の広がりが及んだ可能性がある。

なお、曲輪1では、地山を約50cm削平して平坦面を形成したことが判明している。城郭部分の古代の遺構は、伊坂城築城により失われたと推測される。

2 伊坂城の遺構

(1) 城の変遷と年代

今回の調査で出土した瀬戸美濃陶器は、古瀬戸後期古段階から大塚第4段階前半まで認められた。後述するように、大塚第1段階が最も多く、全体の54%を占める。次いで第2段階が16%と続く。したがって、伊坂城の盛行期は大塚1～2段階と評

値できる。この点は、屋敷地部分での調査傾向と矛盾しない。したがって瀬戸美濃陶器からみた場合、1世紀前半が伊坂城の盛行期といえる。

次に、伊坂城跡の築造時期を探る手がかりとして、曲輪1土壘SA745の旧表土より出土した天目茶碗(138)があげられる。この天目茶碗は、古瀬戸後期新段階のもので、本調査における同段階の占める割合は13%であるため、伊坂城の築造時期は古瀬戸後期新段階にさかのぼる可能性がある。

また、屋敷地部分においても、一定量の古瀬戸後期のものが出土している。城郭部分だけでなく、屋敷地部分も同じ時期に造営が始まった可能性がある。

終焉の時期は、大塚第3段階137%、第4段階が19%の割合が手がかりとなる。おおむね大塚第3段階に終焉を迎えたといえる。ただし城跡の場合、遺物の下限と遺構の特徴による下限に齟齬をきたす事例もある点には留意が必要である。

改修痕跡は合計10か所で確認できた。SD710とSD718、SD716、SB715、SD746、曲輪7、SD747・733、曲輪6・8・11・12、曲輪5とSD736、SD910・SD921、堀底道SD719である。

これらのうち、一は曲輪1の建物配置・防壁施設の改修に伴うもの、二は地滑りに伴うもの、三は城域の拡張に伴うもの、四は主たる防御の対象が弓から火縄銃への変化に起因する可能性のもの、である。

改修、特に城域の拡張に関しては、曲輪1東斜面旧表土直上からの出土品が手がかりとなる。瀬戸美濃陶器の擂鉢(618)は大塚第1段階、常滑陶器の片口鉢2類(617)は1型式であった。築城から程なく改修・拡張を行っているといえる。城域の拡張が大塚第1段階からみられること、地滑りが大塚第1段階、堀の拡張が火縄銃に対応したものならば16世紀半ばから後半と考えられよう。

さらに櫓門SB719の整地層から大塚第3段階の天目茶碗(123)が出土したことから、大塚第3段

階にも改修が行われたこと、最末期の改修によって、伊坂城の性格が著しく変貌したことがわかる。

(2) 櫓門 S B 715と門 S B 907

櫓門 S B 715の形式

伊坂城の櫓門は、合計1石の礎石からなる。中央に大きな礎石6石が3列に並び、前列・中列の脇には小さな礎石4石が両脇の土塁に接するように据えられていた。

遺構の章でも述べたが、櫓門の形式としては、2階が渡り廊下状のものではなく、単独の櫓のものとして推測される。また、門は正面に建てた2本の鎮柱の上に冠木を渡し、転倒を防止するための控柱を後方に立てるが、伊坂城の場合、後列の礎石は花崗岩で平滑とは言えないため、主に前列と中列で門の荷重を受けていたと考えられる。

小さな礎石には脇柱が据えられ、鎮柱・脇柱との間には、2階へ登るための階段が設置されていた可能性が高い。もう一方の側には排水溝が曲輪1の内側から堀底道 S D 719へ向かって設置されていた。

なお、この小さな礎石には、土塁に寄り掛けるように寄り掛け柱を据えて、土塁と門の隙間を埋めるような工夫がなされていた可能性がある。

そして、伊坂城跡では、まとまった量の瓦は確認されていないことから、瓦葺ではなかった可能性が高い。櫓門の構造として、青森県弘前市弘前城迹手門や掛川城より移築された静岡県袋井市油山寺山門等の現存例が参考となろう。

櫓門 S B 715の時期

S B 715は、伊坂城築城当初ではなく、溝 S D 711・716埋めた後、あらたに掘削して虎口を設けて建てられたことが判明している。S D 711土の播鉢（107～109）は大塚1・2段階、S B 715竪地層から出土した天目茶碗（123）は大塚第3段階のものである。これらから、S B 715は大塚第3段階、1560～1599年に建てられたと考えられる。

櫓門 S B 715の評価

2階が単独の櫓門は中世前半あるいは古代以来の系譜の中で位置づけることができる。一方で、渡り廊下状の櫓門は、両側の石垣と連動して、強固な防衛施設となり、織豊系の城郭では大手門や本丸正面等重要な城門に採用する。

伊坂城の櫓門は前者であり、織豊系とは異なる系譜と考えられる。ただし、櫓門のみ精密かつ高い技術で建築していることから、他地域から技術集団を招いたことは確かといえる。なお、寺院建築での櫓門は礎石の中列に最も荷重がかかるが、伊坂城の場合は前列にかかることから、寺院建築からの影響も考えにくい。今後、その技術系譜を特定する必要があるだろう。

門 S B 907

曲輪2のS B 907は、柱穴を2個確認できたこととどまったことから、控柱を有しない構造だったと考えられる。控柱を有しない門として、鎮柱・冠木・屋根で構成される櫓門、屋根を省略した冠木門、屋根・冠木を省略した堀門の3種類があげられる。堀門は旗差物を背に差した騎馬武者が冠木に当たらないように門を通るため、曲輪2には騎馬武者が登ってこないため、該当しない。冠木門は座が常に風雨に晒されるため、城門として用いられるのは稀である。以上から、S B 907の門形式を櫓門と想定しておきたい。

(3) 曲輪1の内部構造

曲輪1上段には主要な建物3棟または4棟（S B 725・S B 724・S B 726・S B 721）確認できた。門からこれらの建物へ至る2通りの想定ルートについて触れておきたい。

ルートA：南側から回り込む

櫓門 S B 715から曲輪1下段へ至り、下段を南進、反時計回りに進み、南側から上段に至るルートである。この場合、手前にS B 726、最も奥にS B 729が位置することになり、最も重要な建物はS B 725となる。

ルートB：S B 725南隅から入る

櫓門 S B 715から曲輪1の下段へ至り、ただちに上段と下段を区分する斜面を登り、掘立柱建物 S B 725南隅に至るルートである。この場合、手前にS B 725があり、発掘調査を行っていない箇所にも重要な建物を想定することになる。S B 725は最も重要な建物の一部、あるいはその付属施設の可能性がある。

ルートAの問題点として、下段を南進すると現在、井戸跡とされる箇所を通過すること、曲輪1の南西

辺は土壁が低いため防衛性が劣る搦手側を思わせる箇所を通過することにある。また、S B 725の入口を南西辺（S K 717の西側）に想定されることとうまく合致しないこともルートAの難点といえる。

以上から、ルートBの可能性を高く考えておきたい。

（４）曲輪１の主要建物の性格

曲輪１の主要建物として、最も大きな掘立柱建物S B 725と、その一連の可能性のあるS B 724およびS B 726の性格について検討する。

S B 729については、屋内柱が少なく、広い内部空間を志向している点が特徴として挙げられる。

その機能として、まず対面の場としての機能を想定できよう。この場合、南隅が入口、北側が奥、長方形平面または一列に部屋が並び、対面は建物長軸を軸線としたものとなろう。対面の場の変遷を詳しくまとめた平井聖氏の研究を参考にすると、聚楽第（1586～1587年）より前は、主となる人物が庭に向かう軸線をとる。一方で、聚楽第以降の軸線は、庭に平行になるのだという。さらに部屋の配列が一列に並び建物は江戸時代の明暦大火（1657年）以降に広まるという。この点をふまえると、想定されるべき庭の位置、庭に平行な軸線が出現する前の建物であるという２点で麒麟を来す。

また、後述するように柱間寸法の検討から、S B 729は専門の集団による建物ではなく、村人等による協業によるもの可能性が高い。福井県一乗谷の朝倉氏館等では、主殿や会所と称される対面の場が想定されている。伊坂城の場合、階層的位置を考慮すれば、対面のためだけの建物は建てられることなく、居住機能と未分離だった可能性を考慮すべきだろう。

次に想定される機能として、台所があげられる。台所については、広島県吉川元春館跡において精緻な復元がなされており、切妻構造で、内部に広い空間をとる。S B 729は柱配置から下屋を想定しづらく、切妻構造がふさわしい。

しかし、伊坂城では被熱した土塊はS B 72付近で出土しており、S B 72建物内や周辺でカマドの痕跡をとらえることができなかった。さらに吉川元春邸の台所の床面積は98.9㎡、伊坂城のS B 729は

97.8㎡とほぼ同規模で、伊坂城の台所としては大きすぎる印象を受ける。台所の想定は難しいといえよう。

後述するようにS B 729は、江戸時代の民家につながる建物と想定したい。いずれにしても曲輪１で最も重要な建物の一つに変わりはない。

S B 725と一連の可能性のあるS B 724については、ピットA y2Pit8の長を建物の外に配された排水受けと想定できることから、日常生活に関連する建物と考えられる。ただ、S B 724の南隅部は柱間寸法を2.45mと広くとる特徴を持つので、馬屋の可能性もあろう。

S B 724は、下段の空間からみると約50m高い位置に建てられている。そびえるように建つことから、遮蔽の機能も有している可能性がある。

S B 729については、不明な部分が多く、柱穴もS B 725・724に比して小さい。現状では、S B 725・724よりも大規模な建物を想定しづらい。南半が未調査のため、今後の調査・研究の進展に委ねたい。

（５）柱間寸法からみたS B 725

曲輪１の主要建物S B 725の性格について、柱間寸法や掘立柱建物の型式などから検討する。

柱間の変遷

寝殿造系の建築において、柱間は、鎌倉時代には8尺、室町時代初期に7尺の例が現れて、漸次小さくなるとされる。鹿苑寺金閣は1間7尺、竜吟庵方丈（1387年）は6尺8寸である。さらに応仁の乱後には6尺5寸となる。慈照寺東求堂（1485年）・銀閣（1489年）大仙院本堂（1513年）などが典型例で、いわゆる京間が始まる。

また、同じ頃の福井県一乗谷朝倉氏遺跡では、6尺2寸前後の柱間が採用されている。これによって京間よりも狭い柱間が既に発生していることが知られている。

さらに、京都市丹波市町・右京二条四坊竹屋町における町屋の調査で、16世紀後半以降の礎石建物が確認されており、6尺3寸を採用することが指摘されている。

伊坂城跡の特徴として、6尺5寸を基本としつつも、桁行と梁間において異なる尺を採用している建

物が多い。三重県内の事例のうち、梁行において3mなどの長い1間が認められる山田城跡に類似している印象を受ける。今後、柱間寸法の検討を通して、伊勢・伊賀または北勢の地域的特徴を明らかにしていきたい。

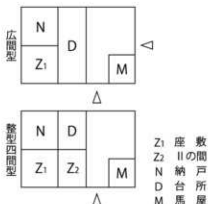
掘立柱建物

宮本長二郎氏によると、中世の掘立柱建物は、奈良・平安時代と異なる新しい構造型式である総柱型掘立柱建物が出現し、この建物内部に立つ柱（屋内柱）は時代が下るにしたがって次第に除去され、間仕切り柱のみとなって近世的な間取りが成立すると結論づける。さらに総柱型とは別に梁間一間型住居も中世に出現するという。その特徴として、柱間寸法は、桁行が狭く、梁間が桁行の1.5～2倍ほど広くなること、弥生時代以来の伝統型式（在来型）が総柱型掘立柱建物の影響を受けて生まれ変わり、中世に復活すると述べている。

この分類に従えば、伊坂城跡のS B 729は梁間一間型に該当するだろう。この場合、専門の集団による建物ではなく、村人等による協業による可能性が高い。この点は建物の評価を行う上で、重要といえる。

建物の性格

S B 729は伊坂城で最も大きな建物である。平面図からみれば、江戸時代の民家の間取りに類似することがわかる。先述の宮本氏の分類に従えば、広間型（第115図）といえよう。この場合、建物の南東側は土間、北西側は床上部となり、建物土坑S K 717は馬屋の可能性が高い。広間型には平入りと妻入りがあるが、伊坂城の場合、妻側に溝S D 710



第115図 農家の平面類型

がめぐることから、平入の可能性が高い。なお、広間型の床上部を田字型に区分すると整型四間型という民家の基本形となる。

面積については、兵庫県粟粟市における1780(安永9)年の記録によると、48戸のうち84間は本役1戸、83間は本役庄屋1戸、標準は5.5～4.5～2間であることが分かる(第29表)。このことから、S B 729は、有力地主層の建物規模に相当する。

(6) 竪穴遺構

曲輪13において3基の方形土坑(S K 913～915)を検出した。大きさは一辺2～3mで、入口の可能性のある突出部が取りつく。これらについては、竪穴遺構の可能性が想起される。城館遺跡から検出された竪穴遺構については、その定義を工藤清泰氏が行っており、これに基づいて中井均氏が事例の集積・検討を行っている。工藤氏は、方形基調、上部構造を推定させる柱穴等が存在すること、出土遺物が城の時期に限られるもの、炉・かまどを造らず、出入口部分は張り出しを用いることが多いこと、以上の4点にまとめている。該当事例として、茨城県石神城跡、長野県金井城跡・大井城跡のほか、長崎県原城跡において竪穴遺構が報告されている。このうち原城跡では、石垣の前面で列となって検出されている。その大きさは原城跡の場合、2～3m程度である。

また、鳥原の乱後20年に際して1837年に描かれた『鳥原の乱図屏風』に、半地下式の小屋が認められる。中井氏は、この屏風にある半地下式の小屋が、竪穴遺構の実体だった可能性を示唆している。

第29表 旧千本屋村の規模別戸数と役柄

	桁行×梁間	戸数	役
標準型	8×4(間)	1	本役
	8×3.5	1	本役庄屋
上層農家層	7×3.5	2	半役
	6.5×3	2	本役・半役
	6×3	4	本役2・半役2
	6.5×2.5	1	本役頼頭
		5.5×2.5	2
標準型	5×2.5	9	本役3・半役5・無役1
	4.5×2.5	2	半役・宍守
	5×2	4	半役1・無役3
	4.5×2	6	半役4・無役2
	小型	3×2.5	1
3.5×2		6	半役3・無役3
3×2		6	半役2・無役4
2.5×2		1	無役

この竪穴遺構の性格については、駐屯の際の陣営地や、緊急時における民衆の避難小屋などの性格が想定されている。いずれにしても緊急的・一時的な使用を目的としており、簡易な構造だったと想定される。

伊坂城跡の場合、遺物が皆無であること、地山由来の埋土で構成されており、炭・焼土などを含まないこと、土坑内および土坑周辺で上屋を支えるための柱穴が確認されなかったこと、入口の可能性をもつ張り出し部が4基とも異なる方向に開口していること等の点から、竪穴遺構として認定することに躊躇を覚える。ここでは可能性をあげるにとどめて、今後の類例増加に期待したい。

(7) 造成方法の特徴

曲輪1・2の平坦面造成と土塁

曲輪1については、地山を50cm以上掘り下げて平坦面を形成しており、造成土は確認されなかった。この点から、旧地形において十分な広がりをもつ丘陵頂部が存在したことが推測できる。

一方曲輪2では、十分な用地が確保できなかったように、北東側と南西側において整地層による平坦面拡張が確認できた。曲輪1の用地確保を優先させた結果とも言えるだろう。土塁の盛土には、灰色粘土質地山に由来するものが多く観察できた。堀底道SD719の深掘りや、周囲を切岸によって防御を高める際に生じた排土を利用したものと考えられる。

土塁の築造方法については、曲輪1において外側から積み始めることが確認された。盛土の単位は大きく、積み方も非常に粗い。古墳の盛土で確認できる精緻な積み方は認められなかった。

なお、土壘中からハマグリ等の貝殻が出土したため、凝固剤に用いられるニガリの代わりに貝殻を使用し、盛土を固めた可能性を想定した。しかし、本調査では、化学変化による盛土強化の技術の痕跡をとらえることができなかった。

また、江戸時代の「武教全書」に記された土壘の勾配は、傾斜45度(たつき土居)または傾斜間60度(芝土居)とされる。伊坂城の場合、調査時における残存状況で傾斜30度であり、当時の傾斜が『武教全書』にあるような角度であったとは想定しがたい。おおむね30~40度であったと想定しておく。

曲輪3の造成

曲輪3の造成に際しては、地山を掘り下げた後、盛土を行っていた。この点は、曲輪1の土壘SA701・745と異なる。すなわち、曲輪3の部分は、当初から計画的に削り残すことを行っていないのである。

さらに、曲輪3で検出した地山の標高は、曲輪1の上段平坦面とおおむね一致する。この点から、曲輪上段平坦面形成の際に曲輪3の範囲まで一連の地山掘り下げが行われた可能性がある。この作業の後、曲輪1下段平坦面が形成されたと推測される。曲輪1西辺は固定的である一方で、東辺は柔軟に変更できる設計だったと想定しておきたい。

曲輪5とSD736

曲輪5は当初、堀SD736がめぐらされていた。このSD736は曲輪1北東斜面下端に形成された堀で、方形の曲輪1の外周をめぐる堀の一部をなす。

この堀は、曲輪1の改修・城域の拡張に伴って埋められ、曲輪5という平坦面へと改修された。城域の拡張によって、それぞれの遺構の役割・機能が変化した結果と考えられる。

曲輪6・8・11・12の造成

曲輪6・8・11・12では、斜堆積を特徴とする造成土が観察された。城の改修・拡張に伴って生じた排土をこれらの曲輪の拡張に利用したのである。すなわち、曲輪平坦面の端部から谷部へ土を排出したような状況で、意図的な盛土の工法等は認められない。

これらの曲輪では、明確な防御施設が設置されていなかった。したがって、防御施設として期待されていたのではなく、非常時に大量の兵士を収容する空間に利用された可能性がある。

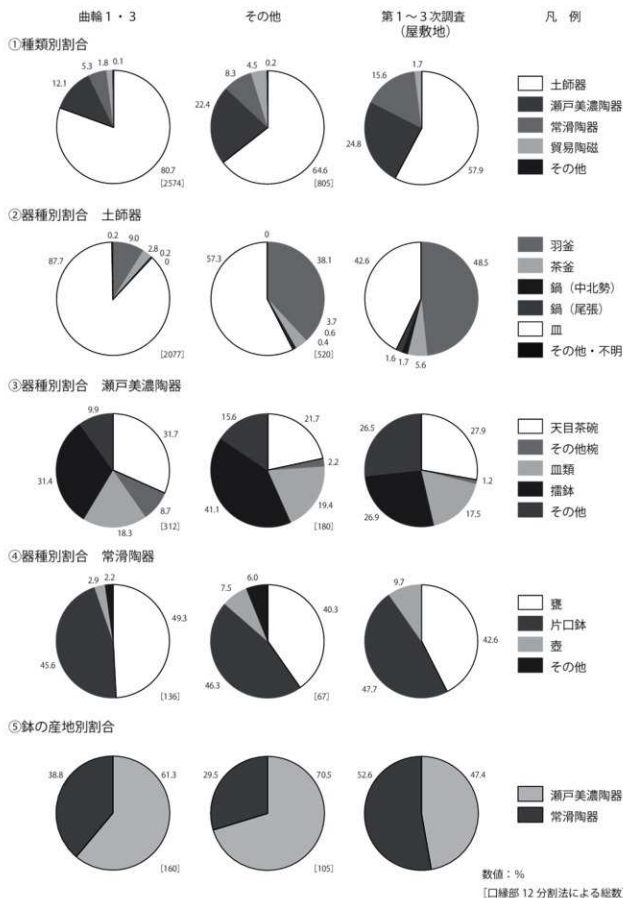
3 伊坂城の遺物 (第116・117図)

伊坂城跡の出土遺物としては、主に土師器・瀬戸美濃陶器・常滑陶器・輸入陶磁器などがある。

(1) 瀬戸美濃陶器

時期

伊坂城出土の瀬戸美濃陶器は、古瀬戸後 期古段階から大塚第4段階前半のものまで認められた。古瀬戸後 期は13%、大塚第1段階は54%、第2



第 116 図 伊坂城跡出土遺物グラフ

段階は16%、第3段階は13.7%、第4段階は1.9%である。曲輪1・3に限定すると、更に大窯第1段階の割合が多くなるが、過去の調査における屋敷地の出土傾向とおおむね一致するといえる。

器種

器種として、天目茶碗28%、その他椀類6.3%、皿類18.7%、掻鉢35%等であった。

特殊な遺物

特記すべき器種として、縁軸はさみ皿(658)があげられよう。縁軸はさみ皿は、生産地近郊で流通するものとされる。生産地からの距離とともに、階層によって流通する器種が異なっている可能性があり、この点の解明が今後期待される。

(3) 常滑陶器

時期

常滑陶器は、8型式から12型式までみられた。その比率は、8型式1.1%、9型式3.3%、10型式23.9%、11型式37.3%、12型式34.4%である(口縁部計測法による)。常滑陶器についても、過去の調査における屋敷地の出土傾向とおおむね一致するといえる。

器種

甕46.3%、片口鉢2類45.8%、壺4.4%で、他に風炉や火鉢が少量ある。

特殊な遺物

真焼と赤物がある。実測図掲載遺物に限った傾向

だが、赤物の割合は10型式6%、11型式35%、12型式61%で新しいほど比率が高い(口縁部計測法による)。

赤物については、生産地近郊に流通する傾向にある。赤物の流通圏内にあったことを示すとともに、階層的な位置づけを今後行う必要がある。

(4) 土師器

皿

皿の内面仕上げにおいてナデ上げ手法を確認できた。この特徴は京都産土師器皿の影響を受けたもので、伊勢では多気北畠氏遺跡等で確認されている。

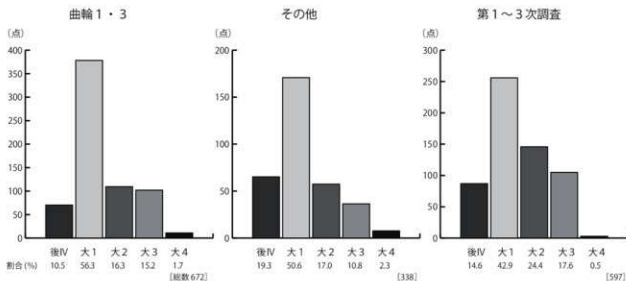
羽釜

中・北勢型と称される羽釜が多数を占める。

(5) その他

瓦

瓦の成形において、タタラ(粘土を直方体に積みあげたもの)から、コビキ(瓦の大きさに応じた粘土板を切り取る)する際に丸瓦凹面に痕跡が残る。この痕跡には、緩弧線が無数に付いたいわゆる糸切状のコビキAと、胎土中にある砂粒の移動したあとが横筋になってあらわれるコビキBが知られている。コビキAは、鉄線ないし糸の両端を手をもって手前に引っ張ることでつけられた切り取り痕であるのに対して、コビキBは軸木につくりつけた張力の大きい鉄線をもって横筋と同一方向に切り取った痕跡と考えられる。このコビキAからBへの転換



第117図 瀬戸美濃陶器の型式別推移(接合前破片数)

は、天正後半期から文祿年間と考えられており、瓦の変遷を探る上でひとつの指標とされている。今回の調査で、723においてコビキAを確認できた。この点から、屋根の一部に瓦が用いられた建物、あるいは小堂のような建物が伊坂城に存在した可能性が考えられるだろう。

金属製品

鉄製品 70点、青銅製品 5点、銭貨 14点、金銅製品 1点、鉛製品 1点の合計 96点が出土した。鉄製品は、曲輪1の東隅のSD 718やSK 749およびその下の曲輪5包含層から多く出土した。

金属製品の種類としては、釘などの鍛造品が多数を占め、鑄造品はわずかに鋳等数点に限られた。武器・武具では、鉄鑿、火縄銃の弾、小札等が確認できた。

また、切断等を行った鉄製品が一部みられたことから、鉄製品を鉄素材として持ち込むとともに、小規模な鍛冶によって必要な製品を作っていた可能性

がある。

4 縄張りの特徴

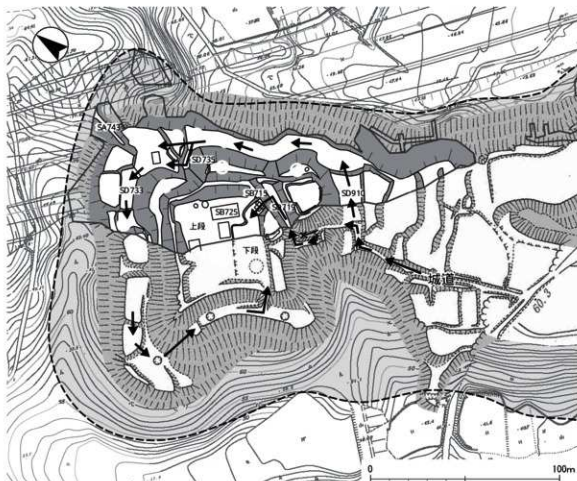
(1) 城郭と屋敷地

伊坂城跡は東西 650m、南北 130mの範囲に広がるが、防御施設の顕著な城郭部分と、防御施設のみあまり顕著ではない屋敷地部分に大別される。前者はSD 910から西側、後者はSD 910よりも東側を指す。SD 910はいわゆる堀切に相当する。

屋敷地部分には城道が東西方向にのびており、その両側に屋敷地が展開する。城道を西進するとSD 910を経て、曲輪1・2へと至る。

(2) 防御施設の特徴

城道を西進すると、堀切SD 910の手前で城道は進行方向に対して右側へ折れる。SD 910では、左側に折れると曲輪2の南裾を回る通常のルート、北進すると曲輪13-16を経て摺手側から進むルートに分かれる。



第118図 伊坂城跡 曲輪1への経路想定略図(1:2000) 調査成果の略図と伊藤徳也200頁(註27)を合成

前者の場合、曲輪2の南裾を西進し、やがて進行方向に対して直交する土塁と虎口が行く手を阻む。この虎口を越えて直進すると行き止まりとなる。少し戻って、虎口を越えてすぐに左へ折れて、さらに右へ折れることで、スロープ状の小道を西へと進むことができる。

行き止まり部分については、後述するように城の改修の名残をとどめている可能性がある。すなわち、曲輪2の裾回りをめぐる幅の狭い堀が当初掘削され、その後、改修によって現在の姿となったと推測される。これを裏付けるかのように、S D 910では改修の痕跡をとらえることができた。

スロープ状の小道を進むと、やがて曲輪1・3斜面の裾に至り、右へと折れる。さらに進めば堀底道S D 719cに至る。S D 719cに入ると、左側に曲輪3・1、右側に曲輪2がそびえており、正面と両側面の3方向から迎撃されることになる。なお、曲輪3・1と曲輪2がそびえる地点からS D 719と呼称するが、この手前にも門を構えていた可能性がある。

S D 719から右側の斜面を登ると曲輪2の虎口、門S B 907を抜けて曲輪2の平坦面へと進むことができる。左側に折れて、虎口、門S B 715を抜け、さらに左に折れると、ようやく曲輪1の下段平坦面と至る。ここから曲輪1の上段平坦面へと進むルートは2通り想定される。第1は南進し、段差のもっとも低い箇所から時計回りに進むルート、第2は北進し、掘立柱建物S B 725へと直線的に進むルートである。上段平坦面へのルートを明らかにするためには、調査区外の解明が必要となる。

搦手側のルートは曲輪13へ16c進むが、その際、曲輪2・4の北側斜面、曲輪1・5の北側斜面の裾を回るように進む。高低差を利用した迎撃が想定される。また、斜面は切岸によって敵し切りたっているため、これを登ることは困難であったと推察される。

曲輪1より西へは堅堀S D 733または曲輪1を登って曲輪1へと進む。この曲輪1は、S D 733と一体化している部分がある。このS D 733は、曲輪6・8と曲輪1とを分断する堀切の機能を有する。したがって、S D 733より外側は、当初城域外として意識されていた可能性が高い。しかし、城の改修に伴っ

て城域が拡大し、曲輪6・8等も城郭部分を構成することになったと解釈できる。

曲輪6の北側には土橋S A 743がある。このS A 743は、自然地形の谷を渡るように設けられている。この谷は自然地形ではあるものの、堀切的な性格を有していたと考えられる。北からこの谷を越えて城域内に進入すると、やがてS D 733に至り、先述のルートと合流する。

このS D 733を南西に進むと曲輪9へと至る。曲輪9から南の曲輪10へは明確な登り口を確認できなかった。この点も考慮すれば、曲輪9は堅堀の機能を備える可能性がある。この場合、いったん斜面を下り、自然地形の谷底を南に進み、調査区外の堅堀を登り、曲輪10の南にある曲輪・横堀へと至ることになる。曲輪9 曲輪10 曲輪9 谷底 堅堀 曲輪・横堀のいずれのルートであっても、調査区外の堅堀で、搦手側からのルートを分断していることがわかる。さらに横堀を南進すると、やがて井戸を有する曲輪に至る。この曲輪の北西隅には虎口の可能性をもつ箇所がある。井戸を有する曲輪からは、曲輪1南側の曲輪へ登る小道を想定できる。この小道によって曲輪1南側の曲輪に至る。このように搦手側のルートは反時計回りに進み、ようやく曲輪1へたどり着く。

以上から、伊坂城跡の特徴として、土塁・堀切・切岸とともに、折れを多用して防御を固めていることが確認できる。折れにより、側面をさらした敵に対して、横矢を射掛けることで迎撃できる。また、敵の正面と側面、時には両側面というように、複数方向から敵に狙いを定めることができる。

これらの特徴をまとめると、以上のようになる。折れを多用して、横矢を効かせる。敵の正面だけでなく側面の2方向以上から迎撃する。

堀底を道として利用する(堀底道)

斜面を切岸によって防御する。

改修の跡が認められる。

改修によって、城域が拡大している。

特に折れの複雑さから、16世紀後半まで城が使用された可能性をうかがうことができる。

(3) 当初の姿と改修の痕跡

伊坂城跡は、長期にわたって使用されたために、幾度かの改修を受けている。この改修によって当初の姿や個々の防御施設に反映された意図が読み取りづらくなっている。そこで、当初の姿を概観するとともに、改修にみる一定の方向性を確認しておきたい。

当初、曲輪1は一辺約50mの方形区画の周りを土塁で囲み、その外側に堀をめぐらせた姿を想定できる。平地でみられる「武士の館」を丘陵上に築くイメージである。堀を示す手がかりは、曲輪5で検出されたS D 736である。発掘調査を行っていないが、曲輪1南側の曲輪における曲輪1南斜面裾の横堀状のくぼみも、S D 736と同様の性格を有すると推測される。さらに曲輪1西側の井戸を有する曲輪付近にみられる横堀状のくぼみも同様であろう。

曲輪2は、曲輪1と基本形は同じで、規模を縮小したものと判断できる。堀を示す手がかりとして、S D 92があげられる。さらに、発掘調査区外だが、曲輪2南裾を西へ進み、虎口を越えて直進すると行き止まりとなる部分も、当初堀だったと推察される。

すなわち、これら曲輪1・2の南と北を堀切によって分断した単純な姿だったと考えられる。これに改修が加えられていく。基本的な方向性は、排土を処理しあぐねた結果、平坦面の造成土として利用し、城郭部分が拡張していくということである。

当初は、横堀のすぐ外側に排土を捨てていたと想定される。調査区外にある井戸を有する曲輪群がこうした過程で形成されたと推察される。同様に曲輪6・8・11・12等の造成に使用され、堀切よりも外側に曲輪がいくつも形成されたと考えられる。これらの曲輪には、高さ1mを超える本格的な土塁で囲った痕跡を確認できなかった。この点から、本格的な城域部分として機能したとは考えにくい。防御施設以外の使用が主であったと考えられる。

5 伊坂城とその評価

(1) 縄張りの評価

伊坂城の縄張りにおける特徴として、「折れ」を多用して防御性を高めている点である。後述するように、伊坂城は織豊系城郭とは異なるが、千田嘉博

氏による虎口の編年を参考にすれば、おおむね千田編年 期 (1567~1579年)以降に相当するといえる。したがって、この段階まで縄張りの改修を行っていた可能性が高い。いずれにしても伊坂城は、在地における城造り系譜にあり、その最も複雑化した段階にあるといえる。

織豊系城郭とは異なる城造りの系譜

伊坂城の縄張りにおける特徴として、堀底道S D 719を最終段階まで使用している点である。堀底道は、やがて堀と道に分離するが、特に織豊系城郭では堀底道は使用されないことが知られている。

したがって、伊坂城における城造りは織豊系城郭とは異なる系譜にある。伊坂城において、曲輪2を馬出しとして使用していないことも、この点を追跡する。

櫓門

櫓門は単独の櫓のものであり、織豊系城郭の志向した渡り廊下状のものとは異なる。また寺院建築の系譜とも異なることは先述した。この技術系譜をどこに求めるのかが問題となる。滝川氏時代に北伊勢衆の記述がみられることを手がかりとすれば、伊坂氏が主体となって、上級権力とつながりを保ちつつ、この技術系譜とつながりを有するに至ったと推測しておきたい。

城造りの系譜における問題

伊坂城の城造りの系譜を考えるにあたって、いくつかの課題が明らかになった。第1に、織豊系城郭に内在するいくつかの系譜とその連続性の究明が待たれる。北勢および伊坂城の場合、滝川一益、織田信雄の城造りの特徴が明瞭ではないため、評価が困難であった。また、改修に際して、堀の掘削や土塁築造などの土木工事(普請)まで及ぶのか、櫓・門などの建築工事(作事)にとどまるのかについても明瞭ではない。石川県鳥越城などの参考として、これらの点が明らかになることを期待したい。

同様に、北勢の城の在地的特徴についても明らかにする必要があろう。これらによって伊坂城も、より具体的な評価を行うことが可能になろう。

伊坂城の特徴

まず、伊坂城は方形単郭の城館を丘陵に築いたものと評価できる。曲輪1と2の関係は、求心的な配

置にはなく、並列配置といえる。ただし、曲輪2で主要な建物が見られなかったことから、等列あるいは格差に応じて単郭の大小が反映するという単純なものとはいえない。両曲輪が何らかの役割分担を行っていた可能性がある。

次に、伊坂城は城郭部分と屋敷地部分からなるが、堀切りよりも外側で防御施設は顕著ではなかった。この点から、伊坂城の規模を屋敷地まで含めた範囲として、他の城館と比較・評価することは控えたほうが良いように思われる。屋敷地部分までを含めた伊坂城は、環濠集落あるいは寺内町に近い特徴・性格を有するような印象を個人的に持つ。城の規模比較は、城の性格を十分に把握して行うことが求められる。

なお、城郭部分とともに屋敷地部分からなることは、北勢でみられる特徴である。保々西城などがその典型といえる。屋敷地の区画には方形を採用しており、町屋のような細長いものはみられない。いずれにしても、北勢の特徴を抽出して型式設定することが今後求められるだろう。

(2) 伊坂城の最期

伊坂城の城郭部分については、古瀬戸後期様式期新段階または大塚第1段階に築城されたと考えられる。その歴年代は概ね応仁の乱後、1480年前後といえる。屋敷地についても同様の傾向にある。

なお、竹田憲治氏は、これより前の遺構・遺物が検出されないこと、西隣の西ヶ広遺跡では古瀬戸後期新段階までの時代の遺物に限られること、西ヶ広遺跡の北に西ノ広城跡があることから、西ノ広城・西ヶ広遺跡を営んだ人々が伊坂城・伊坂城屋敷地へ移動した可能性を示す。

北方一揆の一員として

近世の所伝によると、伊坂城の城主は春日部氏あるいは伊坂氏とされ、伊坂氏は本姓を春日部氏とされる。伊坂城と同時代の文字記録によると、伊坂氏は、1453(享徳2)年の「北方一揆連署書状」に「太郎左衛門尉之実」「左衛門二郎満実」の名前がみえる。位置と環境で述べたように、十ヶ所人数は朝明郡を中心に桑名郡・員弁郡に分布する幕府奉公衆をさす。朝倉・海老名・横瀬・佐脇・足田・富永・南部らの諸氏で構成され、1491(延徳3)年頃

まで機能していた。その後、幕府の軍勢力としての奉公衆体制は16世紀になると解体の過程をたどるが、十ヶ所人数は1532~1559年(天文年間)頃までは奉公衆として活動していることが確認できる。

一方、北方一揆は員弁郡を中心に朝明郡にも分布する大木・田能村・多胡・蘇原・梅戸・萱生・伊坂らが構成員である。彼らは、十ヶ所人数の諸氏と比べて小規模な在地領主だった。北方一揆は、一揆全体で一個の直動御家人(直臣)=國人という身分を有していたと考えられる。応仁・文明の乱以降は、北伊勢は長野・北畠・一色の抗争となり、その過程で北方一揆は解体したとされる。

それとともに同じ頃、1487(長享元)年の長享番帳に梅戸氏と萱生氏が奉公衆として名前を見えており、身分的に上昇したことがわかる。他の一揆の構成員より身分が上昇しており、一揆という「平等」の原理で結ばれた集団の存続が困難になったといえる。

桑名をめぐる長野氏と六角氏の争い

1510(永正7)年、「十楽の津」といわれる自治都市の桑名に、中勢の長野氏が侵攻する。住民は、これに逃散で対抗し、両者の対立は1年半に及んだ。これ以降、長野氏の影響力が桑名に及ぶ。

その後、1536(天文5)年に梅戸氏が桑名に触手を伸ばす。梅戸氏は、もともと員弁郡内の有力者であったが、天文年間(1532~1559年)の前半に六角定頼の弟を養子に迎えており、北勢での勢力拡大をはかっていた。六角氏・梅戸氏は、桑名から八風峠を越えて近江、さらに京都を結ぶ商業ルートの支配強化を目論んだのである。

以後、長野氏は劣勢にたたされ、桑名はいったん長野氏と梅戸氏の共同支配となる。しかし、1549(天文9)年に六角氏の北勢出兵により、長野氏は敗退し、北勢方面から撤退した。

六角氏・梅戸氏が狙った桑名と八風街道の利権は、春日部氏(萱生氏・伊坂氏)にとっても大きな関心事だったと思われる。近世の所伝によると星川城(桑名市星川)も春日部一族の城とされる。萱生城と伊坂城は、朝明川沿いの街道を睨み、伊坂城と星川城は、員弁川沿いの街道を睨む位置関係にあり、通行料の徴収等において好条件である。

織田信長勢力の伊勢侵攻

1568(永祿11)年、織田信長は六角氏を破り、上洛を果たす。これにより六角氏の北勢への影響は大きく後退し、状況は一変する。1567-69(永祿10-12)年、織田勢が伊勢に侵攻し、北畠氏は信長の次男信雄、神戸氏は三男信孝、長野氏は信長の弟信包を養子に迎える。1569年の信長上洛の際には、伊勢衆も動員されていることから、北勢の国人たちは、この頃から滝川一益の指揮下に入った可能性がある。

なお、近世の諸伝によると、伊坂城は1568年に織田信長の軍勢によって攻め落とされ、一族は滅亡したとされる。しかし後述する同時代の記述から、この諸伝が正しくないことがわかる。

長鳥一向一揆

1570-1574(元龜元-天正2)年、長鳥一向一揆が起こる。「信長公記」によると、この時、伊坂氏・董生氏・赤堀氏らが、織田方に人質を差し出している。この記述から、伊坂氏がこの時期まで存続していたことがわかる。

滝川一益・織田信雄の統治

1574(天正2)年から北勢は滝川一益による統治となる。滝川氏時代の支配は不明な部分が多いが、1576(天正4)年に千草如元が黒田村の領家米を寄進していることから、本領地支配を否定されていない国人が存在することが分かる。この時点において、伊坂城の城主は伊坂氏(春日部氏)である可能性がある。

1583(天正11)年、織田信孝・柴田勝家側に味方した滝川一益は、織田信雄・羽柴秀吉の勢力に降り、北勢は織田信雄の所領となる。1583年時点の信雄の所領は、尾張・伊勢・伊賀であった。しかし、1584(天正12)年、小牧・長久手の戦い後、伊賀と南伊勢は割譲され、尾張・北伊勢のみとなり、信雄の所領は約3分の2となった。

この時、中南勢・伊賀に所領を与えていた家臣への替地が問題となった。この問題に対して、信雄は大部分の家臣の給地を3分の1減封という方法を強行する。この詳細が、「織田信雄分限帳」から読み取ることができる。

「織田信雄分限帳」にみる伊坂氏の動向

「織田信雄分限帳」にみる1584(天正12)年の伊

坂の地には、養和100貫文、高橋彦右衛門100貫文、御大工喜左衛門100貫文が確認できるとともに、知行替えが行われていないことが分かる。すなわち伊坂氏は、既に伊坂の地には見えない。

次に伊坂氏の知行地として、富津(現在の桑名市多度町戸津)に伊坂長左衛門150貫文、東金井(現在の桑名市東金井)に伊坂五左衛門200貫文、東金井と饗庭(現在のいなべ市藤原町上相場・下相場)に伊坂才助160貫文、志知(現在の桑名市志知)に伊坂太郎一300貫文である。小牧・長久手の戦い後も替地の対象とならず、知行高の増減もみられない。「分限帳」から、伊坂氏は本實地から切り離されていることが分かる。さらに切り離された時期は小牧・長久手の戦いよりも前であったこともあわせて確認できる。

以上から、伊坂氏は1570年代後半から80年代前半に本實地から切り離された可能性が高い。すなわちこの頃に伊坂城を離れたと想定される。

その後、1590(天正18)年に織田信雄は下野国に転封され、北勢は豊臣政権の直轄地となる。信雄は転封に際して石高を2万石へと大幅に減らされたために、大半の家臣は新たな仕官先を求めることになった。滝川雄利等の有力家臣は他の大名に再出仕するが、北勢の中小領主たちには困難であったと想像される。

文献からみた北勢の国人の動向として、1605(慶長10)年頃の「桑名御領分村絵図」において菟野町千草・音羽付近に「千草又三郎」の名が確認できる。また、1594(文祿3)年の「伊勢国御蔵入・給人目録」にある「員弁郡小給人分」という記載についても、北勢における在地領主の名残の可能性もあるという。いずれにしても、北勢における国人らの名は史料上からほとんどみられなくなる。

また1594(文祿3)年には、伊勢国において一国惣検地が行われた。この検地によって兵農分離が進められ、北勢の中小領主たちも選択を迫られた。このうち赤堀氏は蜂須賀家に仕え、南部氏は尾張藩の熱田で商人になったことが判明している。両氏以外の足取りはつかめないが、開墾した者も多かったと想像される。

伊坂城の城主をはじめとする北勢の国人たちは、

小牧・長久手の戦い後の知行替え、ならびに 158(天正 14) 年の検地による大幅な知行替えによって、本貫地から切り離され、もはや中世の在地領主のような存在ではなかった。

伊坂氏についても足取りがつかめないので、竹田憲治氏は、織田信雄統治期に須須城下町に移住した可能性を指摘する。その際、加藤益幹氏は小牧・長久手の戦い後の領地縮小、および天正 14 年検地に伴う知行替えによって、家臣の在地性は完全に取り払われたと指摘する。この指摘を受けて下村信博氏は、家臣団の城下集住の実現についても考慮し得ると述べている。さらに知行替えにおいて、支城主層は北伊勢や国境沿いに配置され、中小家臣は居城須須の近辺に集中されたとみている。これらの手がかりから、竹田氏の推測が導かれたのである。

その後、新たな手掛かりが見つかったわけではないので、この説について検証することは控えておく。ただし、北勢の中小国人については、帰農、あるいは一族の一部が北勢にとどまった可能性も考慮すべきだろう。

現在、萱生城跡近在の寺院の住職が春日部姓であることなど、朝明郡域に春日部氏を探る手がかりがいくつか確認できる。戦国時代からの連続性において問題を残すものの、これらの点も考慮すれば、伊坂氏(春日部氏)についても一部は北勢にとどまった可能性もあろう。

当時の北勢の拠点として、朝明郡茂福城の山口重政(1300石)、朝明郡の丹羽氏次(7000石)、員井郡田辺城の木造長政(1027石)、三重郡・朝明郡南半分の滝川雄利(3800石)など数か所が知られるにすぎない。いずれも支城的性格を有する。萱生城については、1583(天正 11)年に長島城の滝川一益を攻略する際に羽柴秀吉側の勢力によって手が加えられていることが知られている。しかし、伊坂城の利用は文献にはみえない。したがって、支城的性格を付与されなかった伊坂城は、1584年に降に積極的な利用はなかった可能性が高い。これにより伊坂城は城としての機能を失ったといえる。屋敷地についても、同様だったのだろう。(高松)

【註】

三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡(第3次)発掘

調査報告』(2017年)

三重県埋蔵文化財センター『伊坂遺跡発掘調査報告』(2006年)

三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡発掘調査報告』(2003年)

藤澤良祐『瀬戸・美濃大塚編年の再検討』『研究紀要第10輯』(財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 2003年)
・愛知県史編さん委員会『愛知県史』別編第2巻 中世・近世瀬戸系(愛知県 2007年)

平井聖『日本住宅の歴史』(日本放送出版協会 1974年)

小野正敏『戦国城下町の考古学』(講談社 1997年)

広島県教育委員会『吉川元春館跡 第1〜5次発掘調査概要』(1994〜1998年)

・広島県教育委員会『吉川元春館跡の研究』(2001年)

・三浦正幸『城のつくり方図典』(小学館 2005年)

伊藤延男・五味盛重『中世建築の構造技法』『文化財講座日本の建築』3中世(第一法規 1977年)

吉岡泰英『朝倉館の建築的考察』『朝倉氏遺跡資料館紀要1983』(朝倉氏遺跡資料館 1984年)

堀内明博『近畿地方における古代から中近世の掘立柱建物』『埋もれた中近世の住まい』奈良国立文化財研究所シンポジウム報告(同成社 2007年)

駒田利治『伊賀の中世城館跡』『菊永氏城跡発掘調査報告』(阿山町教育委員会編集 阿山町遺跡調査会発行 1987年)

・東員町教育委員会『山田城跡発掘調査報告』(1987年)

・森川常厚『伊賀地域中世城館の郭内区画と遺構配置』『研究紀要』第4号(三重県埋蔵文化財センター 1999年)

宮本長二郎『日本中世住居の形式と発展』『建築史の空間』(中央公論美術出版 1999年)

第115図と第2表も宮本氏の著書から引用

・宮本長二郎『民家と町並 近畿』『日本の美術』第288号(至文堂 1990年)

工藤清泰『浪岡城跡北館の概略』『浪岡城跡 昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告』(浪岡町教育委員会 1985年)

・中井均『「民衆」と「城館」研究試論』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第5集』(帝京大学山梨文化財研究所 1994年)

南有馬町教育委員会『原城跡』(1996年)

・南島原市教育委員会『原城跡』(2010年)

中央公論社『戦国合戦絵屏風集成』第5巻(1987年)

樋口吉文「古墳築造考」『壱田直先生古希記念論文集』同
刊行会 199年)

三浦正幸監修『歴史群像シリーズ特別編集【決定版】
因説・城造りのすべて』(株式会社学習研究社 2006年)
・前掲註 三浦著書

出土遺物の様相については、前掲註の手法に従った。
つまり、瀬戸美濃陶器の型式別割合については接合前破
片数で、それ以外の様相については口縁部を1/2割して
残存度を数えた。なお、本文では第4〜7次調査出土分
を合わせた数値を表記したが、第116・117回(は曲輪1・
3とそれ以外の場所に分けてグラフを作成した。

伊野近富「土師器皿」『概説中世の土器・陶磁器』(中
世土器研究会 199年)

・中井淳史『日本中世土師器の研究』(中央公論美術出版
201年)

森田克行「畿内における近世瓦の成立について」『摂津
高槻城』(高槻市教育委員会 198年)

・山崎信二「中世瓦の研究」奈良国立文化財研究所学報第
5冊(奈良国立文化財研究所 200年)

・山崎信二「近世瓦の研究」奈良国立文化財研究所学報第
7冊(奈良国立文化財研究所 200年)

千田嘉博「縄文系城郭の成立」『縄文系城郭の形成』(東
京大学出版会 200年)

千田嘉博『縄文系城郭の形成』(東京大学出版会 200
年)

前掲註

四日市市『四日市市史』第1巻 通史編古代・中世(1995
年)

石川県鳥越村教育委員会『鳥越城跡発掘調査概報』(1979
年)

伊藤徳也『再発見北伊勢国の城』(2008年)

・福井健二・竹田恵治・中井均編『三重の山城ベスト50を
歩く』(サンライズ出版 201年)

竹田恵治『発掘調査のまとめ』『伊坂城跡発掘調査報告』
(三重県埋蔵文化財センター 200年)

飯田良一「北伊勢の国人領主・十ヶ所人数、北方一揆
を中心として」『中世史研究』第9号(中世史研究会
198年)

・飯田良一「室町幕府の成立と北伊勢の国人たち」『四日
市市史』第1巻 通史編古代・中世(四日市市 199年)

・稲本紀昭『戦国期の北伊勢』『四日市市史』第1巻 通

史編古代・中世(四日市市 199年)

・兵産勇一「伊勢北方一揆の構造と機能」『日本歴史』第
71号(日本歴史学会編集 吉川弘文館発行 200年)

前掲註

前掲註

前掲註

播磨良紀「豊臣政権の登場」『四日市市史』第1巻 通
史編近世(四日市市 199年)

・播磨良紀「織田・豊臣政権期の北伊勢」『戦国時代の北
伊勢』四日市学講座 3(四日市大学・四日市学研究会
200年)

前掲註

前掲註

前掲註

加藤益幹「織田信雄の尾張・伊勢支配」『戦国期権力と
地域社会』(吉川弘文館 198年)

・下村信博「文献からみた須弥城下町の変遷」『須弥・織
豊期の城と都市・研究報告編』(東海埋蔵文化財研究会
198年)

【参考文献】

・松井一明「戦国期一縄文系城郭の門跡」『縄文系城郭
16』(縄文系城郭研究会 201年)

山上雅弘「掘立柱建物」『中世城館の考古学』(高志書院
201年)

・早川圭「礎石建物」『中世城館の考古学』(高志書院
201年)

・四日市市『四日市市史』第7巻 史料編古代・中世
(199年)

・四日市市『四日市市史』第1巻 通史編古代・中世
(1995年)

写真図版



東から見た伊坂城跡（藤原岳を遠望）



員弁川と朝明川に挟まれた丘陵に位置する伊坂城跡（東から） 中日本高速道路（株）提供



北東から見た曲輪 1・2



北西から見た調査前の伊坂城跡 中日本高速道路(株)提供



空から見た曲輪1・2(北西から)



真上から見た曲輪1（上が南）



曲輪1全景（南東から）



曲輪1全景（南西から）



土塁SA 701土層（北から）

（曲輪1）



櫓門S B 715(北から)



礎石 1 (西から)



礎石 2 (西から)



礎石 3 (西から)



礎石 4 (西から)

(曲輪 1)



碓石 5 (西から)



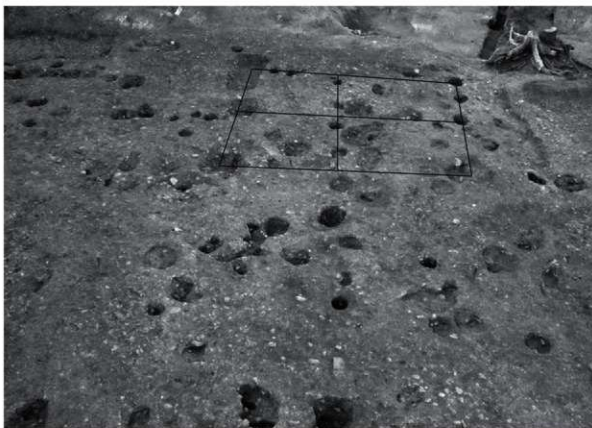
碓石 6 (西から)



曲輪 1 A x22P 並2 (北東から)



曲輪 1 A x22P 並4 (北から)



掘立柱建物 S B 72 (東から)

(曲輪 1)



掘立柱建物 S B 725 (南から)

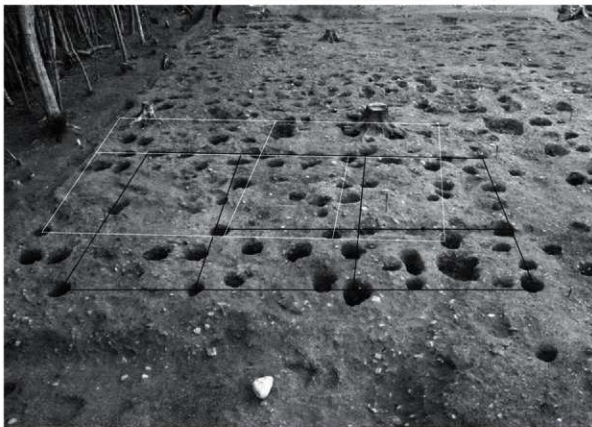


掘立柱建物 S B 725 東から

(曲輪 1)



掘立柱建物SB 724・SB 750(東から 白:SB 724 黒:SB 750)



掘立柱建物SB 751・SB 752(東から 白:SB 751 黒:SB 752)

(曲輪1)



溝SD 711(南から)



溝SD 716(北から)



土坑SK 74q 北西から

(曲輪1)



井戸SE 707(南東から)



平坦面SZ 712

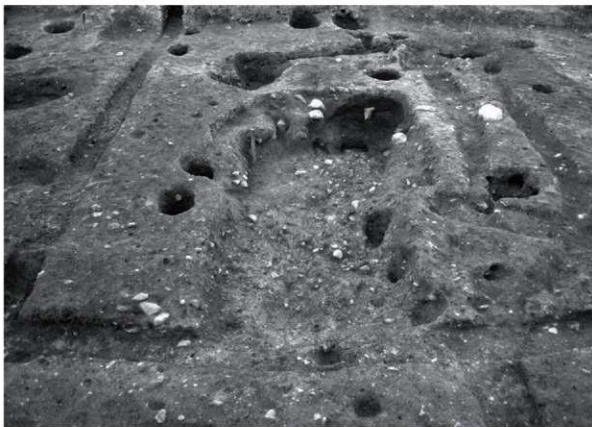
(曲輪1)



曲輪 2・3とSD 719など(北から)



真上から見た曲輪 2 (上が南)



カマド S K 905 (南から)



門 S B 907 (北から)



礎石建物 S B 713 (北から)

(曲輪 2)



北から見た櫓門 S B 715 と曲輪 3



曲輪 3 土層 1 (北東から)



石つぶてSZ 714(西から)



曲輪3土層2(北東から)



曲輪1～3・SB 715・SD 719の位置関係(北西から)



階段状遺構SZ 908(西から)



曲輪 4 と土壘 S A 744 (西から)



貝殻集積遺構 S Z 92㉔ (西から)

(曲輪 4)



曲輪4土層(東から)



新旧の堀切S D 921・S D 910(北から)



SD 736土層1 (東から)



SD 736土層2 (東から)

(曲輪5)



土橋 SA 743土層 (第5次調査 北から)



SA 743土層 (第6次調査 東から)



曲輪6 断ち割り (西から)



第6次調査 西区下層A地区の土層（南から）



西区下層A地区全景（西から）



西区下層A地区の溝SD 746遺物出土状況（北から）



第6次調査西区下層B地区 溝SD 747(北東から)



西区下層C地区 溝SD 747(西から)



西区下層B地区土層(西から)



西区断ち割りでの地滑りを示す土層(第15図64層、南から)



西から見た曲輪 11



北から見た曲輪 7



北から見た曲輪 8



西から見た曲輪 6・8



堀切 S D 733 (北東から)



曲輪 9 (西から)

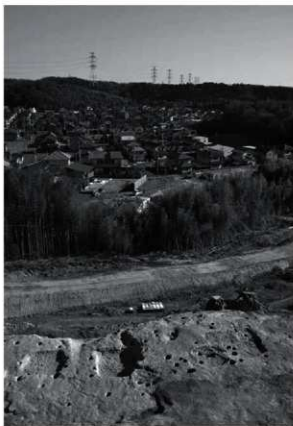


カマドS K 728を伴う掘立柱建物S B 732(北から)

(曲輪 11)



曲輪 11断ち割り(北西から)



曲輪 13とS K 913～915(南から)



曲輪 14全景(西から)



北東から見た堀S D 735



S D 735土層(東から)

(曲輪 16)



曲輪 2 東側の切岸（北東から）



曲輪 2・4 北側の切岸（東から）



曲輪 1・5 北側の切岸と曲輪 15・16（東から）



北から見た第7次調査西区

(曲輪 17～20)

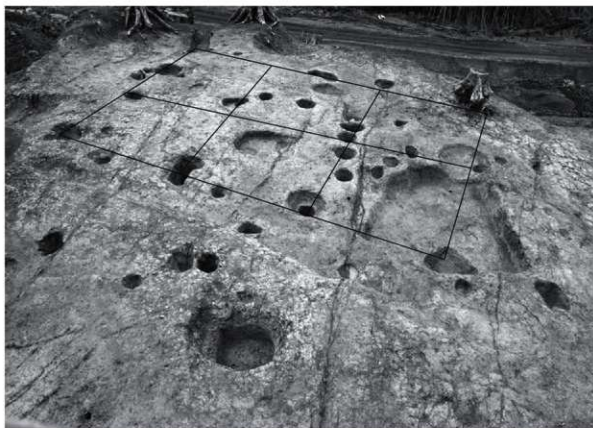


土塁SA 1030と曲輪 17(西から)



掘立柱建物 S B 1025 (南から)

(曲輪 17)



掘立柱建物 S B 1027 (西から)

(曲輪 17)



東から見た曲輪 17



東から見た曲輪 18



北から見た第7次調査中区

(曲輪 20)



火葬土坑 S K 1002(南西から)



火葬土坑 S K 1001(北西から)

(曲輪 20)



火葬土坑 S K 1002(南西から)

(曲輪 20)



犬走状遺構 S Z 1035(南から)

(曲輪 17)



第5次調査中区全景（西から）



第5次調査東区全景（西から）



第4次調査区全景（東から）



第7次調査区全景（東から）



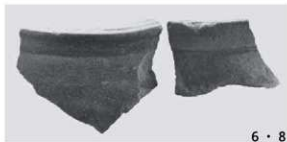
2



4



5



6 · 8



30



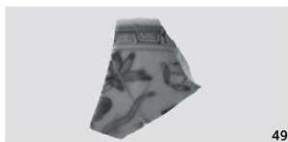
31



32



39



49



52



53



58





121



159



160



169



178



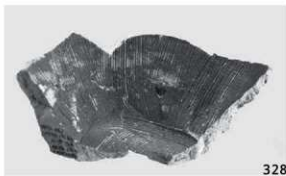
211

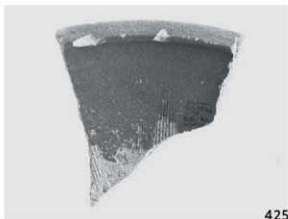


216









425



426



432



433



434



435

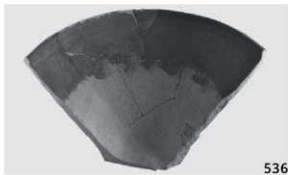
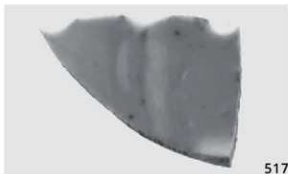


456



465









587



589



593



598



603



604



609



606



611



612



613



635



645



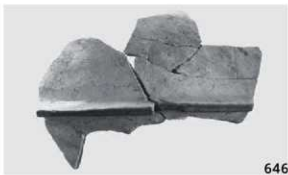
648



661



641



646



654



659



663



665



666



667



668



670



671



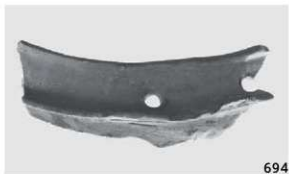
678

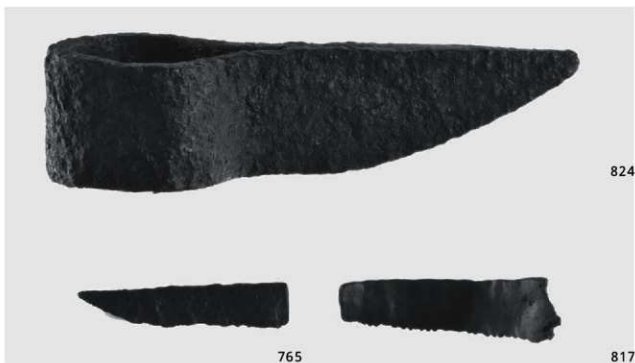


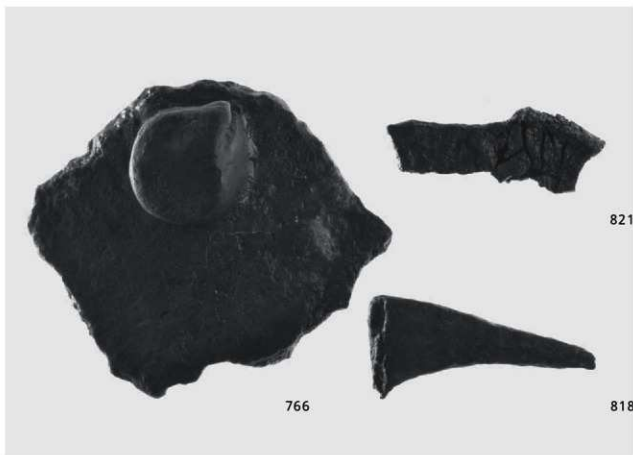
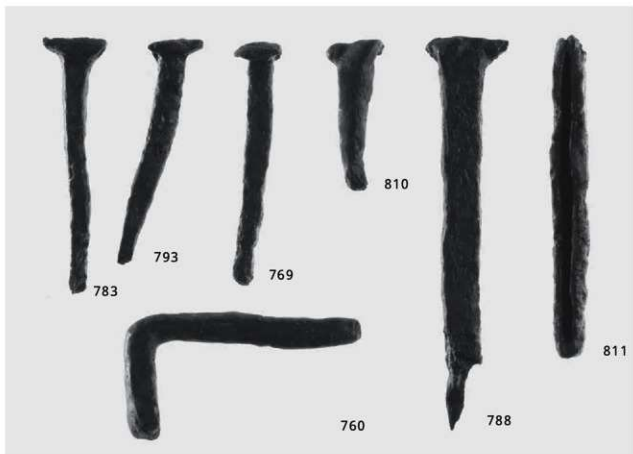
675

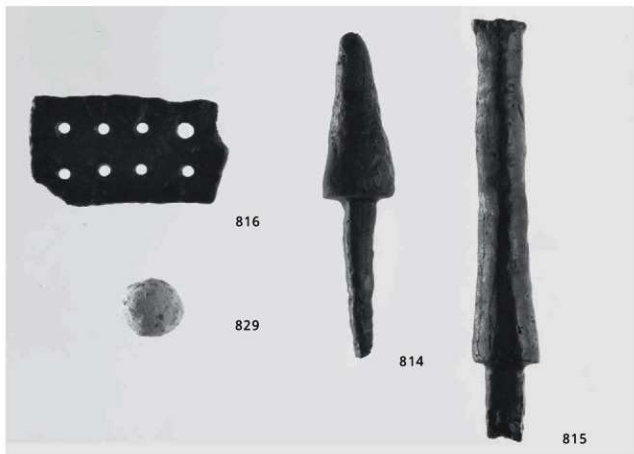


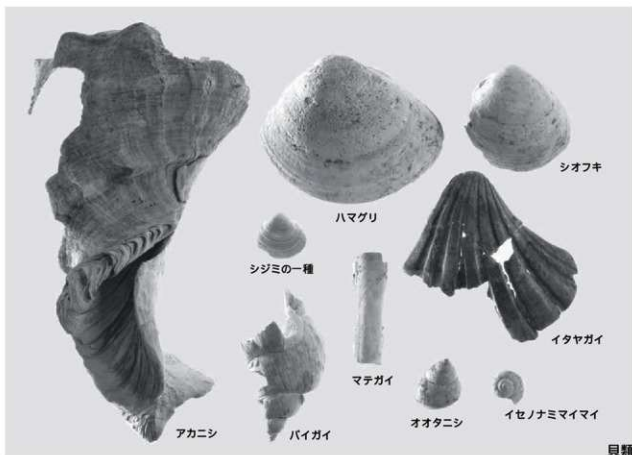
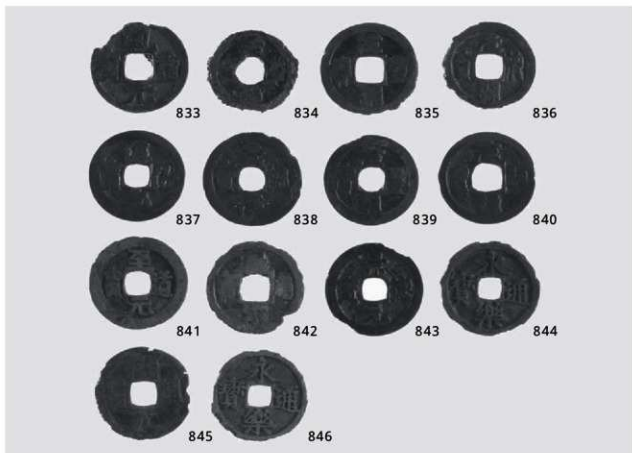
677

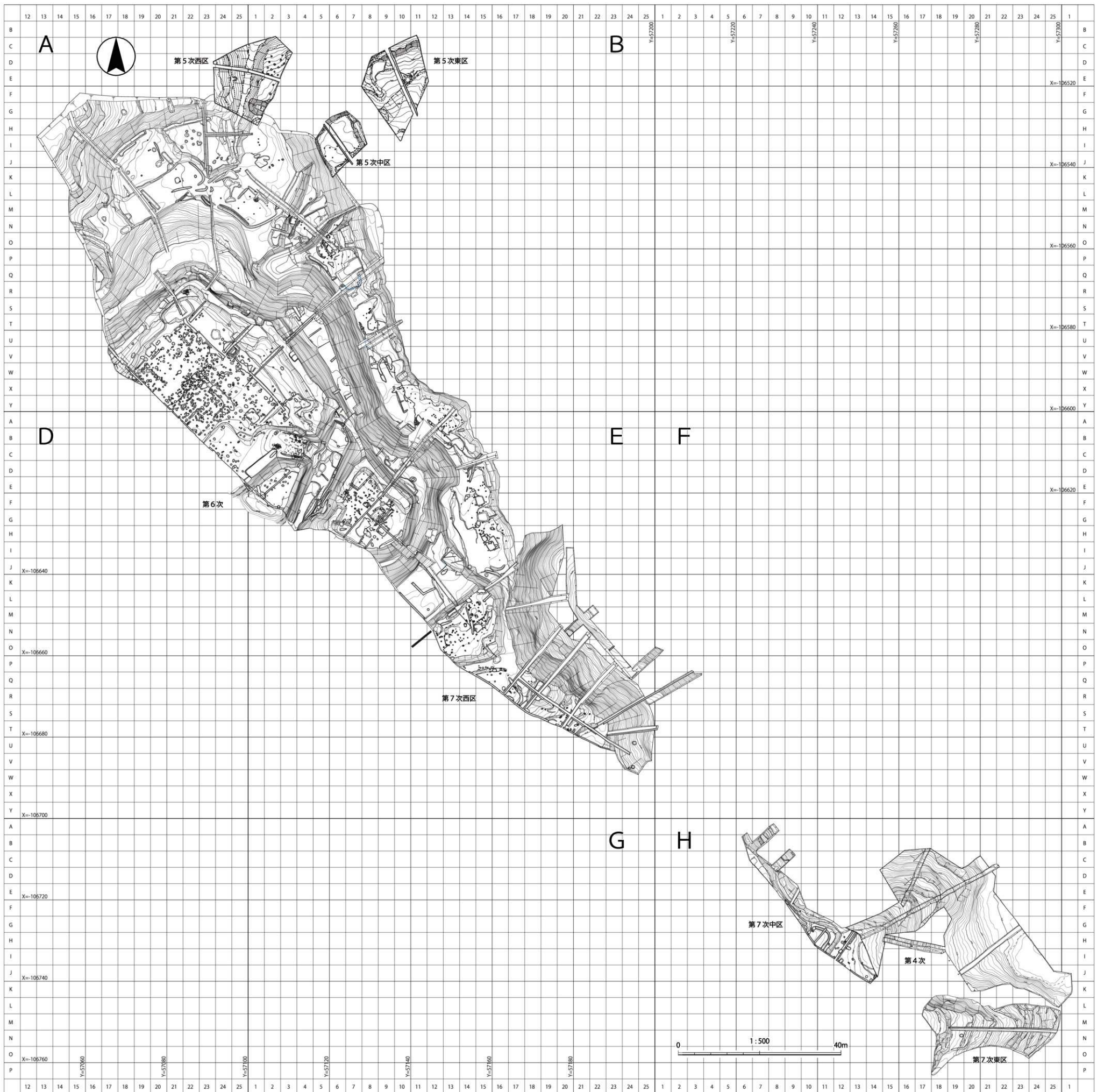












付図 伊坂城跡 (第4～7次) 遺構全体図 (1:500)

三重県埋蔵文化財調査報告 3 2 3 - 3

伊坂城跡（第 4 ～ 7 次）
発掘調査報告

2019（平成 31）年 3 月

付図 伊坂城跡（第 4 ～ 7 次）遺構全体図（1 : 500）

報告書抄録

ふりがな	いさかちょうあと (たいまんからなな) はつてつちょうきほうこく								
書名	伊板城跡 (第4～7次) 発掘調査報告								
副書名									
巻次									
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	323-3								
編著者名	高松雅文・萩原義彦・服部芳人・松永公吉・水谷豊・水橋公恵								
編集機関	三重県埋蔵文化財センター								
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732								
発行年月日	2019 (平成31) 年3月8日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
いさかちょうあと 伊板城跡	よこせし 四日市市伊板町	24202	246	35° 2′ 25″	136° 37′ 23″	20100809 ～20110114	第4次調査 990	近畿自動車道名 古屋神戸線 (四 日市JCT～亀山 西JCT) 建設事 業	
						20131128 ～20140228	第5次調査 589		
						20140519 ～20150313	第6次調査 7,875 (下層319含む)		
						20140820 ～20150313	第7次調査 2,134 (下層24含む)		
						計			11,588
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
伊板城跡	城館跡	戦国時代	曲輪・土塁・堀切・城門 (櫓門)・礎石建物・掘 立柱建物・石つぶて遺 構・井戸・大走り状遺 構・火葬土坑など		土師器 (皿・羽釜・茶釜)・ 瀬戸美濃陶器 (天目茶碗・ 搦鉢)・常滑陶器・磁器・ 火縄銃の弾・銭貨・貝殻				
要約	<p>戦国時代の山城で、曲輪1 (主郭) をはじめとする多くの曲輪や土塁・堀切・堀底道などを調査した。曲輪1では、櫓門の礎石、掘立柱建物、井戸などを検出し、他の曲輪でも掘立柱の門や礎石建物、掘立柱建物、カマドの可能性のある土坑などを確認した。</p> <p>城は15世紀後半から16世紀初めに築造され、約100年使用されたこと、その間に地滑りで土塁の外側が広範囲に崩壊したこと、堀が掘り直され櫓門が建てられるなどの大規模な改修によって、城の守りが強固なものになったことなどが明らかになった。</p> <p>遺物は大半が曲輪1から出土した。土師器・瀬戸美濃陶器・常滑陶器・磁器 (青磁・白磁・染付磁器) などがある。曲輪1では、他の場所と比べて土師器が多く、中でも皿の占める割合が高い。他に、釘や鋸、飾金具、火縄銃の弾など金属製品が目立つ。ハマグリなどの貝殻も多く出土した。</p>								

三重県埋蔵文化財調査報告書 323-3

伊坂城跡（第4～7次）発掘調査報告

2019（平成31）年3月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行
印刷 榎ミナジ印刷
